

Hyperion(R) Enterprise(R) Reporting

リリース 6.5.1

管理者用ガイド

ORACLE®
ENTERPRISE PERFORMANCE
MANAGEMENT SYSTEM

Hyperion Enterprise Reporting 管理者用ガイド, 6.5.1

Copyright © 1991, 2009, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

著者: Enterprise Reporting Information Development Team

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントが、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供される場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS:

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、このソフトウェアを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle は、Oracle Corporation またはその関連会社、あるいはその両方の登録商標です。他の名称は、それぞれの所有者の商標である可能性があります。

このソフトウェアおよびドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても、一切の責任を負いかねます。

目次

第 1 章 Web サイト作成の準備	13
外部認証	13
パフォーマンスに関する考慮事項	13
ユーザ数	13
静的データと動的データ	14
レポートの複雑さ	14
ネットワークの利用	15
静的 Web ページと動的 Web ページ	16
Web サイトで表示できるデータの種類	16
Web サイトの作成	17
Web サイトウィザードの使用	17
HTML エディタを使用したテンプレートの変更	17
ファイルの整理	18
カスタムファイルのパスの指定	18
第 2 章 外部認証の設定	21
認証の概要	21
認証プロバイダについて	22
外部セキュリティサービスユーティリティの使用	22
LDAP または MSAD 認証の設定	23
NTLM 認証の設定	30
Spider.ini ファイルの編集	34
追加の外部認証情報	35
設定の効果	35
適切なログ優先順位の設定	36
プロバイダ検索の順序の設定	36
トークンのタイムアウトの設定	37
NTLM プロバイダの設定	43
第 3 章 Web サイトへのレポートの追加	47
レポートの追加について	47
静的レポートと動的レポート	47
静的レポートの用途	48

動的レポートの用途	48
複合レポートと並列表示レポート	48
データ入力レポート	49
レポートファイル	50
並列表示レポート用のファイル	50
調査と展開用のファイル	50
レポートオプション	50
グリッド線の表示	51
PDF ファイルの作成	51
行および列見出しの固定	51
調査または展開の使用	51
ブラウザ形式の選択	51
カスタムテンプレートのディレクトリの設定	51
レポートの作成	52
管理プログラムを使った静的レポートの作成	52
管理プログラムを使った動的レポートへのリンクの作成	53
静的レポートの印刷	54
第 4 章 Web サイトへのチャートの追加	55
チャートの追加について	55
静的および動的チャート	55
静的チャートの用途	56
動的チャートの用途	56
並列表示のレポートとチャート	56
静的チャートのファイル	56
並列表示のレポートとチャートのファイル	57
チャートの種類	57
チャートのプロパティ	59
チャートの作成	59
管理プログラムを使った静的チャートの作成	60
管理プログラムを使った動的レポートへのリンクの作成	61
Microsoft Excel のオートフォーマットの使用	62
第 5 章 Web サイトへの静的パッケージの追加	65
静的パッケージについて	65
静的パッケージの作成	65
静的パッケージの出力オプション	66
静的パッケージでの調査と展開	66
静的パッケージでの PDF ファイルの作成	67
静的パッケージのレポートの行および列見出しの固定	67

静的パッケージのブラウザ形式の指定	67
出力オプション - [Creating a Single File (単一ファイルの作成)]	68
出力オプション - [Creating a File for Each Report Group (レポートグループごとにファイルを作成)]	68
出力オプション - [Creating a File for Each Report (レポートごとにファイルを作成)]	68
管理プログラムを使った静的パッケージの作成	68
静的パッケージの印刷	69
第 6 章 レポートとチャートへのリンクの追加	71
アプリケーションデータへのリンクの追加	71
Link Builder について	71
リンクページの定義	72
動的レポートとチャートへのリンクの作成	73
並列表示の動的レポートとチャートへのリンクの作成	74
HTML ファイルへのリンクの作成	76
リンクの編集	76
第 7 章 スプレッドシートへのデータの表示	79
スプレッドシートでのデータの表示	79
Microsoft Excel スプレッドシートへのリンクの追加	79
スプレッドシートの表示方法	80
HTML ファイルを編集してスプレッドシートリンクを追加する	81
Web ブラウザでのスプレッドシート要求の入力	81
EXCELREP 関数の構文	81
Web ページからの Hyperion Distributed Schedules の起動	83
Hyperion Distributed Schedules を起動する HTML ファイルの編集	84
Web ブラウザで Hyperion Distributed Schedules を起動する要求の入力	84
SCHEDREP 関数の構文	85
データ入力モードのレポート表示	86
セルの色	87
すべてのレポートのデータ入力モードの許可	88
データ入力モードでレポートを表示するための HTML ファイルの編集 ...	88
Web ブラウザで Hyperion Distributed Schedules を起動する要求の入力	88
DATAENTRY 関数の構文	89
第 8 章 PDF レポートの追加	93
PDF レポートについて	93
PDF ファイルの使用	94
管理プログラムを使用した PDF ファイルの生成	94
HTML ファイルを編集して PDF リンクを追加する	94

Web ブラウザでの PDF 要求の入力	95
PRINTREP 関数の構文	96
第 9 章 調査の使用	97
調査	97
調査レポート	97
調査の設定	99
調査レベルの設定	99
調査の無効化	99
第 10 章 展開の使用	101
展開について	101
展開レポート	101
ケーススタディ - Hyperion Enterprise Reporting Web での展開の使用	102
展開の設定	103
静的レポートとパッケージの展開レベルの設定	103
管理プログラムを使用した展開レベルの設定	104
展開の無効化	104
第 11 章 データの視点バーの追加	107
データの視点	107
データの視点バーのカスタマイズ	108
@SMARTPOV	108
@POVDROPBAR	111
@POVDROPDOWN	113
@EVALUATE	115
@QUERY	118
第 12 章 動的レポート一覧の作成	121
動的一覧	121
動的一覧の生成	121
HTML ファイルを編集して動的一覧を追加する	121
SYSLIST (製品情報)	122
APPLIST (アプリケーション一覧)	123
SETLIST (レポートセット一覧)	125
REPSETLIST (レポート一覧)	127
Essbase の構文	128
第 13 章 Web サイトへのお気に入りページの追加	129
お気に入りページ	129
始める前に	130

お気に入りの設定	130
お気に入りページへのアクセス	131
第 14 章 テンプレートを使用した Web ページの作成	133
テンプレート	133
サンプルテンプレートファイル	134
ケーススタディ - 標準テンプレートの変更	135
標準テンプレート	137
フレームを使用する動的レポートとチャートのテンプレート	137
フレームを使用しない動的レポートとチャートのテンプレート	138
静的レポートとチャートのテンプレート	138
静的パッケージのテンプレート	138
Hyperion Enterprise Reporting Web のレポートライブラリのテンプレート	139
財務エージェントのテンプレート	139
データの視点フォームのテンプレート	140
行および列見出しが固定された動的レポートのテンプレート	140
行および列見出しが固定された静的レポートのテンプレート	141
データ入力モードのレポートのテンプレート	142
フレームを使用しない動的複合レポートとチャートのテンプレート	142
フレームを使用する動的複合レポートとチャートのテンプレート	143
静的複合レポートとチャートのテンプレート	144
ユーザ定義のお気に入りのテンプレート	144
標準テンプレートの変数	145
%APPDESC%	147
%APPLICATION%	148
%APPLIST%	148
%BOOKNAME%	149
%CONTENTS%	149
%CONTENTS_NAMEONLY%	149
%CONTENTS_TITLEONLY%	149
%DATE%	150
%FILENAME%	150
%HTX_FULLPATH%	150
%HEADER%	150
%INDEX%	150
%INDEX_NAMEONLY%	151
%INDEX_TITLEONLY%	151
%KEYNAME%	151
%POVBAR%	152

%POVKEYNAMESWITHDESC%	152
%POVTITLES%	153
%REPDESC%	153
%REPLIST2%	153
%REPORT%	154
%REPORTNAME%	154
%SERVERUSERNAME%	155
%SET%	155
%SETLIST2%	155
%SYSLIST%	156
%SYSTEM%	156
%TIME%	157
カスタム変数	157
%@BUTTON()%	158
%@EVALUATE()%	158
%@LAB()%	158
%@LAUNCH_PRINT()%と%@LAUNCH_PRINT2()%	159
%@LINK()%	159
%@QUERY()%	160
%STATIC_PRINT%	160
%STATIC_BOOK%	160
標準テンプレートの変更	161
カスタムテンプレート	162
フレームを使用する動的レポートとチャートのカスタムテンプレートの作成	162
フレームを使用しない動的レポートとチャートのカスタムテンプレートの作成	163
静的レポート、チャート、パッケージのカスタムテンプレートの作成	164
カスタムテンプレートの使用	165
フレームを使用する動的レポートとチャートのカスタムテンプレート	165
フレームを使用しない動的レポートとチャートのカスタムテンプレート	165
静的レポート、チャート、パッケージのカスタムテンプレート	166
Gallery テンプレート	166
Dimen.htx : デイメンションボタン	167
Excel.htx : Microsoft Excel の起動	167
Drill_chart.htx : ドリルスルーを使用するチャート	167
Chart_link.htx : 現在のレポートのチャートの作成	168

Cust_pov.htx : カスタマイズされたデータの視点セレクトの表示	168
Dynchart.htx : チャートオプションの設定	169
Frbottom.htx : 下部のフレームのデータの視点ボタン	169
Nopov.htx : データの視点ボタンの削除	170
COLORS : 色のカスタマイズ	170
動的注釈	170
Stars.htx : Performance Ratings 条件ベースのページ	170
Summary.htx : Financial Highlights 条件ベースのページ	171
Gauge.htx : Gauge 条件ベースのページ	171
第 15 章 財務インジケータの作成	173
財務インジケータについて	173
条件ベースのページの仕組み	174
スコアカードや順位付けの条件ベースのページの作成	175
条件ベースのページの作成	176
条件ベースのページへのアクセス	177
Microsoft VBScript と Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーション ...	177
Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションのスクリプト	177
VBScript	178
VBScript の入手	178
条件スクリプトについて	178
ケーススタディ - 条件付き条件を使用して表示要素を変更する	179
ケーススタディ - デフォルト値を使用して表示要素を変更する	180
条件ベースのページのレポート	182
条件ベースのページのテンプレート	182
VRML 条件スクリプト	183
条件スクリプトの定義	183
[Criteria Scripts (条件スクリプト)] ウィンドウへのアクセス	184
Visual Basic Assistant を使用した条件の定義	184
VB Assistant を使用した条件定義 - 構文の補足情報	186
VBScript を使用した条件定義	187
OLE オートメーションオブジェクトを使用した条件の定義	189
条件スクリプトの編集	189
VB Assistant を使用した条件スクリプトの編集	190
VBScript を使用した条件の編集	191
OLE オートメーションを使用した条件スクリプトの編集	191
CBP ファイルでの高度な操作	192
.Rep ファイルへのアクセス	192
\$(CBPDIR)変数の使用	193

条件スクリプトのテスト	193
条件スクリプトのサンプルファイル	193
第 16 章 財務エージェントの使用	197
財務エージェント	197
ケーススタディ	198
手順 1 : レポートの定義	198
手順 2 : 条件の定義	199
手順 3 : メッセージの定義	199
手順 4 : アクションの選択	200
手順 5 : エージェントのスケジュール設定	201
手順 6 : セキュリティの定義	201
手順 7 : エージェントの Spider.ini 設定の定義	201
[財務エージェント管理] ダイアログボックスへのアクセス	202
エージェントシステムのオプションの定義	202
エージェントの定義	203
VBScript 条件の例	205
カスタマイズ可能な条件スクリプト	206
カスタマイズ可能なスクリプトの定義	210
VBScript を使用したエージェントの定義	211
OLE オートメーションを使用したエージェントの定義	213
アクションの選択	213
エージェントのスケジュール	214
エージェントセキュリティの設定	215
エージェントのカスタマイズ	217
電子メール通知	217
エージェント電子メールのカスタマイズ	221
エージェント Web 通知のカスタマイズ	222
エージェントの Spider.ini オプションの設定	224
エージェントの編集	224
エージェントのコピー	226
エージェントの削除	227
エージェントモニタサービス	227
エージェントモニタサービスの設定	228
エージェントモニタサービスの設定	228
エージェントモニタのオプション設定	228
第 17 章 カスタム OLE オートメーションの使用	231
カスタム OLE オートメーション	231
OLE オートメーションを使用した条件スクリプトのカスタマイズ	231

OLE ベースの条件スクリプトの評価プロセス	232
OLE ベースの条件スクリプトの作成	233
Microsoft Visual Basic を使用した OLE オブジェクトとしての Winners 表示 の作成	234
Microsoft Visual C++を使用した OLE オブジェクトとしての Winners 表示の 作成	235
OLE オートメーションを使用したエージェントのカスタマイズ	236
OLE で定義されたエージェントの評価プロセス	237
エージェントのカスタム OLE オブジェクトの作成	238
Microsoft Visual Basic を使用した OLE オブジェクトとしての Expenses_Prior エージェントの作成	239
Microsoft Visual C++を使用した OLE オブジェクトとしての Expenses_Prior エージェントの作成	240
OLE オートメーションを使用したエージェントアクションのカスタマイ ズ	242
OLE で定義されたエージェントアクションの評価プロセス	242
エージェントアクションのカスタム OLE オブジェクトの作成	243
Microsoft Visual Basic を使用したネットワークメッセージアクションの作 成	244
Microsoft Visual C++を使用したネットワークメッセージアクションの作 成	245
第 18 章 Batch Administration Program の使用	247
Batch Administration Program	247
Batch Administration Program の使用	247
BatAdmin コマンド行の構文	248
ChartType パラメータの値	251
単一の BatAdmin コマンドの実行	253
複数の BatAdmin コマンドを実行するバッチファイルの作成と実行	254
BatAdmin コマンドでの代替変数の使用	254
例	255
例 1 : 環境変数	257
例 2 : 展開と調査	260
例 3 : データの視点の変更	262
例 4 : テンプレートパスの変更	262
例 5 : レポートのグリッド線の有効化と無効化	263
例 6 : チャートの生成	263
例 7 : 並列表示のレポートとチャートの生成	265
例 8 : 静的パッケージの生成	265
例 9 : チャートのみを含む静的パッケージの生成	268

用語集	271
索引	275

1

Webサイト作成の準備

この章の内容

外部認証	13
パフォーマンスに関する考慮事項	13
静的 Web ページと動的 Web ページ	16
Web サイトで表示できるデータの種類	16
Web サイトの作成	17
ファイルの整理	18

外部認証

デフォルトでは、Oracle Hyperion® Enterprise® Reporting は単一の NTLM プロバイダをユーザ名とパスワードの認証に使用し、ユーザは Hyperion Enterprise Reporting と Hyperion Enterprise に別々にログオンする必要があります。ユーザが 1 回のログオン手続きで Hyperion Enterprise Reporting と Hyperion Enterprise の両方にログオンできるようにするには、Hyperion Enterprise Reporting External Security Services ユーティリティを使って外部認証を設定する必要があります。次の外部認証オプションを使用する場合にもこのユーティリティを実行する必要があります。

- Microsoft Active Directory (MSAD)
- Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)
- 複数の NTLM プロバイダ

セットアップ手順など、外部認証について詳しくは、[第 2 章「外部認証の設定」](#)を参照してください。

パフォーマンスに関する考慮事項

この項では、Hyperion Enterprise Reporting Web を使って Web サイトを作成する前に検討すべきパフォーマンスの問題について説明します。

ユーザ数

Hyperion Enterprise Reporting Web に同時にアクセスするユーザの数がパフォーマンスに影響します。最初にインストールするときに、ユーザの数とユーザが出す要求の種類を考慮しておく必要があります。増加を見込んでおく必要もあります。

ユーザは同じアプリケーションにアクセスすることも別々のアプリケーションにアクセスすることもできます。アプリケーションはローカルの場合とリモートの場合、事前に読み込まれている場合とそうでない場合とがあります。これらの要因すべてがパフォーマンスに影響します。

ユーザが感じる遅れは、そのときサーバにアクセスしているユーザ数と個々の要求でサーバが行う処理の量に直接結びついています。Hyperion Enterprise Reporting Web は複数のユーザをサポートしますが、それはハードウェアとソフトウェアの構成および同時接続の数に依存します。

注： Hyperion Enterprise Reporting Web は、IIS の拡張機能なので、ポート 80 がデフォルトとして使用されます。

注： iisreset コマンドはプーリングプロセス (Spider_Pooler.exe) を終了しない場合があります。ただし、Spider_Pooler プロセスは 5 分間アクティブでないと、自動的に閉じます。Oracle Hyperion® Enterprise®バックアップはユーザがシステムにログインしている、していないにかかわらず実行できます。

静的データと動的データ

静的なレポートやチャートは、それが作成されたときの Hyperion Enterprise アプリケーション内のデータを捕えたもので、HTML ファイルとして保存されています。ユーザが静的なレポートやチャートにアクセスすると、その HTML ファイルがネットワークを介して送信されます。パフォーマンスは完全に Web サーバに依存します。

動的なレポートやチャートは Hyperion Enterprise アプリケーションの現在のデータを表示します。動的なレポートやチャートを Web ブラウザに表示すると、そのデータが動的に更新されます。静的なレポートやチャートに比べると、動的なレポートやチャートはシステムにはるかに大きな負荷をかけます。

レポートの複雑さ

多くの計算を必要とする動的レポートや関数を使用する動的レポートは処理に時間がかかります。データを読み取って計算し、その結果を Web サーバとユーザの両方に送る必要があります。

調査と展開

調査は特定の値に関する追加情報を取得するときに使用します。展開はレポート内のサマリレベルの行や列に関する追加情報を取得するときに使用します。

動的レポートでは、調査と展開の詳細は最初のレポートに含まれません。調査と展開の詳細データは、ユーザが展開のマークやレポート値を選択すると取得されます。

サーバは、調査や展開を適用するセルを調べるために追加の処理を行います。従って、調査や展開を含むレポートに対して、その URL でそれらが無効になるように

drill パラメータと expand パラメータを「no」に設定することによってパフォーマンスを向上できます。

静的レポートでは、調査や展開の詳細データは最初にレポートを作成するときに取得されます。従って、調査や展開は静的レポートの生成時間に影響します。

ネットワークの利用

Hyperion Enterprise Reporting Web でアプリケーションを使用するには基本的に次の 2 つの方法があります。

- Hyperion Enterprise Reporting Web サーバで実行する。
- 別のサーバで実行する。

動的なレポートやチャートでは、Hyperion Enterprise Reporting Web、Hyperion Enterprise、Oracle Essbase をすべて同じサーバで実行した方がパフォーマンスが向上します。しかし、メモリと CPU の制約によるパフォーマンスの低下がすべてのユーザに影響します。すべてのアプリケーションを別のサーバ上で実行したときに最適パフォーマンスを達成できるかどうかは、ネットワーク環境やユーザ数に依存します。

Essbase サーバと Essbase アプリケーションを Hyperion Enterprise Reporting Web サーバとは別のサーバ上で実行する構成をお勧めします。Hyperion Enterprise を実行している場合は、アプリケーションを別のコンピュータ上で実行できますが、製品の実行可能ファイルは Hyperion Enterprise Reporting Web のサーバ上で実行する必要があります。

シンククライアントアプリケーションとファットクライアントアプリケーション

すべてのレポートは Hyperion Enterprise Reporting Web サーバ上で処理されるので、Hyperion Enterprise はファットクライアントアプリケーションです。レポートの要求があると、処理を行う前に、すべてのデータがサーバに送られる必要があります。ネットワークのトラフィック、ルータホップ数、およびトポロジがパフォーマンスに影響します。

Essbase サーバで大部分の処理が行われるので、Essbase はシンククライアントです。処理結果のみがクライアントに返されます。ここでもネットワークのレイアウトがパフォーマンスに大きく影響します。しかし、Web サーバではレポートを書式設定するので、そこでもかなりの量の処理が行われます。

アプリケーションプロセッサの性能

Hyperion Enterprise Reporting Web サーバには高性能コンピュータが必要です。『Hyperion Enterprise Reporting インストールガイド』を参照してください。Hyperion Enterprise Reporting Web はそれより多少性能の劣るコンピュータ上でも実行できますが、パフォーマンスが低下します。

サーバ設定によって、多数のユーザが異なるアプリケーションに同時にアクセスしても、あまり遅れを感じることはありません。

静的 Web ページと動的 Web ページ

Web ページには、動的なものと静的なものの 2 種類があります。動的ページとは、ユーザのリクエストに応じて作成されるものです。Hyperion Enterprise Reporting Web では、動的な Web ページを作成して Hyperion Enterprise Reporting で作成されたレポートを表示することができます。

動的レポートページを設定するには、Web ページのハイパーリンクの URL に Hyperion Enterprise アプリケーションとレポートを指定します。ユーザがレポートを作成するためのリンクを選択すると、ブラウザに Web ページとしてレポートを表示することができます。動的に作成されたレポートには、ページの上部にデータの視点ボタンが表示されます。ユーザはレポートの別のデータの視点を選択できます。Hyperion Enterprise Reporting Web は選択されたデータの視点でレポートを作成し直します。

静的ページは、ユーザからの要求に従って作成された HTML ページで、Web サーバにファイルとして保存されます。管理プログラムによって Hyperion Enterprise Reporting のレポートやパッケージが HTML ファイルに変換されます。静的レポートやパッケージのファイルは、Hyperion Enterprise アプリケーションに動的にリンクされていないため、アプリケーションのデータベースでデータが変更されても更新されません。

静的ページはアクセスに時間がかからず、確かなデータのみを反映できるという利点があります。データベースが頻繁に更新される場合は、すべてのデータが入力され検証されるまで、ユーザにデータを公開しない方がよい場合もあります。

Web サイトで表示できるデータの種類

次の表に、Hyperion Enterprise Reporting Web で作成される Web ページに表示できるデータの種類とそれに関する情報の参照先を示します。

表 1 表示できるデータの種類

データの種類	参照先
静的レポートと動的レポート	47 ページの「静的レポートと動的レポート」
複合レポートと並列表示レポート	48 ページの「複合レポートと並列表示レポート」
データ入力レポート	49 ページの「データ入力レポート」
静的および動的チャート	55 ページの「チャートの追加について」
静的パッケージ	65 ページの「静的パッケージについて」
ハイパーリンク	71 ページの「アプリケーションデータへのリンクの追加」
スプレッドシート	79 ページの「スプレッドシートでのデータの表示」
PDF レポート	93 ページの「PDF レポートについて」
調査	97 ページの「調査」

データの種類	参照先
展開	101 ページの「展開について」
カスタマイズされたデータの視点バー	108 ページの「データの視点バーのカスタマイズ」
製品、アプリケーション、レポートセット、およびレポートの連動一覧	121 ページの「動的一覧」
ユーザ定義のお気に入り	129 ページの「お気に入りページ」
財務インジケータ（条件ベースの Web ページ）	173 ページの「財務インジケータについて」
財務エージェント	197 ページの「財務エージェント」

Web サイトの作成

Hyperion Enterprise Reporting Web では Web ページや Web サイトの作成に次の方法を使用できます。

- Microsoft FrontPage 2000 を使用した Web サイトウィザードでの Web サイトの作成と編集
- HTML 編集プログラムを使用して Hyperion Enterprise Reporting Web に用意されている Web ページテンプレート（.htx files）を変更

Web サイトウィザードの使用

Web サイトの作成には Web サイトウィザードを使うのが最も簡単な方法です。Web サイトウィザードは、HTML ファイルの作成や編集を手動で行わなくても、組織の Web サイトをすばやく簡単に設定できるようにするものです。Web サイトウィザードでは、会社に関するものや、Web サイトに含める情報の種類など、一連の質問が表示されます。これらの質問に対する回答によって、Web サイトのコンテンツと外観が決まります。

Web サイトウィザードでは Microsoft FrontPage 互換の Web ページが作成されるため、Microsoft FrontPage 2000 が必要です。ウィザードが作成した Web サイトは Microsoft FrontPage で編集できます。

HTML エディタを使用したテンプレートの変更

テンプレートは、Hyperion Enterprise Reporting Web で Web ページを作成するときに使用される HTML の書式ファイルです。テンプレートファイルのファイル名には .htx という拡張子が付いています。このファイルには、HTML の書式タグと変数が含まれています。書式タグは要素間の間隔やサイズ、背景色など Web ページの外観を制御します。変数は Hyperion Enterprise アプリケーションの情報を挿入する場所を示します。

Hyperion Enterprise Reporting Web に用意されているデフォルトのテンプレートは変更できます。HTML エディタを使って独自のカスタムテンプレートを作成することもできます。HTML の書式タグや変数を必要に応じて変更してください。

テンプレートのカスタマイズについて詳しくは、[第 14 章「テンプレートを使用した Web ページの作成」](#)を参照してください。

ファイルの整理

Hyperion Enterprise Reporting Web を Web ページの作成に使用すると、独自のカスタムテンプレート（.htxファイル）や条件ベースの Web ページ（CBP ファイル）を作成できます。これらのカスタムファイルを整理する 1 つの方法は、各 Web アプリケーション用のカスタム .htx ファイルや cbp ファイルをそれぞれ適切なディレクトリに保存することです。

カスタムファイルのパスの指定

カスタムファイルへの完全または部分的なパスをシステムレジストリに指定すると、完全なサーバパスを指定せずにファイルへアクセスできるようになります。

HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Hyperion Solutions\Hyperion Enterprise Reporting Web Server の Path レジストリ設定に、1 つ以上のディレクトリへの完全または部分的なパスを指定できます。複数のディレクトリを指定する場合は、セミコロンで区切ります。パスステートメントの検索は左から右に行われます。

spider.dll 関数の呼び出しなどで .htx や CBP ファイルにアクセスすると、次の順序でファイルが検索されます。

1. システムレジストリに指定したパス
2. HSPIDER ディレクトリ
3. システムパス

► システムレジストリにカスタムファイルのパスを指定するには、次の操作を行います。

- 1 [スタート] メニューから [ファイル名を指定して実行] を選択します。
- 2 「regedt32」と入力して、[OK] をクリックします。
- 3 HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Hyperion Solutions\Hyperion Enterprise Reporting Web Server レジストリキーを選択します。
- 4 [編集] メニューの [値の追加] を選択します。
- 5 [値の名前] ボックスに「path」と入力します。
- 6 [データ型] ドロップダウンリストから [REG_SZ] を選択します。
- 7 [OK] をクリックします。
- 8 [文字列エディタ] にカスタムファイルのパスを入力して、[OK] をクリックします。
- 9 [ファイル] メニューから [終了] を選択します。

例 1 - 同一ファイル名がパスにある 2 つのディレクトリで使用されている場合

パスステートメントに部分パスのみを入力しておけば、別のディレクトリに存在する同一ファイル名のファイルのパスを区別できます。これは、.htx と cbp のカスタムファイルを、各 Web アプリケーション用に別々のディレクトリに保存して、各ディレクトリで同じファイル名を使用する場合などに効果的です。

例えば、C:ドライブに WEBAPPS というディレクトリがあり、この中には \MYWEB1 と \MYWEB2 という 2 つのディレクトリがあり、それぞれに 2 つの Web アプリケーションのすべてのカスタムファイルを保存するとします。各 Web アプリケーションで mycrit.cbp という cbp カスタムファイルを作成して、2 つのディレクトリに同じ名前のファイル mycrit.cbp を保存しました。ここで、システムレジストリのカスタムファイルのパスステートメントが、次のように指定されている場合を想定してみます。

```
C:\WEBAPPS\MYWEB1;C:\WEBAPPS\MYWEB2
```

この状態で、次の関数呼び出しでいずれかの mycrit.cbp ファイルを呼び出します。

```
http://server/hspider/spider.dll?criteria&mycrit
```

パスステートメントには C:\WEBAPPS\MYWEB ディレクトリが先にリストされ、左から右にパスステートメントが検索されるので、C:\WEBAPPS\MYWEB の mycrit.cbp ファイルが使用されます。

注： .htx ファイルではファイルの拡張子を含める必要があります。次にその例を示します。http://server/hspider/spider.dll?criteria&mytemp.htx

パスステートメントには C:\WEBAPPS\MYWEB1 ディレクトリが先にリストされ、左から右にパスステートメントが検索されるので、C:\WEBAPPS\MYWEB1 の mycrit.cbp ファイルが使用されます。

この問題を解決するには、カスタムファイルのパスステートメントに次の部分パスを指定します。

```
C:\WEBAPPS
```

さらに、MYWEB2 ディレクトリにある MYCRIT.CBP ファイルを使用するためのサブディレクトリを関数呼び出しに含めます。

```
http://server/hspider/spider.dll?criteria&myweb2\mycrit
```

これで正しいファイルが使用されます。

例 2 - デフォルトテンプレートのコピーを使用する場合

カスタムパスステートメントを使用すれば、SPIDER.DLL 関数呼び出しの tfile パラメータを使用しなくても、デフォルトテンプレートの独自のコピーを使用できます。デフォルトテンプレートを変更してカスタムテンプレートを作成する場合、すべてのデフォルトテンプレートを異なるディレクトリにコピーし、ファイル名を変更せずにコピーに変更を加えます。これにより、元のデフォルトテンプレー

トが維持されます。パスステートメントには、コピーのあるディレクトリを指定し、`tfile` パラメータを使用せずに `spider.dll` 関数を呼び出します。

この章の内容

認証の概要.....	21
認証プロバイダについて.....	22
外部セキュリティサービスユーティリティの使用.....	22
Spider.ini ファイルの編集.....	34
追加の外部認証情報.....	35

認証の概要

認証では、ユーザ名をパスワードに一致させることによって各ユーザの ID が確認されます。Hyperion Enterprise Reporting で次の認証オプションを使用する場合には、外部認証を設定する必要があります。

- Microsoft Active Directory (MSAD)
- Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)
- 複数の NTLM
- ユーザが、Hyperion Enterprise Reporting と Hyperion Enterprise にシングルサインオン機能を利用して、ログオンできるようにします。

これらの外部プロバイダはいくつでも使用できます。

外部認証プロバイダの設定時には、設定されている認証の種類に応じて次の情報を指定する必要があります。

- NT ドメイン名 (NTLM)
- ドメイン情報を保持しているサーバのホスト名 (MSAD \ LDAP)
- ディレクトリの読み取り権限が与えられたユーザ (MSAD)
- ポート番号 (MSAD \ LDAP)
- ベースディレクトリ (DIT) (MSAD \ LDAP)

次に管理者は、ロールとアクセス権を Hyperion Enterprise アプリケーションのリポジトリからユーザおよびグループに割り当てることができます。

外部認証では、クラスタ内のすべてのサーバが同じセキュリティ設定に設定されている必要があります。

外部認証設定は、spider.ini ファイルに追加する必要があります。詳しくは、[34 ページの「Spider.ini ファイルの編集」](#)を参照してください。

認証プロバイダについて

Hyperion Enterprise Reporting は、デフォルトとして Microsoft NTLM セキュリティをサポートしています。Microsoft Windows オペレーティングシステムのセキュリティサブシステムによって、リポジトリが作成され、管理されます。

Microsoft Windows Server では、ユーザおよびグループはドメインによって整理されています。ドメインは、ネットワーク化されたコンピュータと関連するユーザおよびリソースの管理グループです。ドメイン内のすべてのユーザによるネットワークリソースへのアクセスは、ドメイン内のドメインコントローラコンピュータによって保存および認証されます。つまり、Primary Domain Controller によって、ユーザとパスワードのデータベースが保存および管理されています。

大規模なインストールの場合には、信頼関係にある複数のドメインを設定できます。この設定では、あるドメインのすべてのユーザが別のドメインのリソースにアクセスできるようになります。また、ユーザアカウント管理とリソース管理をある程度分けることができます。

例えば、ドメイン A にニューヨークのユーザ、ドメイン B にボストンのユーザ、ワシントンのドメイン C にサーバがあるとします。信頼関係は、ドメイン C のサーバと他のすべてのドメイン（この場合はドメイン A とドメイン B）の間に確立されている必要があります。ドメイン A とドメイン B のユーザは、ドメイン C にログオンして Hyperion Enterprise アプリケーションに追加される必要があります。但し、Microsoft Windows のインタラクティブログオンを使用してドメイン C のサーバにアクセスできるユーザは、この操作を行う必要がありません。

通常、Microsoft Windows のセキュリティは社内の IT 担当者によって設定されています。Microsoft Windows のセキュリティ設定方法について詳しくは、『Hyperion Enterprise Reporting インストールガイド』を参照してください。

Hyperion Enterprise Reporting では、デフォルトで NTLM 認証をサポートしています。LDAP または MSAD 認証を使用または有効にするには、外部セキュリティサービスユーティリティを実行する必要があります。

外部セキュリティサービスユーティリティの使用

外部セキュリティサービスユーティリティを使用して、Hyperion Enterprise Reporting のシングルサインオンを有効にします。シングルサインオンは、ユーザが一度ログオンするだけで複数の Hyperion Enterprise アプリケーションにアクセスできる機能です。外部認証されたユーザが Hyperion Enterprise アプリケーションにログオンすると、暗号化されたトークンが生成されます。このトークンには、ユーザ名およびユーザのパスワード（場合による）などのユーザのログオン情報が含まれています。トークンにパスワードが含まれるかどうかは、設定によって異なります。信頼されている認証ディレクトリを使用する場合、パスワードはトークンには含まれないか、必要ありません。

トークンは暗号化されていますが、反射攻撃や中間者攻撃を防ぐために、Secure Sockets Layer (SSL) プロトコルなどの追加セキュリティの使用をお勧めします。

互いに起動し合う複数の Hyperion Enterprise アプリケーション間でシングルサインオンを有効にするには、複数の製品インストールに共有の 1 つの XML ファイルを使用する必要があります。

Hyperion Enterprise Reporting 外部セキュリティサービスユーティリティは、Hyperion Enterprise Reporting で使用できる外部認証やシングルサインオンの設定を支援します。使用する企業ディレクトリを選択し、ウィザードに必要な接続情報を入力します。

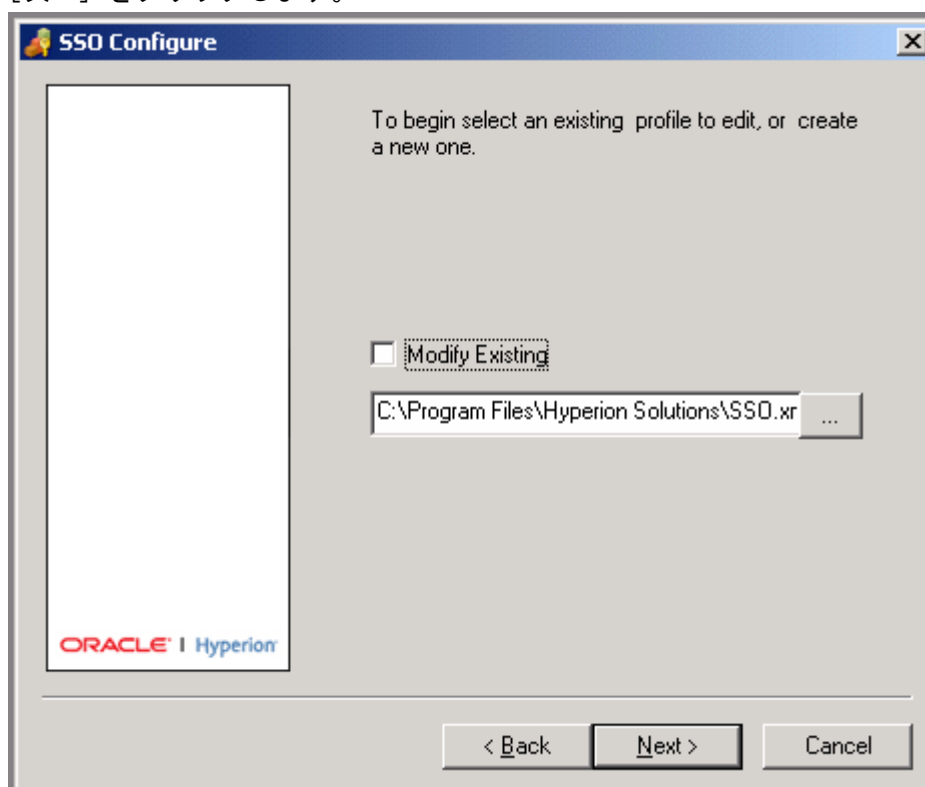
注： 外部セキュリティサービスのオプションは、Hyperion Enterprise Reporting Web Application のカスタムサーバイnstall時に外部セキュリティサービスを選択した場合にのみ、プログラムメニューから使用できます。詳しくは、『Hyperion Enterprise Reporting インストールガイド』の「Hyperion Enterprise Reporting Web Application のインストール」の章の「カスタムサーバイnstallの実行」の項を参照してください。

LDAP または MSAD 認証の設定

Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) および Microsoft Active Directory (MSAD) 認証は、外部セキュリティサービスユーティリティを使用して個別に設定することも、一度に設定することもできます。

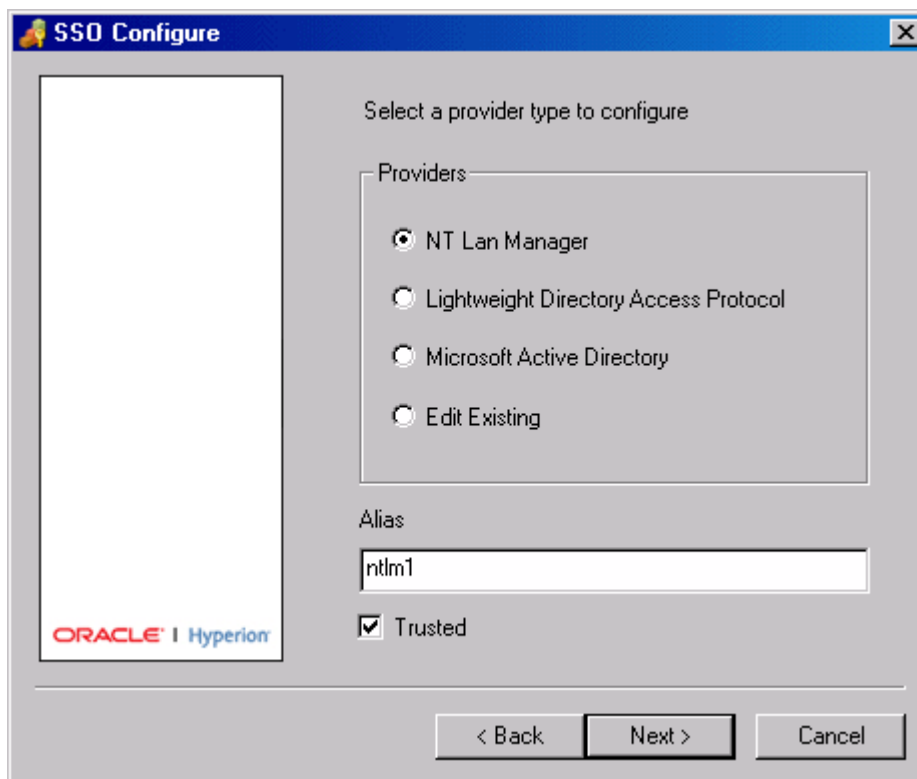
▶ LDAP または MSAD 認証を設定するには、次の手順に従います。

- 1 [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[外部セキュリティサービス] の順に選択します。
- 2 [次へ] をクリックします。



- 3 次のいずれかの操作を行い、[次へ] をクリックします。
 - 既存のプロファイルを変更するには、[Modify Existing (既存のプロファイルを変更)] チェックボックスをオンにし、プロファイルファイルへのパスを入力するか、[参照] ボタンを使用して移動します。

- プロファイルを新規作成するには、ボックスにファイル名を入力します。



4 プロバイダを選択し、エイリアスを指定します。

1. [プロバイダ] ボックスで、[Lightweight Directory Access Protocol] または [Microsoft Active Directory] を選択します。
2. [エイリアス] ボックスに、エイリアスを入力します。

注： 指定したエイリアスが既存のエイリアスであることを示すメッセージが表示された場合には、[OK] をクリックし、[エイリアス] ボックスに新しいエイリアス名を入力してください。

3. オプション：[Trusted (信頼)] チェックボックスをオンにすると、指定したエイリアスは、ユーザがプロバイダとして信頼するドメインであることを示します。

[Trusted (信頼)] チェックボックスがオンになっている場合には、設定処理の実行速度が大幅に加速します。

4. [次へ] をクリックします。

SSO Configure

Please enter the LDAP server host information

Host:

Port:

Base DN:

ORACLE | Hyperion

< Back Next > Cancel

5 LDAP サーバホスト情報を入力します。

1. [ホスト] ボックスに、LDAP サーバホスト名を入力します。
2. [ポート] ボックスで、ポート番号を指定します。デフォルトは 389 です。
3. [Base DN (基本 DN)] ボックスに、検索を開始する識別名を入力します。
4. [次へ] をクリックします。

SSO Configure

Please enter the LDAP access credentials.

User Distinguished Name:

cn =

Password:

Confirm password:

☒ Anonymous bind

ORACLE | Hyperion

< Back Next > Cancel

6 LDAP アクセスのログイン情報を指定します。

1. **【ユーザー識別名】** ドロップダウンリストで、名前属性を選択します。
2. 等号 (=) の付いたボックスに、ユーザ名を入力します。
3. 次のいずれかの操作を行い、**【次へ】** をクリックします。
 - パスワードを要求するには、**【パスワード】** ボックスに指定されているユーザのパスワードを入力し、**【パスワードの確認】** ボックスに同じパスワードを再び入力します。
 - サーバのアクセスが公開されている場合に匿名ユーザによるアクセスを有効にするには、**【匿名バインド】** チェックボックスをオンにします。

注： MSAD では匿名バインドは許可されません。指定されたディレクトリの読み取り権限が与えられたアカウントが必要です。

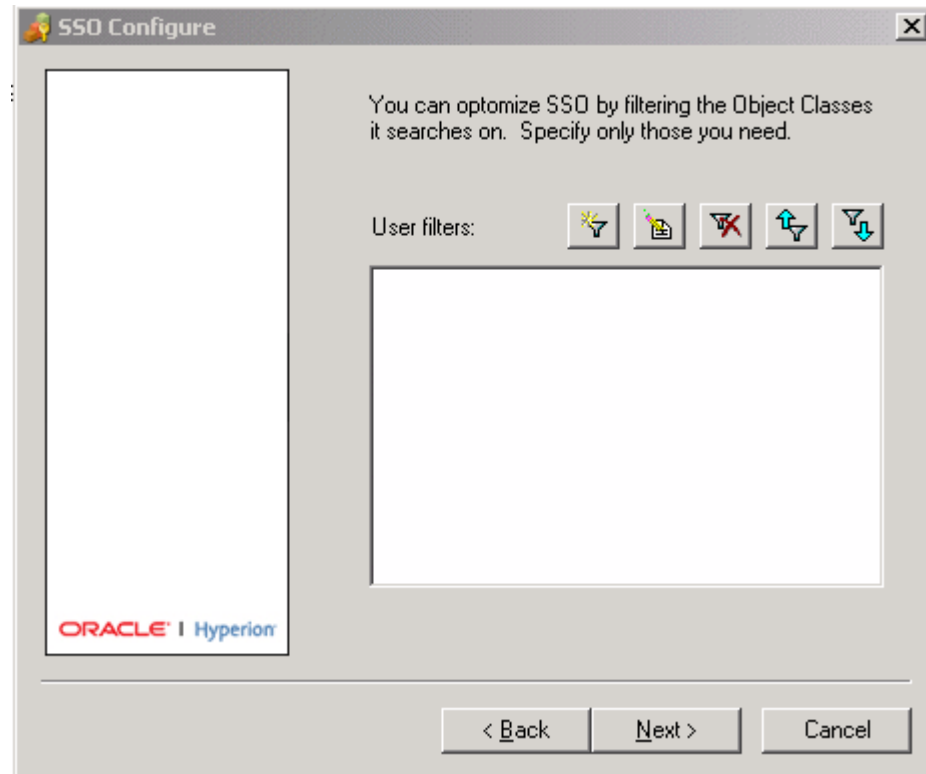
7 LDAP ユーザノードの情報を入力します。

1. **【URI attribute (URI 属性)】** ドロップダウンリストで、ノードの組織単位属性を選択します。
2. 等号 (=) の付いたボックスに、ノード名を入力します。
3. **【ログイン属性】** ドロップダウンリストで、ノードユーザのログイン名に対応する属性を選択します。






注： MSAD では UID 属性は許可されません。MSAD と同等の認証を使用する場合は、XML ファイルでログイン属性を `sAMAccountName` に手動で変更する必要があります。

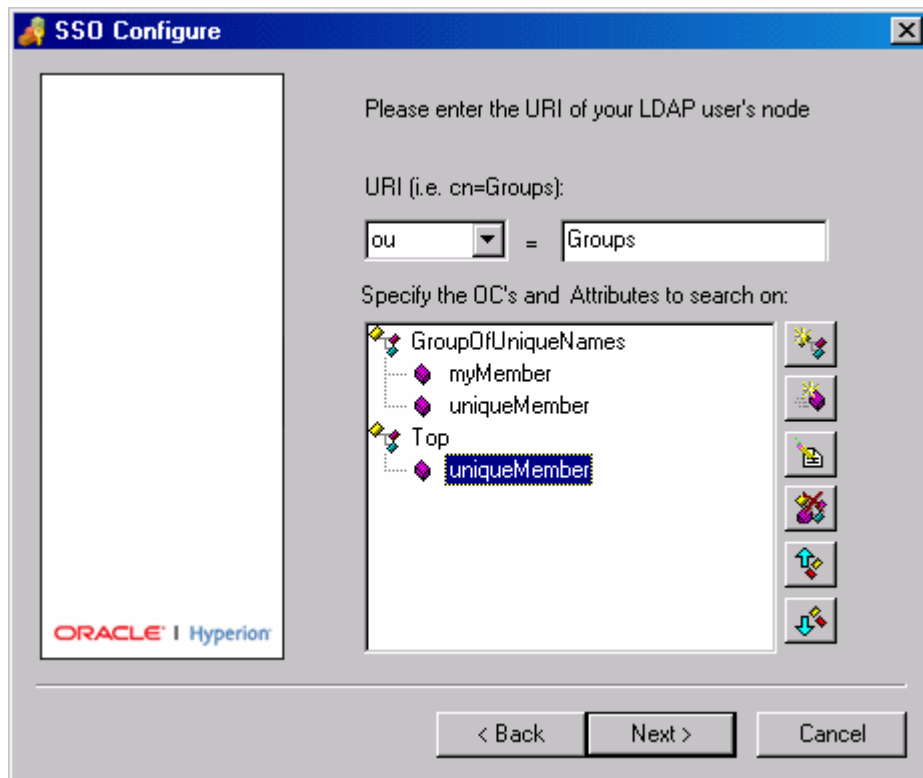
4. **【名前属性】** ドロップダウンリストで、ユーザがノードにグループ化されている属性を選択します。

5. [グループ名属性] ドロップダウンリストで、グループを整理しているグループ属性を選択します。
6. [次へ] をクリックします。








- 8 外部セキュリティサービスによって評価するユーザのオブジェクトクラスを次の手順に従って指定し、[次へ] をクリックします。

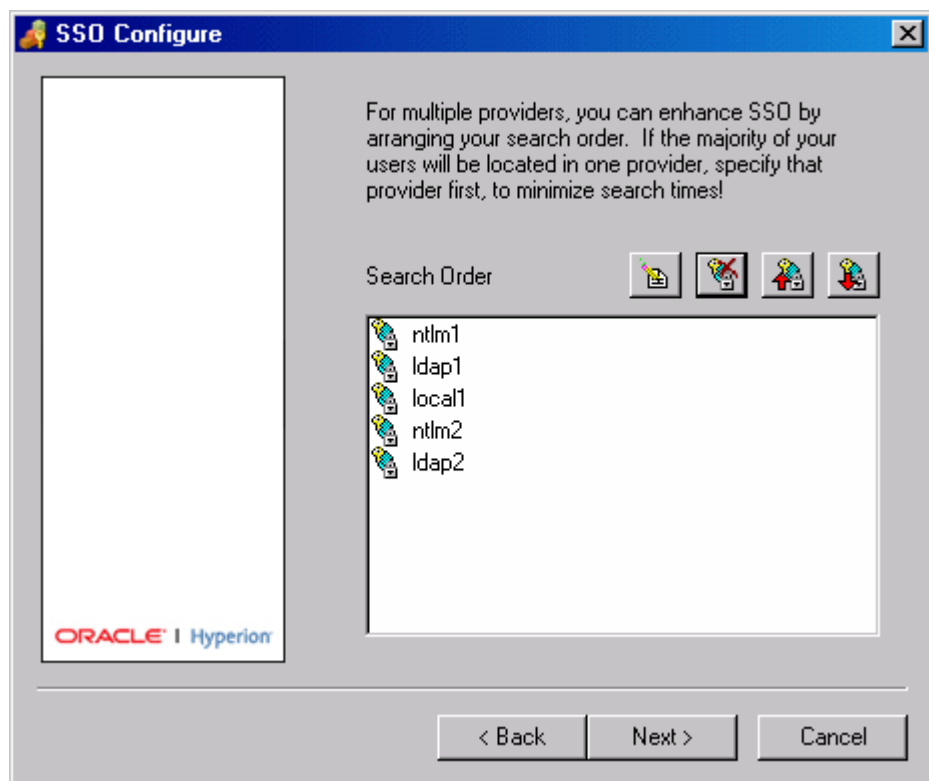
- オブジェクトクラスを挿入するには、 ボタンをクリックします。
- リストにあるオブジェクトクラスのラベルを編集するには、オブジェクトクラスをダブルクリックするか、クリックしてから  ボタンをクリックし、ラベルを変更します。
- リストからオブジェクトクラスを削除するには、オブジェクトクラスをクリックし、 ボタンをクリックします。
- リスト内でオブジェクトクラスの位置を上に移すには、オブジェクトクラスをクリックし、 ボタンをクリックするか、オブジェクトクラスを選択し、新しい位置にドラッグします。
- リスト内でオブジェクトクラスの位置を下に移すには、オブジェクトクラスをクリックし、 ボタンをクリックするか、オブジェクトクラスを選択し、新しい位置にドラッグします。







9 検索を行う URI、オブジェクトクラスと属性を次の手順に従って指定し、[次へ] をクリックします。

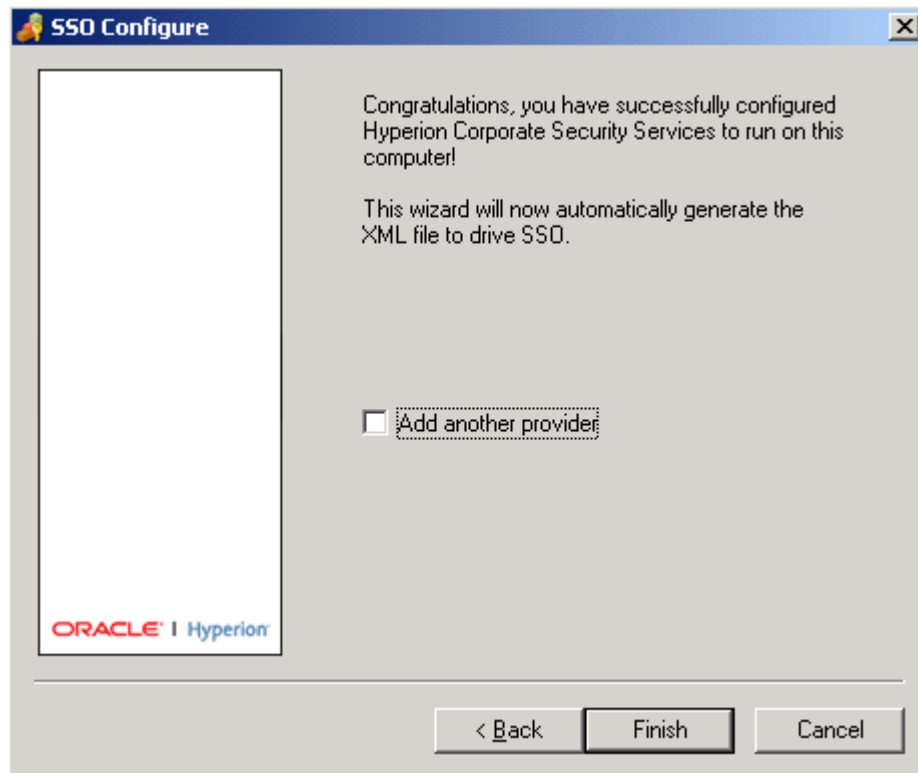
1. [URI] ドロップダウンリストで、グループディレクトリの組織単位を選択します。
2. オブジェクトクラスと属性フィルタを指定します。

- オブジェクトクラスを挿入するには、 ボタンをクリックします。
- 評価するオブジェクトクラスの入力項目に属性を追加するには、オブジェクトクラスをクリックし、 ボタンをクリックします。
- オブジェクトクラスまたは属性名を編集するには、オブジェクトクラスまたは属性をダブルクリックするか、クリックして  ボタンをクリックし、名前を変更します。
- リスト内でオブジェクトクラスとその属性を上に移動するには、オブジェクトクラスをクリックし、 ボタンをクリックするか、オブジェクトクラスを選択して新しい位置にドラッグします。
- リスト内でオブジェクトクラスとその属性を下に移動するには、オブジェクトクラスをクリックし、 ボタンをクリックするか、オブジェクトクラスを選択して新しい位置にドラッグします。



10 複数のプロバイダを指定した場合は、次のいずれかの操作を行ってプロバイダの検索順序を指定し、[次へ] をクリックします。

- プロバイダのラベル名を編集するには、プロバイダを選択し、 ボタンをクリックするか、そのオブジェクトクラスをダブルクリックします。
- プロバイダを削除するには、そのプロバイダを選択し、 ボタンをクリックします。
- プロバイダを検索順序内で上に移動するには、プロバイダを選択して  ボタンをクリックします。
- プロバイダを検索順序内で下に移動するには、プロバイダを選択して  ボタンをクリックします。



11 次のいずれかの操作を行います。

- 他のプロバイダを追加するには、[別のプロバイダを追加する] チェックボックスをオンにし、[次へ] をクリックし、次の手順でプロバイダとエイリアスを指定します。
 - 別の LDAP または MSAD プロバイダを追加するには、ステップ 4 ～ 10 を繰り返します。
 - NTLM プロバイダを追加するには、30 ページの「NTLM 認証の設定」の手順に従います。
- 他のプロバイダを追加せずに設定処理を終了するには、[終了] をクリックします。

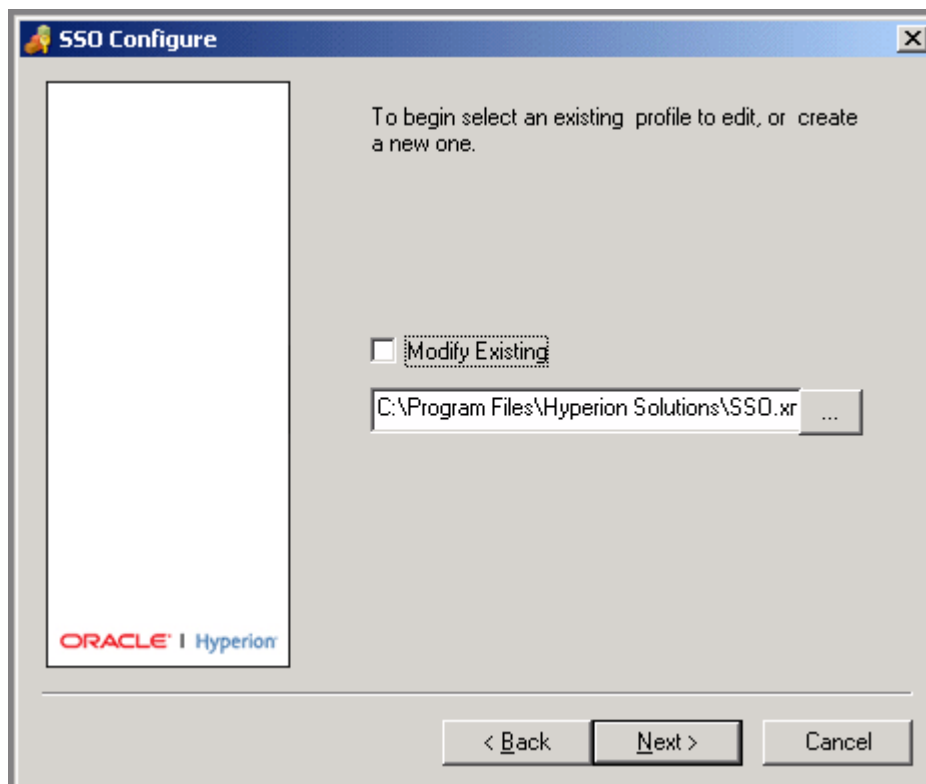
NTLM 認証の設定

外部セキュリティサービスユーティリティを使用すると、NTLM を認証プロバイダとして設定できます。

▶ NTLM を認証プロバイダとして指定するには、次の手順に従います。

- 1 [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[外部セキュリティサービス] の順に選択します。
- 2 [次へ] をクリックします。

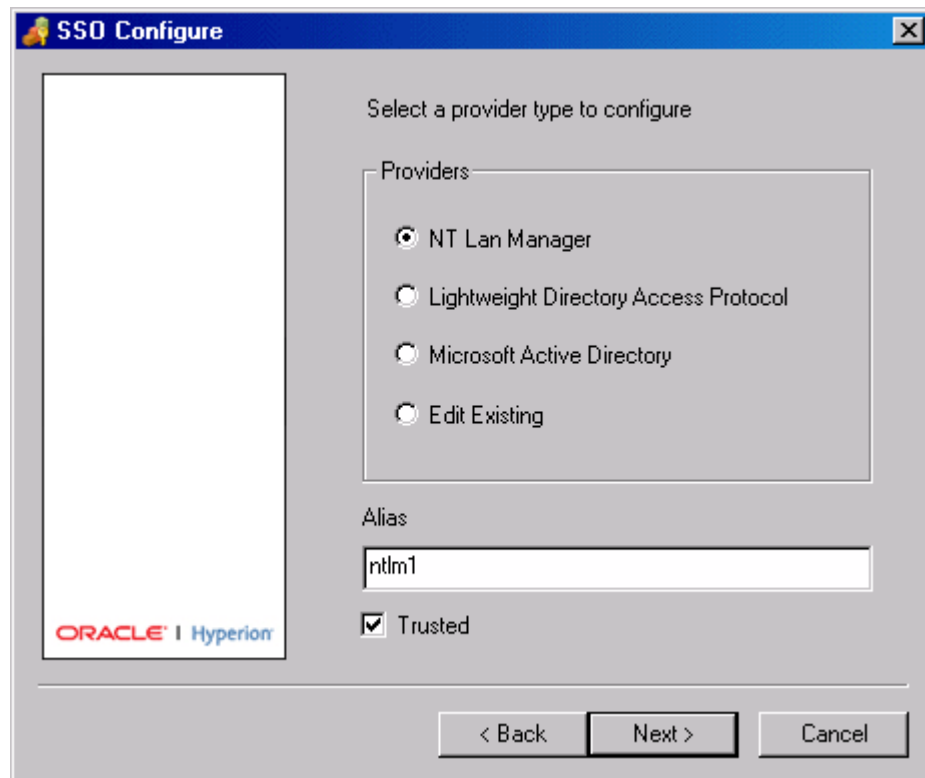
図 1 設定プロファイルの選択または作成



3 次のいずれかの操作を行い、[次へ] をクリックします。

- 既存のプロファイルを変更するには、[Modify Existing (既存のプロファイルを変更)] チェックボックスをオンにし、プロファイルファイルへのパスを入力するか、[参照] ボタンを使用して移動します。
- プロファイルを新規作成するには、ボックスにファイル名を入力します。

図2 プロバイダの選択

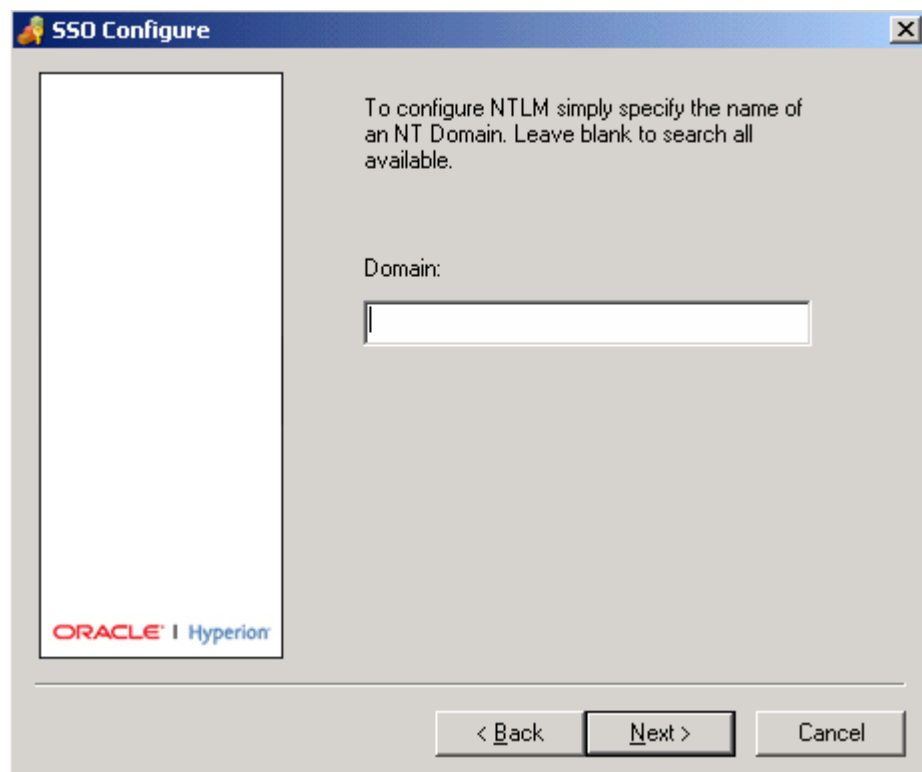


4 プロバイダを選択し、エイリアスを指定します。

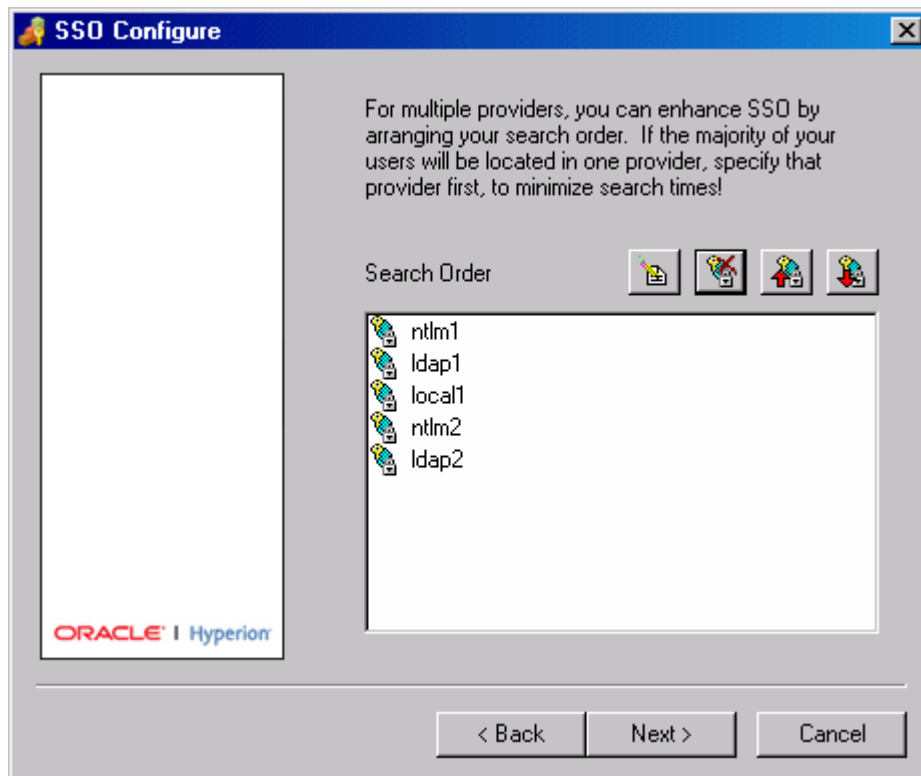
1. [プロバイダ] ボックスで、[NT Lan Manager] を選択します。
2. [エイリアス] ボックスに、エイリアスを入力します。

注： 指定したエイリアスが既存のエイリアスであることを示すメッセージが表示された場合には、[OK] をクリックし、[エイリアス] ボックスに新しいエイリアス名を入力してください。


3. オプション：[Trusted (信頼)] チェックボックスをオンにすると、指定したエイリアスは、ユーザがプロバイダとして信頼するドメインであることを示します。
4. [次へ] をクリックします。






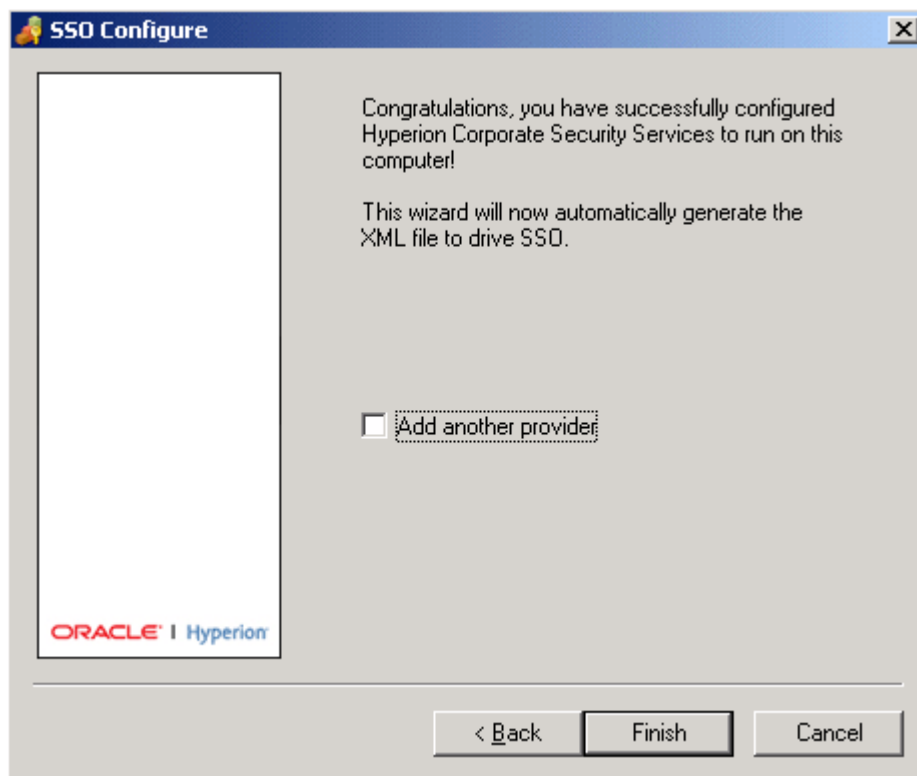
- 5 [ドメイン] ボックスに NT ドメイン名を入力し、[次へ] をクリックします。



- 6 複数のプロバイダを指定した場合は、次のいずれかの操作を行ってプロバイダの検索順序を指定し、[次へ] をクリックします。

- プロバイダのエイリアスを編集するには、エイリアスをダブルクリックするか、エイリアスをクリックしてから  ボタンをクリックし、エイリアスを変更します。

- プロバイダを削除するには、そのプロバイダのエイリアスをクリックし、 ボタンをクリックします。
- プロバイダを検索順序内で上に移動するには、プロバイダのエイリアスをクリックしてから  ボタンをクリックします。
- プロバイダを検索順序内で下に移動するには、プロバイダのエイリアスをクリックしてから  ボタンをクリックします。



7 次のいずれかの操作を行います。

- 他のプロバイダを追加するには、[別のプロバイダを追加する] チェックボックスをオンにし、[次へ] をクリックし、次の手順でプロバイダとエイリアスを指定します。
 - 別の NTLM プロバイダを追加する場合は、ステップ 4～7 を繰り返します。
 - Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) または Microsoft Active Directory (MSAD) プロバイダを追加するには、[23 ページの「LDAP または MSAD 認証の設定」](#) の手順に従います。
- 他のプロバイダを追加せずに設定処理を終了するには、[終了] をクリックします。

Spider.ini ファイルの編集

外部認証を使用している場合は、次のコードを spider.ini ファイルに追加する必要があります。

[CSS]

```
Enabled=1  
ConfigFile="file:///C:/Program Files/Hyperion Solutions/HYPENTSSO.XML"
```

spider.ini ファイルは、drive:\wininstall ディレクトリに保存されます。ここで、drive および wininstall は、ディスクドライブで、Microsoft Windows がインストールされているドライブのディレクトリを指します。

追加の外部認証情報

次に、外部認証を使用する場合の追加情報を示します。詳しくは、次の項目を参照してください。

- [35 ページの「設定の効果」](#)
- [36 ページの「適切なログ優先順位の設定」](#)
- [36 ページの「プロバイダ検索の順序の設定」](#)
- [37 ページの「トークンのタイムアウトの設定」](#)
- [38 ページの「LDAP または Active Directory プロバイダの設定」](#)
- [43 ページの「NTLM プロバイダの設定」](#)

設定の効果

基本的な設定は、sample.xml ファイルまたは sample-full.xml ファイルでプロパティを編集して行います。これらの XML ファイルは CSS のインストール時に一緒にインストールされます。Hyperion Enterprise や Essbase と一緒にインストールされることはありません。プロパティ値は、使用するアプリケーションおよびプロバイダシナリオに合わせて設定する必要があります。プロパティは、次の形式で表記されます。

- プロパティタイプを表す XML タグ
- 各プロパティの値を表す XML タグの変更可能な値

サポートされている各認証シナリオにはプロパティのセットがあります。これらのプロパティセットは、導入シナリオに応じて sample.xml ファイルで編集します。

別のソフトウェアを起動するオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアでシングルサインオンを有効にするには、両方の製品インストールで共有する 1 つの XML 設定ファイルを使用する必要があります。

注： Internet Explorer のバージョン 6.0 以降などの XML をサポートしているブラウザで検証することによって、sample.xml ファイルの内容を把握しておいてください。これらのブラウザでは、ファイルは色分け表示され、セクションの展開や折りたたみができます。Internet Explorer では、変更するセクションは濃い太字で表示されます。太字で表示されている領域はタグのコンテンツです。例えば、<tag>**content**</tag>などです。ユーザーが変更してはいけない実際のタグは、薄い文字で山型かっこに囲まれて表示されます。

ample.xml ファイルには、最低限のプロパティセットがあります。これらのプロパティセットは、使用するアプリケーションおよびプロバイダシナリオ用に設定する必要があります。

適切なログ優先順位の設定

次の設定条件は、LDAP、Active Directory、および NTLM プロバイダに適用されます。それぞれのプロバイダに固有の追加条件については、[38 ページの「LDAP または Active Directory プロバイダの設定」](#) または [43 ページの「NTLM プロバイダの設定」](#) を参照してください。

- ▶ 外部認証とシングルサインオンをサポートしているアプリケーションのエラーレベルを設定するには、次の手順に従います。

- 1 テキストエディタで sample.xml を開きます。

注： sample.xml ファイルは、<COMMON_FILES>\Hyperion Shared\CSS \Configuration ディレクトリにあります。

- 2 sample.xml の次のセクションを探します。

```
<logger>
  <priority>DEBUG</priority>
</logger>
```

- 3 エラーレポートの値を DEBUG からアプリケーションがログに記録する認証関連エラーメッセージのレベルに変更します。

タグを含む<logger></logger>セクション全体が削除されている場合、デフォルト値の DEBUG が使用されます。タグ内の値のみを削除しないでください。

有効な値は次の一覧のとおりです。各レベルにはその下のレベルがすべて含まれます。

DEBUG、デバックに役立つ広範な情報が含まれています。

INFO、操作および要求のステータスに関する情報が含まれます。

WARN、一部の操作および要求に関する警告情報が含まれます。

ERROR、失敗した操作および要求に関する説明のみが含まれます。

FATAL、接続の切断の原因になるエラーに関する情報のみが含まれます。

- 4 sample.xml ファイルを保存します。

プロバイダ検索の順序の設定

検索順序を設定すると、外部認証メカニズムが複数のプロバイダに指定された順番でアクセスできるようになります。検索順序は、単一の認証プロバイダのみの場合も設定する必要があります。その場合、検索順序のプロパティの入力項目は 1 つです。

- ▶ プロバイダ検索順序を定義するには、次の手順に従います。

- 1 テキストエディタで `sample.xml` を開きます。
- 2 `sample.xml` の次のセクションを探します。

```
<searchOrder>
  <el>ntlmServer</el>
  <el>ldapServer</el>
  <el>msadServer</el>
</searchOrder>
```

- 3 `<el>` セクションを必要に応じて移動して、プロバイダタイプを、ユーザが Hyperion Enterprise アプリケーションにログオンを試みるたびに検索する順番に配置します。

Hyperion Enterprise アプリケーションのユーザが最も多く含まれているプロバイダがわかっている場合は、そのプロバイダを検索順序の最初に配置するのが適切です。

例えば、次のセクションでは、ユーザ情報の検索は最初に LDAP プロバイダで実行されます。

```
<searchOrder>
  <el>ldapServer</el>
  <el>ntlmServer</el>
  <el>msadServer</el>
</searchOrder>
```

注： LDAP および NTLM プロバイダの両方が外部認識に使用されている場合には、検索順序では NTLM より先に LDAP を指定する必要があります。

プロバイダは必要に応じて追加または削除できます。例えば、`ldapServer2` という名前の 2 つ目の LDAP プロバイダがある場合に、`<el>ldapServer2</el>` というセクションを追加する場合などです。

- 4 該当する `<el></el>` タグ内に LDAP プロバイダを使用している場合には、`ldapServer` を、その LDAP サーバの設定を表す名前に置き換えます。

この名前は、[39 ページの手順 3](#) の LDAP プロバイダのセクションで指定する名前と同じである必要があります。

- 5 該当する `<el></el>` タグ内に NT LAN Manager プロバイダを使用している場合には、`ntlmServer` を、その NTLM プロバイダの設定を表現する名前に置き換えます。

この名前は、[43 ページの手順 3](#) の NTLM プロバイダのセクションで指定する名前と同じである必要があります。

- 6 `sample.xml` ファイルを保存します。

トークンのタイムアウトの設定

外部認証されたユーザが Hyperion Enterprise アプリケーションにログインすると、トークンが生成されてログイン証明書が格納されます。トークンは、デフォルトの 480 分（8 時間）でなく、指定の時間（分単位）の経過後に期限切れになるように設定できます。

➤ トークンの有効期間を設定するには、次の手順に従います。

- 1 テキストエディタで `sample-full.xml` を開きます。
- 2 `sample-full.xml` の次のセクションを探します。

```
<token>
  <timeout>60</timeout>
</token>
```

- 3 `<timeout></timeout>` タグ内に、ユーザの再認証が必要になるまでの時間を入力します（単位は分）。

トークンのデフォルトの時間は、480 分（8 時間）です。

- 4 XML 設定ファイルを保存します。

LDAP または Active Directory プロバイダの設定

この項では、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) のプロバイダ実装を設定するために必要なプロパティの変更方法を説明します。使用するアプリケーションが LDAP または Microsoft Active Directory プロバイダをサポートしている場合にこれらの手順を使用します。

注： これらの手順は、[36 ページの「適切なログ優先順位の設定」](#) および [36 ページの「プロバイダ検索の順序の設定」](#) の一般的な設定手順が完了していることを前提としています。

この項では、次の内容を説明します。

- [38 ページの「LDAP または Active Directory の基本的な設定」](#)
- [40 ページの「LDAP または Active Directory のオプション設定」](#)

LDAP または Active Directory の基本的な設定

➤ LDAP の基本的な設定を完了するには、次の手順に従います。

- 1 テキストエディタで `sample.xml` を開きます。
- 2 iPlanet または Novell LDAP サーバなどの LDAP ディレクトリを設定している場合には、`sample.xml` で次のセクション、`<ldap name="ldapServer">` と `</ldap>` タグに囲まれたセクション全体を探します。

```
<ldap name="ldapServer">
  <trusted>true</trusted>
  <url>ldap://host:portNo/DIT</url>
  <userDN>cn=User Name</userDN>
  <password>userPassword</password>
</ldap>
<user>
  <url>ou=People</url>
</user>
<group>
  <url>ou=Groups</url>
</group>
```

</ldap>

Microsoft Active Directory を設定している場合には、<msad name="msadServer"></msad>タグ内のセクションを探し、iPlanet または Novell LDAP での設定方法と同じ方法でプロパティを設定します。

- 3 上記のセクションの最初の行で、ldapServer または msadServer を、この LDAP または Microsoft Active Directory プロバイダの設定を示す名前に変更します。

この名前は、37 ページの手順 4 の検索順序のセクションで指定した名前と同じである必要があります。

- 4 <trusted></trusted>タグ内の値は、デフォルト値 true のままにするか、特定のプロバイダが信頼されている LDAP または Active Directory プロバイダでない場合には、false に置き換えます。

タグを含む<trusted></trusted>セクション全体が削除されている場合、デフォルト値の true が使用されます。タグ内の値のみを削除しないでください。

信頼設定が true の場合、ユーザ認証時に生成されるトークンにはパスワードが含まれないか、必要ありません。

信頼設定が false の場合、パスワードはトークンに含まれます。

- 5 <url></url>タグ内の値 ldap://host:portNo/DIT を LDAP または Active Directory プロバイダの場所を指定する URL に置き換えます。

この URL には、domain Component 属性 (DC) を含める必要があります。

ディレクトリの情報ツリー (DIT) を含む URL の例を次に示します。

ldap://ldap_server:389/DC=company,DC=com

注： URL には、余分なスペースを入れないように注意してください。

- 6 <userDN></userDN>タグ内と<password></password>タグ内のサンプル値である cn=User Name と userPassword 値をディレクトリストアへの読み取り専用アクセス権を持つユーザアカウント情報に書き換えます。

匿名アクセスを設定する場合には、<userDN></userDN>と<password></password>のセクションを完全に削除します。タグおよび値の両方を削除し、値のみを削除しないでください。

- 7 ユーザ用の<url></url>タグ内の値 ou=People を、ユーザ入力項目のあるディレクトリサーバにあるブランチを示す情報に書き換えます。

ユーザ URL プロパティは、LDAP または Active Directory プロバイダで指定されている URL に対応しています。プロバイダのセクションの URL で指定したディレクトリ全体をプロバイダで検索する場合は、<user>のセクションの<url></url>セクション全体を削除してください。<url></url>タグ内の値を空のままにしないでください。

例えば、LDAP または Active Directory プロバイダのユーザが People という組織単位ディレクトリに保存されている場合には、次のサンプルのようになります。

```
<user>
  <url>ou=People</url>
</user>
```

- 8 グループ用の<url></url>タグ内の値 ou=Groups を、グループ入力項目のあるディレクトリサーバにあるブランチを示す情報に置き換えます。

グループ URL プロパティは、プロバイダのセクションで指定されている URL と対応しています。プロバイダのセクションの URL で指定したディレクトリ全体をプロバイダで検索する場合は、<group>セクションの<url></url>全体を削除してください。<url></url>タグ内の値を空のままにしないでください。

例えば、LDAP または Active Directory プロバイダのグループが Groups という組織単位ディレクトリに保存されている場合には、次のサンプルのようになります。

```
<group>
  <url>ou=Groups</url>
</group>
```

- 9 sample.xml ファイルを保存します。

LDAP または Active Directory のオプション設定

次の XML 要素は、LDAP または Active Directory (MSAD) 用の設定全体を示しています。

```
<ldap name="ldapServer">
  <trusted>true</trusted>
  <url>ldap://host:portNo/DIT</url>
  <userDN>cn=User Name</userDN>
  <password>userPassword</password>
  <authType>simple</authType>
  <authProtocol>ssl</authProtocol>
  <maxSize>200</maxSize>
  <identityAttribute>dn</identityAttribute>
  <user>
    <url>ou=people</url>
    <loginAttribute>uid</loginAttribute>
    <fnAttribute>givenname</fnAttribute>
    <snAttribute>sn</snAttribute>
    <emailAttribute>mail</emailAttribute>
    <objectclass>
      <entry>person</entry>
      <entry>organizationalPerson</entry>
      <entry>inetOrgPerson</entry>
    </objectclass>
  </user>
  <group>
    <url>ou=Groups</url>
    <nameAttribute>cn</nameAttribute>
    <objectclass>
      <entry>groupofuniquenames?uniquemember</entry>
      <entry>groupOfNames?member</entry>
    </objectclass>
  </group>
</ldap>
```

- ▶ LDAP または Active Directory のオプション設定を完了するには、次の手順に従います。

- 1 テキストエディタで `sample.xml` を開きます。
- 2 LDAP または Active Directory プロバイダのセクションにある `<maxSize></maxSize>` タグ内のサンプル値をクエリで返す入力項目数の最大値で置き換えます。

`<maxSize></maxSize>` タグとその中のサンプル値が `sample.xml` から削除されている場合には、デフォルト値の 100 が使用されます。

検索クエリによってフェッチされる入力項目のすべてが返されるように設定するには、この値を 0 に設定することで無制限の結果サイズが示されるようにします。この設定はお勧めしません。非常に大きなクエリ結果では、メモリの消費量が大きくなりすぎるためです。

- 3 `<authProtocol></authProtocol>` タグ内に、認証プロバイダを通じてのデータ転送のセキュリティを向上する目的で使用する追加セキュリティプロトコルに対応する値を入力します。

今回のリリースで、この `<authProtocol></authProtocol>` タグ内の値として有効な値は、`ssl` のみです。Secure Sockets Layer を使用していない場合には、`sample.xml` から、`<authProtocol></authProtocol>` タグとその間のサンプル値を削除してください。

Secure Sockets Layer (SSL) を使用する場合は、次の作業も行う必要があります。

- ディレクトリサーバで、証明書がインストールされており、使用可能であることを確認します。
- アプリケーションを実行する Java Virtual Machine で、証明書データベースがない場合は作成します。
- アプリケーションを実行する Java Virtual Machine で、サーバ証明書を発行する証明機関 (CA) を信頼します。

セキュリティプラットフォームでは、SUN の LDAP サービスプロバイダを使用して、Novell eDirectory、SunTM Open Net Environment (Sun ONE、以前の iPlanet)、Microsoft Active Directory などの LDAP 互換ディレクトリ内に外部保存されているユーザを認証します。LDAP サービスプロバイダは、アプリケーションの Java Virtual Machine で実行されます。ディレクトリサーバに安全に接続するための方法として SSL を使用する場合、セキュリティプラットフォームの LDAP サービスプロバイダでは、SSL をサポートするために Java Secure Socket Extension (JSSE) ソフトウェアを使用します。

SSL の設定方法については、ディレクトリサーバまたは JRE のマニュアルを参照してください。

- 4 `<identityAttribute></identityAttribute>` タグ内のサンプル値を、エントリを一意に識別するディレクトリ内の属性に一致する値に変更します。

属性には、DN、`employee_ID` などのカスタマイズされた属性、またはユーザおよびグループのディレクトリノードで一般的に使用されるその他の属性を指定できます。`<identityAttribute>` セクションが削除されている場合、デフォルト値は `dn` になります。

- 5 <user>セクションにある<loginAttribute></loginAttribute>タグ内のサンプル値を、ユーザ入力項目を一意に識別するディレクトリ内の属性と一致する値に変更します。

属性には、cn や uid などの DN の一部、employee_ID などのカスタマイズした属性、またはユーザのディレクトリノードで一般的に使用されるその他の属性を指定できます。<loginAttribute>セクションが削除されている場合、デフォルト値は cn になります。

次のサンプル設定は、目的のユーザ名に"common name"属性が使用されていることを示しています。

```
<loginAttribute>cn</loginAttribute>
```

上記のサンプルは、次の企業ディレクトリストアの LDAP ブラウザビューにある Autumn Smith のように、すべてのユーザ名が cn = UserName によって識別される場合に適しています。

上記の例では、DN のサブセットがハイライトされています。但し、loginAttribute プロパティでは、代わりにユーザのディレクトリノードの属性を参照できます。例えば、次のエントリ詳細のように、loginAttribute で uid を指すことができます。

- 6 <user>セクションにある<fnAttribute></fnAttribute>タグ内のサンプル値を、ディレクトリ内の名を入力項目に関連する属性に一致する値に変更します。
<fnAttribute></fnAttribute>タグとその値が削除されている場合には、名属性のデフォルト値は givenname になります。

- 7 <user>セクションにある<snAttribute></snAttribute>タグ内のサンプル値を、LDAP ディレクトリ内の姓の入力項目に関連する属性に一致する値に変更します。
<snAttribute></snAttribute>タグとその値が削除されている場合には、姓属性のデフォルトは sn になります。

- 8 <user>セクションにある<emailAttribute></emailAttribute>タグ内のサンプル値を、企業ディレクトリ内に保存されている電子メールアドレスにマッピングされている属性名に一致する値に変更します。

<emailAttribute></emailAttribute>タグとその値が削除されている場合には、デフォルト値は mail になります。

- 9 <user>セクションの<objectclass>セクションには、企業ディレクトリのスキーマで、ユーザを記述するために特殊なオブジェクトクラスが必要な場合で、そのオブジェクトクラスが既存の入力項目に含まれていない場合には、<entry></entry>タグと値を追加できます。

LDAP に用意されている（デフォルトの）ユーザオブジェクトクラスは、person、organizationalPerson、および inetOrgPerson です。

Active Directory に用意されている（デフォルトの）ユーザオブジェクトクラスは、person、organizationalPerson、および user です。

- 10 <group>セクション内の<nameAttribute></nameAttribute>タグ内のサンプル値 cn を、グループ入力項目を探す企業ディレクトリ内の属性を指すように置き換えます。nameAttribute セクションが削除されている場合、デフォルト値は cn になります。

例えば、次のサンプルでは、関連するユーザ入力項目を含んでいるグループ名で Common Name 属性が使用されていることを示しています。

```
<nameAttribute>cn</nameAttribute>
```

- 11 **<group>**セクション内の**<objectclass>**セクションには、企業ディレクトリのスキーマでユーザを記述するために特殊なオブジェクトクラスが必要な場合で、そのオブジェクトクラスが既存の入力項目に含まれていない場合には、**<entry>****</entry>**タグと値を追加できます。

LDAP に用意されている（デフォルトの）グループオブジェクトクラスは、groupofuniquenames?uniquemember と groupOfNames?member です。

Active Directory に用意されている（デフォルトの）グループオブジェクトクラスは、group?member です。

作成する追加の入力項目では、**<entry>**タグの値が ObjectClassName?AttributeName の形式になっている必要があります。

次にその例を示します。

```
<entry>group?member</entry>
```

ここで、group は objectClass の名前であり、member はこのグループのメンバーの識別名を保持する属性です。

- 12 sample.xml ファイルを保存します。

NTLM プロバイダの設定

この項では、アプリケーションが Windows NT LAN Manager (NTLM) プロバイダをサポートしている場合に、NTLM プロバイダ実装を設定するために必要なプロパティの変更方法を説明します。

この項では、次の内容を説明します。

- [43 ページの「基本的な NTLM 設定の例」](#)
- [44 ページの「オプションの NTLM 設定」](#)

基本的な NTLM 設定の例

- NTLM の基本的な設定を完了するには、次の手順に従います。

- 1 テキストエディタで sample.xml を開きます。
- 2 sample.xml で次のセクション（または<ntlm name="ntlmServer">と</ntlm>タグに囲まれたセクション全体）を探します。

```
<ntlm name="ntlmServer">
  <trusted>>false</trusted>
  <domain>THIS_IS_DOMAIN_NAME</domain>
</ntlm>
```

- 3 上記のセクションの最初の行で、ntlmServer を、この NTLM プロバイダの設定を示す名前に変更します。

この名前は、[37 ページの手順 5](#) の検索順序の項目で指定されている名前と同じである必要があります。

- 4 `<trusted></trusted>`タグ内の値は、デフォルト値 `true` のままにするか、これが信頼されている NTLM プロバイダでない場合には、`false` に置き換えます。
- 信頼設定が `true` の場合、ユーザ認証時に生成されるトークンにはパスワードが含まれないか、必要ありません。この場合もユーザはユーザ名とパスワードを使用してログインする必要がありますが、パスワードはトークンに保存されません。
 - 信頼設定が `false` の場合、パスワードはトークンに含まれており、この NTLM プロバイダに必要になります。
- 5 `<domain></domain>`タグ内の値 `THIS_IS_DOMAIN_NAME` を適切な Windows ドメイン名で置き換えます。
- ドメインを指定すると、NTLM プロバイダはそのドメインで処理を実行します。ドメイン要素を空のままにすると（例えば、`<domain></domain>`のように）、NTLM プロバイダは信頼されているすべてのドメインで処理を行います。
- 6 `sample.xml` ファイルを保存します。

オプションの NTLM 設定

次の XML 要素は、NT LAN Manager 用に指定した設定全体を示します。

太字の要素は、この項で説明するオプションの設定パラメータです。

```
<ntlm name="ntlmServer">
  <trusted>false</trusted>
  <domain>DOMAIN_NAME</domain>
  <maxSize>300</maxSize>
  <remoteServer>
    <location>//host:1099/NTLMImpl</location>
  </remoteServer>
</ntlm>
```

- NTLM のオプション設定を完了するには、次の手順に従います。

- 1 テキストエディタで `sample.xml` を開きます。
- 2 NTLM プロバイダのセクションにある `<maxSize></maxSize>` タグ内のサンプル値を、クエリで返される入力項目数の最大値で置き換えます。
`<maxSize></maxSize>` タグとその間の値が `sample.xml` から削除されている場合、デフォルト値は 100 です。
- 3 `<location></location>` タグ内の `<remoteServer></remoteServer>` タグ内を次のように変更します。
 - Windows プラットフォームのみで Hyperion Enterprise アプリケーションをサポートする場合には、これらのタグ内の値を削除します。これは、これらの設定は NTLM プロバイダに保存されている情報にアクセスする UNIX のみをサポートしているためです。
 - UNIX 上で実行する Hyperion Enterprise アプリケーションに NTLM を使用した外部認証をサポートする場合には、`<location></location>` タグのサンプル値をリモート NTLM プロバイダの正確な URL で置き換えます。この場合、NTLM Remote Server がインストールされている必要があります。

4 sample.xml ファイルを保存します。

この章の内容

レポートの追加について	47
複合レポートと並列表示レポート	48
データ入力レポート	49
レポートファイル	50
レポートオプション	50
レポートの作成	52
静的レポートの印刷	54

レポートの追加について

Hyperion Enterprise Reporting レポートのデータを Web ページに表示するには、Hyperion Enterprise Reporting Web を使用します。Web ページにレポートを追加する作業には管理プログラムを使用します。

静的レポートと動的レポート

Hyperion Enterprise Reporting Web は静的レポートと動的レポートの 2 種類のレポートを Web サイトに追加できます。

動的レポートは Hyperion Enterprise アプリケーションの現在のデータを表示します。動的レポートのデータは Web ブラウザに表示されるときに更新されます。動的レポートは時間が経つと変化する情報のレポートに使用されます。

Web サイトに動的レポートへのリンクを追加することも、既存の Web ページに動的レポートを埋め込むこともできます。

静的レポートはレポートが作成された時点の Hyperion Enterprise アプリケーションのデータを捕えたものです。静的レポートは時間が経っても変化しない情報をユーザに示すレポートに適しています。動的レポートとは違って、静的レポートに含まれる情報はレポートが Hyperion Enterprise Reporting Web に表示されるときに更新されません。静的レポートでは作成時にデータの読み取りが行われ、後で最新情報に更新されることはありません。

静的レポートは独立した Web ページとして作成されます。管理プログラムを使用して、Hyperion レポートを静的 HTML ファイルに変換できます。動的レポートも静的レポートも、レポートへの HTML リンクとして Web サイトに追加できます。

レポートへの HTML リンクは、静的または動的レポートへのハイパーリンクです。レポートへの HTML リンクがクリックされると、Web ブラウザは別の Web

ページにある動的または静的レポートを表示します。管理プログラムの Link Builder を使用して、動的レポートへの HTML リンクを含む Web ページを作成します。Link Builder の使用方法について詳しくは、[72 ページの「リンクページの定義」](#)を参照してください。

静的レポートの用途

静的レポートは静的 HTML ファイルとして保存されます。従って、静的レポートを作成した後に行われたデータの変更は静的レポートやチャートには反映されません。しかし、静的レポートは既に HTML ファイルとして存在するので、ユーザが表示するたびにアプリケーションから動的に生成される動的レポートに比べて、非常に速くアクセスできます。

静的レポートは独立したレポートとして作成され、データの視点バーは表示されません。従って、静的レポートを表示するユーザはデータの視点を変更できません。ユーザがデータの視点を変更できるようにするには、動的レポートを使用する必要があります。

関連する静的レポートをまとめて、その中でデータの視点を使用して移動するには、レポートの静的パッケージを作成します。詳しくは、[65 ページの「静的パッケージの作成」](#)を参照してください。

動的レポートの用途

レポートにアプリケーションでの最新の変更が反映されるようにするには、動的レポートを使用します。アプリケーションのパフォーマンスが問題になる場合は、静的レポートの使用を検討してください。

複合レポートと並列表示レポート

Hyperion Enterprise Reporting Web では、複合レポートや並列表示のレポートを作成できます。

注： Hyperion Enterprise Reporting Web リリース 3.0 以前は、並列表示レポートは複合レポートと呼ばれていました。Hyperion Enterprise Reporting Web の古いバージョンでは動的または静的レポートを埋め込んだ複合レポートはサポートされていませんでした。

複合レポートには、複数の動的または静的レポートが埋め込まれています。複数のレポートを、左右または上下に並べて表示することができます。動的複合レポートは、フレーム付きまたはフレームなしで表示できます。静的複合レポートは、グリッド線付きまたはグリッド線なしで表示することができます。次の図に、一般的な複合レポートを示します。

図 3 複合レポートの例

Report - Microsoft Internet Explorer

Address: http://HERWEBSERVERhspider/spider.dll?report&Enterprise6&Demo&SUMBAL

Hyperion Enterprise® Reporting - Report

System List → Enterprise6 → Demo → ... → SUMBAL

Point of View: CORP LASTYR JAN 98 M.CTD GRSALES

SUMMARY BALANCE SHEET
For the Period Ending JAN 99

Current Assets		Current Liabilities	
	JAN 99		JAN 99
Cash	\$2,592,452	Short Term Debt	\$21,346,910
Short Term Investments	8,269,590	Accounts Payables	11,240,950
Accounts Receivable	34,023,047		
Inventory	30,690,144	Total Current Liabilities	\$32,587,965
Total Current Assets	\$75,575,333		

User : administrator System : Enterprise6 Application : Demo

複合レポートを使用する場合は次のガイドラインに従ってください。

- 静的複合レポートには調査や展開を含めることはできません。
- 静的パッケージには複合レポートを含めることはできません。
- 条件ベースのページに複合レポートを使用して条件を定義することはできません。
- 複合レポートではデータ入力モードのレポートを表示できません。
- 行または列見出しを固定できません。
- 複合レポートから Microsoft Excel を起動すると、埋め込まれている個々のレポートは別々のワークシートに表示されます。

データ入力レポート

Hyperion Enterprise Reporting Web では動的レポートをデータ入力モードで表示できます。データ入力モードにより、ユーザはインターネットまたはイントラネットを介して標準 HTML により Hyperion Enterprise Reporting Web レポートを編集できます。データ入力モードのレポートは、デフォルトではグリッド線付きで表示され、Hyperion Distributed Schedules のセルの色でセルステータスが示されます。ユーザはセル間でデータの切り取り、コピー、および貼り付けを行い、再計算して変更の影響を確認することができます。その後で、変更を保存するかどうかを選択できます。

データ入力モードについて詳しくは、[86 ページの「データ入力モードのレポート表示」](#)を参照してください。

レポートファイル

静的レポートの作成では、HTML ファイルが作成され、その名前と拡張子を指定できます。

並列表示レポート用のファイル

並列表示レポートの作成では次の 3 つのファイルが作成されます。

- 右側のフレームに表示する HTML ファイル
- 左側のフレームに表示する HTML ファイル
- フレームのサイズと位置を定義するフレームファイル

フレームファイルには指定した名前に拡張子 .htm が付きます。フレームファイルは並列表示レポートページのレイアウトを定義します。レポートファイルには、フレームファイルと同じ名前および拡張子が付き、名前の後にレポートファイルであることを示す文字 R が付きます。

注： 一方のフレームにレポートを表示し、もう一方のフレームにチャートを表示する並列表示レポートも作成できます。

調査と展開用のファイル

レポートの行と列に調査または展開を作成すると、静的レポートファイルとともに、調査および展開の補助レポートのファイルが作成されます。これらの補助ファイルの名前には、指定したレポート名の後に番号が付加されます。例えば、レポートに INC という名前を付けると、inc0001.htm や inc0002.htm といった名前のファイルが作成されます。関連する調査および展開レポートを含む静的レポートを別の場所にコピーするには、関連ファイルもコピーする必要があります。

調査または展開を含む静的レポートを作成する場合は、ファイル名に MS-DOS 互換の 8 文字ファイル名と長いファイル名のどちらでも使用できます。DOS 互換のファイル名を使用する場合は、レポート名は 4 文字以下に制限されます。9999 個を超える調査レポートを関連付けたレポートを作成しようとするときエラーメッセージが表示されます。並列表示レポートの関連レポートは、最大 999 個です。長いファイル名を使用する場合は、これらの制限は該当しません。

レポートオプション

管理プログラムを使って静的レポートを作成するときには、レポートの表示方法を決めるオプションを選択します。次のオプションから選択できます。

- グリッド線の表示
- PDF ファイルの作成
- 行および列見出しの固定
- 調査または展開の使用
- ブラウザ形式の選択

- カスタムテンプレート用ディレクトリの設定

グリッド線の表示

セルを囲むグリッド線をレポートに表示するかどうかを指定できます。

PDF ファイルの作成

レポートを PDF ファイルとして生成するには出力タイプに PDF を選択します。出力タイプとして PDF を選択すると、そのレポートは PDF ファイルとして生成され、Adobe Acrobat Reader に表示されます。PDF レポートは Adobe Reader で表示して印刷できます。PDF 出力タイプは動的および静的レポートへの HTML リンクでのみ選択できます。PDF 機能を使用するには、Web サーバに Adobe Acrobat Reader がインストールされている必要があります。詳しくは、[第 6 章「レポートとチャートへのリンクの追加」](#)を参照してください。

行および列見出しの固定

ユーザがレポートをスクロールしたときに、行および列見出しが固定されるように設定できます。Web ブラウザでレポート全体を表示するためにスクロールする必要がある場合にこのオプションを使用できます。

調査または展開の使用

Web サイトで使用する Hyperion レポートで、列または行の調査または展開が定義されている場合は、調査または展開の補助レポートの HTML ファイルを作成できます。調査が定義されている行と列の値は、調査補助レポートへのハイパーリンクです。

レポートの値を調査または展開するレベルの最大値を指定できます。調査または展開が可能な行数または列数にもよりますが、レポートに調査や展開を含めると多数の HTML ファイルが生成される可能性があります。調査および展開のレベル数を低く設定すれば、生成されるファイル数が少なくなります。

ブラウザ形式の選択

どのブラウザ用にレポートの書式を設定するかを指定できます。Microsoft Internet Explorer 6.0 以降または Mozilla Firefox 2.0.x 以降を選択して、選択したブラウザ用に書式を設定できます。動的レポートでは「自動検出」を選択して、Hyperion Enterprise Reporting Web で正しいブラウザ形式が自動的に選択されるようにすることもできます。

カスタムテンプレートのディレクトリの設定

動的および静的レポートのデフォルトの外観を変更するには、レポートの生成に使用される HTML テンプレートファイルを編集します。カスタムテンプレートの

場所はレポートオプションで指定できます。テンプレートについて詳しくは、[第14章「テンプレートを使用した Web ページの作成」](#)を参照してください。

レポートの作成

静的レポートは、特定の時点におけるオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアのデータを捕えたものです。オラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェア内のレポートを静的な HTML レポートページに変換するには管理プログラムを使用します。

管理プログラムを使ってレポートを静的ページに変換するには、レポートデータのデータの視点を指定します。Web サーバ上に作成される HTML ファイルには、指定したデータの視点のデータが保存されます。

注： 静的レポートではデータの視点を変更できないので、このようにして作成された静的レポートにはデータの視点バーは含まれません。パッケージの一部として作成された静的レポートには、データの視点バーが表示されますが、制限があります。

元のレポート書式でデータを表示するファイルを作成できるだけでなく、データのチャートを表示するファイルも作成できます。Web サイトにチャートを追加する方法について詳しくは、[第4章「Web サイトへのチャートの追加」](#)を参照してください。

管理プログラムを使った静的レポートの作成

管理プログラムの「静的レポート/チャート」ウィンドウで、Hyperion レポートを静的 HTML ページに変換します。

管理プログラムで作成した静的レポートにユーザがアクセスできるようにするには、Hyperion Enterprise Reporting Web のホームページやその他のページにレポートファイルへのハイパーリンクを作成します。ユーザが Web ブラウザでリンクを選択してレポートファイルを取得すると、レポートファイルが表示されます。

- ▶ 管理プログラムで静的レポートを作成するには、次の手順に従います。
- 1 [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択して管理プログラムにアクセスします。
- 2 「静的レポート/チャート」を選択します。
- 3 メッセージが表示された場合は、レポートを作成するアプリケーションにログインします。

注： 現在のセッションでアプリケーションに既にログインしている場合は、ログインの指示は表示されません。別のアプリケーションに切り替えるには、[アプリケーション] を選択し、別のアプリケーションを選択してログインし、[OK] をクリックします。

- 4 [レポート] タブで、データの視点を選択し、レポートセットとレポートを選択します。

ヒント： [出力オプション] タブで、レポートの出力オプションを設定します。
[チャート] または [Side-by-Side Report/Chart (並列表示のレポートとチャート)] を選択した場合は、[チャートオプション] タブを使ってチャートのオプションを設定します。

- 5 HTML ファイルを作成するには、[HTML に保存] を選択して、ファイル名を指定し、[保存] を選択します。
- 6 [完了] ボタンをクリックします。

管理プログラムを使った動的レポートへのリンクの作成

管理プログラムを使って動的レポートへのリンクを含む Web ページを作成できます。リンクは Hyperion Enterprise アプリケーション内のデータだけでなく、システム内の他のデータに対しても作成できます。データへのリンクを含んでいる Web ページを作成して開くには、[Link Builder] ウィンドウを使用します。

また、Link Builder を使用すると、既存のリンクページを編集することもできます。リンクの追加や削除、既存のリンクのプロパティの編集、ページ内のリンクの並べ替えなども行うことができます。Web ページ内の既存リンクの編集に Link Builder を使用する方法について詳しくは、[76 ページの「リンクの編集」](#)を参照してください。

► Link Builder を使ってリンクページを作成するには、次の手順に従います。

- 1 [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択して管理プログラムにアクセスします。
- 2 [リンクページ] を選択します。
- 3 次のいずれかの操作を行います。
 - リンクページを作成するには、[ページタイトル] 編集ボックスに Web ページのタイトルを入力します。
 - リンクページを開くには、[ファイル] メニューの [開く] を選択して、リンクページを選択し、[開く] を選択します。
- 4 ページのリンクを作成するには、必要に応じて次の操作を行います。
 - 動的レポートとチャートへのリンクを作成します。詳しくは、[53 ページの「管理プログラムを使った動的レポートへのリンクの作成」](#)を参照してください。
 - 並列表示のレポートとチャートへのリンクを作成します。
 - HTML ファイルへのリンクを作成します。
- 5 ページ上の各リンクの横にアイコンを表示するには、[リンクアイコンの表示] を選択します。

ヒント： リンクアイコンは、レポート、チャート、ファイルなどのリンクの種類を示すために表示します。

- 6 リンクを移動したり、ページから削除するには、必要に応じて次の操作を行います。
 - リンクを移動するには、リンクの表でそのリンクをハイライトして、上向き矢印または下向き矢印をクリックします。
 - リンクを削除するには、リンクの表でリンクをハイライトして、[リンクの除去] を選択します。
- 7 リンクページを保存するには、[ファイル] メニューの [保存] を選択して、ファイル名を選択し、[保存] を選択します。
- 8 ページを保存するには、次のいずれかの操作を行います。
 - 新しいページを保存したり、ページの名前を変更したりする場合は、[ファイル] メニューの [名前を付けて保存] を選択し、ファイル名を指定して [OK] を選択します。
 - 既存のページを保存するには、[ファイル] メニューの [保存] を選択します。
- 9 [閉じる] を選択します。

静的レポートの印刷

静的レポートの印刷には次の 2 つの方法が用意されています。

- ブラウザの印刷機能を使用してレポートを印刷できます。この方法で印刷すると、レポートの元の書式が維持されない可能性があります。
- レポートを Adobe PDF ファイルに出力できます。Hyperion Enterprise Reporting の印刷プレビュー機能を使用して、レポートの外観を確認することができます。

レポートを PDF ファイルに出力できるようにするには、静的レポートまたは静的パッケージを作成するときに PDF ファイルを生成して、Web ページに PDF 出力ファイルへのリンクを指定する必要があります。詳しくは、[94 ページの「管理プログラムを使用した PDF ファイルの生成」](#)を参照してください。

注： GhostScript のような PDF 生成ソフトウェアがインストールされていない場合は、PDF ファイルに出力できません。詳しくは、『Hyperion Enterprise Reporting Web Installation Instructions』を参照してください。

4

Webサイトへのチャートの追加

この章の内容

チャートの追加について.....	55
静的チャートのファイル.....	56
並列表示のレポートとチャートのファイル	57
チャートの種類	57
チャートのプロパティ	59
チャートの作成	59
Microsoft Excel のオートフォーマットの使用	62

チャートの追加について

Hyperion Enterprise Reporting レポートのデータをチャートとして Web ページに表示するには、Hyperion Enterprise Reporting Web を使用します。Web ページにチャートを追加する作業には管理プログラムを使用します。

静的および動的チャート

Hyperion Enterprise Reporting Web では静的チャートと動的チャートの 2 種類のチャートを Web サイトに追加できます。

動的なチャートは Hyperion Enterprise アプリケーションの現在のデータを表示します。動的なチャートを Web ブラウザに表示すると、そのデータが動的に更新されます。動的チャートは時間が経つと変化する情報を表示する際に使用されます。

Web サイトに動的チャートへのリンクを追加することも、既存の Web ページに動的チャートを埋め込むこともできます。

静的チャートはそれが作成された時点の Hyperion Enterprise アプリケーションのデータを表示します。静的チャートは時間が経っても変化しない情報に適しています。動的チャートとは違って、静的チャートに含まれる情報は、Hyperion Enterprise Reporting Web に表示されるときに更新されません。静的チャートは作成時にデータが取得され、後で最新情報に更新されることはありません。

静的チャートは独立した Web ページとして作成されます。管理プログラムを使用して、Hyperion レポートを静的 HTML ファイルに変換できます。動的チャートも静的チャートも、チャートへの HTML リンクを作成して Web サイトに追加することができます。

チャートへの HTML リンクは、静的または動的チャートへのハイパーリンクです。チャートへの HTML リンクを選択すると、別の Web ページにある動的または静的チャートが Web ブラウザに表示されます。

管理プログラムの Link Builder を使用して、動的チャートへの HTML リンクを含む Web ページを作成します。Link Builder の使用方法について詳しくは、[72 ページの「リンクページの定義」](#)を参照してください。

静的チャートの用途

静的チャートは静的 HTML ファイルとして保存されます。従って、静的レポートを作成した後に行われたデータの変更は、チャートに反映されません。しかし、静的チャートは既に HTML ファイルとして存在するので、ユーザが表示するたびにアプリケーションから動的に生成される動的チャートに比べて、非常に速くアクセスできます。

独立したチャートとして作成された静的チャートには、データの視点バーは表示されません。従って、静的チャートを表示するユーザはデータの視点を変更できません。ユーザがデータの視点を変更できるようにするには、動的チャートを使用する必要があります。

関連する静的レポートまたはチャートをまとめて、その中でデータの視点を使用して移動するには、レポートの静的パッケージを作成します。詳しくは、[65 ページの「静的パッケージの作成」](#)を参照してください。

動的チャートの用途

チャートにアプリケーションでの最新の変更が反映されるようにするには、動的チャートを使用します。アプリケーションのパフォーマンスが問題になる場合は、静的チャートの使用を検討してください。

並列表示のレポートとチャート

Hyperion Enterprise Reporting Web では並列表示のレポートとチャートを作成できます。詳しくは、[48 ページの「複合レポートと並列表示レポート」](#)を参照してください。

静的チャートのファイル

静的チャートの作成では、HTML ファイルと JPEG ファイルが作成されます。JPEG ファイルにはチャートの図が含まれます。JPEG ファイルには HTML ファイルに指定した名前と同じ名前が付きますが、拡張子は .jpg です。静的チャートのファイルを別の場所にコピーする場合は HTML ファイルと JPEG ファイルの両方をコピーする必要があります。

並列表示のレポートとチャートのファイル

並列表示のレポートとチャートを作成すると、4つのファイルが作成されます。右側フレームに表示されるレポートのHTMLファイル、左側フレームに表示されるチャートのHTMLファイル、フレームのサイズや位置を定義するフレームファイルに加えて、チャートの図を含むJPGファイルが作成されます。

フレームファイルには指定した名前に拡張子.HTMが付きます。フレームファイルは並列表示レポートページのレイアウトを定義します。レポートとチャートのファイルの名前は、フレームファイルと同じ名前と拡張子が使用され、それぞれレポートファイルであることを示す文字Rとチャートファイルであることを示す文字Cが名前の後に付きます。JPEGファイルの名前はチャートファイルの名前と同じになりますが、拡張子として.jpgが付きます。

例えば、並列表示レポートにSalesという名前を指定すると、フレームファイルの名前はSALES.HTM、レポートファイルはSALESR.HTM、チャートファイルはSALESC.HTM、チャートの図のファイルはsalesc.jpgとなります。並列表示レポートとチャートを別の場所にコピーするときは、4つのファイルすべてをコピーする必要があります。

チャートの種類

静的または動的チャートを追加するとき、チャート作成ツールとチャートの種類を指定します。このリリースのHyperion Enterprise Reporting Webで使用可能なチャート作成ツールはVisual Components First ImpressionとMicrosoft Excelです。

選択できるチャートの種類はVisual Components First Impressionチャート作成ツールを使うか、Microsoft Excelを使うかで異なります。

次の場合にVisual Components First Impressionチャート作成ツールを使用します。

- Microsoft ExcelがHyperion Enterprise Reportingサーバにインストールされていない場合
- 複合チャート、バブルチャート、ガントチャートなどMicrosoft Excelがサポートしないチャートを作成する場合
- First Impressionのチャートの外観が望ましい場合

次の場合はMicrosoft Excelのチャート作成ツールを使用します。

- Microsoft ExcelがHyperion Enterprise Reportingサーバにインストールされている場合
- 等高線グラフ、二次元ドーナツグラフ、ユーザ定義のグラフなどFirst Impressionがサポートしないチャートを作成する場合。
- Excelのチャートの外観が望ましい場合

Visual Components First Impressionチャート作成ツールを使用する場合は、次の表にあるチャートの種類のパラメータを選択できます。

表 2 First Impression のチャートの種類

チャートの種類
3 次元縦棒
2 次元縦棒
3 次元折れ線
2 次元折れ線
3 次元面
2 次元面
3 次元階段状
2 次元階段状
3 次元複合
2 次元複合
3 次元横棒
2 次元横棒
3 次元集合棒
3 次元円
2 次元円
3 次元ドーナツ
2 次元 XY 線
2 次元ポーラー
2 次元レーダー
2 次元バブル
2 次元等高線
2 次元ガント
3 次元ガント

Microsoft Excel のチャート作成ツールを使用する場合は、次の表にあるチャートの種類を選択できます。

表 3 Microsoft Excel のチャートの種類

チャートの種類
3 次元縦棒
2 次元縦棒

チャートの種類
3 次元折れ線
2 次元折れ線
3 次元面
2 次元面
3 次元横棒
2 次元横棒
3 次元円
2 次元折れ線
2 次元 XY 散布図
2 次元レーダー
2 次元ドーナツ
カスタム

チャートのプロパティ

動的または静的チャートを Web サイトに追加するときは、その表示方法を決めるプロパティを選択します。チャートの種類とチャート作成ツールの選択に加えて、次のオプションを選択できます。

- カスタムチャート用の Microsoft Excel のオートフォーマットを指定する。
- 水平軸に行データを表示するか列データを表示するかを指定する
- 最大 23 種類のチャートから選択する
- チャートの幅と高さをピクセル単位で指定する。
- チャートラベルのフォントの種類とサイズを変更する
- 凡例を表示する。
- チャートタイトルを含める。
- チャートの Web ブラウザ形式を指定する。

チャートの作成

静的チャートは、特定の時点におけるオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアのデータを捕えたものです。オラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェア内のレポートを静的な HTML チャートページに変換するには管理プログラムを使用します。レポートを静的チャートページに変換するには、レポートデータのデータの視点を指定します。Web サーバ上に

作成される HTML ファイルには、指定したデータの視点のデータが保存されません。

注： 静的チャートではデータの視点を変更できないので、作成された静的チャートにはデータの視点バーは含まれません。パッケージの一部として作成された静的チャートには、データの視点バーが表示されますが、制限があります。詳しくは、[65 ページの「静的パッケージの作成」](#)を参照してください。

静的チャートファイルにユーザがアクセスできるようにするには、Hyperion Enterprise Reporting Web のホームページやその他の Web ページにファイルへのハイパーリンクを作成します。ユーザが Web ブラウザでリンクを選択してチャートファイルを取得すると、チャートファイルが表示されます。詳しくは、[76 ページの「HTML ファイルへのリンクの作成」](#)を参照してください。

静的チャートのデフォルト外観を変更するには、チャートの生成に使用される HTML テンプレートファイルを編集します。詳しくは、[138 ページの「静的レポートとチャートのテンプレート」](#)を参照してください。

管理プログラムを使った静的チャートの作成

管理プログラムの [静的レポート/チャート] ウィンドウで、Hyperion レポートを静的 HTML ページに変換します。

管理プログラムで作成した静的チャートにユーザがアクセスできるようにするには、Hyperion Enterprise Reporting Web のホームページやその他の Web ページにファイルへのハイパーリンクを作成します。ユーザが Web ブラウザでリンクを選択してチャートファイルを取得すると、チャートファイルが表示されます。詳しくは、[76 ページの「HTML ファイルへのリンクの作成」](#)を参照してください。

► 管理プログラムで静的チャートを作成するには、次の手順に従います。

- 1 [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択して管理プログラムにアクセスします。
- 2 [静的レポート/チャート] を選択します。
- 3 メッセージが表示された場合は、レポートを作成するアプリケーションにログオンします。

注： 現在のセッションでアプリケーションに既にログオンしている場合は、ログオンの指示は表示されません。別のアプリケーションに切り替えるには、[アプリケーション] を選択し、別のアプリケーションを選択してログオンし、[OK] をクリックします。

- 4 [レポート] タブで、データの視点を選択し、レポートセットとレポートを選択します。
- 5 [出力オプション] タブで、[チャート] を選択します。

ヒント： レポートとチャートを並べて表示するには、[Side-by-Side Report/Chart (並列表示のレポートとチャート)] を選択します。

- 6 [チャートオプション] タブで、静的チャートに適用するオプションを選択します。
- 7 HTML ファイルを作成するには、[HTML に保存] を選択して、ファイル名を指定し、[保存] を選択します。
- 8 [完了] ボタンをクリックします。

管理プログラムを使った動的レポートへのリンクの作成

管理プログラムを使って、動的チャートへのリンクを含む Web ページを作成できます。リンクは Hyperion Enterprise アプリケーション内のデータだけでなく、システム内の他のデータに対しても作成できます。データへのリンクを含んでいる Web ページを作成して開くには、[Link Builder] ウィンドウを使用します。

また、Link Builder を使用すると、既存のリンクページを編集することもできます。リンクの追加や削除、既存のリンクのプロパティの編集、ページ内のリンクの並べ替えなども行うことができます。Web ページ内の既存リンクの編集に Link Builder を使用する方法について詳しくは、[76 ページの「リンクの編集」](#)を参照してください。

► Link Builder を使ってリンクページを作成するには、次の手順に従います。

- 1 [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択して管理プログラムにアクセスします。
- 2 [リンクページ] を選択します。
- 3 次のいずれかの操作を行います。
 - リンクページを作成するには、[ページタイトル] 編集ボックスに Web ページのタイトルを入力します。
 - リンクページを開くには、[ファイル] メニューの [開く] を選択して、リンクページを選択し、[開く] を選択します。
- 4 ページのリンクを作成するには、必要に応じて次の操作を行います。
 - 動的レポートとチャートへのリンクを作成します。詳しくは、[73 ページの「動的レポートとチャートへのリンクの作成」](#)を参照してください。
 - 並列表示のレポートとチャートへのリンクを作成します。詳しくは、[73 ページの「動的レポートとチャートへのリンクの作成」](#)を参照してください。
 - HTML ファイルへのリンクを作成します。詳しくは、[76 ページの「HTML ファイルへのリンクの作成」](#)を参照してください。
- 5 ページ上の各リンクの横にアイコンを表示するには、[リンクアイコンの表示] を選択します。

ヒント： リンクアイコンは、レポート、チャート、ファイルなどのリンクの種類を示すために表示します。

- 6 リンクを移動したり、ページから削除するには、必要に応じて次の操作を行います。
 - リンクを移動するには、リンクの表でそのリンクをハイライトして、上向き矢印または下向き矢印をクリックします。
 - リンクを削除するには、リンクの表でリンクをハイライトして、[リンクの除去] を選択します。
- 7 リンクページを保存するには、[ファイル] メニューの [保存] を選択して、ファイル名を選択し、[保存] を選択します。
- 8 ページを保存するには、次のいずれかの操作を行います。
 - 新しいページを保存したり、ページの名前を変更したりする場合は、[ファイル] メニューの [名前を付けて保存] を選択し、ファイル名を指定して [OK] を選択します。
 - 既存のページを保存するには、[ファイル] メニューの [保存] を選択します。
- 9 [閉じる] を選択します。

Microsoft Excel のオートフォーマットの使用

Microsoft Excel のオートフォーマットを Hyperion Enterprise Reporting Web のチャートに適用できます。Microsoft Excel のオートフォーマットは、フォントサイズ、パターン、配置などを定義した組み込み書式であり、一連のデータに簡単に適用できます。Microsoft Excel によってサマリや詳細のレベルが決定され、それによって指定された範囲に書式が適用されます。オートフォーマットに定義されている書式は、Hyperion Enterprise Reporting Web の管理プログラムを使ってチャートに適用した書式を上書きします。

注： Hyperion Enterprise Reporting Web でオートフォーマットを使用するには、Microsoft Excel 2000 が Hyperion Enterprise Reporting サーバにインストールされている必要があります。Microsoft Excel 2000 のユーザ定義のグラフの種類やオートフォーマットについては、次の Web ページを参照してください。

<http://support.microsoft.com/support/kb/articles/Q214/2/65.ASP>

- Microsoft Excel で Hyperion Enterprise Reporting Web 用にカスタムのオートフォーマットを作成するには、次の手順に従います。
- 1 Microsoft Excel 2000 を Hyperion Enterprise Reporting サーバで起動します。
 - 2 サンプルデータを入力します。または EXCELREP 関数を使って Hyperion Enterprise Reporting Web のレポートを Microsoft Excel で開きます。
 - 3 データ全体を選択し、[挿入] メニューの [グラフ] を選択してグラフウィザードを開きます。
 - 4 次のいずれかを実行します。
 - [標準] タブで、左側のリストからグラフの種類を選択し、右側のリストからグラフの形式を選択します。

- **【ユーザー設定】** タブを選択し、左側のリストから組み込みのグラフの種類を選択し、右側のリストからグラフの形式を選択します。

ヒント： 以前に作成したカスタムオートフォーマットは **【ユーザー設定】** タブの **【ユーザー定義】** を選択すると表示されます。

注： 2 軸のグラフや値がなく空白のある折れ線グラフは Hyperion Enterprise Reporting Web ではサポートされません。オートフォーマットにサポートされていない書式が含まれている場合は、チャートの種類ごとに用意されている Hyperion Enterprise Reporting Web のデフォルトのチャート書式を使用してチャートが表示されます。

5 **【次へ】** を選択します。

6 グラフウィザードの残りの画面でオートフォーマットに適用するオプションを選択し、グラフウィザードの **【完了】** を選択すると、チャートが表示されます。

7 必要に応じて、**【グラフ】** メニューのコマンドを使用してチャートを変更します。

注： 例えば、チャートで使用されるフォントの色を変更できます。

8 現在のチャートを Microsoft Excel のオートフォーマットとして保存するには、次の手順に従います。

1. **【グラフ】** メニューの **【グラフの種類】** を選択します。
2. **【ユーザー設定】** タブを選択します。
3. **【ユーザー定義】** を選択します。
4. **【追加】** ボタンをクリックします。
5. オートフォーマットの名前と説明を入力します。オートフォーマットの名前は Hyperion Enterprise Reporting Web で使用する名前と同じである必要があります。
6. **【OK】** をクリックします。入力した名前が **【ユーザー設定】** タブの **【グラフの種類】** リストの最後に追加されます。
7. **【OK】** をクリックします。

この章の内容

静的パッケージについて.....	65
静的パッケージの作成.....	65
静的パッケージの出力オプション.....	66
静的パッケージの印刷.....	69

静的パッケージについて

Hyperion Enterprise Reporting では、パッケージを使うとレポートをまとめて印刷できます。Hyperion Enterprise Reporting Web の静的パッケージは、レポートとチャートを1つにまとめたものです。Hyperion Solutions アプリケーションの既存のレポートパッケージは、Hyperion Enterprise Reporting Web を使って直接静的パッケージに変換できます。

例えば、USA、Canada、および Mexico エンティティの損益計算書レポートと貸借対照表レポートを毎月印刷する必要があるとします。Hyperion Enterprise Reporting では、各エンティティの損益計算書レポートと貸借対照表レポートを自動的に印刷するパッケージを作成できます。このパッケージを実行することによって、USA、Canada、および Mexico エンティティの損益計算書レポートと貸借対照表レポートの合計6つのレポートを一括して印刷できます。詳しくは、『Hyperion Enterprise Reporting ユーザガイド』を参照してください。

静的パッケージの作成

管理プログラムを使って、Hyperion Solutions 製品のデータのパッケージを静的レポートやチャートページとして Web サーバに保存できます。例えば、上の例のパッケージは、6つのレポートまたはチャートの静的 HTML ページからなる HTML パッケージとして保存できます。

Hyperion Enterprise Reporting Web を使って作成した静的パッケージでは、パッケージに含まれるすべてのレポートまたはチャートへのハイパーリンクの一覧が目次として表示されます。パッケージ内の各レポートやチャートには制限付きのデータの視点バーが表示され、同じレポートにあらかじめ定義されている視点にアクセスするために使用できます。例えば、USA の損益計算書レポートの上部に表示されるデータの視点バーから、Canada の損益計算書レポートにアクセスできます。このデータの視点バーでは、実行しているパッケージ内に存在するデータの視点にのみアクセスできます。上の例のデータの視点バーでは、USA、Canada、および Mexico のレポートの視点にのみアクセスできます。

静的パッケージのレポートは静的 HTML ファイルとして保存されます。ユーザがパッケージを表示するときに動的に生成されるものではありません。レポートやチャートは静的 HTML ファイルに保存されるため、パッケージを実行した後に行われた Hyperion Solutions 製品内のデータの変更は、パッケージ内のレポートやチャートには反映されません。

注： 複合レポートが静的パッケージに含まれていると、そのレポートをブラウザでユーザが開こうとしたときにエラーメッセージが表示されます。

静的パッケージの出力オプション

Hyperion Enterprise Reporting を使用して、1 つのエンティティの 4 半期ごとのレポートのセットなど、関連するレポートを連続出力するパッケージや、組織内のすべてのエンティティの損益計算書など、一度に何百ものレポートを出力するパッケージを作成できます。

Hyperion Enterprise Reporting Web 管理プログラムを使用して Hyperion Enterprise Reporting のパッケージから静的パッケージを作成するには、次の出力オプションを設定できます。

- パッケージの内容をレポートとチャートのどちらで出力するか
- パッケージの内容に展開と調査を含めるかどうか
- パッケージの内容を 1 個のパッケージファイルとして保存するか、レポートグループ単位のファイルとして保存するか、レポート単位のファイルとして保存するか
- パッケージの内容を PDF ファイルに保存するかどうか
- パッケージ内のすべてのレポートで行および列見出しを固定するかどうか
- パッケージ内のすべてのレポートをどの Web ブラウザ用に書式設定するか

レポート単位やレポートグループ単位でファイルを作成する場合は、パッケージに指定した名前に番号が付加されたファイル名が作成されます。例えば、Sales という名前をパッケージに付けた場合は、SALES01.HTM、SALES02.HTM、SALES03.HTM といったパッケージファイルが作成されます。パッケージをコピーしたり移動したりするときは、グラフィックファイル (SALES01.JPG など) も含めて、関連するすべてのファイルをコピーまたは移動する必要があります。

静的パッケージでの調査と展開

静的パッケージを作成するときに調査や展開を含めると、各調査と展開される行と列の組み合わせごとにレポートが作成されます。これによって多数のファイルが作成されると、それだけ時間もかかります。作成されるレポートの数は [Max Level (最大レベル)] オプションを設定することによって制限できます。[Max Level (最大レベル)] を低く設定するほど、作成されるレポート数が少なくなります。

調査や展開を含まない静的パッケージを作成する場合は、ファイル名に MS-DOS 互換の 8 文字ファイル名と長いファイル名のどちらでも使用できます。調査や展開を含む静的パッケージを作成する場合は、次のようなパッケージの命名規則に従う必要があります。

- MS-DOS 互換のファイル名を使用してレポートグループ単位でファイルを作成する場合は、パッケージファイルに付ける名前を 6 文字以下にする必要があります。
- MS-DOS 互換のファイル名を使用してレポート単位でファイルを作成する場合は、パッケージに付ける名前を 4 文字以下にする必要があります。パッケージにチャートが含まれる場合は、チャートの図を保存する JPEG ファイルも作成されます。JPEG ファイルの名前は対応する HTML ファイルと同じで拡張子に.JPG が付きます。
- 長いファイル名を使用する場合は、パッケージに付ける名前の文字数は制限されません。パッケージを構成するファイル数も制限されません。

調査や展開を含む静的パッケージを作成する場合は、DOS 互換のファイル名を使用すると、選択した出力オプションにかかわらず、パッケージ名は 4 文字以下に制限されます。

注： レポートグループ単位でファイルを作成する場合は、1 つのパッケージに含めるファイルが最大 99 個に制限されます。レポート単位でファイルを作成する場合は、1 つのパッケージに含めるファイルが最大 9,999 個に制限されます。

静的パッケージでの PDF ファイルの作成

静的パッケージでは PDF ファイルも作成できます。静的パッケージの出力オプションには、パッケージ内のすべてのレポートを含む PDF ファイルを作成するオプションと、パッケージ内のレポートごとに PDF ファイルを作成するオプションがあります。静的パッケージ内のレポートグループごとに PDF ファイルを作成するオプションはありません。

静的パッケージのレポートの行および列見出しの固定

静的パッケージのレポート単位でファイルを作成する場合は、レポートの行および列見出しを固定することができます。それには [出力オプション] パネルで [行見出しおよび列見出しの保護] チェックボックスをオンにします。

静的パッケージのブラウザ形式の指定

パッケージ内のレポートをどの Web ブラウザ用に書式設定するかを指定できます。[Format Reports (レポートの書式設定)] ドロップダウンリストから次のいずれかのブラウザを選択します。

- Microsoft Internet Explorer 6.0 以降
- Mozilla Firefox 2.0.x 以降

出力オプション - [Creating a Single File (単一ファイルの作成)]

パッケージ内のすべてのレポートを単一の HTML ファイルに含めるには、このオプションを選択します。パッケージ内のすべてのレポートが 1 つのファイルに含まれているので、ローカルドライブに保存してオフラインで表示できます。但し、多数のレポートを含むパッケージでは、HTML ファイルが非常に大きくなり実用的ではありません。[PDF ファイルの作成] チェックボックスをオンにすると、パッケージ内のすべてのレポートを含む PDF ファイルが作成されます。

出力オプション - [Creating a File for Each Report Group (レポートグループごとにファイルを作成)]

レポートのさまざまな視点をまとめて 1 つのファイルに含めるにはこのオプションを選択します。例えば、USA、Canada、および Mexico の収益と費用のレポートを含むパッケージがあるとします。このオプションでは、USA、Canada、および Mexico の収益レポートを含むファイルと、USA、Canada、および Mexico の費用レポートを含むファイルの 2 つの HTML ファイルが作成されます。

出力オプション - [Creating a File for Each Report (レポートごとにファイルを作成)]

パッケージ内のレポートの表示形式ごとに HTML ファイルを作成するには、このオプションを選択します。このオプションでは、パッケージ内の他のレポートへのハイパーリンクを含んでいるインデックスファイルも作成されます。例えば、USA の収益レポートと Canada の収益レポートは別々の HTML ファイルに保存されます。[PDF ファイルの作成] チェックボックスをオンにすると、パッケージ内の個々のレポートに対して PDF ファイルが作成されます。

このオプションでは、ダウンロードに時間のかからない小さなファイルが作成されますが、ファイル数が多くなる場合があります。

管理プログラムを使った静的パッケージの作成

- ▶ 管理プログラムを使って静的パッケージを作成するには、次の手順に従います。
- 1 [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択して管理プログラムにアクセスします。
- 2 [静的パッケージ] を選択します。
- 3 メッセージが表示された場合は、パッケージを作成するアプリケーションにログオンします。

注： 現在のセッションでアプリケーションに既にログオンしている場合は、ログオンの指示は表示されません。別のアプリケーションに切り替えるには、

[アプリケーション] を選択し、別のアプリケーションを選択してログオンし、[OK] をクリックします。

- 4 [パッケージ] タブで、データの視点を選択し、パッケージセットとパッケージを選択します。
- 5 [出力オプション] タブで、パッケージの出力オプションを設定します。

ヒント： [チャート] オプションを選択した場合は、[チャートオプション] タブで使用するチャートオプションを設定します。

- 6 HTML ファイルを作成するには、[HTML に保存] を選択して、ファイル名を指定し、[保存] を選択します。
- 7 [完了] ボタンをクリックします。

静的パッケージの印刷

生成した静的パッケージの印刷には次の 2 つの方法があります。

- ブラウザの印刷機能を使ってパッケージ内の個々のレポートを印刷できます。この方法で印刷すると、レポートの元の書式が維持されない可能性があります。
- レポートを Adobe PDF ファイルに出力できます。PDF ファイルは Adobe Acrobat プラグインを使って Web ブラウザに表示できます。

ユーザがレポートを PDF ファイルに出力できるようにするには、静的パッケージの作成時に、PDF ファイルを作成しておく必要があります。PDF ファイルの作成方法について詳しくは、[94 ページの「PDF ファイルの使用」](#)を参照してください。静的レポートのテンプレートには PDF 印刷リンクが自動的に作成されます。ユーザはこのリンクを選択して、Adobe Acrobat Reader に PDF ファイルを表示できます。静的レポートの作成時に PDF ファイルを生成しなかった場合は、PDF 印刷リンクはレポートに含まれず、ユーザは PDF ファイルに出力できません。

注： PDF 出力機能がインストールされていない場合は、PDF ファイルに出力できません。詳しくは、『Hyperion Enterprise Reporting Web Installation Instructions』を参照してください。

6

レポートとチャートへのリンクの追加

この章の内容

アプリケーションデータへのリンクの追加	71
Link Builder について	71
リンクページの定義	72
リンクの編集	76

アプリケーションデータへのリンクの追加

Hyperion Enterprise Reporting Web では、Hyperion Solutions アプリケーションのレポートにアクセスするハイパーリンクが含まれた Web ページを作成できます。管理プログラムのグラフィカルインターフェイスである Link Builder を使用して、動的レポートやチャートへのリンクが含まれた Web ページを作成します。

また、使い慣れた HTML エディタを使用して、Web ページへのリンクを手動で追加することもできます。

注： アプリケーションデータへのリンクが含まれた Web ページを作成して、Microsoft Excel スプレッドシートや Adobe PDF ファイルのような他の形式で表示できます。

Link Builder について

Hyperion Enterprise Reporting Web の Link Builder は、Hyperion Solutions アプリケーションの動的なレポートやチャートへのリンクが含まれた Web ページを作成できるグラフィカルインターフェイスを備えています。Link Builder を使用すると、Hyperion Enterprise Reporting Web サーバからアクセスできる Hyperion Solutions 製品のアプリケーションを参照して、リンクを作成するレポートを選択できます。

Link Builder で作成する Web ページは、標準的な HTML 形式のファイルとして保存されます。Web ページを作成したら、それをテキストエディタか HTML エディタで開いて、その外観をカスタマイズできます。例えば、会社のロゴやその他のグラフィックをページに追加できます。また、他の Web サイトやインターネットリソースへのリンクを追加することもできます。

注意 一部の HTML エディタでは、Link Builder で作成した HTML コードが変更されてしまうため、ブラウザでファイルを表示できても、再び開くことができません。

LINKPAGE.HTX テンプレートを編集すると、Link Builder で作成した Web ページのデフォルトの外観を変更できます。詳しくは、[133 ページの「テンプレート」](#)を参照してください。

リンクページの定義

動的および静的なレポート、チャート、その他の関連データへのリンクを含んでいる Web ページを作成できます。Hyperion Solutions アプリケーションのデータへのリンクや、システム内の他のデータへのリンクを作成できます。データへのリンクを含んでいる Web ページを作成して開くには、[Link Builder] ウィンドウを使用します。

レポートへのリンクを作成するとき、レポートのデータを元のレポート書式で表示するか、チャートとして表示するかを指定できます。また、レポートとチャートを同じ Web ページに並べて表示する並列表示のレポートリンクを作成することもできます。レポート、チャート、またはパッケージの静的ファイルを作成したら、Link Builder を使用して、これらのファイルへのリンクを作成することも、Web サーバにある他の HTML ファイルへのリンクを作成することもできます。

また、Link Builder を使用すると、既存のリンクページを編集することもできます。リンクの追加や削除、既存のリンクのプロパティの編集、ページ内のリンクの並べ替えなども行うことができます。

- リンクページを定義するには、次の手順に従います。
 - 1 [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択して管理プログラムにアクセスします。
 - 2 [リンクページ] を選択します。
 - 3 次のいずれかの操作を行います。
 - リンクページを作成するには、[ページタイトル] 編集ボックスに Web ページのタイトルを入力します。
 - リンクページを開くには、[ファイル] メニューの [開く] を選択して、リンクページを選択し、[開く] を選択します。
 - 4 ページのリンクを作成するには、必要に応じて次の操作を行います。
 - 動的レポートとチャートへのリンクを作成します。詳しくは、[73 ページの「動的レポートとチャートへのリンクの作成」](#)を参照してください。
 - 並列表示のレポートとチャートへのリンクを作成します。詳しくは、[74 ページの「並列表示の動的レポートとチャートへのリンクの作成」](#)を参照してください。
 - HTML ファイルへのリンクを作成します。詳しくは、[76 ページの「HTML ファイルへのリンクの作成」](#)を参照してください。
 - 5 ページ上の各リンクの横にアイコンを表示するには、[リンクアイコンの表示] を選択します。

ヒント： リンクアイコンは、レポート、チャート、ファイルへのリンクなど、リンクの種類を表すために表示します。

- 6 リンクを移動したり、ページから削除するには、必要に応じて次の操作を行います。
 - リンクを移動するには、リンクの表でリンクをハイライトして、上向き矢印または下向き矢印を選択します。
 - リンクを削除するには、リンクの表でリンクをハイライトして、[リンクの除去] を選択します。
- 7 リンクページを保存するには、[ファイル] メニューの [保存] を選択して、ファイル名を選択し、[保存] を選択します。
- 8 ページを保存するには、次のいずれかの操作を行います。
 - 新しいページを保存したり、ページの名前を変更したりする場合は、[ファイル] メニューの [名前を付けて保存] を選択し、ファイル名を指定して [OK] を選択します。
 - 既存のページを保存するには、[ファイル] メニューの [保存] を選択します。
- 9 [閉じる] を選択します。

動的レポートとチャートへのリンクの作成

Link Builder を使用すると、Hyperion Solutions アプリケーションのレポートへの動的リンクを作成できます。ユーザがリンクを選択すると、アプリケーションからレポートのデータが取得され、レポートの Web ページが動的に生成されます。リンクを作成するとき、レポートのデータを元のレポート書式で表示するか、チャートとして表示するかを指定できます。

► 動的レポートやチャートへのリンクを作成するには、次の手順に従います。

- 1 新規または既存のリンクページから、次の操作を行います。
 - [リンクの追加] を選択します。
 - [動的レポート/チャート] を選択し、[OK] を選択します。

ヒント： リンクページを作成したり開いたりする方法については、[72 ページ](#)の「[リンクページの定義](#)」を参照してください。

- 2 メッセージが表示された場合は、リンクを作成するレポートが含まれているアプリケーションにログオンします。

注： 現在のセッションでアプリケーションに既にログオンしている場合は、ログオンの指示は表示されません。別のアプリケーションに切り替えるには、[アプリケーション] を選択し、別のアプリケーションを選択してログオンし、[OK] をクリックします。

- 3 リンクを作成するレポートをハイライトし、[追加] を選択します。

ヒント： レポートを削除するには、レポートをハイライトし、[除去] を選択します。

- 4 [レポートへのリンク] リストでレポートをハイライトし、[リンクオプション] パネルでレポートのリンクオプションを設定します。

ヒント： [チャート] オプションを選択した場合は、[チャートオプション] パネルを使用してチャートオプションを設定します。

- 5 すべてのユーザに動的レポートやチャートの特定のデータの視点を設定するには、[カスタムのデータの視点を使用] を選択し、[POV] タブを選択して、データの視点の各ディメンションに適切な値を設定します。
- 6 [OK] をクリックします。

並列表示の動的レポートとチャートへのリンクの作成

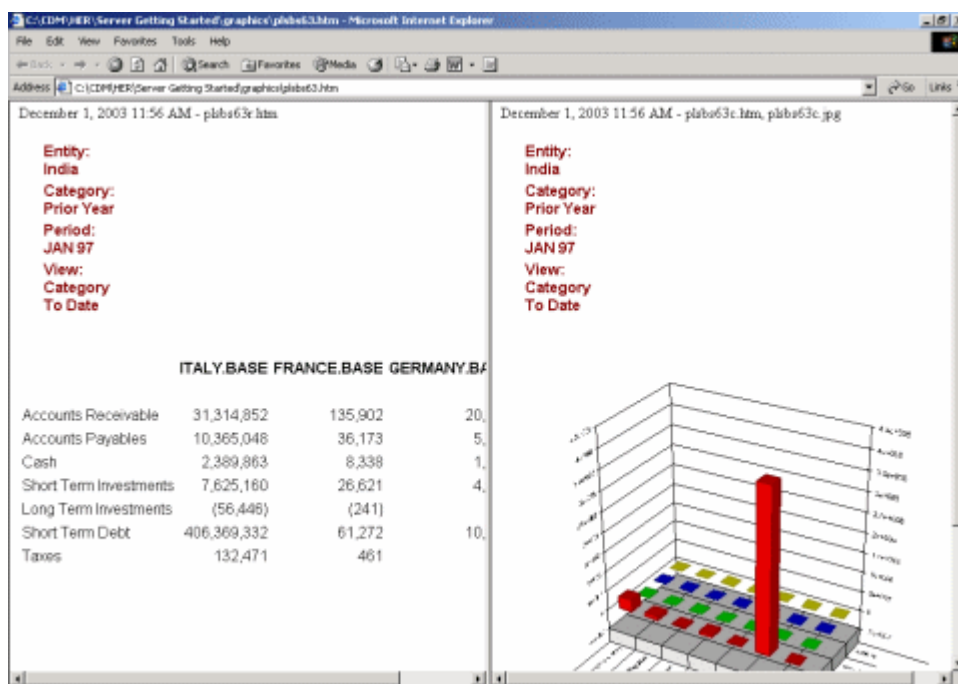
Link Builder を使用すると、レポートとチャートを並べて表示する Web ページへのリンクを作成できます。レポートを 2 つ、チャートを 2 つ、またはレポートとチャートを表示できます。ユーザがリンクを選択すると、レポートのデータが含まれている Hyperion Solutions アプリケーションにアクセスし、並列表示のページが動的に生成されます。

レポートとチャートを並べて表示する Web ページは 2 つのフレームに分かれています。両フレームのレポートとチャートは同じアプリケーションに含まれている必要があります。

注： レポートとチャートを並べて表示できるのは、フレームの表示が可能な Web ブラウザのみです。

次の図に、左側のフレームにレポートを表示し、右側のフレームにチャートを表示している Web ページを示します。

図 4 チャートとレポートの並列表示



▶ 並列表示の動的レポートやチャートへのリンクを作成するには、次の手順に従います。

1 新規または既存のリンクページから、次の操作を行います。

- [リンクの追加] を選択します。
- [Dynamic Side-by-Side Report/Chart (並列表示の動的レポート/チャート)] を選択し、[OK] を選択します。

ヒント： リンクページを作成したり開いたりする方法については、72 ページの「リンクページの定義」を参照してください。

2 メッセージが表示された場合は、リンクを作成するレポートが含まれているアプリケーションにログオンします。

注： 現在のセッションでアプリケーションに既にログオンしている場合は、ログオンの指示は表示されません。別のアプリケーションに切り替えるには、[アプリケーション] を選択し、別のアプリケーションを選択してログオンし、[OK] をクリックします。

3 並列表示のレポートに表示するリンクテキストを入力します。

4 並列表示するレポートのテンプレートを選択します。

5 左側と右側のフレームパネルで、次の操作を行います。

- [リンク先の変更] を選択し、フレームのレポートをハイライトしてから [OK] を選択します。
- レポートのリンクオプションを設定します。

注： [チャート] オプションを選択した場合は、[Chart Options (チャートオプション)] パネルを使用してチャートオプションを設定します。

- 6 動的レポートやチャートに特定のデータの視点を設定するには、[カスタムのデータの視点を使用] を選択し、[POV] タブを選択して、データの視点の各ディメンションに適切な値を設定します。
- 7 [OK] をクリックします。

HTML ファイルへのリンクの作成

Link Builder を使用すると、Hyperion Enterprise Reporting Web サーバの WWWROOT ディレクトリやサブディレクトリに格納されている HTML ファイルへのリンクを作成できます。例えば、管理プログラムで作成した静的レポート、チャート、またはパッケージの HTML ファイルへのリンクを追加できます。

- ▶ HTML ファイルへのリンクを作成するには、次の手順に従います。
 - 1 新規または既存のリンクページから [リンクの追加] を選択し、[HTML ファイル] を選択してから [OK] を選択します。

リンクページを作成したり開いたりする方法については、72 ページの「[リンクページの定義](#)」を参照してください。
 - 2 ワークステーションから Hyperion Enterprise Reporting Web 管理プログラムを実行している場合は、[参照] を選択し、サーバのルートディレクトリを選択してから [OK] を選択します。
 - 3 [追加] を選択し、リンクを作成するファイルをハイライトして、[OK] を選択します。
 - 4 [ファイルへのリンク] リストで、それぞれのファイルをハイライトして、ファイルのリンクテキストを指定します。
 - 5 [OK] をクリックします。

リンクの編集

Link Builder でリンクページを作成した後で、リンクのプロパティを編集できます。例えば、動的チャートリンクのリンクテキストやチャートオプションを変更できます。Link Builder のみで作成されたページを編集するには、Link Builder を使用できます。

リンクページを作成したり開いたりする方法については、72 ページの「[リンクページの定義](#)」を参照してください。

- ▶ リンクを編集するには、次の手順に従います。
 - 1 既存のリンクページから、リンクの表で編集するリンクが含まれている行を選択し、[リンクの編集] を選択するか、選択した行をダブルクリックします。

注： レポートまたは並列表示のレポートへのリンクを選択した場合は、そのレポートが含まれているアプリケーションにログオンする必要があります。
 - 2 レポートまたは HTML ファイルのリンクオプションを設定します。

3 [OK] をクリックします。

この章の内容

スプレッドシートでのデータの表示	79
Microsoft Excel スプレッドシートへのリンクの追加	79
Web ページからの Hyperion Distributed Schedules の起動	83
データ入力モードのレポート表示	86

スプレッドシートでのデータの表示

Hyperion Enterprise Reporting レポートのデータをスプレッドシートに表示するには、Hyperion Enterprise Reporting Web を使用します。Web サイトで次のようにスプレッドシートを使用できます。

- リンクを追加して動的レポートを Microsoft Excel のスプレッドシートとして表示する。
- リンクを追加して Hyperion Distributed Schedules でレポートを起動する。
- データ入力モードでレポートを表示し、ユーザが Web ブラウザで直接レポートのデータを入力および編集できるようにする。

Microsoft Excel スプレッドシートへのリンクの追加

HTML エディタを使用して動的レポートのテンプレートや他の Web ページへのスプレッドシートのリンクを手動で追加すると、レポートを Microsoft Excel のスプレッドシートとして表示できます。また、エンドユーザがブラウザのアドレスバーにスプレッドシート要求を入力することもできます。ユーザは HTML の『Hyperion Enterprise Reporting ユーザガイド』の「Open a Spreadsheet View of Reports（レポートのスプレッドシート表示を開く）」を参照する必要があります。

システムでスプレッドシートリクエストが実行されると、要求されたレポートデータは、ユーザのローカルスプレッドシートツールのメニューおよびコントロールを備えたスプレッドシートとして表示されます。ユーザは、スプレッドシートのデータを移動して、データを変更できます。

注： データがスプレッドシートに表示されるときにデータを再計算する計算式は作成されません。ユーザがデータを変更した場合、合計や計算済みの数字は更新されません。

スプレッドシートの起動機能を使用するには、システムが次の条件を満たしている必要があります。

- Hyperion Enterprise Reporting Web サーバに Microsoft Office 2000、2002、2003、2007 のいずれかがインストールされている必要があります。Microsoft Excel 2000 と Microsoft IIS サーバを使用している場合は、IIS リリース 5.0 または 6.0 の使用をお勧めします。
- スプレッドシートを要求するユーザは、選択した書式を解釈できるスプレッドシートプログラムをローカルにインストールしている必要があります。

%LAUNCH_EXCEL%変数を使用して、動的レポートのテンプレートにスプレッドシートのリンクを含めます。現在のレポートの Excel バージョンにアクセスする URL リンクで変数が置き換えられます。ユーザがリンクを選択すると、関連付けられたデータがスプレッドシートとして表示されます。リンクはテキストリンクでもグラフィックリンクでも使用できます。

スプレッドシートの表示方法

スプレッドシートを起動すると、ブラウザが URL 要求とともにシステム、アプリケーション、表示するレポートの名前、および使用する書式に関する情報を Hyperion Enterprise Reporting Web サーバに送信します。サーバで Hyperion Enterprise Reporting Web によりレポートが開き、そのデータが取得されます。次に、Microsoft の OLE オートメーション技術を使用して、サーバで Microsoft Excel がアクティブになります。

レポートが開き、Microsoft Excel がアクティブになると、Microsoft Excel を使用して Hyperion Enterprise Reporting Web で以下の処理が行われます。

- レポートデータが含まれた一時スプレッドシートが作成されます。
- レポートの作成時に定義された書式を使用してデータが書式設定されます。
- 要求した書式を使用して一時ファイルにスプレッドシートが保存されます。
- スプレッドシートが保存されると、ファイルを Microsoft Excel スプレッドシートとして識別する特別なヘッダー（MIME タイプの application/x-msexcel）とファイルの内容がブラウザに送信されます。

以降の処理は、使用しているブラウザによって異なります。ほとんどのブラウザではスプレッドシートの処理方法が認識されないため、ファイルをローカルディスクに保存するか、ローカルアプリケーションを使用して開くかを尋ねるメッセージが表示されます。この場合は、ローカルスプレッドシートアプリケーションを使用してファイルを開くように選択します。ブラウザはファイルを一時ディレクトリにキャッシュし、ローカルスプレッドシートツールを起動します。これは、コマンドプロンプトで<drive>:\<path>\excel.exe と入力する（つまり OLE を使用しない）操作と同等です。ローカルスプレッドシートアプリケーションがウィンドウに表示され、キャッシュされたファイルが読み込まれます。

注： 次回スプレッドシートの起動を要求するときは、メッセージが表示されずに自動的に起動します。

注： Microsoft Excel で複合レポートを起動すると、埋め込まれている各レポートが別々のワークシートに表示されます。

HTML ファイルを編集してスプレッドシートリンクを追加する

HTML ファイルを編集してレポートのスプレッドシートリンクを追加するには、動的レポートのテンプレートに%LAUNCH_EXCEL%変数を挿入するか、EXCELREP 関数を使用します。

- ▶ HTML ファイルでスプレッドシートへのリンクを作成するには、次の手順に従います。

動的レポートのテンプレートで次のいずれかの場所に%LAUNCH_EXCEL%変数を挿入します。

- <A HREF>タグ内（例：）
- form アクション内（例：<FORM ACTION="%LAUNCH_EXCEL%">）

ヒント： %LAUNCH_EXCEL%変数の後で書式を指定できます（例：
%LAUNCH_EXCEL%&fmt=xls5）。fmt パラメータについては、[81 ページの「EXCELREP 関数の構文」](#)を参照してください。

または、次のように<A HREF>タグに EXCELREP 関数呼び出しを含めることもできます。

```
<A HREF="/HSPIDER/spider.dll?  
excelrep&Enterprise&sales&REVENUE&fmt=XLS">  
Microsoft Excel Format</A>
```

EXCELREP 関数の構文について詳しくは、[81 ページの「EXCELREP 関数の構文」](#)を参照してください。

Web ブラウザでのスプレッドシート要求の入力

ユーザがレポートをスプレッドシートとして表示するには、Web ブラウザの URL にスプレッドシート要求を入力する方法もあります。

- ▶ ブラウザでスプレッドシート要求を入力するには、ブラウザの URL に次の関数呼び出しを入力します。

`http://server/hspider/spider.dll?excelrep&sys&app&rpt&fmt=Format`

ここで、server は Enterprise Reporting サーバ、hspider はサーバの仮想ディレクトリ、Format はスプレッドシートの書式です。

EXCELREP 関数の構文

EXCELREP 関数には次の構文を使用します。

http://Path/spider.dll?excelrep&[sys=]System&[app=]Application
&[rpt=]Report[&fmt=Format][&Keyname=Keyvalue]

変数	説明
Path	サーバ名と SPIDER.DLL ファイルのパス。SPIDER.DLL は HSPIDER ディレクトリにあります。
System	<p>アクセスするシステムまたはオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアのラベル。これは必須のパラメータです。システムラベルは、REPENG.INI ファイルの[DRIVERS32]セクションで定義します。</p> <p>Essbase を使用している場合は、System パラメータを次の構文に置き換えます。 Essbase-servername\Essbase application name</p> <p>ここで、Essbase-servername は、REPENG.INI ファイルの Essbase ドライバ名と Essbase サーバ名をハイフンでつないだものです。Essbase application name は、Essbase アプリケーションの名前です。</p>
Application	<p>データの視点を変更する Hyperion Enterprise アプリケーションのラベル。これは必須のパラメータです。</p> <p>System パラメータで指定されているオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアの任意のアプリケーションを選択できます。</p> <p>Essbase を使用している場合、このパラメータは Essbase データベースの名前です。</p>
Report	<p>実行するレポートのラベル。これは必須のパラメータです。</p> <p>Application パラメータで指定されているアプリケーションの任意のレポートを選択できます。</p>
Format	表示するスプレッドシートの書式。書式のリストについては、 83 ページの「Format パラメータの値」 を参照してください。
Keyname	設定するデータの視点ディメンション。
Keyvalue	Keyname に割り当てる値。ピリオドはすべて、データの視点ディメンション値に表示されるとおりに入力してください。また、データの視点ディメンション値のスペースはプラス記号 (+) に置き換える必要があります。例えば、「JULY 07」の期間は、レポートリクエストで「JULY+07」になります。

EXCELREP の必須パラメータとオプションパラメータを使用する際のルール

この関数には、必須とオプションの両方のパラメータが含まれます。これらのパラメータを使用する場合は、次のルールに従ってください。

- 必須パラメータは、System、Application、Report の順で指定する必要があります。
- 1 つの必須パラメータでラベルを使用する場合、すべての必須パラメータでラベルを使用する必要があります。
- オプションパラメータは、必須パラメータの後に配置する必要があります。
- オプションパラメータは任意の順序で使用できます。
- それぞれのオプションパラメータでは、ラベルを使用する必要があります。

必須パラメータについては、前述の表を参照してください。

Format パラメータの値

次の表に EXCELREP 関数の Format パラメータで使えるスプレッドシートのすべての書式を一覧表示します。

表 4 EXCELREP 関数で使用可能な書式

書式	説明
XLS (デフォルト), -4143	サーバに現在インストールされている Excel のバージョン
XLS5	Excel 5/95 (.XLS)
CSV, 6	カンマ区切りテキスト
TXT, -4158	タブ区切りテキスト
20	タブ区切りテキスト (Windows) (.TXT)
23	カンマ区切りテキスト (Windows) (.CSV)

Web ページからの Hyperion Distributed Schedules の起動

Hyperion Enterprise Reporting Web では、Web ページから Hyperion Distributed Schedules でレポートを起動できます。Hyperion Distributed Schedules でレポートを起動する方法は次の 2 通りあります。

- ユーザが選択したときに Hyperion Distributed Schedules を起動するテンプレートまたは他の Web ページにリンクを含めることができます。
- Hyperion Enterprise Reporting Web では、ユーザがブラウザのアドレスバーに SCHEXT.DLL リンクを入力できます。

Web ページから Hyperion Distributed Schedules を起動するには、システムが次の条件を満たしている必要があります。

- サーバに Hyperion Distributed Schedules サーバソフトウェアがインストールされている必要があります。
- 要求を行うユーザはローカルに Hyperion Distributed Schedules クライアントソフトウェアをインストールしている必要があります。

Hyperion Distributed Schedules を起動するリンクをユーザが選択すると、Distributed Application サーバで Hyperion Distributed Schedules クライアントの次の設定が選択されます。これらの設定は、システム管理者が SCHEXT.DLL リンクに含めます。

- Distributed Applications サーバのサーバ名
- オラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェア
- アプリケーションセット (該当する場合)
- Application
- Essbase データベース (該当する場合)
- Report

- 部分的なデータの視点

ユーザが Hyperion Distributed Schedules を起動するリンクを選択するとき、以下のタスクを実行する必要があります。

- Hyperion Distributed Schedules を初めて起動するときに、Distributed Applications サーバの Windows ユーザ名とパスワードを入力します。
- Hyperion Distributed Schedules を起動するたびに、Hyperion Enterprise アプリケーションのユーザ名とパスワードを入力します。

Web ページから Hyperion Distributed Schedules が起動すると、要求されたレポートのデータが Web ブラウザではなく Hyperion Distributed Schedules に表示されます。

Hyperion Enterprise Reporting Web で SCHEDREP 関数を使用して Distributed Schedules を起動します。SCHEDREP 関数は、Hyperion Distributed Schedules サーバソフトウェアでインストールされる SCHEXT.DLL に含まれています。

Hyperion Distributed Schedules を起動する HTML ファイルの編集

レポートのテンプレートに schext.dll リンクを含めて、Hyperion Distributed Schedules でレポートを起動する HTML ファイルを編集できます。

- ▶ Web ページから Hyperion Distributed Schedules を起動するリンクを作成するには、次の手順に従います。

レポートテンプレートの<A HREF>タグ内に SCHEXT.DLL URL リンクを次のように含めます。

```
<A HREF="http://yourserver/HSPIDER/schext.dll?SchedRep&Enterprise
&none&demo&rppl1">
```

Web ブラウザで Hyperion Distributed Schedules を起動する要求の入力

Hyperion Distributed Schedules でレポートを起動するには、Web ブラウザの URL に要求を入力する方法もあります。

ユーザが Microsoft Internet Explorer から Hyperion Distributed Schedules を起動すると、ファイルを開くか、ディスクに保存するかを尋ねるメッセージが表示されます。そのとき、必ずファイルを開くように選択する必要があります。ユーザが Mozilla Firefox から Hyperion Distributed Schedules を起動する場合、最初に [Pick App (アプリケーションの選択)] ボタンを選択し、ローカルコンピュータを参照して HSCHED.EXE という Distributed Schedules 実行可能ファイルを見つけます。

- ▶ ブラウザに SCHEXT.DLL の URL リンクを入力するには、次のように URL にこの関数を入力します。

```
http://path/schext.dll?SchedRep&sys&appset&app&rpt
```

ここで、path はサーバ名と SCHEXT.DLL ファイルのパスです。SCHEXT.DLL ファイルは HSPIDER ディレクトリにあります。

SCHEXREP 関数の構文

SCHEXREP 関数には次の構文を使用します。

```
http://Path/schext.dll?schedrep&[sys=]System&[appset=]  
ApplicationSet&[app=]Application&[rpt=]Report[&Keyname=Keyvalue]  
[&server=ServerName]
```

変数	説明
Path	サーバ名と SCHEXT.DLL ファイルのパス。SCHEXT.DLL は HSPIDER ディレクトリにあります。
System	アクセスするシステムまたは Hyperion 製品のラベル。これは必須のパラメータです。システムラベルは、REPEXG.INI ファイルの[DRIVERS32]セクションで定義します。
ApplicationSet	レポートを生成する Hyperion Enterprise アプリケーションセットのラベル。これは必須のパラメータです。 System パラメータで指定されているオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアでアプリケーションセットを使用する場合は、表示、入力、または編集するデータのあるアプリケーションが含まれたセットを選択します。指定したオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアがアプリケーションセットを使用しない場合は、NONE を指定します。
Application	レポートを生成する Hyperion Enterprise アプリケーションのラベル。これは必須のパラメータです。 System パラメータで指定されているオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアと、Appset パラメータで指定されているアプリケーションセットのアプリケーションを選択できます。
Report	実行するレポートのラベル。これは必須のパラメータです。 Application パラメータで指定されているアプリケーションの任意のレポートを選択できます。
Keyname	設定するデータの視点ディメンション。
Keyvalue	Keyname に割り当てる値。ピリオドはすべて、データの視点ディメンション値に表示されるとおりに入力してください。また、データの視点ディメンション値のスペースはプラス記号 (+) に置き換える必要があります。例えば、「JULY 97」の期間は、レポートリクエストで「JULY+97」になります。
ServerName	Distributed Applications サーバのサーバ名。Hyperion Distributed Schedules クライアントが接続するサーバは、Path パラメータに表示されているサーバとは異なる場合があります。ServerName パラメータを省略すると、Hyperion Distributed Schedules クライアントは、Path パラメータで指定されているサーバに接続します。

この関数には、必須とオプションの両方のパラメータが含まれます。これらのパラメータを使用する場合は、次のルールに従ってください。

- 必須パラメータは、System、ApplicationSet、Application、Report の順で設定する必要があります。

- 1つの必須パラメータでラベルを使用する場合、すべての必須パラメータでラベルを使用する必要があります。
 - オプションパラメータは、必須パラメータの後に配置する必要があります。
 - オプションパラメータは任意の順序で使用できます。
 - それぞれのオプションパラメータでは、ラベルを使用する必要があります。
- 必須パラメータについては、前述の表を参照してください。

データ入力モードのレポート表示

Hyperion Enterprise Reporting Web を使用すると、レポートをデータ入力モードで表示できます。これにより、ユーザはインターネットまたはイントラネット上で標準の HTML を使用して Hyperion Enterprise アプリケーションにデータを入力できるようになります。

データ入力モードのレポートは、デフォルトではグリッド線付きで表示され、Hyperion Distributed Schedules のセルの色でセルステータスが示されます。ユーザはデータをセルに入力し、保存せずに再計算して変更結果を確認できます。その後で、変更を保存するかどうかを選択できます。

次の図に、一般的なデータ入力レポートを示します。

図 5 データ入力レポート

	ITALY.BASE	FRANCE.BASE	GERMANY.BASE	S
Accounts Receivable	123456	146,131	22,083	
Accounts Payables	11,142,642	38,894	6,045	
Cash	2,569,722	8,971	1,394	
Short Term Investments	8,197,047	28,613	4,457	

User : administrator System : Enterprise6 Application : Demo

Frequency Local intranet

管理プログラムでオプションを設定すると、Hyperion Enterprise Reporting Web のすべてのレポートのデータ入力モードを有効にできます。このオプションを選択した場合は、[DATAENTRY] 関数を使用してデータ入力モードでレポートを表示できます。

次の方法を使用して、データ入力モードでレポートを表示できます。

- ユーザが選択したときにレポートがデータ入力モードで起動するように、レポートまたは他の Web ページにリンクを含めることができます。
- Hyperion Enterprise Reporting Web では、ユーザがブラウザのアドレスバーで DATAENTRY 関数を呼び出すことができます。

レポートをデータ入力モードで表示すると、デフォルトではグリッド形式で表示されます。このグリッドは適切なデータ入力テンプレートでオフにできます。レポートのセルは Distributed Schedules と同じデフォルト色で表示されます。セルの色は各セルに含まれているデータの種別を示します。編集可能なセルにはテキスト入力フィールドが含まれています。[Recalculate (再計算)] ボタンと [Submit report data (レポートデータを送信)] ボタンがレポートの上に表示されますが、適切なデータ入力テンプレートをカスタマイズして別の場所に移動することもできます。ユーザは個々のセル間で値の切り取り、コピー、および貼り付けを行うことができます。セルに新しい値を入力し、[Recalculate (再計算)] ボタンを選択して、レポートを保存せずに新しいデータをプレビューするか、[Submit report data (レポートデータを送信)] ボタンを選択し、新しいデータを計算してレポートを保存できます。

注： Essbase を使用している場合は、[Recalculate (再計算)] ボタンは表示されません。データ入力モードでは複合レポートは表示できません。

セルの色

データ入力モードで表示されるレポートのセルの色は、次のようなデータセルを示します。

- デフォルト色は有効な入力セルを示します。デフォルトのセルでデータの入力や変更ができます。
- 「Changed (変更あり)」の色は、未保存のデータ変更が含まれているセルを示します。変更したセルのデータをさらに変更することもできます。変更したセルをデフォルトのセルに変換するには、変更内容を保存する必要があります。
- 「保護済」の色は表示専用のセルを示し、オラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアのアプリケーションで保護または仕訳帳保護されています。
- 「Reporting Calculated (Reporting 算出)」の色は表示専用のセルを示し、Hyperion Enterprise Reporting の計算式に基づいて計算されるデータを含んでいます。式を計算すると、値が変わります。
- 「Application Calculated (アプリケーション計算)」の色は表示専用のセルを示し、現在のアプリケーションの計算式に基づいて計算されるデータを含んでいます。式を計算すると、値が変わります。
- 「テキスト」の色は表示専用のセルを示し、空か、またはテキストを含んでいます。
- 「Write-failed (書き込み失敗)」の色は、システムに保存したときデータベースに書き込めなかったデータを含んでいるセルを示します。

- 「Read Only（読み取り専用）」の色は、読み取り専用データを含んでいるセルを示します。読み取り専用のセルにはデータを入力できません。例えば、視点が無効のデータセルは読み取り専用です。

すべてのレポートのデータ入力モードの許可

管理プログラムの [レポートオプション] タブでオプションを設定すると、Hyperion Enterprise Reporting Web のすべてのレポートのデータ入力モードを有効にできます。

このオプションを選択した場合は、[DATAENTRY] 関数を使用してデータ入力モードでレポートを表示できます。このオプションを選択しないと、[DATAENTRY] 関数を使用してデータ入力モードでレポートを表示することはできません。

- ▶ すべてのレポートのデータ入力モードを許可するには、次の手順に従います。
- 1 [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Hyperion Enterprise Reporting Web Administration Program (Hyperion Enterprise Reporting Web 管理プログラム)] の順に選択して管理プログラムにアクセスします。
- 2 [オプション] を選択します。

注： この設定を変更するには、管理プログラムを Web サーバから実行する必要があります。この設定をワークステーションから変更することはできません。

- 3 [レポートオプション] タブを選択します。
- 4 [Allow data entry mode (データ入力モードを許可)] を選択し、[OK] を選択します。

データ入力モードでレポートを表示するための HTML ファイルの編集

データ入力モードでレポートを表示するには、HTML ファイルを編集して、レポートテンプレートにリンクを含めます。

- ▶ リンクを作成してデータレポートモードでレポートを起動するには、次の手順に従います。

レポートテンプレートの<A HREF>タグ内に次の URL リンクを含めます。

```
<A HREF="http://yourserver/HSPIDER/spider.dll?
dataentry&EnterpriseXA&Demo&RPPL1">
```

Web ブラウザで Hyperion Distributed Schedules を起動する要求の入力

レポートをデータ入力モードで表示するには、Web ブラウザの URL に DATAENTRY 要求を入力する方法もあります。

- ▶ ブラウザに DATAENTRY URL リンクを入力するには、URL に次の関数を入力します。

http://server/hspider/spider.dll?dataentry&sys&app&rpt

ここで、server は Hyperion Enterprise Reporting サーバの名前です。

DATAENTRY 関数の構文

DATAENTRY 関数には次の構文を使用します。

**http://Path/spider.dll?dataentry&[sys=]System&[app=]Application
&[rpt=]Report[&frame=UseFrames][&tfile=Template.htx] [&tvview=Template2.htx]
[&tpov=Template3.htx][&Keyname=Keyvalue] [&browser=BrowserType]
[&lockhdrs=LockHeaders]**

変数	説明
Path	サーバ名と spider.dll ファイルのパス。SPIDER.DLL は HSPIDER ディレクトリにあります。
System	アクセスするシステムまたはオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアのラベル。これは 必須のパラメータ です。システムラベルは、REPENG.INI ファイルの[DRIVERS32]セクションで定義します。 Essbase を使用している場合は、System パラメータを次の構文に置き換えます。 Essbase-servername\Essbase application name ここで、Essbase-servername は、REPENG.INI ファイルの Essbase ドライバ名と Essbase サーバ名をハイフンでつないだものです。Essbase application name は、Essbase アプリケーションの名前です。
Application	データ入力モードでレポートを生成する Hyperion Enterprise アプリケーションのラベル。これは 必須のパラメータ です。 System パラメータで指定されているオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアの任意のアプリケーションを選択できます。 Essbase を使用している場合、このパラメータは Essbase データベースの名前です。
Report	データ入力モードで実行するレポートのラベル。これは 必須のパラメータ です。 Application パラメータで指定されているアプリケーションの任意のレポートを選択できます。
UseFrames	次のいずれかの値。 <ul style="list-style-type: none">● Yes : 個別のフレームにデータの視点ボタンが表示されます。これがデフォルト値です。● No : レポートの本体にデータの視点ボタンが表示されます。ブラウザがフレームをサポートしていない場合は、No を指定します。
Template.htx	レポートで使用するテンプレート (UseFrames が Yes に設定されている場合)。デフォルトは FRAMES.HTX です。
Template2.htx	レポートに使用する HTML テンプレート。 このパラメータのデフォルト値については、90 ページの「 Template2.htx パラメータのデフォルト値 」を参照してください。

変数	説明
Template3.htx	レポートのデータの視点オプションで使用する HTML テンプレート (UseFrames が Yes に設定されている場合)。デフォルトは FPOV.HTX です。
Keyname	設定するデータの視点ディメンション。
Keyvalue	Keyname に割り当てる値。ピリオドはすべて、データの視点ディメンション値に表示されるとおりに入力してください。また、データの視点ディメンション値のスペースはプラス記号 (+) に置き換える必要があります。例えば、「JULY 97」の期間は、レポートリクエストで「JULY+97」になります。
BrowserType	次のいずれかの値。 <ul style="list-style-type: none"> ● IE40 : Microsoft Internet Explorer 6.0.以降を Web ブラウザとして指定します。 ● Netscape40 : Mozilla Firefox 2.0.x 以降を Web ブラウザとして指定します。 BrowserType パラメータを使用すると、管理プログラムのデフォルトブラウザの設定を上書きできます。このオプションの設定方法について詳しくは、Administration プログラムのオンラインヘルプを参照してください。
LockHeaders	次のいずれかの値。 <ul style="list-style-type: none"> ● Yes : ユーザがレポートをスクロールするときに、行および列見出しが固定されます。 ● No : 行および列見出しは固定されません。 LockHeaders パラメータを使用すると、管理プログラムの行および列見出しのデフォルトの動作を上書きできます。このオプションの設定方法について詳しくは、Administration プログラムのオンラインヘルプを参照してください。

DATAENTRY の必須パラメータとオプションパラメータを使用する際のルール

この関数には、必須とオプションの両方のパラメータが含まれます。これらのパラメータを使用する場合は、次のルールに従ってください。

- 必須パラメータは、System、Application、Report の順で指定する必要があります。
 - 1 つの必須パラメータでラベルを使用する場合、すべての必須パラメータでラベルを使用する必要があります。
 - オプションパラメータは、必須パラメータの後に配置する必要があります。
 - オプションパラメータは任意の順序で使用できます。
 - それぞれのオプションパラメータでは、ラベルを使用する必要があります。
- 必須パラメータについては、前述の表を参照してください。

Template2.htx パラメータのデフォルト値

次の表に DATAENTRY 関数の Template2.htx パラメータのデフォルト値を一覧表示します。デフォルト値は、フレームを使用するか、行および列見出しを保護するか、およびどのブラウザを使用するかによって異なります。

表 5 DATAENTRY 関数の Template2.htx パラメータのデフォルト値

	Microsoft Internet Explorer 6.0 以降	Mozilla Firefox 2.0.x 以降
見出しの保護なし、フレームなし	DEREPIE.HTX	DEREPNS.HTX
見出しの保護なし、フレームあり	FDEREPIE.HTX	FDEREPNS.HTX
見出しの保護あり、フレームなし	DELHRIE.HTX	DELHRNS.HTX
見出しの保護あり、フレームあり	FDELHRIE.HTX	FDELHRNS.HTX

この章の内容

PDF レポートについて	93
PDF ファイルの使用	94

PDF レポートについて

Hyperion Enterprise Reporting Web を使用して、ユーザにハードコピーの PDF レポートを配布できます。ユーザは動的および静的レポートでデータを表示できます。静的パッケージの静的レポートでは、ユーザはブラウザまたは Adobe Acrobat Reader を使用してデータを Adobe PDF ファイルとして表示できます。また、Adobe Acrobat Reader から PDF ファイルを表示したり印刷したりすることもできます。PDF ファイルを使用すると、レポートを表示または印刷するときに、Hyperion Enterprise Reporting で定義されたレポート書式を維持できます。

レポートを印刷可能なファイルとして PDF 形式に変換する処理は、オープンソースの PDF 作成プログラムである GhostScript および HRPrinter で行います。レポートを PDF ファイルに印刷する必要があるユーザは、システムに GhostScript リリース 8.54 以降をインストールする必要があります。ファイルを PDF 形式に印刷する前に、デフォルトのプリンタとして HRPrinter をインストールする必要があります。HRPrinter は Hyperion Enterprise Reporting をインストールするときにデフォルトでシステムにインストールされます。こうすることにより、インストール後に PDF ドライバのプロパティをカスタマイズできないようにします。

静的パッケージの出力オプションには、パッケージ内のすべてのレポートを含む PDF ファイルを作成するオプションと、パッケージ内のレポートごとに PDF ファイルを作成するオプションがあります。静的パッケージ内のレポートグループごとに PDF ファイルを作成するオプションはありません。

Web ページに、Adobe Acrobat で PDF ファイルとしてレポートを開くリンクを作成できます。PDF リンクは次のアイコンとして表示されます。



ユーザが PDF 形式の静的レポートまたはパッケージを表示または印刷できるようにするには、レポートまたはパッケージを作成するときに PDF ファイルを生成する必要があります。静的レポートを作成するときに PDF ファイルを作成しなかった場合は、PDF は使用できず、PDF アイコンもレポートに表示されません。

PDF ファイルの使用

PDF ファイルは次の方法で使用できます。

- Hyperion Enterprise Reporting Web 管理プログラムを使用して PDF ファイルを生成します。
- HTML エディタを使用してカスタムテンプレートや他の Web ページに PDF リンクを手動で追加します。
- Hyperion Enterprise Reporting Web ユーザがブラウザのアドレスバーで PDF 要求を入力できます。

管理プログラムを使用した PDF ファイルの生成

管理プログラムを使用して、静的レポートやパッケージの PDF ファイルを作成できます。

- 静的レポートの PDF ファイルを作成するには、次の手順に従います。
 - 1 **【スタート】** ボタンをクリックし、**【プログラム】**、**【Hyperion Solutions】**、**【Hyperion Enterprise Reporting】**、**【Web サーバー管理プログラム】** の順に選択します。
 - 2 **【静的レポート/チャート】** を選択し、使用するアプリケーションにログオンします。
 - 3 **【レポート】** からデータの視点を選択し、**【セットのレポート】** からレポートを選択します。
 - 4 **【出力オプション】** から **【PDF ファイルの作成】** を選択し、**【完了】** をクリックします。
- 静的パッケージの PDF ファイルを作成するには、次の手順に従います。
 - 1 **【スタート】** ボタンをクリックし、**【プログラム】**、**【Hyperion Solutions】**、**【Hyperion Enterprise Reporting】**、**【Web サーバー管理プログラム】** の順に選択します。
 - 2 **【静的パッケージ】** を選択し、使用するアプリケーションにログオンします。
 - 3 **【パッケージ】** からデータの視点を選択し、**【セットに含まれるパッケージ】** からパッケージを選択します。
 - 4 **【出力オプション】** で、次の操作を実行します。
 - パッケージの PDF ファイルを 1 つ作成するには、**【単一ファイルの作成】** を選択します。
 - グループ内のレポートごとに PDF ファイルを作成するには、**【レポート別にファイルを作成】** を選択します。
 - 5 **【PDF ファイルの作成】** を選択し、**【完了】** をクリックします。

HTML ファイルを編集して PDF リンクを追加する

PDF ファイルへのリンクを追加するには、カスタムテンプレートまたは HTML ファイルを手動で編集します。変数または PRINTREP 関数を使用してリンクを作成します。

- ▶ テンプレートで変数を使用して PDF ファイルへのリンクを作成するには、次の手順に従います。

1 次のいずれかの場所にある動的レポートテンプレートに%LAUNCH_PRINT% or %LAUNCH_PRINT2%変数を含めます。

- <A HREF>タグ内（例：）
 - form アクション内（例：<FORM ACTION="%LAUNCH_PRINT2%">）
- %LAUNCH_PRINT%変数は現在の動的レポートの PDF リンクと PDF アイコンを挿入します。%LAUNCH_PRINT2%は現在の動的レポートの PDF リンクを PDF アイコンなしで挿入します。

2 静的レポートの場合は、静的レポートテンプレートの次のいずれかの場所に%STATIC_PRINT%変数を含めます。

- <A HREF>タグ内（例：）
- form アクション内（例：<FORM ACTION="%STATIC_PRINT%">）

3 静的パッケージの場合は、静的レポートテンプレートの次のいずれかの場所に%STATIC_BOOK%変数を含めます。

- <A HREF>タグ内
- form アクション内

- ▶ PRINTREP 関数を使用して PDF ファイルへのリンクを作成するには、次のように <A HREF>タグ内に PRINTREP 関数呼び出しを含めます。

```
<A HREF="/HSPIDER/spider.dll?
printrep&Enterprise&sales&REVENUE">
```

PRINTREP 関数の構文については、[96 ページの「PRINTREP 関数の構文」](#)を参照してください。

Web ブラウザでの PDF 要求の入力

ユーザがレポートを PDF ファイルとして表示するには、Web ブラウザの URL に PDF 要求を入力する方法もあります。

- ▶ ブラウザで PDF 要求を入力するには、ブラウザの URL に次の関数呼び出しを入力します。

```
http://Path/spider.dll?printrep&sys=System&app=Application&rpt=Report
```

ここで、Path はサーバ名と SPIDER.DLL ファイルのパスで、これは HSPIDER ディレクトリにあります。PRINTREP 関数の使用法については、次の項を参照してください。

注： 前述の関数を使用して印刷するには、サーバに HRPrinter と GhostScript がインストールされており、クライアントに Adobe Acrobat Reader がインストールされている必要があります。Adobe Acrobat Reader のダウンロードについては、次の Adobe の Web サイト (<http://www.adobe.com/prodindex/acrobat/readstep.html>) を参照してください。

PRINTREP 関数の構文

PRINTREP 関数を使用して、Adobe Acrobat PDF ファイルにレポートを出力できます。ブラウザの出力機能を使用してレポートを出力する場合は、Hyperion Enterprise Reporting で設定されているレポート書式の一部がサポートされません。PRINTREP 関数を使用すると、Hyperion Enterprise Reporting のレポートエンジンによってレポートがサーバの一時ファイルに出力され、クライアントコンピュータにダウンロードされます。次に、結果の PDF ファイルが Adobe Acrobat Reader に表示され、Adobe Acrobat Reader からファイルを印刷できます。PDF ファイルに出力する場合は、Hyperion Enterprise Reporting の書式設定がすべてサポートされます。

PDF ファイルに出力するには、次の構文を使用します。

http://Path/spider.dll?printrep&sys=System&app=Application&rpt=Report

この関数には、必須とオプションの両方のパラメータが含まれます。これらのパラメータを使用する場合は、次のルールに従ってください。

- 必須パラメータは、System、Application、Report の順で指定する必要があります。
- 1 つの必須パラメータでラベルを使用する場合、すべての必須パラメータでラベルを使用する必要があります。

必須パラメータについては、次の表を参照してください。

変数	説明
Path	サーバ名と SPIDER.DLL ファイルのパス。SPIDER.DLL は HSPIDER 仮想ディレクトリにあります。
System	アクセスするシステムまたはオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアのラベル。これは 必須のパラメータ です。システムラベルは、REPENG.INI ファイルの[DRIVERS32]セクションで定義します。 Essbase を使用している場合は、System パラメータを次の構文に置き換えます。 Essbase-servername\Essbase application name ここで、Essbase-servername は、REPENG.INI ファイルの Essbase ドライバ名と Essbase サーバ名をハイフンでつないだものです。Essbase application name は、Hyperion Essbase アプリケーションの名前です。
Application	レポートを生成する Hyperion Enterprise アプリケーションのラベル。これは 必須のパラメータ です。 System パラメータで指定されているオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアの任意のアプリケーションを選択できます。 Essbase を使用している場合、このパラメータは Essbase データベースの名前です。
Report	実行するレポートのラベル。これは 必須のパラメータ です。 Application パラメータで指定されているアプリケーションの任意のレポートを選択できます。

この章の内容

調査	97
調査レポート	97
調査の設定	99
調査レベルの設定	99
調査の無効化	99

調査

調査とは、レポート内の行や列のセルの値を選択して、その値に関する詳細情報を表示する機能です。

調査が定義されている行または列の値は、Web ページのレポートで下線の付いたハイパーリンクとして表示されます。行または列のリンクを選択して、その値の詳細を調査します。例えば、レポートで調査を定義して、Canada の Gross Margin 勘定科目の行の値をクリックしたときに、Canada のすべての子の Gross Margin 勘定科目を表示する新しいレポートが生成されるようにすることができます。

調査を定義する値を選択すると、データの視点が、選択した値を含んでいるレポートセルのデータの視点に設定されます。例えば、Canada 列の Gross Margin 行を選択した場合、勘定科目のデータの視点は Gross Margin に、エンティティのデータの視点は Canada に設定されます。

注： Hyperion Enterprise Reporting Web の静的複合レポートには調査を含めることはできません。Hyperion Enterprise Reporting の調査を含む複合レポートを Hyperion Enterprise Reporting Web で使用すると、調査を含まない複合レポートになります。

調査レポート

調査レポートは、レポートで調査が定義されている行または列のセルをクリックすると表示されます。セルをクリックすると、データの視点がそのセルのデータの視点にリセットされます。Hyperion Enterprise Reporting では、ユーザがクリックしたセルのデータの視点に基づく詳細情報を表示するために調査レポートを設定します。次の図に、調査を定義したサンプルレポートを示します。

図 6 調査を定義したサンプルレポート

Report - Microsoft Internet Explorer

Address: http://HERWEBSERVER/hspider/spider.dll?report&enterprise&demo&OTINC1B&frame=no

Hyperion Enterprise® Reporting - Report | Home | Logoff | Help

System List > enterprise > demo > ... > OTINC1B

Point of View: CORP ACTUAL JAN 99 M.CTD SALESEE

P&L for Actual vs. Budget
Corporate HQ

	Actual	Budget	Variance	% Var
Gross Sales	6,334,870	5,871,418	463,452	7.9
Cost of Goods Sold	1,982,469	1,919,780	(62,689)	(3.3)
Gross Margin	4,352,401	3,951,638	400,763	10.1
Total Expenses	2,087,038	1,994,553	(92,485)	(4.6)

Entity Local intranet

上の図で、Canada 列の Gross Margin 行をクリックすると、データの視点の現在の勘定科目が Gross Margin に、現在のエンティティが Canada にリセットされます。調査レポートでは、新しいデータの視点で@DEP 関数呼び出して、Canada の子の Gross Margin 勘定科目を表示します。次の図に、上の図の Canada 列の Gross Margin 行の値をユーザが選択したとき、その行の調査レポートが@DEP 関数によってどのように表示されるかを示します。

図 7 調査レポート

Report - Microsoft Internet Explorer

Address: http://HERWEBSERVER/hspider/spider.dll?report&enterprise&demo&D_NCV2&Entity=CC

Hyperion Enterprise® Reporting - Report | Home | Logoff | Help

System List > enterprise > demo > ... > D_NCV2

Point of View: CORP ACTUAL JAN 99 M.CTD GRSALES

Actual

	Actual
Gross Sales	
Americas	18,559
Europe	6,306,527
Asia	9,784
Corporate HQ	6,334,870

User : administrator System : enterprise Application : demo

Entity Local intranet

Hyperion Enterprise Reporting を使用したレポートの作成方法については、『Hyperion Enterprise Reporting ユーザガイド』を参照してください。

調査の設定

調査を設定するには、最初に Hyperion Enterprise Reporting で調査レポートを作成する必要があります。それから、調査を定義する必要があります。レポートに調査を定義するには、調査を可能にする行と列を選択し、ユーザがそれらの行または列の値を選択したときに表示される調査レポートを指定します。調査の設定方法について詳しくは、『Hyperion Enterprise Reporting ユーザガイド』を参照してください。

調査レベルの設定

Hyperion Enterprise Reporting では、静的レポートとパッケージに複数の調査レベルを設定できます。例えば、レポートの Total Expenses 勘定科目を選択した場合に、Total Expenses の明細勘定を示す調査レポートを表示することが考えられます。さらに、調査レポートの明細勘定を選択した場合に、選択された勘定科目のサブエンティティ明細を示す新しい調査レポートを表示することも考えられます。

Hyperion Enterprise Reporting Web 管理プログラムで静的レポートを作成するときに、調査のレベルを設定します。Hyperion Enterprise Reporting Web 管理プログラムのデフォルトでは、[調査を含む] オプションを選択して静的レポートを作成すると、4 レベルまでの調査レポートの HTML ファイルが作成されます。管理プログラムを使用して、Hyperion Enterprise Reporting Web に含める調査レポートのレベル数を調整することができます。

- ▶ 管理プログラムを使用して調査のレベルを設定するには、次の手順に従います。
- 1 [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Hyperion Enterprise Reporting Web Administration Program (Hyperion Enterprise Reporting Web 管理プログラム)] の順に選択して管理プログラムにアクセスします。
- 2 静的レポートとチャートの調査レベルを設定するには [静的レポート/チャート] を選択し、パッケージの調査レベルを設定するには [静的パッケージ] を選択します。
- 3 必要なアプリケーションにログインします。
- 4 [出力オプション] タブを選択します。
- 5 [調査を含む] チェックボックスをオンにします。
- 6 [レベル数] 編集ボックスに、含める調査レベル数を入力します。
- 7 [HTML に保存] を選択します。

調査の無効化

調査により、レポートの値をドリルダウンして、その値に関する追加情報を示す新しいレポートを表示することができます。調査を使用する Hyperion Solutions レポートから Web ページを作成すると、システムのオーバーヘッドが増大し、パフォーマンスが低下することがあります。Hyperion Enterprise Reporting Web で調査を使用しない場合、この機能を無効にすることができます。

➤ 調査を無効にするには、次の手順に従います。

- 1 動的レポートの調査を無効にするには、spider.ini ファイルに次のテキストを入力します。

```
[OPTIONS]
drill=no
```

- 2 静的レポート、チャートおよびパッケージの調査を無効にするには、spider.ini ファイルに次のテキストを入力します。

```
[ADMIN]
maxdrill=0
```

- 3 特定アプリケーションの静的パッケージの調査を無効にするには、次の操作を行います。

- [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択して管理プログラムにアクセスし、[静的パッケージ] を選択します。
- 必要なアプリケーションにログオンします。
- [出力オプション] タブを選択します。
- [調査を含む] チェックボックスをオフにします。
- [HTML に保存] を選択します。

- 4 特定アプリケーションの静的レポートの調査を無効にするには、管理プログラムで次の操作を行います。

- [スタート] メニューから [プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web Server Administration Program] の順に選択して Hyperion Enterprise Reporting 管理プログラムにアクセスし、[静的レポート/チャート] を選択します。
- 必要なアプリケーションにログオンします。
- [出力オプション] タブを選択します。
- [調査を含む] チェックボックスをオフにします。
- [HTML に保存] を選択します。

- 5 ブラウザから特定レポートの調査を無効にするには、URL リクエストの終わりに次のパラメータを入力します。

```
&DRILL=NO
```

この章の内容

展開について.....	101
展開の設定.....	103
展開の無効化.....	104

展開について

レポート内の項目を展開して詳細を表示することができます。例えば、主要勘定科目を展開してサブ勘定科目を表示することができます。展開はレポートの任意の行または列に設定できます。

展開は1つのサマリ行または列と、複数の詳細行または列から構成されます。サマリ行または列に展開が設定されていると、プラス記号 (+) がその行または列のラベルの横に表示されます。プラス記号 (+) をクリックすると展開が開き、マイナス記号 (-) をクリックすると展開が閉じます。

詳細行は、レポートの Hyperion Enterprise Reporting の設定に応じて、サマリ行の上または下に表示されます。詳細列はサマリ列の右側または左側に表示されます。データの視点は行や列を展開しても変わりません。

注： Hyperion Enterprise Reporting Web の静的複合レポートには展開を含めることはできません。Hyperion Enterprise Reporting の展開を含む複合レポートを Hyperion Enterprise Reporting Web で使用すると、展開を含まない複合レポートになります。

展開レポート

展開レポートでは、列や行を展開してその詳細を表示できます。展開を使用するには、Hyperion Enterprise Reporting でレポートの行および列に展開が定義され有効になっている必要があります。展開が定義されている行や列をクリックすると、その行または列の詳細なレベルが表示されます。次の図に展開を定義したサンプルレポートを示します。

図 8 展開を定義したサンプルレポート

	Corporate HQ	Americas	Europe	Asia
Sales	6,334,870	18,559	6,306,527	9,784
PSALES - Golf	2,751,060	7,664	2,736,322	7,074
PSALES.GOLF - Shoes	134,057	449	133,264	344
PSALES.GOLF - Balls	161,971	528	161,026	417
PSALES.GOLF - Equipment	1,545,136	4,206	1,536,956	3,974
PSALES.GOLF - Apparel	665,356	1,775	661,873	1,708
PSALES.GOLF - Novelties	244,540	706	243,203	631
PSALES - Tennis	1,393,931	4,475	1,386,746	2,710

図 8 で Americas、Europe、または Asia の列を選択すると、その列の展開に指定された行が追加表示されます。PSales-Tennis の行を選択すると、その行の展開に指定された行が追加表示されます。

ヒント： ブラウザで展開を表示する場合は、ブラウザの「戻る」ボタンを使って展開する前のレポート画面に戻ることができます。この機能を使用すると、展開した行や列を 1 つずつすべて閉じるより簡単な場合があります。すべて展開したレポートにブックマークを付けて、その状態のレポートを簡単に表示することもできます。展開の使用方法について詳しくは、『Hyperion Enterprise Reporting Web ユーザガイド』を参照してください。

Hyperion Enterprise Reporting での展開の定義については、『Hyperion Enterprise Reporting ユーザガイド』を参照してください。

ケーススタディ - Hyperion Enterprise Reporting Web での展開の使用

Thompson Sporting Goods の経営者は、本社の総経費を追跡し、その子を展開して確認するために、Hyperion Enterprise Reporting Web の展開レポートを使用することを望んでいます。

システム管理者は、まず必要な情報を含んでいる既存のレポートを特定し、レポートを修正して展開を定義することから始めました。

展開を有効にするために、REPENG.INI ファイルをチェックする必要があります。REPENG.INI をテキストエディタで開いて次の設定が存在することを確認します。

[DEFAULT]

必要なレポートは CBPMAN2 という名前で、会社の Hyperion Enterprise システムの DEMO アプリケーションに含まれています。システム管理者はそのレポートを Hyperion Enterprise Reporting で開き、[展開の設定] と [展開機能の管理] コマンドを使用して各行に展開を定義します。これらのコマンドについて詳しくは、『Hyperion Enterprise Reporting ユーザガイド』を参照してください。

最後に、システム管理者は Hyperion Enterprise Reporting Web の Link Builder を使用してレポートへのリンクを作成します。システム管理者は管理プログラムから Link Builder にアクセスして、動的レポートへのリンクを作成することにしました。表示される指示に従って、DEMO アプリケーションにログオンし、CBPMAN2 レポートを追加します。

データをチャートではなくレポートとして表示するので、[リンクオプション] タブで [Display As Report (レポートとして表示)] を選択します。レポートのデータの視点はカスタマイズしないので、テンプレートにはデフォルトの REPORT.HTX を使用します。システム管理者は次にリンクページを Hyperion Enterprise Reporting Web サーバに保存して、Web ブラウザで作成されたページをテストします。これで、ユーザはブラウザでレポートを表示して、詳細データを確認するために行を展開したり折りたたんだりできます。

展開の設定

Hyperion Enterprise Reporting では、展開を設定できます。展開を設定するには、最初に展開レポートを作成する必要があります。展開レポートとは、展開したい行と列を含んでいるレポートです。次に Hyperion Enterprise Reporting を使用して、そのレポートに展開を定義します。レポートの展開を定義するには、展開を可能にする行と列を選択し、ユーザがいずれかの行または列の展開を選択したときに使われる展開を指定します。Hyperion Enterprise Reporting での展開の定義については、『Hyperion Enterprise Reporting ユーザガイド』を参照してください。

注： Hyperion Enterprise Reporting Web では、Hyperion Enterprise Reporting のカスタム展開のみがサポートされています。自動展開はサポートされていません。

静的レポートとパッケージの展開レベルの設定

Hyperion Enterprise Reporting では、複数の展開レベルを定義できます。例えば、レポートの 2007 列を展開した場合に、2007 年度の 4 四半期を示す 4 つの新しい列を表示できます。また、Q3 列を展開した場合に、7 月、8 月、9 月を示す新しい列を表示できます（ここでは会計年度ではなく暦年とします）。

静的レポートとパッケージに対して展開レベルを設定するには、以下の 2 つの方法があります。

- システム全体の展開レベルを設定するには、SPIDER.INI ファイルにエントリを追加します。

- 特定レポートのレベルを設定するには、管理プログラムの [Static Reports and Books (静的レポートとパッケージ)] ダイアログボックスの設定を変更します。

注： 展開レベルを 0 に設定すると、展開が無効になります。展開レベルを -1 に設定すると、展開レベルが無限になります。これにより、多数の展開ファイルが作成される可能性があります。

管理プログラムを使用した展開レベルの設定

Hyperion Enterprise Reporting Web 管理プログラムのデフォルトでは、[展開を含む] チェックボックスをオンにした状態で静的レポートを作成すると、最大 4 の展開レベルの HTML ファイルが作成されます。Hyperion Enterprise Reporting Web に含める展開レベルを調整することができます。

- 管理プログラムを使用して静的レポートやパッケージの展開レベルを設定するには、次の手順に従います。
- 1 [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択して管理プログラムにアクセスします。
- 2 静的レポートとチャートの展開レベルを設定するには [静的レポート/チャート] を、パッケージの展開レベルを設定するには [静的パッケージ] をそれぞれ選択します。
- 3 必要なアプリケーションにログオンします。
- 4 [出力オプション] タブを選択します。
- 5 [展開を含む] チェックボックスをオンにします。
- 6 [レベル数] 編集ボックスに、含める展開レベル数を指定します。
- 7 [HTML に保存] を選択します。

展開の無効化

展開を使用すると、チャートの行または列に関する詳細情報を表示できます。展開を使用する Hyperion Solutions レポートの Web ページを作成すると、システムのオーバーヘッドが増大し、パフォーマンスが低下することがあります。Hyperion Enterprise Reporting Web で展開を使用しない場合は、この機能を無効にすることができます。

- 展開を無効にするには、次の操作を行います。
- 1 動的レポートの展開を無効にするには、spider.ini ファイルに次のテキストを入力します。
[OPTIONS]
expand=no
- 2 静的レポート、チャートおよびパッケージの展開を無効にするには、spider.ini ファイルに次のテキストを入力します。

[ADMIN] maxexpand=0

- 3 特定アプリケーションの静的パッケージの展開を無効にするには、次の操作を行います。
 - [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択して管理プログラムにアクセスし、[静的パッケージ] を選択します。
 - 必要なアプリケーションにログオンします。
 - [出力オプション] タブを選択します。
 - [展開を含む] チェックボックスをオフにします。
 - [HTML に保存] を選択します。
- 4 特定アプリケーションの静的レポートの展開を無効にするには、管理プログラムで次の操作を行います。
 - [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択して管理プログラムにアクセスし、[静的レポート/チャート] を選択します。
 - 必要なアプリケーションにログオンします。
 - [出力オプション] タブを選択します。
 - [展開を含む] チェックボックスをオフにします。
 - [HTML に保存] を選択します。
- 5 ブラウザから特定レポートの展開を無効にするには、URL リクエストの終わりに次のパラメータを入力します。

&EXPAND=NO

この章の内容

データの視点.....	107
データの視点バーのカスタマイズ.....	108

データの視点

Hyperion Enterprise Reporting Web のレポートまたはチャートは、Hyperion Enterprise アプリケーションの財務データを特定のデータの視点から捕らえたものです。レポートまたはチャートのデータの視点は、画面上部のデータの視点バーに表示されます。データの視点バーには、アプリケーションのデータの視点の各ディメンションを示すボタンが表示されます。ディメンションは要素またはキーとも呼ばれます。次の図に、Hyperion Enterprise アプリケーションのレポートのデータの視点バーを示します。

図9 レポートのデータの視点バー

Point of View: **INDIA** **ACTUAL** **DEC 99** **M.YTD** **SALESEE**

データの視点バーを使用して、アプリケーションのデータの視点を変更できます。例えば、データ種別が Actual、エンティティが USA のデータを示す損益計算書レポートにアクセスするとします。データの視点バーを使用して、データ種別が Budget、エンティティが Canada の視点に変更することができます。

さらに、データの視点の変更時にそのディメンションでフィルタすることもできます。例えば、エンティティの視点をフィルタして、親エンティティのみを表示することができます。

動的レポートには、必ずデータの視点バーが表示されます。静的レポートは1つのデータの視点に関して作成されているもので、データの視点バーは表示されません。パッケージの一部として作成された静的レポートの場合は、示されるデータの視点オプションが限られています。

デフォルトのデータの視点バーではボタンが表示され、ユーザはボタンをクリックしてデータの視点を変更します。ドロップダウンリストを使用してデータの視点を変更するように設定することもできます。ボタンの代わりにドロップダウンリストを表示するには、次の項で説明するカスタム変数を使用してデータの視点バーをカスタマイズします。

データの視点バーのカスタマイズ

動的レポートやチャートに標準のデータの視点バーを表示するだけでなく、Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションテンプレートで次のカスタム変数を使用してデータの視点バーをカスタマイズできます。

- @SMARTPOV
- @POVDROPBAR
- @POVDROPDOWN
- @EVALUATE
- @QUERY

次の表に、各変数を使用してデータの視点をどのようにカスタマイズするかを示します。

表 6 データの視点のカスタム変数

カスタム変数	説明
@SMARTPOV	ディメンションメンバを変更するためのドロップダウンリストがあるデータの視点バーを追加します。変更内容を適用する [実行] ボタンも表示されます。指定されたアプリケーションのデータの視点ディメンションがすべて表示されます。この変数は設定と管理が容易ですが、あまりカスタマイズできません。
@POVDROPBAR	ディメンションメンバを変更するためのドロップダウンリストがあるデータの視点バーを追加します。変更内容を適用する [実行] ボタンも表示されます。表示するディメンションとそのメンバを指定できます。
@POVDROPDOWN	ディメンションメンバを変更するためのドロップダウンリストを追加します。表示するディメンションを指定できます。@QUERY とともに使用して FORM タグ要素をデータの視点バーに追加します。
@EVALUATE	ディメンションの値を列挙します。この変数を使用してリストボックスまたはドロップダウンリストを作成できます。この変数を使用すると設定と管理に労力を必要としますが、大幅にカスタマイズできます。
@QUERY	現在の表示を要求した URL を再度送信するための form または HREF タグを作成します。

@SMARTPOV

@SMARTPOV カスタム変数を使用して、Web ページに、ディメンションメンバを変更するためのドロップダウンリストがあるデータの視点バーを表示します。ユーザは、データの視点ディメンションを変更するときに、そのドロップダウンリストからメンバを選択します。@SMARTPOV を使用すると、データの視点のすべてのディメンションが表示されます。データの視点バーに含めるディメンションを指定することはできません。

テンプレートに@SMARTPOV カスタム変数を設定すると、そのテンプレートを使用するページにスマートなデータの視点バーが追加されます。@SMARTPOV 変数によって作成されるデータの視点バーは HTML フォームであり、変数に渡される各ディメンションのドロップダウンリストと、変更を適用するための [実行] ボタンが含まれます。@SMARTPOV はドロップダウンリストに各ディメンションメ

ンバを表示するために必要な情報をディメンションメンバに追加します。
@SMARTPOV が呼び出されたときに使用された現在のクエリが [実行] ボタンのターゲットアクションとして適用されます。

注： SPIDER.INI に smarties オプションを使用すると、すべてのデータの視点バーをスマートなデータの視点バーに置き換えることができます。詳しくは、『Hyperion Enterprise Reporting Web テクニカルリファレンスガイド』を参照してください。

構文

@SMARTPOV 変数には次の構文を使用します。

%@SMARTPOV(System, Application)%

変数	説明
----	----

System	使用しているオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェア。デフォルトは、現在実行されている SPIDER.DLL 関数に指定されている製品です。
--------	---

Application	使用している Hyperion Enterprise アプリケーションの名前。
-------------	---

デフォルトは次のいずれかです。

- Hyperion Enterprise を使用している場合は、現在実行されている SPIDER.DLL 関数によって指定されるアプリケーション
- Essbase を使用している場合は、Essbase データベースの名前。

System パラメータと Application パラメータはオプションです。これらのパラメータを指定しない場合は次の構文のどちらかを使用します。

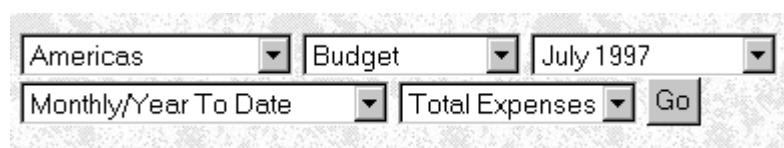
- %@SMARTPOV()%
- %SMARTPOV%

戻り値

@SMARTPOV 変数は HTML フォームを返します。その HTML フォームには、指定したアプリケーションのすべてのデータの視点ディメンションを含むドロップダウンリストと、新しく選択した値を送信して Web ページを更新する [実行] ボタンが含まれます。

次の図に、@SMARTPOV 変数によって挿入された、カスタマイズ後のデータの視点バーの例を示します。

図 10 @SMARTPOV 変数によって作成されたデータの視点バー

The image shows a web-based data perspective bar. It consists of two rows of dropdown menus. The first row contains three dropdowns: 'Americas', 'Budget', and 'July 1997'. The second row contains two dropdowns: 'Monthly/Year To Date' and 'Total Expenses', followed by a 'Go' button. All dropdowns have a small downward arrow on the right side.

通常は次のように、System パラメータを%SYSTEM%に、Application パラメータを%APPLICATION%に設定します。

```
%@SMARTPOV(%SYSTEM%,%APPLICATION%)%
```

これで、現在実行されている SPIDER.DLL 関数に指定されているオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアとアプリケーション名が正しく代入されます。

例

例えば、Hyperion Enterprise Reporting Web に用意されている REPORT.HTX テンプレートをカスタマイズして、そのテンプレートを使用するすべての Web ページに、ディメンションのドロップダウンリストを含むカスタマイズしたデータの視点バーが表示されるようにできます。それには、テンプレートで、標準のデータの視点バーを定義している HTML コードを@SMARTPOV 変数で置き換えます。

次に、標準のデータの視点バーを定義する REPORT.HTX の HTML コードを示します。

```
<TABLE><TR ALIGN=TOP><TD>
<FORM action="/hspider/spider.dll?editpov" method = POST>
<INPUT TYPE="hidden" NAME="sys" VALUE="%SYSTEM%">
<INPUT TYPE="hidden" NAME="app" VALUE="%APPLICATION%">
<INPUT TYPE="hidden" NAME="prevquery" VALUE="%PREVQUERY%">
<INPUT TYPE="hidden" NAME="tfile" VALUE="povedit.htx">
%POVBAR%
</FORM>
</TR>
</TABLE>
```

上の HTML コードを@SMARTPOV 変数で置き換えます。

```
%@SMARTPOV(%SYSTEM%,%APPLICATION%)%
```

Hyperion Enterprise の例

次に、Hyperion Enterprise DEMO アプリケーションでカスタム POV バーを挿入する例を示します。

```
%@SMARTPOV(Enterprise,Demo)%
```

Essbase の例

次の例では、CORP1 Essbase サーバ上の Essbase DEMO アプリケーションの一部として、Basic データベース用のカスタム POV バーが挿入されます。

```
%@SMARTPOV(Essbase-CORP1\Demo,Basic)%
```

エラー処理

これらのカスタム変数でエラーが発生した場合は、その HTML コードを見てエラーの種類を調べることができます。以下はエラーのリストです。

- 存在しないテンプレートを使用した場合は、エラーメッセージとそのテンプレートが HTML コードに記載されます。

- 適切でない値を使用した場合は、エラーメッセージとその原因となったステートメントが HTML コードに記載されます。
- @SMARTPOV 変数で使えないデータの視点を指定した場合は、[POV Edit All Bitmap (POV すべてのビットマップを編集)] が追加されます。
- エラーが 25 以上発生した場合、HTML コードにエラーメッセージが記載され、すべてのデータの視点のドロップダウンリストが空になります。

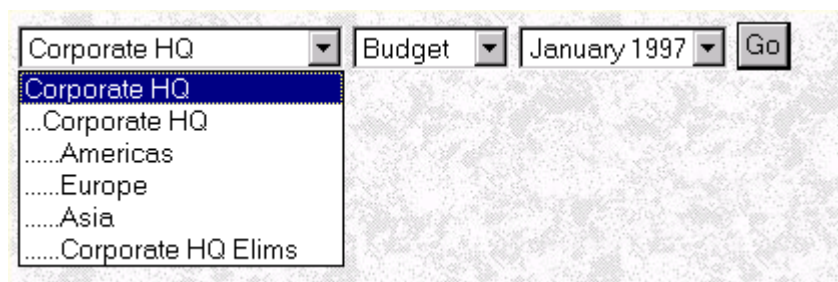
@POVDROPBAR

@POVDROPBAR カスタム変数は、Web ページに、特定のディメンションメンバを変更するためのドロップダウンリストがあるデータの視点バーを表示するときに使用します。ユーザは、データの視点ディメンションのメンバを変更するときに、限定された範囲のディメンションのドロップダウンリストからメンバを選択します。@POVDROPBAR を使うと、データの視点バーに含めるディメンションとそのメンバを指定できます。

@POVDROPBAR 変数によって作成されるデータの視点バーは HTML フォームであり、変数に渡される各ディメンションのドロップダウンリストと、変更を適用するための [実行] ボタンが含まれます。@POVDROPBAR はディメンションメンバをドロップダウンリストとして表示するために必要な情報を各ディメンションメンバに追加します。@POVDROPBAR が呼び出されたときに使用された現在のクエリが [実行] ボタンのターゲットアクションとして適用されます。

次の図に、@POVDROPBAR 変数を使用して挿入された、カスタマイズ後のデータの視点バーの例を示します。

図 11 @POVDROPBAR 変数によって作成されたデータの視点バー



構文

@POVDROPBAR 変数には次の構文を使用します。

```
@POVDROPBAR(System,Application,Dimension, [DimValues]{,Dimension2,
[DimValues2]{,....DimensionX, [DimValuesX]})
```

変数 説明

System	<p>使用しているオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェア。デフォルトは、現在実行されている SPIDER.DLL 関数に指定されている製品です。</p> <p>Essbase を使用している場合は、System パラメータを次の構文に置き換えます。 Essbase-servername\Essbase application name</p>
--------	--

変数	説明
	ここで、Essbase-servername は、REPENG.INI ファイルの Essbase ドライバ名と Essbase サーバ名をハイフンでつないだものです。Essbase application name は、Hyperion Essbase アプリケーションの名前です。
Application	<p>使用しているオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェア。デフォルトは、現在実行されている SPIDER.DLL 関数に指定されている製品です。</p> <p>Essbase を使用している場合、このパラメータは Essbase データベースの名前です。</p>
Dimension N	ドロップダウンリストにメンバとともに表示する最初のディメンション
DimValues N	<p>Dimension パラメータの値。これには、必要に応じて次の項目を含めることができます。</p> <p>[SCRIPT: ReportScript] ここで、Report Script は Hyperion Enterprise Reporting スクリプトの有効な行です (Essbase の FIELD キーを参照しているものは使用できません)。これはオプションです。</p> <p>[LIST: DimensionName,+ -FilterName]</p> <p>ここで、DimensionName は表示するディメンションの ID、+ -FilterName はフィルタを設定するかどうかを示します。表示するメンバの数を限定するか (-)、またはすべて表示するか (+) を指定します。</p> <p>[TEXT: AnyText]</p> <p>ここで、Any Text は指定したディメンションのドロップダウンリストに含めるスペースやテキスト行の組み合わせです。</p>

注： 各ディメンションに複数の値文字列を渡すことができます。
@POVDROPDOWN 変数はすべての文字列を同じドロップダウンリストに追加します。この機能を利用して、複数のレポートスクリプトを同じドロップダウンリストに含めることができます。例えば、Hyperion Enterprise のエンティティドロップダウンリストに、現在の値とその親および子の値を含めることができます。さらに、それらの項目が階層表示されるように、異なる見出し"HEAD"を指定することができます。どの種類の値でも、HEAD セクションはオプションです。TEXT では無視されます。HEAD セクションを省略すると、@LAB が適用されます。LIST では@LAB と@DES しか使用できません。選択されている項目として[DIM @CUR HEAD "@DES"]が自動的にドロップダウンリストに追加されます。

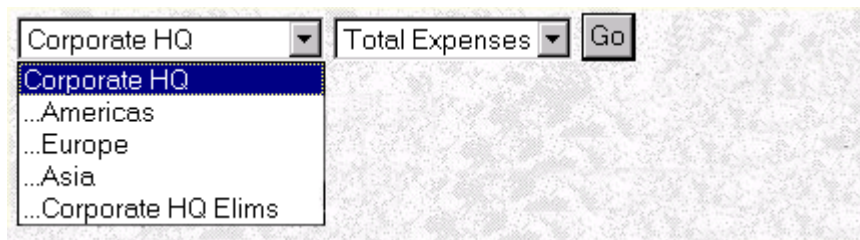
例

次の例では、2つのディメンション（エンティティと勘定科目）を表示するカスタム POV バーが Hyperion Enterprise DEMO アプリケーション用に作成されます。その Web ページでユーザが [実行] ボタンをクリックすると、HTML ページを表示するアクションと同じアクションが実行され、選択されたデータの視点ディメンションがパラメータとして渡されます。

```
%@POVDROPBAR(Enterprise, Demo, ENT, [ENT @DEP HEAD "...@DES"] [ENT @PAR HEAD "PARENT: @DES"], ACC, [LIST: ACC] [TEXT:-----] [ACC @SUB HEAD "...@DES"])%
```

次の図に、上の例で表示されるデータの視点バーを示します。

図 12 @POVDROPBAR 変数によって作成された、2つのディメンションのドロップダウンリストを持つデータの視点バー



@POVDROPDOWN

@POVDROPDOWN カスタム変数は、Web ページに、特定のディメンションメンバを変更するためのドロップダウンリストがあるデータの視点バーを表示するときに使用します。ユーザは、データの視点ディメンションのメンバを変更するときに、限定された範囲のディメンションのドロップダウンリストからメンバを選択します。@POVDROPDOWN を使うと、データの視点バーに表示するディメンションとそのメンバを指定できます。@QUERY 変数を使用するときも、@POVDROPDOWN では FORM HTML タグをカスタマイズできます。例えば、@QUERY で@POVDROPDOWN を使用すると、カスタム POV バーの [実行] ボタンのラベルを変更できます。

@POVDROPDOWN 変数によって作成されるデータの視点バーは HTML フォームであり、変数に渡される各ディメンションのドロップダウンリストと、変更を適用するための [実行] ボタンが含まれます。

PovDropDown 関数を使うと、フォームに HTML ドロップダウンリストを挿入するときに柔軟にカスタマイズできます。この関数は DimValues で指定された値を含む HTML ドロップダウンリストを作成します。リストボックスの名前には指定したディメンション名が適用され、値の名前にはディメンション値の短い形式の名前が適用されます。表示形式は DimValues パラメータ内の見出しの指定に従って定義されます。

構文

@POVDROPDOWN 変数には次の構文を使用します。

@POVDROPDOWN(System, Application, Dimension, [DimValues])

変数	説明
System	<p>使用しているオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェア。デフォルトは、現在実行されている SPIDER.DLL 関数に指定されている製品です。</p> <p>Essbase を使用している場合は、System パラメータを次の構文に置き換えます。 Essbase-servername\Essbase application name</p> <p>ここで、Essbase-servername は、REPENG.INI ファイルの Essbase ドライバ名と Essbase サーバ名をハイフンでつないだものです。Essbase application name は、Essbase アプリケーションの名前です。</p>
Application	<p>使用している Hyperion 製品の名前。デフォルトは、現在実行されている SPIDER.DLL 関数に指定されている製品です。</p>

変数 説明

Essbase を使用している場合、このパラメータは Essbase データベースの名前です。

Dimension N ドロップダウンリストにメンバとともに表示する最初のディメンション

DimValues N Dimension パラメータの値。これには、必要に応じて次の項目を含めることができます。

[SCRIPT: ReportScript] ここで、Report Script は Hyperion Enterprise Reporting スクリプトの有効な行です（Essbase の FIELD キーを参照しているものは使用できません）。これはオプションです。

[LIST: DimensionName,+|-FilterName]

ここで、DimensionName は表示するディメンションの ID、+|-FilterName はフィルタを設定するかどうかを示します。表示するメンバの数を限定するか (-)、またはすべて表示するか (+) を指定します。

[TEXT: AnyText]

ここで、Any Text は指定したディメンションのドロップダウンリストに含めるスペースやテキスト行の組み合わせです。

注： 各ディメンションに複数の値文字列を渡すことができます。
@POVDROPDOWN 変数はすべての文字列を同じドロップダウンリストに追加します。この機能を利用して、複数のレポートスクリプトを同じドロップダウンリストに含めることができます。例えば、Hyperion Enterprise のエンティティドロップダウンリストに、現在の値とその親および子の値を含めることができます。さらに、それらの項目が階層表示されるように、異なる見出し"HEAD"を指定することができます。どの種類の値でも、HEAD セクションはオプションです。TEXT では無視されます。HEAD セクションを省略すると、@LAB が適用されます。LIST では@LAB と@DES しか使用できません。選択されている項目として[DIM @CUR HEAD "@DES"]が自動的にドロップダウンリストに追加されます。

例 1 - @POVDROPDOWN

次の例では、@POVDROPDOWN 変数を使ってエンティティディメンション用に 1 つの HTML ドロップダウンリストを作成します。この例では、HTML フォームとフォームアクションは自動的に作成されません。

```
%@POVDROPDOWN(Enterprise, Demo, ENT, [ENT @DEP HEAD "...@DES"] [ENT @PAR HEAD "PARENT: @DES"])%
```

例 2 - @POVDROPDOWN と@QUERY

次の Essbase の例では、@POVDROPDOWN 変数と@QUERY 変数を使ってカスタム POV バーを作成します。この例では、NAMES（組織単位）、TIME（時刻）、および CATEGORY（データ種別）ディメンションのドロップダウンリストを含む POV バーが作成されます。組織単位のドロップダウンリストには、現在のディメンションメンバとその親および子のメンバが表示されます。時刻のドロップダウンリストには、現在のディメンションメンバとその親、兄弟、子のメンバが表示されます。データ種別のドロップダウンリストには、ディメンションのハードコード化

された値が表示されます。この例では、変更内容を送信するための [実行] ボタンも表示されます。

```
<FORM %@QUERY (POST, -POV) %
<!-- ドロップダウンには必ず現在の値が表示されます。現在の値は1番上に選択された状態で表示されます。従って、@CURまたは@SIBをPOVDROPDOWN変数で使用すると、現在の値がドロップダウンに2度表示されます。-->
<!-- この例ではすべてHEAD "@DES"が使用されています。DESはメンバの説明です。短い形式の名前を表示するにはHEAD "@LAB" (LABはラベル) を使用します。インデントを表示するには点 (...) を使用します。-->
<!-- この例は、NAMES (組織単位)、TIME (時刻)、CATEGORY (データ種別) ディメンションを持つEssbaseアプリケーションに基づいています。-->
<!-- PAR (親)、CUR (現在の値)、CHIL (子) が表示されます。 -->
%@POVDROPDOWN(%SYSTEM%, %APPLICATION%, NAMES, [NAMES @PAR HEAD "@DES"
[NAMES @CUR HEAD "...@DES"] [NAMES @CHL HEAD ".....@DES"]])%
<!-- PAR (親)、SIB (兄弟-現在の値も含めて)、CHIL (子) を表示します。 -->
%@POVDROPDOWN(%SYSTEM%, %APPLICATION%, TIME, [TIME @PAR HEAD "@DES"
[TIME @SIB HEAD "...@DES"] [TIME @CHL HEAD ".....@DES"]])%
<!-- ハードコード化された値を表示します。 -->
%@POVDROPDOWN(%SYSTEM%, %APPLICATION%, CATEGORY, [CATEGORY "ACTUAL",
"BUDGET", "FORECAST"])%
<Input type="Submit" Value="Go">
</FORM>
```

@EVALUATE

@EVALUATE カスタム変数を使うと、カスタム POV バーを作成するときに最も柔軟にカスタマイズできますが、自動的に生成される HTML コードは最少になります。@EVALUATE は、レポートスクリプトの評価やフィルタの値に基づいた POV ディメンションメンバの列挙に使用できます。

@EVALUATE 変数は結果の値に HTML コードを追加しませんが、オプションで指定したテンプレートに値を渡すことができます。テンプレートを指定した場合は、すべての値が連結されます。テンプレートを指定しない場合は、値が改行文字 (\n) で区切られます。

構文

@EVALUATE 変数には次の構文を使用します。

@Evaluate(System,Application,DimValues{, Template})

変数	説明
System	使用しているオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェア。 Essbase を使用している場合は、System パラメータを次の構文に置き換えます。 Essbase-servername\Essbase application name ここで、Essbase-servername は、REPENG.INI ファイルの Essbase ドライバ名と Essbase サーバ名をハイフンでつないだものです。Essbase application name は、Essbase アプリケーションの名前です。
Application	使用しているオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェア。Essbase を使用している場合はデータベース名を指定します。

変数 説明

Essbase を使用している場合、このパラメータは Essbase データベースの名前です。

DimValues Dimension パラメータの値。これには、必要に応じて次の項目を含めることができます。

[SCRIPT: ReportScript] ここで、Report Script は Hyperion Enterprise Reporting スクリプトの有効な行です (Essbase の FIELD キーを参照しているものは使用できません)。これはオプションです。

[LIST: DimensionName,+|-FilterName]

ここで、DimensionName は表示するディメンションの ID、+|-FilterName はフィルタを設定するかどうかを示します。表示するメンバの数を限定するか (-)、またはすべて表示するか (+) を指定します。

[TEXT: AnyText]

ここで、Any Text は指定したディメンションのドロップダウンリストに含めるスペースやテキスト行の組み合わせです。

注： 他のカスタム POV 変数と違って、@EVALUATE はディメンションメンバの 1 セットしか渡すことができません。ディメンションメンバのセットを複数表示するには、2 番目のディメンションに別の@EVALUATE 変数を追加します。@EVALUATE は、デフォルトでは HTML コードを生成しません。HEAD セクションに HTML コードを入れて渡すか、テンプレートに HTML コードを指定できます。テンプレートには、各ディメンションメンバを代入するための%VALUE%パラメータを含める必要があります。

例 - @EVALUATE と@QUERY

この例では、変更内容を送信するためのボタンを追加しないで、データの視点を変更するドロップダウンリストを作成します。

```
<FORM %@QUERY(POST, -POV)%
<Select Name="ent"
onchange="form.submit();"
onmouseover="window.status='Choose an Entity'"
onmouseout="window.status=' ';">
%@EVALUATE(%SYSTEM%, %APPLICATION%,
[ENT @PAR HEAD "<Option value=@LAB>@DES"])%
%@EVALUATE(%SYSTEM%, %APPLICATION%,
[ENT @CUR HEAD "<Option Selected value=@LAB>...@DES"])%
%@EVALUATE(%SYSTEM%, %APPLICATION%,
[ENT @DEP HEAD "<Option value=@LAB>.....@DES"])%
</Select>
<Select Name="cat"
onchange="form.submit();"
onmouseover=
"window.status='Choose a Category'"
onmouseout="window.status=' ';">
%@EVALUATE(%SYSTEM%, %APPLICATION%,
[CAT @CUR HEAD "<Option Selected value=@LAB>@DES"])%
%@EVALUATE(%SYSTEM%, %APPLICATION%,
[CAT "ACTUAL", "BUDGET", "FCST", "LASTYR" HEAD "<Option
value=@LAB>.....@DES"])%
```

```

</Select>
<Select Name="dat"
onchange="form.submit();"
onmouseover="window.status='Choose a Period'"
onmouseout="window.status='';">
%%EVALUATE(%SYSTEM%, %APPLICATION%,
[DAT @RNG(@START, @CUR-1) HEAD "<Option value=@LAB>@DES"])%
%%EVALUATE(%SYSTEM%, %APPLICATION%,
[DAT @CUR HEAD "<Option selected value=@LAB>@DES"])%
%%EVALUATE(%SYSTEM%, %APPLICATION%,
[DAT @RNG(@CUR+1, @END) HEAD "<Option value=@LAB>@DES"])%
</Select>
<!-- 次の行はJavaScriptなしのブラウザ用です -->
<noscript><Input type="Submit" Value="Go"></noscript>
</FORM>

```

Essbase の例 - @EVALUATE と@QUERY

次の例は、Essbase Sample/Demo アプリケーションに該当します。

注： この例を利用するには、最初に eval.htx という名前のテキストファイルを作成する必要があります。このファイルには次の行を含めます。<option value=%VALUE%>%VALUE%

```

<FORM %%QUERY(POST, -POV)%
<Select Name="MARKET"
onchange="form.submit();"
onmouseover="window.status='Choose an Entity'"
onmouseout="window.status='';">
%%EVALUATE(%SYSTEM%, %APPLICATION%,
[MARKET @PAR HEAD "<Option value=@LAB>@DES"])%
%%EVALUATE(%SYSTEM%, %APPLICATION%,
[MARKET @CUR HEAD "<Option Selected value=@LAB>...@DES"])%
%%EVALUATE(%SYSTEM%, %APPLICATION%,
[MARKET @DEP HEAD "<Option value=@LAB>.....@DES"])%
</Select>
<Select Name="SCENARIO"
onchange="form.submit();"
onmouseover="window.status='Choose a Category'"
onmouseout="window.status='';">
%%EVALUATE(%SYSTEM%, %APPLICATION%,
[SCENARIO @CUR HEAD "<Option Selected value=@LAB>@DES"])%
%%EVALUATE(%SYSTEM%, %APPLICATION%,
[SCENARIO "Scenario","Actual","Budget","Variance"], eval.htx)%
</Select>
<Select Name="YEAR"
onchange="form.submit();"
onmouseover="window.status='Choose a Period'"
onmouseout="window.status='';">
%%EVALUATE(%SYSTEM%, %APPLICATION%,
[YEAR @PAR HEAD "<Option value=@LAB>@DES"])%
%%EVALUATE(%SYSTEM%, %APPLICATION%,
[YEAR @SLA HEAD "<Option value=@LAB>...@DES"])%
%%EVALUATE(%SYSTEM%, %APPLICATION%,

```

```
[YEAR @CUR HEAD "<Option Selected value=@LAB>...@DES" )]%
%@EVALUATE(%SYSTEM%, %APPLICATION%,
[YEAR @DEP HEAD "<Option value=@LAB>.....@DES" )]%
%@EVALUATE(%SYSTEM%, %APPLICATION%,
[YEAR @SRA HEAD "<Option value=@LAB>...@DES" )]%
</Select>
<!-- 次の行はJavaScriptなしのブラウザ用です -->
<noscript><Input type="Submit" Value="Go"></noscript>
</FORM>
```

@QUERY

@QUERY 変数は、現在の Web ページの作成に使用された SPIDER.DLL 関数についての情報を抽出して表示します。@QUERY を使うと、Form アクションを作成して、そのアクションに渡す初期パラメータを前の SPIDER.DLL 要求に基づいて設定できます。パラメータは左から右へ評価されます。

構文

@QUERY 変数には次の構文を使用します。

@QUERY(GET|POST, {+-Keyword1}{,+-Keywordn}{,+-Parameter1}{,+-ParameterN}):

変数 説明

GET|POST: @QUERY 変数による要求の種類。GET 要求または POST 要求を使用します。戻り値は適切に書式設定されます。

アクション:

GET は現在の Web ページの作成に使用された SPIDER.DLL 関数を返します。

POST は HTML フォームのアクションの部分の返します。次にその例を示します。

```
action="/hspider/spider.dll?report" method = POST>
```

Keyword GET または POST 要求で追加または削除される値のセット。次のキーワードが有効です。

すべての値を含めるか、除外するかを指定します。-ALL を他のオプションを付けずに指定すると、変数が空の文字列で置き換えられます。POV により、POV のディメンション値であると判定されたすべてのパラメータが元の要求に対して追加または削除されます。

Parameter 戻り値に追加または除外するパラメータ名を指定します。

例

次の例では、現在要求されている SPIDER.DLL 関数を使った HTML フォームのアクションが作成されます。この@QUERY 変数では、SPIDER.DLL 要求に渡されたすべての必須パラメータとオプションパラメータが含まれ、POV 関係のすべてのパラメータと FCODE パラメータが除外されます。

```
<FORM %@QUERY (POST, -POV, -FCODE) %
%@POVDROPDOWN(Enterprise,Demo,ACC, [LIST: ACC] [TEXT:-----] [ACC @SUB
HEAD "...@DES" ])%
```

```
%@POVDROPDOWN(Enterprise,Demo,DAT, [LIST: DAT])%  
<INPUT TYPE="submit" VALUE="Go">  
</FORM>
```


この章の内容

動的一覧	121
動的一覧の生成	121
HTML ファイルを編集して動的一覧を追加する	121

動的一覧

Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションを使用すると、オラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェア、アプリケーション、レポートセットなどのドリル可能な一覧を生成して、オラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアから動的なレポートを生成できます。以下のような一覧を Web ページに追加できます。

- 製品一覧。Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションで使用するオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアをすべて一覧表示します。
- アプリケーション一覧。オラクル社の現在の Enterprise Performance Management ソフトウェアアプリケーションをすべて一覧表示します。
- レポートセット一覧。現在の Hyperion Solution 製品とアプリケーション内のレポートセットをすべて一覧表示します。
- レポート一覧。現在のレポートセット内のレポートをすべて一覧表示します。

動的一覧の生成

動的一覧を生成するには、HTML エディタを使用して、テンプレートまたは HTML ファイルに動的一覧へのリンクを手動で追加します。テンプレートまたは HTML ファイルに動的一覧へのリンクを手動で追加するときは、Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションのライブラリ関数を使用します。

エンドユーザは、Web ブラウザの URL にライブラリ関数呼び出しを入力して動的一覧を生成できます。

HTML ファイルを編集して動的一覧を追加する

Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションのライブラリ関数を使用すると、オラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェア、アプリケー

ション、レポートセットなどの一覧を生成して、オラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアから動的なレポートを生成できます。次の表でライブラリ関数について説明します。

表 7 ライブラリ関数

ライブラリ関数	出力
SYSLIST	Web サーバ上のオラクル社の Enterprise Performance Management の一覧を生成します。
APPLIST	指定した製品のアプリケーションの一覧を生成します。
SETLIST	指定した製品とアプリケーションのレポートセットの一覧を生成します。
REPSETLIST	指定した製品、アプリケーション、およびレポートセット内のレポートの一覧を生成します。

- HTML ファイルを編集して動的一覧を追加するには、<A HREF>タグ内に次のようなライブラリ関数呼び出しを含めます。

```
<A HREF="http://spider/HSPIDER/spider.dll?  
applist&sys=enterprise&tfile=apps.htx&htxrslst=reps.htx">
```

ライブラリ関数の構文については、次の項を参照してください。

SYSLIST（製品情報）

SYSLIST 関数は、Windows ディレクトリ内の repeng.ini ファイルで指定されているように、Web サーバにインストールされ Hyperion Enterprise Reporting からアクセスできるオラクル社の Enterprise Performance Management をすべて一覧にする Web ページを生成します。

製品一覧内の各製品はハイパーリンクとして表示されます。ユーザがページから製品へのリンクを選択すると、選択した製品のアプリケーションを一覧表示する Web ページが動的に生成されます。ユーザはアプリケーション一覧から、アプリケーションのレポートセットとレポートを一覧にするページへと、さらにドリルダウンできます。レポート一覧ページからは動的レポートを実行できます。

Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションでは、テンプレートファイルを使用して、SYSLIST で生成された Web ページの外観を定義します。SYSLIST で使用されるテンプレートファイルは SYSLIST.HTX です。テンプレートを変更するか、独自のユーザ定義テンプレートを作成できます。テンプレートについて詳しくは、[161 ページの「標準テンプレートの変更」](#)を参照してください。

構文

SYSLIST 関数には以下の構文を使用します。

```
http://Path/spider.dll?syslist[&frame=UseFrames][&tfile=Template1]  
[&htxapplist=Template2][&htxsetlist=Template3][&htxrslst=Template4]  
[&htxrep=Template5][&bitmap=UseBitmaps]
```

変数	説明
Path	サーバ名と SPIDER.DLL ファイルのパス。SPIDER.DLL は HSPIDER ディレクトリにあります。
UseFrames	レポートのデータの視点ボタンを別のフレームに表示する場合は Yes、レポートの本文に表示する場合は No。デフォルト値は Yes です。フレームをサポートしていないブラウザでチャートを表示するには、No を指定します。
Template1	システム一覧 Web ページに使用する HTML テンプレート。デフォルトは SYSLIST.HTX です。
Template2	アプリケーション一覧 Web ページに使用する HTML テンプレート。デフォルトは APPLIST.HTX です。
Template3	レポートセッター一覧 Web ページに使用する HTML テンプレート。デフォルトは SETLIST.HTX です。
Template4	レポート一覧 Web ページに使用する HTML テンプレート。デフォルトは REPLIST.HTX です。
Template5	ユーザがレポート一覧ページからレポートを選択したときに生成される動的レポートに使用する HTML テンプレート。デフォルトは FRAMES.HTX です。
UseBitmaps	ユーザがドリルダウンするレポート一覧のレポート名の前にレポートアイコンを表示する場合は Yes、表示しない場合は No。デフォルトは Yes です。

例

次の例で、製品一覧を動的に生成する方法を示します。

例 1：製品一覧の生成

この例では、Spider サーバ上の製品一覧を生成します。

```
<A HREF="http://spider/HSPIDER/spider.dll?syslist">
```

例 2：SYSLIST 関数でのユーザ定義テンプレートの使用

この例では、システム一覧ページのユーザ定義テンプレートとして SYS.HTX、アプリケーション一覧ページのユーザ定義テンプレートとして APPS.HTX を指定します。

```
<A HREF="http://spider/HSPIDER/spider.dll?
syslist&sys=enterprise&tfile=sys.htx&htxapplist=apps.htx">
```

APPLIST（アプリケーション一覧）

APPLIST 関数を使用すると、指定したシステムのすべてのアプリケーションを一覧表示する Web ページが生成されます。アプリケーション一覧ページの各アプリケーションはハイパーテキストリンクとして表示されます。リンクを選択すると、APPLIST 関数の最後のレベルに達するまで、次のレベルの情報が表示されます。

Essbase を使用している場合は、指定した製品に使用できるサーバの一覧が APPLIST 関数によって生成されます。サーバを選択すると、ログオンプロンプトが表示さ

れ、そのサーバで使用可能なアプリケーションの一覧がブラウザに表示されます。アプリケーションを選択すると、使用可能なデータベースの一覧が生成されます。

APPLIST 関数を使用して Essbase で初めてサーバにアクセスするときは、有効なユーザ ID とパスワードを入力する必要があります。

Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションでは、HTML テンプレートファイルを使用して、APPLIST で生成される Web ページの外観を定義できます。

APPLIST で使用されるテンプレートファイルは applist.htx です。テンプレートを変更するか、独自のユーザ定義テンプレートを作成できます。詳しくは、[161 ページの「標準テンプレートの変更」](#)を参照してください。

構文

APPLIST 関数には以下の構文を使用します。

```
http://Path/spider.dll?applist&[sys=]System[&frame=UseFrames][&tfil=Template1]
[&htxsetlist=Template2][&htxrslst=Template3][&htxrep=Template4]
[&bitmap=UseBitmaps]
```

変数	説明
Path	サーバ名と SPIDER.DLL ファイルのパス。SPIDER.DLL は HSPIDER ディレクトリにあります。
System	アプリケーション一覧を生成するオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアのラベル。製品のラベルは、Windows ディレクトリにある REPENG.INI ファイルの[DRIVERS32]セクションで定義されています。 Essbase 構文の詳細については、 128 ページの「Essbase の構文」 を参照してください。
UseFrames	レポートのデータの視点ボタンを別のフレームに表示する場合は Yes、レポートの本文に表示する場合は No。デフォルト値は Yes です。フレームをサポートしていないブラウザでチャートを表示するには、No を指定します。
Template1	アプリケーション一覧 Web ページに使用する HTML テンプレート。デフォルトは APPLIST.HTX です。
Template2	レポートセッター一覧 Web ページに使用する HTML テンプレート。デフォルトは SETLIST.HTX です。
Template3	レポート一覧 Web ページに使用する HTML テンプレート。デフォルトは REPLIST.HTX です。
Template4	ユーザがレポート一覧ページからレポートを選択したときに生成される動的レポートに使用する HTML テンプレート。デフォルトは FRAMES.HTX です。
UseBitmaps	ユーザがドリルダウンするレポート一覧のレポート名の前にレポートアイコンを表示する場合は Yes、表示しない場合は No。デフォルトは Yes です。

例

この例では、指定した製品のアプリケーション一覧を動的に生成する方法を示します。

例 1 : Hyperion Enterprise のアプリケーション一覧の生成

この例では、Spider サーバ上の Hyperion Enterprise のアプリケーション一覧を生成します。

```
<A HREF="http://spider/HSPIDER/spider.dll?applist&sys=enterprise">
```

例 2 : APPLIST 関数でのユーザ定義テンプレートの使用

この例では、アプリケーション一覧ページのカスタムテンプレートとして APPS.HTX を指定し、レポート一覧ページのカスタムテンプレートとして REPS.HTX を指定します。

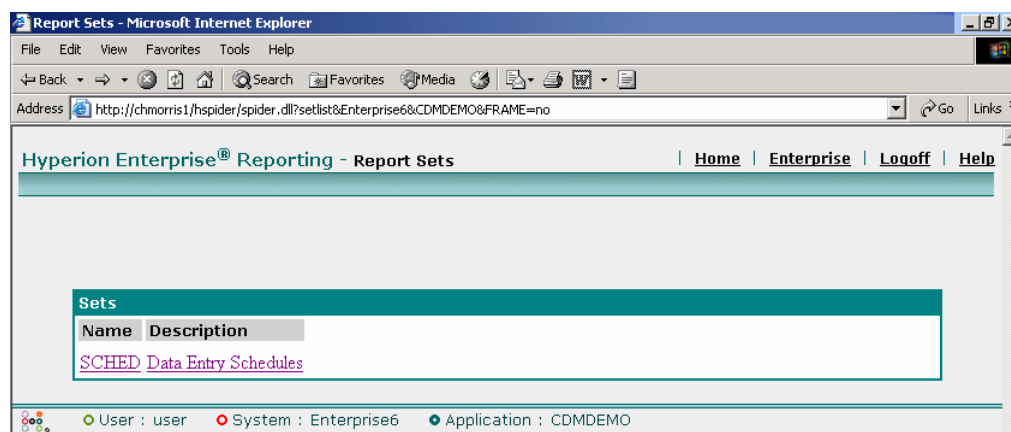
```
<A HREF="http://spider/HSPIDER/spider.dll?applist&sys=enterprise&tfile=apps.htx&htxrslst=reps.htx">
```

SETLIST (レポートセotto一覧)

SETLIST 関数は、指定した製品とアプリケーションのレポートセットをすべて一覧にする Web ページを生成します。レポートセotto一覧ページのレポートの各レポートセottoはハイパーテキストリンクとして表示されます。ユーザがこのページからレポートセottoへのリンクを選択すると、そのレポートセotto内のレポートを一覧表示する Web ページが動的に生成されます。ユーザはレポートセotto一覧ページから動的レポートを実行できます。

次の表に、SETLIST ライブラリ関数によって生成される典型的な Web ページを示します。

図 13 SETLIST で生成される Web ページ



Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションでは、HTML テンプレートファイルを使用して、SETLIST で生成される Web ページの外観を定義できます。SETLIST で使用されるテンプレートファイルは SETLIST.HTX です。テンプレートを変更するか、独自のユーザ定義テンプレートを作成できます。テンプレートについて詳しくは、161 ページの「標準テンプレートの変更」を参照してください。

構文

SETLIST 関数には以下の構文を使用します。

```
http://Path/spider.dll?setlist&[sys=]System&[app=]Application[&frame=UseFrames]
[&tfil=Template1][&htxrsList=Template2][&htxrep=Template3]
[&bitmap=UseBitmaps]
```

変数	説明
Path	サーバ名と SPIDER.DLL ファイルのパス。SPIDER.DLL は HSPIDER ディレクトリにあります。
System	レポートセットの一覧を生成するオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアのラベル。製品のラベルは、Windows ディレクトリにある REPENG.INI ファイルの[DRIVERS32]セクションで定義されています。 Essbase 構文の詳細については、 128 ページの「Essbase の構文」 を参照してください。
Application	レポートセotto一覧を生成するアプリケーションのラベル。これは、System 変数で指定した製品に含まれているアプリケーションのいずれかです。 Essbase 構文の詳細については、 128 ページの「Essbase の構文」 を参照してください。
UseFrames	レポートのデータの視点ボタンを別のフレームに表示する場合は Yes、レポートの本文に表示する場合は No。デフォルト値は Yes です。フレームをサポートしていないブラウザを使用する場合は、No を指定します。
Template1	レポートセotto一覧 Web ページに使用する HTML テンプレート。デフォルトは SETLIST.HTX です。
Template2	レポート一覧 Web ページに使用する HTML テンプレート。デフォルトは REPLIST.HTX です。
Template3	ユーザがレポート一覧ページからレポートを選択したときに生成される動的レポートに使用する HTML テンプレート。デフォルトは FRAMES.HTX です。
UseBitmaps	ユーザがドリルダウンするレポート一覧のレポート名の前にレポートアイコンを表示する場合は Yes、表示しない場合は No。デフォルトは Yes です。

例

この例は、指定したアプリケーションのレポートセotto一覧を動的に生成する方法を示します。

例 1 : Hyperion Enterprise DEMO アプリケーションのレポートセotto一覧の生成

この例では、Spider サーバ上の Hyperion Enterprise DEMO アプリケーションのレポートセotto一覧を生成します。

```
<A HREF="http://spider/HSPIDER/spider.dll?
setlist&sys=enterprise&app=demo">
```

例 2 : SETLIST 関数でのユーザ定義テンプレートの使用

この例では、セotto一覧ページのカスタムテンプレートとして SETS.HTX を指定し、レポート一覧ページのカスタムテンプレートとして REPS.HTX を指定します。

```
<A HREF="http://spider/HSPIDER/spider.dll?
setlist&sys=enterprise&tfile=sets.htx&htxrslst=reprs.htx">
```

REPSETLIST（レポート一覧）

REPSETLIST 関数は、指定した製品、アプリケーション、およびレポートセット内のレポートをすべて一覧にする Web ページを生成します。レポート一覧ページの各レポートはハイパーテキストリンクとして表示されます。ユーザがこのページからレポートへのリンクを選択すると、そのレポートを表示する Web ページが動的に生成されます。

Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションでは、HTML テンプレートファイルを使用して、REPSETLIST で生成される Web ページの外観を定義できます。REPLIST で使用されるテンプレートファイルは replist.htx です。テンプレートを変更するか、独自のユーザ定義テンプレートを作成できます。詳しくは、[161 ページの「標準テンプレートの変更」](#)を参照してください。

REPSETLIST 関数には以下の構文を使用します。

```
http://Path/spider.dll?
repsetlist&[sys=]System&[app=]Application&[set=]Set[&frame=UseFrames]
[&tfile=Template1][&htxrep=Template2][&bitmap=UseBitmaps]
```

変数	説明
Path	サーバ名と SPIDER.DLL ファイルのパス。Spider.dll は HSPIDER ディレクトリにあります。
System	レポート一覧を生成するオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアのラベル。製品のラベルは、Windows ディレクトリにある repeng.ini ファイルの [DRIVERS32] セクションで定義されています。 Essbase 構文の詳細については、 128 ページの「Essbase の構文」 を参照してください。
Application	レポート一覧を生成するアプリケーションのラベル。これは、System 変数で指定した製品に含まれているアプリケーションのいずれかです。 Essbase 構文の詳細については、 128 ページの「Essbase の構文」 を参照してください。
Set	レポート一覧を生成するレポートセットのラベル。これは、Application 変数で指定したアプリケーションに含まれているレポートセットのいずれかです。Set パラメータラベルを省略した場合は、パラメータリストの Application 変数のすぐ後に Set 変数を指定する必要があります。
UseFrames	レポートのデータの視点ボタンを別のフレームに表示する場合は Yes、レポートの本文に表示する場合は No。デフォルト値は Yes です。フレームをサポートしていないブラウザを使用する場合は、No を指定します。
Template1	レポート一覧 Web ページに使用する HTML テンプレート。デフォルトは REPLIST.HTX です。
Template2	ユーザがレポート一覧ページからレポートを選択したときに生成される動的レポートに使用する HTML テンプレート。デフォルトは FRAMES.HTX です。

変数	説明
----	----

UseBitmaps	ユーザがドリルダウンするレポート一覧のレポート名の前にレポートアイコンを表示する場合は Yes、表示しない場合は No。デフォルトは Yes です。
------------	--

Essbase の構文

Hyperion Enterprise Reporting Web を Essbase で使用している場合は、ライブラリ関数の使用に必要な構文が他のオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアとは異なります。

System は、ライブラリ関数でパラメータとして使用する場合は、Hyperion Enterprise などのオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアを指します。Essbase を使用していて、これらの状況に該当する場合は、System を次の構文に置き換えてください。

Essbase-servername\Essbase application name

変数	説明
----	----

Essbase-servername	REPENG.INI ファイル内の Essbase ドライバ名と、Essbase サーバ名をハイフンで区切ったもの
--------------------	---

Essbase application name	Essbase アプリケーションの名前
--------------------------	---------------------

Application をライブラリ関数構文でパラメータとして使用する場合は、Hyperion Enterprise アプリケーションなど、オラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアのアプリケーションを指します。Essbase を使用していて、これらの状況に該当する場合は、Application を Essbase データベースの名前に置き換えてください。

この章の内容

お気に入りページ	129
始める前に.....	130
お気に入りの設定	130
お気に入りページへのアクセス	131

お気に入りページ

Hyperion Enterprise Reporting Web のお気に入りを使用すると、ユーザごとに異なるリンクページを作成することも、それらを 1 つの URL で発行することもできます。お気に入りを使用して、以下の操作を行うことができます。

- 個人またはグループのお気に入りページを設定する。
- さまざまなユーザに複数のリンクページを設定して、それらを 1 つの URL で発行する。
- 頻繁に使用する動的レポートテンプレートやチャートをリンクまたは埋め込み項目として 1 ページに追加する。
- レポート、チャート、パッケージ、条件ベースのページ、Hyperion Enterprise Reporting 以外の URL へのリンクなどの項目をページに追加する。

注： リンクされていたり埋め込まれている動的レポートや動的チャートのデータの視点は、項目が追加されるときに修正されます。

お気に入りページを作成するには、Hyperion Enterprise Reporting の Web サイトウィザードまたはテンプレートを使用します。テンプレートを使用する場合は、メモ帳や他の HTML エディタで編集できます。

お気に入り HTML ファイルを作成し、そのファイルにネットワーク ID やネットワークグループ (tsmith.htm、analysts.htm など) の名前を付けます。個人のお気に入りページを作成していない場合は、代わりにグループのお気に入りページが表示されます。ユーザが複数のグループに属する場合は、Hyperion Enterprise Reporting Web 管理プログラムの [User Favorites (ユーザーお気に入り)] タブで設定した順に検出された最初の適切なグループの HTML ファイルが表示されます。

注： 個々のページやグループのページを作成しない場合は、EVERYONE.HTM ファイルが表示されます。順序が everyone.htm の後にあるグループのお気に入りファイルは常に表示されません。

始める前に

お気に入り機能を使用する前に、以下の作業を行う必要があります。

- お気に入り HTML ファイルを保存するサーバのアクセス権があることを確認します。
- 次の項で説明するお気に入りオプションを設定します。

お気に入りの設定

▶ お気に入りを設定するには、次の操作を行います。

- 1 [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択します。

注： このオプションを設定するには、管理プログラムを Web サーバから実行する必要があります。このオプションは、ワークステーションからは設定できません。

- 2 [オプション] を選択します。
- 3 [お気に入り] タブを選択します。
- 4 お気に入りの HTM ファイルを格納するディレクトリを選択します。

注： ディレクトリのパスを変更するには、[参照] ボタンを選択し、フォルダを選択してから [OK] を選択します。

- 5 関連付けられたユーザメンバ名の HTM ファイル (<user>.HTM) がない場合は、ユーザが属するグループのグループお気に入りファイルがリストに表示されている順序で検索されます。グループの順序を変更するには、上矢印と下矢印のボタンを使用します。

注： ユーザが複数のグループに属する場合は、リストの最初にあるグループのお気に入りファイルが表示されます。

- 6 グループおよびユーザの一覧にドメイングループを追加するには、[ドメイングループの追加] を選択し、グループを追加するドメインの名前を入力して [OK] を選択します。

注： グループの一覧にドメイングループを追加した後、お気に入りファイルが入っているディレクトリに、ドメイン名を使用してサブディレクトリを作成します。そのドメイン名のお気に入りファイルは、このサブディレクトリに格納されます。

- 7 ドメイングループを削除するには、[ドメイングループの削除] を選択し、削除するドメインの名前を入力し、[OK] をクリックします。

注： ドメイン内のすべてのグループが削除されます。

- 8 お気に入りページが他のページに組み込まれている場合に<HTML>、<HEAD>、および<BODY>タグが削除されないようにするには、[お気に入りをテンプレートに埋め込むときに余分な HTML タグを削除] チェックボックスをオフにします。

注： これらのタグは、Microsoft FrontPage や他のエディタでお気に入りファイルを作成および編集できるようにするために削除されます。このオプションをオフにすると、組み込まれたお気に入りページがブラウザで正確に表示されない場合があります。

- 9 [OK] をクリックして変更を保存します。

お気に入りページへのアクセス

ユーザは、管理者が設定したお気に入りページに複数の方法でアクセスできます。

- ▶ お気に入りページにアクセスするには、次のいずれかの操作を行います。
 - お気に入りの URL を Web サイトのリンクとして追加できます。
 - ユーザは URL に spider.dll 要求を入力するか、それをブックマークとして保存できます。
 - Hyperion Enterprise Reporting Web サイトウィザードには、生成された Web サイトの「ようこそ」ページとしてお気に入りページを含めるためのチェックボックスがあります。

この章の内容

テンプレート.....	133
サンプルテンプレートファイル	134
ケーススタディ - 標準テンプレートの変更	135
標準テンプレート	137
カスタム変数.....	157
標準テンプレートの変更.....	161
カスタムテンプレート.....	162
カスタムテンプレートの使用	165
Gallery テンプレート	166

テンプレート

テンプレートファイルの HTML 書式設定タグを変更することによって、レポートやチャートの Web ページの外観をカスタマイズすることができます。また、変数をテンプレートの別の場所に移動することもできます。

テンプレートは、Hyperion Enterprise Reporting Web で Web ページを作成するとき使用される HTML の書式ファイルです。テンプレートファイルには、HTML 書式設定タグと変数の 2 種類の情報が含まれています。HTML 書式設定タグは間隔、フォントサイズ、背景色などの Web ページの外観を制御します。変数はオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアアプリケーションからの情報を挿入する場所を指定します。

ユーザが動的なレポートやチャートを実行したり、管理者がレポートまたはパッケージを静的 HTML ファイルに変換したりすると、次の処理が行われます。

- オラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアアプリケーションからデータを取得します。
- HTML テンプレートファイルが開きます。
- テンプレートファイルの変数をオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアアプリケーションから取得したデータで置き換えた Web ページが作成されます。
- 動的レポートやチャート用に Web サーバからユーザのブラウザに Web ページが送信されるか、または静的レポート、チャート、パッケージ用に Web サーバ上に HTML ファイルとして Web ページが保存されます。

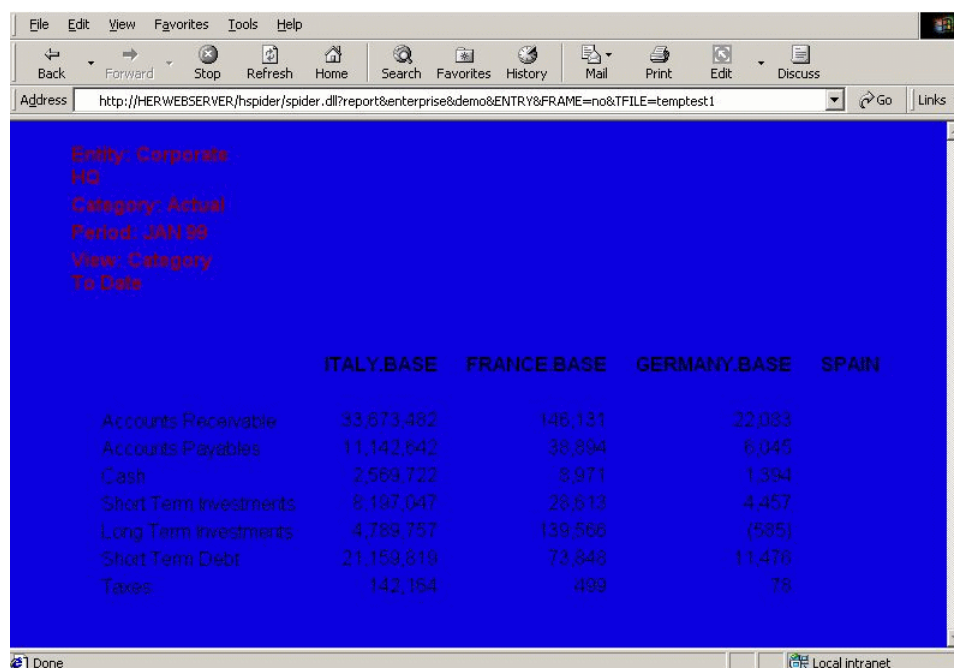
サンプルテンプレートファイル

```
<HTML>
<BODY BGCOLOR="blue">
<H2>%HEADER%</H2>
<P><P>
<CENTER><TABLE>
%REPORT%
</TABLE></CENTER>
<P>
</BODY>
</HTML>
```

このサンプルで、<H2>、<CENTER>、<P>、<TABLE>は HTML 書式設定タグです。%HEADER%と%REPORT%は変数です。変数は常にパーセント記号(%)で囲まれます。変数について詳しくは、145 ページの「標準テンプレートの変数」を参照してください。

次の図に、上のサンプルテンプレートを使用したレポートの Web ページを示します。

図 14 サンプルレポート



	ITALY.BASE	FRANCE BASE	GERMANY.BASE	SPAIN
Accounts Receivable	33,673,482	146,131		22,083
Accounts Payables	11,142,642	38,894		6,045
Cash	2,569,722	8,971		1,394
Short Term Investments	8,187,047	28,613		4,457
Long Term Investments	4,789,757	139,566		(585)
Short Term Debt	21,159,819	72,848		11,476
Taxes	142,164	899		79

次の例では、上のサンプルテンプレートにタイトルを追加します。

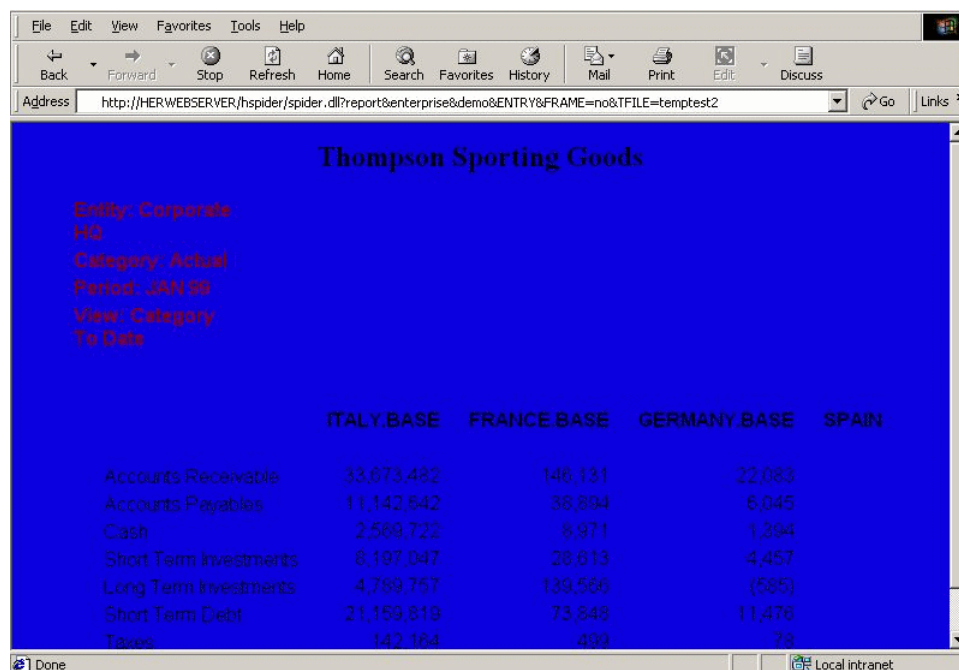
```
<HTML>
<BODY BGCOLOR="blue">
<H2><CENTER>Thompson Sporting Goods</CENTER></H2>
<H2>%HEADER%</H2>
<P><P>
<CENTER><TABLE>
%REPORT%
</TABLE></CENTER>
</BODY>
```

</HTML>

<P>

次の図に、変更したテンプレートを使用したレポートの Web ページを示します。

図 15 変更したテンプレートを使用したサンプルレポート



The screenshot shows a web browser window with the address bar displaying a URL. The main content area has a blue background and displays the title 'Thompson Sporting Goods'. Below the title, there is a list of metadata: Entity: Corporate, HQ, Category: Actual, Period: JAN 99, View: Category, To Date. The main data is presented in a table with four columns representing different regions: ITALY.BASE, FRANCE.BASE, GERMANY.BASE, and SPAIN. The rows list various financial items: Accounts Receivable, Accounts Payables, Cash, Short Term Investments, Long Term Investments, Short Term Debt, and Taxes. The values for each item are listed under the respective region columns.

	ITALY.BASE	FRANCE.BASE	GERMANY.BASE	SPAIN
Accounts Receivable	33,873,482	146,131	22,083	
Accounts Payables	11,142,642	38,894	6,045	
Cash	2,589,722	8,971	1,394	
Short Term Investments	8,197,047	20,813	4,457	
Long Term Investments	4,789,757	139,566	(585)	
Short Term Debt	21,159,819	73,848	11,476	
Taxes	142,164	499	78	

Hyperion Enterprise Reporting Web には、動的レポートとチャート、静的レポートとチャート、パッケージ、並列表示のレポートとチャート、データの視点フォーム、リンクページの標準テンプレートがあります。標準テンプレートを変更するか、カスタマイズした独自のテンプレートを作成できます。Hyperion Enterprise Reporting Web は、カスタムテンプレートを指定した場合を除き、標準テンプレートを使用してレポート、チャート、パッケージを表示します。

ケーススタディ - 標準テンプレートの変更

Thomson Sporting Goods のシステム管理者は、スプレッドシートリンクを含めることができるように FREPORT.HTX テンプレートファイルを変更したいと考えています。スプレッドシートリンクを含めれば、ユーザはレポートをレポートとしてもスプレッドシートとしても表示できるからです。

管理者は初めに、FREPORT.HTX テンプレートをテキストエディタで開きました。次の図に、変更前のテンプレートを示します。

図 16 Freport.htm テンプレート

```
<!doctype html public "-//IETF//DTD HTML//EN">
<HTML>
<HEAD>
    <META NAME="AUTHOR" CONTENT="Oracle | Hyperion Software">
</HEAD>
<BODY BACKGROUND="/images/backgrnd.gif">
    <H1>%HEADER%</H1>
    <P><P>
    <CENTER>
    <TABLE CELLPADDING=3 CELLSPACING=0>
    %REPORT%
    </TABLE>
    </CENTER>
    <P>
    <P>
    <P>
    <P>
    <IMG SRC="/images/spd_rep.gif">
</BODY>
</HTML>
```

スプレッドシートリンクを追加するため、管理者は本文セクションの<H1>行のすぐ上に行を追加しました。追加した行は、<A HREF>という HTML リンクタグを使用してスプレッドシートアプリケーションへのリンクを作成します。管理者は%LAUNCH_EXCEL%変数を使用して、ユーザがリンクを選択したときにスプレッドシートが作成されるように指定し、HTML タグを使用して excel.gif というピクチャを挿入します。このピクチャは、リンクのホットスポットとして機能します。ユーザがこのピクチャを選択すると、%LAUNCH_EXCEL%変数が実行されます。次の図に、編集されたテンプレートを示します。

図 17 編集されたテンプレート

```
<!doctype html public "-//IETF//DTD HTML//EN">
<HTML>
<HEAD>
    <META NAME="GENERATOR" CONTENT="Internet Assistant for Word 1.0Z">
    <META NAME="AUTHOR" CONTENT="Hyperion Software">
</HEAD>
<body background="/images/backgrnd.gif">
    <A HREF="%LAUNCH_EXCEL%"></A><BR>
    <H1>%HEADER%</H1>
    <P><P>
    <CENTER>
    <TABLE CELLPADDING=3 CELLSPACING=0>
    %REPORT%
    </TABLE>
    </CENTER>
    <P>
    <P>
    <IMG SRC="/images/spd_rep.gif">
</BODY>
</HTML>
```

この変更は、フレームを使用して表示され、行および列見出しの固定を解除した標準の動的レポートにのみ反映されます。複合レポート、フレームを使用しないレポート、行および列見出しが固定されているレポートに変更を反映するには、管理者は追加のテンプレートファイルにも同じ変更を加える必要があります。

管理者が、変更したテンプレートを使用してレポートを表示するリンクページを作成すると、Microsoft Excel の図とリンクが表示されるので、ユーザはレポートをスプレッドシートで表示できます。

標準テンプレート

Hyperion Enterprise Reporting Web には、次の情報を示す標準テンプレートがあります。

- フレームを使用する動的レポートとチャート
- フレームを使用しない動的レポートとチャート
- 静的レポートとチャート
- 静的パッケージ
- データの視点フォーム
- 財務エージェント
- Hyperion Enterprise Reporting Web のレポートライブラリ
- 行および列見出しが固定されたレポート
- データ入力モードのレポート
- 動的複合レポートおよびチャート
- 静的複合レポートおよびチャート
- ユーザ定義のお気に入り

フレームを使用する動的レポートとチャートのテンプレート

Web ブラウザでフレームを使用して表示する動的レポートとチャートには、上部のフレームにデータの視点を変更するためのボタンが表示されます。下部のフレームには、1 つのレポートまたはチャートが表示されるか、左右にフレームが分割されて、各フレームにレポートまたはチャートが表示されます。これらのレポートとチャートでは、各フレームの外観を定義するテンプレート、ページフレームのデータの視点ボタン用のテンプレート、下部のフレームのレポートまたはチャートページ用のテンプレートの 3 つのテンプレートを使用します。次の表に、フレームを使用したレポートとチャートを示します。

表 8 フレームを使用する動的レポートとチャートのテンプレート

テンプレート名	説明
CCFRAMES.HTX	データの視点ボタンを上部のフレームに、チャートを左下と右下のフレームに配置するフレームレイアウトを定義します。
CRFRAMES.HTX	データの視点ボタンを上部のフレームに、チャートを左下のフレームに、レポートを右下のフレームに配置するフレームレイアウトを定義します。
FPOV.HTX	フレームを使用するドキュメントでデータの視点ボタンの外観を定義します。

テンプレート名	説明
FRAMES.HTX	データの視点ボタンを上部のフレームに、1つのレポートまたはチャートを下部のフレームに配置するフレームレイアウトを定義します。
FREPORT.HTX	フレームを使用するドキュメントで動的レポートの Web ページの外観を定義します。
RCFRAMES.HTX	データの視点ボタンを上部のフレームに、レポートを左下のフレームに、チャートを右下のフレームに配置するフレームレイアウトを定義します。
RRFRAMES.HTX	データの視点ボタンを上部のフレームに、レポートを左下と右下のフレームに配置するフレームレイアウトを定義します。
SIGNON.HTX	動的レポートの [アプリケーションのログオン] ページの外観を定義します。

フレームを使用しない動的レポートとチャートのテンプレート

データの視点ボタンを個別のフレームではなくレポートの本文に表示するレポートとチャートは、REPORT.HTX テンプレートを使用します。

静的レポートとチャートのテンプレート

次の表に、静的レポートとチャートのテンプレートを示します。

表 9 静的レポートとチャートのテンプレート

テンプレート名	説明
STATRC.HTX	並列表示の静的レポートおよびチャートのフレームレイアウトを定義します。
STATREP.HTX	静的レポートおよびチャートの外観を定義します。
STATREPT.HTX	[グリッド上にレポートを表示する] オプションを使用したときの静的レポートの外観を定義します。

静的パッケージのテンプレート

静的パッケージを作成すると、パッケージのレポート、パッケージの目次、パッケージ内のデータの視点の値の一覧に別々のテンプレートが使用されます。静的パッケージの作成方法について詳しくは、[65 ページの「静的パッケージの作成」](#)を参照してください。

次の表に、静的パッケージで使用するテンプレートを示します。

表 10 静的パッケージのテンプレート

テンプレート名	説明
STATBKIX.HTX	レポートごとにファイルを作成するオプションを使用してパッケージを作成する場合のデータの視点の値の外観を定義します。

テンプレート名	説明
STATBKPG.HTX	レポートごとにファイルを作成するオプションを使用してパッケージを作成する場合のパッケージのレポートの外観を定義します。
STATBKRP.HTX	レポートグループごとにファイルを作成するオプションを使用してパッケージを作成する場合のパッケージのレポートの外観を定義します。
STATBKT.HTX	[グリッド上にレポートを表示する] オプションを使用したときの静的パッケージの外観を定義します。
STATBOOK.HTX	単一ファイルオプションを使用したときの静的パッケージの外観を定義します。また、レポートごとにファイルを作成するオプションとレポートグループごとにファイルを作成するオプションを使用する場合の静的パッケージの目次の外観も定義します。
STATBPGT.HTX	レポートごとにファイルを作成するオプションを使用してパッケージを作成し、[グリッド上にレポートを表示する] オプションを選択した場合の、パッケージにおけるレポートの外観を定義します。
STATBRPT.HTX	レポートグループオプションを使用してパッケージを作成し、[グリッド上にレポートを表示する] オプションを選択した場合の、パッケージにおけるレポートの外観を定義します。

Hyperion Enterprise Reporting Web のレポートライブラリのテンプレート

次の表に、Hyperion Enterprise Reporting Web のレポートライブラリのテンプレートを示します。

表 11 Hyperion Enterprise Reporting Web のレポートライブラリのテンプレート

テンプレート名	説明
APPLIST.HTX	アプリケーション一覧ページの外観を定義します。このページには、Hyperion Enterprise Reporting Web からアクセスするオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェア用に定義されたすべてのアプリケーションが一覧表示されます。
REPLIST.HTX	レポート一覧ページの外観を定義します。
SETLIST.HTX	セッター一覧ページの観を定義します。このページには、Hyperion Enterprise Reporting Web からアクセスするすべてのレポートセットが一覧表示されます。
SYSLIST.HTX	システム一覧ページの外観を定義します。このページには、Hyperion Enterprise Reporting Web からアクセスするオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェア用に定義されたすべてのシステムが一覧表示されます。

財務エージェントのテンプレート

次の表に、財務エージェントで使用するテンプレートを示します。

表 12 財務エージェントのテンプレート

テンプレート名	説明
AGENTS.HTM	ボタンを画面上部に、エージェント通知と購読を下部に配置するフレームレイアウトを定義します。
AGTAVAIL.HTX	ユーザが購読できる財務エージェントの一覧を表示します。
AGTMOD.HTX	ユーザが既存の購読の変更に使用できるフォームを表示します。
AGTMSG.HTX	ユーザが財務エージェントを購読した後、購読をキャンセルした後、または通知をクリアした後に確認メッセージを表示します。
AGTSENT.HTX	ユーザが表示していないエージェント通知の数を表示します。
AGTSUB.HTX	ユーザが現在購読しているエージェントの一覧を表示します。
AGTSUBTO.HTX	ユーザがエージェントを購読するために記入するフォームを表示します。
AGTTRIG.HTX	データが変更されたすべての財務エージェントの一覧を表示します。
BUTTONS.HTX	ユーザが [エージェントの登録]、[Modify Subscriptions (購読の変更)] または [View Agent Notifications (エージェント通知の表示)] Web ページで作業しているときに表示されるボタンを定義します。このテンプレートは、BUTTONS=NO パラメータが URL に表示される場合に使用されます。
FRMBTNS.HTX	AGENTS.HTM ファイルがフレームアプリケーションで使用するボタンを定義します。このテンプレートは、BUTTONS=NO パラメータが URL に表示される場合に使用されます。

データの視点フォームのテンプレート

次の表に、データの視点フォームのテンプレートを示します。

表 13 データの視点フォームのテンプレート

テンプレート名	説明
POVEDIT.HTX	選択したデータの視点ディメンションの値を変更する [Change Point of View (データ視点の変更)] フォームの外観を定義します。
POVTABS.HTX	レポートのデータの視点ディメンションの値を変更する [Select Point of View (データの視点の選択)] フォームの外観を定義します。

行および列見出しが固定された動的レポートのテンプレート

次の表に、ユーザが Web ページのレポートをスクロールしたときに行および列見出しが画面に表示されたままになる動的レポートのテンプレートを示します。

注： これらのテンプレートは、Dynamic HTML と JavaScript を使用しますが、一部の HTML エディタでは認識されない場合があります。テンプレートをカスタマイズする際は注意してください。複合レポートの行と列の見出しを保護することはできません。

表 14 行および列見出しが固定された動的レポートのテンプレート

テンプレート名	説明
FJSREPIE.HTX	Microsoft Internet Explorer 6.0 以降でのみ、フレームを使用するドキュメントで行および列見出しが固定されている動的レポートの Web ページの外観を定義します。
FJSREPNS.HTX	Mozilla Firefox 2.0.x 以降でのみ、フレームを使用するドキュメントで行および列見出しが固定されている動的レポートの Web ページの外観を定義します。
JSREPIE.HTX	Microsoft Internet Explorer 6.0 以降でのみ、フレームを使用しない行および列見出しが固定されている動的レポートの Web ページの外観を定義します。
JSREPNS.HTX	Mozilla Firefox 2.0.x 以降でのみ、フレームを使用しないドキュメントで行および列見出しが固定されている動的レポートの Web ページの外観を定義します。

行および列見出しが固定された静的レポートのテンプレート

次の表に、ユーザが Web ページのレポートをスクロールしたときに行および列見出しが画面に表示されたままになる静的レポートのテンプレートを示します。

注： これらのテンプレートは、Dynamic HTML と JavaScript を使用しますが、一部の HTML エディタでは認識されない場合があります。テンプレートをカスタマイズする際は注意してください。複合レポートの行と列の見出しを保護することはできません。

表 15 行および列見出しが固定された静的レポートのテンプレート

テンプレート名	説明
STLHRIE.HTX	Microsoft Internet Explorer 6.0 以降でのみ、行および列見出しが固定された静的レポートの Web ページの外観を定義します。
STLHRNS.HTX	Mozilla Firefox 2.0.x 以降でのみ、行および列見出しが固定された静的レポートの Web ページの外観を定義します。
STLHRIET.HTX	Microsoft Internet Explorer 6.0 以降でのみ、行および列見出しが固定され、グリッドが表示されている静的レポートの Web ページの外観を定義します。
STLHRNST.HTX	Netscape Navigator 4.0 以降でのみ、行および列見出しが固定され、グリッドが表示されている静的レポートの Web ページの外観を定義します。
STLHPIE.HTX	Microsoft Internet Explorer 6.0 以降でのみ、行および列見出しが固定された静的パッケージのレポートの Web ページの外観を定義します。
STLHPNS.HTX	Mozilla Firefox 2.0.x 以降でのみ、行および列見出しが固定された静的パッケージのレポートの Web ページの外観を定義します。

テンプレート名	説明
STLHPIET.HTX	Microsoft Internet Explorer 6.0 以降でのみ、行および列見出しが固定され、グリッドが表示されている静的パッケージのレポートの Web ページの外観を定義します。
STLHPNST.HTX	Mozilla Firefox 2.0.x 以降でのみ、行および列見出しが固定され、グリッドが表示されている静的パッケージのレポートの Web ページの外観を定義します。

データ入力モードのレポートのテンプレート

次の表に、データ入力モードで表示されるレポートのテンプレートを示します。データ入力モードにより、ユーザはインターネットまたはイントラネットを介して標準 HTML ページからレポートのデータを編集および保存できます。

表 16 データ入力モードのレポートのテンプレート

テンプレート名	説明
DEREPIE.HTX	Microsoft Internet Explorer 6.0 以降でのみ、データ入力モードのレポート用の Web ページの外観を定義します。
DEREPNS.HTX	Netscape Navigator 4.0 以降でのみ、データ入力モードのレポート用の Web ページの外観を定義します。
FDREPIE.HTX	Microsoft Internet Explorer 6.0 以降でのみ、フレームを使用したデータ入力モードのレポート用の Web ページの外観を定義します。
FDREPNS.HTX	Mozilla Firefox 2.0.x 以降でのみ、フレームを使用したデータ入力モードのレポート用の Web ページの外観を定義します。
DELHRIE.HTX	Microsoft Internet Explorer 6.0 以降でのみ、行および列見出しが固定されたデータ入力モードのレポート用の Web ページの外観を定義します。
DELHRNS.HTX	Mozilla Firefox 2.0.x 以降でのみ、行および列見出しが固定されたデータ入力モードのレポート用の Web ページの外観を定義します。
FDELHRIE.HTX	Microsoft Internet Explorer 6.0 以降でのみ、行および列見出しが固定され、フレームを使用したデータ入力モードのレポート用の Web ページの外観を定義します。
FDELHRNS.HTX	Mozilla Firefox 2.0.x 以降でのみ、行および列見出しが固定され、フレームを使用したデータ入力モードのレポート用の Web ページの外観を定義します。

フレームを使用しない動的複合レポートとチャートのテンプレート

次の表に、フレームを使用しない動的複合レポートとチャートのテンプレートを示します。

表 17 フレームを使用しない動的複合レポートとチャートのテンプレート

テンプレート名	説明
1U2D.HTX	2 つの動的レポートまたはチャートの上に、埋め込まれた動的レポートまたはチャートを 1 つ表示する複合レポートのレイアウトを定義します。
COMBO3.HTX	3 番目の動的レポートまたはチャートの上に、埋め込まれた動的レポートまたはチャートを 2 つ表示する複合レポートのレイアウトを定義します。
SIDBSID.HTX	2 つの動的レポートまたはチャートが埋め込まれた並列表示の複合レポートのレイアウトを定義します。
STACK2.HTX	埋め込まれた動的レポートまたはチャートを 2 つ重ねて表示する複合レポートのレイアウトを定義します。
STACK3.HTX	埋め込まれた動的レポートまたはチャートを 3 つ重ねて表示する複合レポートのレイアウトを定義します。
STACK4.HTX	埋め込まれた動的レポートまたはチャートを 4 つ重ねて表示する複合レポートのレイアウトを定義します。

フレームを使用する動的複合レポートとチャートのテンプレート

次の表に、フレームを使用する動的複合レポートとチャートのテンプレートを示します。

表 18 フレームを使用する動的複合レポートとチャートのテンプレート

テンプレート名	説明
F1U2D.HTX	埋め込まれた 1 つの動的レポートまたはチャートを 2 つの動的レポートまたはチャートの上に表示し、フレームを使用する複合レポートのレイアウトを定義します。
FCOMBO3.HTX	3 番目の動的レポートまたはチャートの上に埋め込まれた動的レポートまたはチャートを 2 つ表示し、フレームを使用する複合レポートのレイアウトを定義します。
FSIDBSID.HTX	2 つの動的レポートまたはチャートが埋め込まれた、フレームを使用する並列表示の複合レポートのレイアウトを定義します。
FSTACK2.HTX	埋め込まれた動的レポートまたはチャートを 2 つ重ねて表示し、フレームを使用する複合レポートのレイアウトを定義します。
FSTACK3.HTX	埋め込まれた動的レポートまたはチャートを 3 つ重ねて表示し、フレームを使用する複合レポートのレイアウトを定義します。
FSTACK4.HTX	埋め込まれた動的レポートまたはチャートを 4 つ重ねて表示し、フレームを使用する複合レポートのレイアウトを定義します。

静的複合レポートとチャートのテンプレート

次の表に、データ入力モードで表示される静的複合レポートとチャートのテンプレートを示します。

表 19 静的複合レポートとチャートのテンプレート

テンプレート名	説明
STAT1U2D.HTX	2 つの静的レポートまたはチャートの上に埋め込まれた静的レポートまたはチャートを 1 つ表示し、レポートのセルを枠線で囲まない複合レポートのレイアウトを定義します。
STATSBS.HTX	埋め込まれた 2 つの静的レポートまたはチャートを並列表示し、レポートのセルを枠線で囲まない複合レポートのレイアウトを定義します。
STATCMB.HTX	3 番目の静的レポートまたはチャートの上に埋め込まれた静的レポートまたはチャートを 2 つ表示し、レポートのセルを枠線で囲まない複合レポートのレイアウトを定義します。
STAT2STK.HTX	埋め込まれた静的レポートまたはチャートを 2 つ重ねて表示し、レポートのセルを枠線で囲まない複合レポートのレイアウトを定義します。
STAT3STK.HTX	埋め込まれた静的レポートまたはチャートを 3 つ重ねて表示し、レポートのセルを枠線で囲まない複合レポートのレイアウトを定義します。
STAT4STK.HTX	埋め込まれた静的レポートまたはチャートを 4 つ重ねて表示し、レポートのセルを枠線で囲まない複合レポートのレイアウトを定義します。
TSTA1U2D.HTX	2 つの静的レポートまたはチャートの上に埋め込まれた静的レポートまたはチャートを 1 つ表示し、レポートのセルを枠線で囲む複合レポートのレイアウトを定義します。
TSTASBS.HTX	埋め込まれた 2 つの静的レポートまたはチャートを並列表示し、レポートのすべてのセルを枠線で囲む複合レポートのレイアウトを定義します。
TSTACMB.HTX	3 番目の静的レポートまたはチャートの上に埋め込まれた静的レポートまたはチャートを 2 つ表示し、レポートのすべてのセルを枠線で囲む複合レポートのレイアウトを定義します。
TSTA2STK.HTX	埋め込まれた静的レポートまたはチャートを 2 つ重ねて表示し、レポートのすべてのセルを枠線で囲む複合レポートのレイアウトを定義します。
TSTA3STK.HTX	埋め込まれた静的レポートまたはチャートを 3 つ重ねて表示し、レポートのすべてのセルを枠線で囲む複合レポートのレイアウトを定義します。
TSTA4STK.HTX	埋め込まれた静的レポートまたはチャートを 4 つ重ねて表示し、レポートのすべてのセルを枠線で囲む複合レポートのレイアウトを定義します。

ユーザ定義のお気に入りのテンプレート

favorites.htx テンプレートは、ユーザ定義のすべてのお気に入りページで共有されるレイアウトを定義します。

標準テンプレートの変数

標準のテンプレートには、パーセント記号（%）で囲まれた変数が含まれています。変数は、テンプレートを使用してレポートの Web ページが作成された場合に、Hyperion アプリケーションからの情報を挿入する場所を示します。例えば、%REPORTNAME%という変数は、レポートにアクセスしたときにレポートのラベルに置き換えられます。

一部の変数は、ユーザのログオン ID や現在のデータの視点などのシステム情報を追跡します。こうした変数の値は、Web ページには表示されません。このようなシステム変数は削除しないでください。

次の表に、標準テンプレートの変数を示します。

表 20 標準テンプレートの変数

変数	説明
%APPDESC%	アクセスしているアプリケーションの説明を挿入します。
%APPLICATION%	アクセスしているアプリケーションのラベルを挿入します。
%APPLIST%	現在のシステムのアプリケーション一覧を挿入します。
%BEGININDEX%	予約済みのシステム変数
%BEGINPAGE%	予約済みのシステム変数
%BEGINREPORT%	予約済みのシステム変数
%BOOKNAME%	静的パッケージの名前を挿入します。
%CHANGECOMP%	予約済みのシステム変数
%CHARTFILE%	予約済みのシステム変数
%CHARTREQ%	予約済みのシステム変数
%CONTENTS%	静的パッケージの目次
%CONTENTS_NAMEONLY%	パッケージのレポートのラベルをパッケージの目次に挿入します。
%CONTENTS_TITLEONLY%	パッケージのレポートの説明をパッケージの目次に挿入します。
%DATE%	現在の日付を静的レポートまたはパッケージに挿入します。
%EDITQUERY%	予約済みのシステム変数
%ENDINDEX%	予約済みのシステム変数
%ENDPAGE%	予約済みのシステム変数
%ENDREPORT%	予約済みのシステム変数
%FAVORITES%	現在のユーザのお気に入りファイルを挿入します。

変数	説明
%FILENAME%	現在の HTML ファイルの名前を静的レポートまたはパッケージに挿入します。
%FILTERTEXT%	予約済みのシステム変数
%FIRSTKEY%	予約済みのシステム変数
%FIRSTKEY2%	予約済みのシステム変数
%HEADER%	レポートのヘッダーを挿入します。
%HTXEDIT%	予約済みのシステム変数
%HTX_FULLPATH%	テンプレートファイルのパスとファイル名を挿入します。
%IDS_SPUI_DONE_BTN_TEXT%	予約済みのシステム変数
%IDS_SPUI_LOGIN_BTN_TEXT%	予約済みのシステム変数
%IDS_SPUI_NEXT_BTN_TEXT%	予約済みのシステム変数
%IDS_SPUI_PREV_BTN_TEXT%	予約済みのシステム変数
%IDS_SPUI_UPDATE_BTN_TEXT%	予約済みのシステム変数
%INDEX%	データの視点のディメンションメンバ ID と説明を静的パッケージのインデックスページに挿入します。
%INDEX_NAMEONLY%	データの視点のディメンションメンバ ID を静的パッケージのインデックスページに挿入します。
%INDEX_TITLEONLY%	データの視点のディメンションメンバの説明を静的パッケージのインデックスページに挿入します。
%KEYNAME%	データの視点のディメンション ID を静的パッケージのインデックスページに挿入します。
%KEYNAME%	動的レポートのテンプレート用に予約済みのシステム変数
%LASTKEY%	予約済みのシステム変数
%LASTKEY2%	予約済みのシステム変数
%LISTQUERY%	予約済みのシステム変数
%MAXVALUE%	予約済みのシステム変数
%PAGEDEF%	予約済みのシステム変数
%POV%	データの視点バーを静的パッケージのレポートに挿入します。
%POVBAR%	現在のデータの視点のデータの視点ボタンを動的レポートまたはチャートに挿入します。
%POVKEYNAMESWITHDESC%	レポートのデータの視点のディメンションメンバ ID と説明を静的パッケージに挿入します。

変数	説明
%POVTITLES%	レポートのデータの視点のディメンションメンバの説明を静的パッケージに挿入します。
%PREVQUERY%	予約済みのシステム変数
%PREVREQ%	予約済みのシステム変数
%REPDESC%	アクセスしているレポートの説明を挿入します。
%REPLIST2%	現在のセットのレポートラベルの一覧を挿入します。
%REPORT%	レポートの本文を表形式で挿入します。
%REPORTFILE%	予約済みのシステム変数
%REPORTNAME%	レポート ID を挿入します。
%REPORTREQ%	予約済みのシステム変数
%SERVERUSERNAME%	Web サーバのログオン ID を取得します。
%SET%	現在のセットのセットラベルを挿入します。
%SETLIST2%	現在のアプリケーションのセットラベルの一覧を挿入します。
%SYSLIST%	使用可能なシステムの一覧を挿入します。
%SYSTEM%	アクセスしている Oracle の Enterprise Performance Management ソフトウェアの名前を挿入します。
%TIME%	現在の時刻を静的レポートまたはパッケージに挿入します。
%USER%	予約済みのシステム変数

%APPDESC%

アクセスしている Hyperion Enterprise アプリケーションの説明を挿入する場合は、%APPDESC%変数を使用します。

例

動的レポート一覧の外観を定義する REPLIST.HTX テンプレートか、または動的レポートセット一覧の外観を定義する SETLIST.HTX テンプレートをカスタマイズして、現在のアプリケーションの説明を表示します。

SETLIST.HTX テンプレートの次の HTML 行では、Hyperion Enterprise Reporting アイコンの横に「Sets」という見出しが表示されます。

```
<h2><img SRC="/images/spd_icon.gif"> Sets</h2>
```

アプリケーションの説明を見出しに追加するには、この行を次のように変更します。

```
<h2><img SRC="/images/spd_icon.gif"> Sets for %APPDESC%</h2>
```

実行時に、現在のアプリケーションの説明が見出しに追加されます。アプリケーションの説明が「Demo application」だった場合、見出しは「Sets for Demo application」になります。

%APPLICATION%

アクセスしている Hyperion Enterprise アプリケーションのラベルを挿入する場合は、%APPLICATION%変数を使用します。

例

HTML の次の行は、HTML フォームを使用して POV セレクタをカスタマイズする CUST_POV.HTX テンプレートに含まれています。

```
<form action="/hspider/spider.dll?report" method=post> <!-- formアクション  
はspider.dllのREPORT関数を呼び出します -->  
<input type="hidden" name="sys" value="%SYSTEM%">  
<input type="hidden" name="app" value="%APPLICATION%">  
<input type="hidden" name="rpt" value="%REPORTNAME%">  
<input type="hidden" name="tview" value="cust_pov.htx">  
.  
.  
.  
</form>
```

実行時に、%APPLICATION%が現在の Hyperion アプリケーションに置き換えられます。

%APPLIST%

現在の Hyperion 製品のアプリケーション一覧を挿入する場合は、%APPLIST%変数を使用します。

例

HTML の次の行は、アプリケーション一覧ページの外観を定義する APPLIST.HTX テンプレートに含まれています。アプリケーション一覧には、現在の Oracle の Enterprise Performance Management ソフトウェアに定義された全アプリケーションが一覧表示されます。

```
<body background="/images/backgrnd.gif">  
<H2><IMG SRC="/images/spd_icon.gif"> Applications</H2><P>  
%APPLIST%  
</BODY>
```

Web ページが生成されると、%APPLIST%変数は現在の Oracle の Enterprise Performance Management ソフトウェアの動的なアプリケーション一覧に置き換えられます。

%BOOKNAME%

静的パッケージの名前をパッケージに挿入する場合は、%BOOKNAME%変数を使用します。

例

HTML の次の行は、静的パッケージの目次の外観を定義する STATBOOK.HTX テンプレートに含まれています。

```
<P>%PAGEDEF%%DATE% %TIME% - %FILENAME%  
<BR>%STATIC_BOOK%  
<H1><CENTER>%SYSTEM% - %APPLICATION% - %BOOKNAME%</CENTER></H1>
```

静的パッケージの目次が表示されると、%BOOKNAME%変数は静的パッケージの名前に置き換えられます。

%CONTENTS%

目次を静的パッケージに挿入する場合は、%CONTENTS%変数を使用します。

例

HTML の次の行は、静的パッケージの目次の外観を定義する STATBOOK.HTX テンプレートに含まれています。

```
<P>%PAGEDEF%%DATE% %TIME% - %FILENAME%  
<BR>%STATIC_BOOK%  
<H1><CENTER>%SYSTEM% - %APPLICATION% - %BOOKNAME%</CENTER></H1>  
<HR>  
<UL TYPE="square">  
<!-- 目次がここに挿入されます -->  
%CONTENTS%  
</UL>
```

静的パッケージの目次が表示されると、%CONTENTS%変数はパッケージに含まれる静的レポートとチャートの ID と説明の箇条書き一覧に置き換えられます。

%CONTENTS_NAMEONLY%

パッケージのレポートの ID をパッケージの目次に挿入する場合は、%CONTENTSNAMEONLY%変数を使用します。この変数は%CONTENTS%変数とほとんど同じですが、%CONTENTS%が実行時にレポート ID と説明の一覧で置き換えられるのに対し、%CONTENTS_NAMEONLY%は実行時にレポート ID のみの一覧で置き換えられます。

%CONTENTS_TITLEONLY%

パッケージのレポートの説明をパッケージの目次に挿入する場合は、%CONTENTS_TITLEONLY%変数を使用します。この変数は%CONTENTS%変数と

ほとんど同じですが、%CONTENTS%が実行時にレポート ID と説明の一覧で置き換えられるのに対し、%CONTENTS_TITLEONLY%は実行時にレポートの説明のみの一覧で置き換えられます。

%DATE%

現在の日付を静的レポートまたはパッケージに挿入する場合は、%DATE%変数を使用します。Web ページが表示されると、%DATE%変数は現在の日付に置き換えられます。

%FILENAME%

現在の HTML ファイルのファイル名を静的レポートまたはパッケージに挿入する場合は、%FILENAME%変数を使用します。

例

HTML の次の行は、静的レポートの外観を定義する STATREP.HTX テンプレートに含まれています。

```
<P>%DATE% %TIME% - %FILENAME%  
<BR>%STATIC_PRINT%  
<H1>%HEADER%</H1>
```

静的レポートが含まれる HTML ファイルが Web ブラウザに表示されると、%FILENAME%変数は HTML ファイルの名前に置き換えられます。

%HTX_FULLPATH%

テンプレートファイルのパスおよびファイル名を挿入する場合は、%HTX_FULLPATH%変数を使用します。例えば REPORT.HTX テンプレートでは、実行時に%HTX_FULLPATH%がテンプレートのパスとファイル名に置き換えられます。

%HEADER%

Hyperion Enterprise Reporting で定義されたレポートヘッダーをレポートの Web ページに挿入する場合は、%HEADER%変数を使用します。例えば REPORT.HTX テンプレートでは、実行時に%HEADER%が指定のレポートのヘッダーに置き換えられます。

%INDEX%

データの視点のディメンションメンバ ID と説明を静的パッケージのインデックスページに挿入する場合は、%INDEX%変数を使用します。

例

HTML の次の行は、管理プログラムの [レポート別にファイルを作成] オプションを使用して静的パッケージを作成したときにデータの視点ディメンションメンバの外観を定義する STATBKIX.HTX テンプレートに含まれています。

```
<H2>%KEYNAME%</H2>
<HR>
<UL TYPE="square">
<!-- POVの値の一覧がここに挿入されます -->
%INDEX%
</UL>
```

%INDEX%変数は、実行時にインデックスページのデータの視点のディメンションメンバ ID と説明の箇条書きに置き換えられます。

%INDEX_NAMEONLY%

データの視点のディメンションメンバ ID を静的パッケージのインデックスページに挿入する場合は、%INDEX_NAMEONLY%変数を使用します。詳しくは、次の変数の%INDEX_TITLEONLY%参照してください。

%INDEX_TITLEONLY%

データの視点のディメンションメンバの説明を静的パッケージのインデックスページに挿入する場合は、%INDEX_TITLEONLY%変数を使用します。

例

HTML の次の行は、管理プログラムの [レポート別にファイルを作成] オプションを使用して静的パッケージを作成したときにデータの視点ディメンションメンバの外観を定義する STATBKIX.HTX テンプレートに含まれています。

```
<H2>%KEYNAME%</H2>
<HR>
<UL TYPE="square">
<!-- POVの値の一覧がここに挿入されます -->
%INDEX_TITLEONLY%
</UL>
```

%INDEX_TITLEONLY%変数は、実行時にインデックスページのデータの視点のディメンションメンバの説明の箇条書きに置き換えられます。

%KEYNAME%

データの視点のディメンションの ID を静的パッケージのインデックスページに挿入する場合は、%KEYNAME%変数を使用します。

例

HTML の行<H2>%KEYNAME%/H2>は、管理プログラムの [Individual Report (個々のレポート)] オプションを使用して静的パッケージを作成したときにデータの視点ディメンションメンバの外観を定義するSTATBKIX.HTX テンプレートに含まれています。

```
<HR>
<UL TYPE="square">
<!-- POVの値の一覧がここに挿入されます -->
%INDEX_TITLEONLY%
</UL>
```

%KEYNAME%変数は、実行時にインデックスページのディメンション ID に置き換えられます。例えば、ENTITY のインデックスページなどです。

%POVBAR%

現在のデータの視点のデータの視点ボタンを動的レポートまたはチャートに挿入する場合は、%POVBAR%変数を使用します。

例

HTML の次の行は、フレームを使用する Web ページのデータの視点ボタンの外観を定義する FPOV.HTX テンプレートに含まれています。

```
<table><tr align=top><td>
<form action="/hspider/spider.dll?editpov" method=POST target="_parent">
<input type="hidden" name="sys" value="%SYSTEM%">
<input type="hidden" name="app" value="%APPLICATION%">
<input type="hidden" name="prevquery" value="%PREVQUERY%">
<input type="hidden" name="tfile" value="povedit.htx">
%POVBAR%
</form>
</tr>
</table>
```

ページが生成されると、POVBAR 変数は、現在のデータの視点を表示するデータの視点ボタンに置き換えられます。

%POVKEYNAMESWITHDESC%

データの視点のディメンションメンバ ID と説明を静的パッケージのレポートに挿入する場合は、%POVKEYNAMESWITHDESC%変数を使用します。

例

HTML の次の行は、[レポート別にファイルを作成] オプションを使用してパッケージを作成したときに、パッケージのレポートの外観を定義する STATBKPG.HTX テンプレートに含まれています。

```
<body background="/images/backgrnd.gif" LINK="#0000FF" VLINK="#0000FF">
<!-- このセクションでは、各ページの外観を指定します。-->
<!--各レポートの各ページについて繰り返します。-->
<!-- 「POV」は、1列のPOV「ボタン」を挿入します。-->
<P>%POVKEYNAMEWITHDESC%
<HR>
```

ページが生成されると、%POVKEYNAMEWITHDESC%変数は、静的パッケージのレポートのデータの視点メンバ ID と説明を含んでいる行に置き換えられます。

%POVTITLES%

データの視点のディメンションメンバの説明を静的パッケージのレポートに挿入する場合は、%POVTITLES%変数を使用します。

例

HTML の次の行は、[レポート別にファイルを作成] オプションを使用してパッケージを作成したときに、パッケージのレポートの外観を定義する STATBKPG.HTX テンプレートに含まれています。

```
<body background="/images/backgrnd.gif" LINK="#0000FF" VLINK="#0000FF">
<!-- このセクションでは、各ページの外観を指定します。-->
<!--各レポートの各ページについて繰り返します。-->
<!-- 「POV」は、1列のPOV「ボタン」を挿入します。-->
<P>%POVTITLES%
<HR>
```

ページが生成されると、%POVTITLES%変数は、静的パッケージのレポートのデータの視点メンバの説明を含んでいる行に置き換えられます。

%REPDESC%

現在のレポートの説明を挿入する場合は、%REPDESC%変数を使用します（これがレポートのタイトルになります）。レポートが Web ブラウザに表示されると、%REPDESC%変数はレポートの説明に置き換えられます。

%REPLIST2%

現在のレポートセットのレポート一覧を挿入する場合は、%REPLIST2%変数を使用します。

例

HTML の次の行は、レポート一覧ページの外観を定義する REPLIST.HTX テンプレートに含まれています。レポート一覧には、現在の Oracle の Enterprise Performance Management ソフトウェア、アプリケーション、レポートセットのすべてのレポートが一覧表示されます。

```
<body background="/images/backgrnd.gif">
```

```
<H2><IMG SRC="/images/spd_icon.gif"> Reports</H2><P>
<TABLE>
%REPLIST2%
</TABLE>
</BODY>
```

Web ページが生成されると、%REPLIST2%変数は、現在の Oracle の Enterprise Performance Management ソフトウェア、アプリケーション、レポートセットのレポートの動的な一覧に置き換えられます。

%REPORT%

レポートの本文を表形式で挿入する場合は、%REPORT%変数を使用します。

例

HTML の次の行は、フレームを使用するドキュメントの動的レポートの Web ページの外観を定義する FREPORT.HTX テンプレートに含まれています。

```
<center><table cellpadding=3 cellspacing=0>
%REPORT%
</table></center>
```

テンプレートを使用して動的レポートの Web ページが生成されると、%REPORT%変数は、表の特定のレポートに置き換えられます。

%REPORTNAME%

現在のレポートの ID を挿入する場合は、%REPORTNAME%変数を使用します。

例

HTML の次の行は、HTML フォームを使用して POV セレクタをカスタマイズする CUST_POV.HTX テンプレートに含まれています。

```
<form action="/hspider/spider.dll?report" method=post> <!-- formアクション
はspider.dllのREPORT関数を呼び出します -->
<input type="hidden" name="sys" value="%SYSTEM%">
<input type="hidden" name="app" value="%APPLICATION%">
<input type="hidden" name="rpt" value="%REPORTNAME%">
<input type="hidden" name="tview" value="cust_pov.htx">

.

.

.

</form>
```

%REPORTNAME%は、実行時に現在のレポートの ID に置き換えられます。

%SERVERUSERNAME%

Web サーバのログオン ID を取得する場合は、%SERVERUSERNAME%変数を使用します。

次の構文を使用します。

`object.ServerUserName()`

但し、`object` はカスタム関数に渡す条件オブジェクトの名前。この変数は文字列を返します。

例

次の条件 VB スクリプトでは、`ServerUserName()`を使用して、数値またはテキストメッセージを表示します。

```
if CBP2.GetCellDouble( 1, 3)>0 then
if Criteria.ServerUserName()="FREDJONES" then
MyCriteriaPage.Sub "%UserVariable%",CBP2.GetCellDouble( 1, 3)
Else
MyCriteriaPage.Sub "%UserVariable%","Over Budget"
end if
end if
```

%SET%

現在のレポートセットの ID を挿入する場合は、%SET%変数を使用します。

例

動的レポート一覧の外観を定義して現在のレポートセットの ID を表示する REPLIST.HTX テンプレートをカスタマイズするとします。

REPLIST.HTX テンプレートの次の HTML 行では、Hyperion Enterprise Reporting アイコンの横に「Reports」という見出しが表示されます。

```
<h2><img SRC="/images/spd_icon.gif"> Reports</h2>
```

レポートセット名を見出しに追加するには、この行を次のように変更します。

```
<h2><img SRC="/images/spd_icon.gif"> Reports for %SET%</h2>
```

実行時に現在のレポートセットの ID が見出しに追加されます。現在のレポートセットが損益計算書レポートの INC である場合、見出しは「Reports for INC」となります。

%SETLIST2%

現在の Hyperion 製品とアプリケーションのレポートセットの一覧を挿入する場合は、%SETLIST2%変数を使用します。

例

HTML の次の行は、レポートセット一覧ページの外観を定義する SETLIST.HTX テンプレートに含まれています。レポートセット一覧には、現在の Oracle の Enterprise Performance Management ソフトウェアとアプリケーションの全レポートセットが一覧表示されます。

```
<body background="/images/backgrnd.gif">
<H2><IMG SRC="/images/spd_icon.gif"> Sets</H2><P>
<TABLE>
%REPLIST2%
</TABLE>
</BODY>
```

Web ページが生成されると、%SETLIST2%変数は現在の Oracle の Enterprise Performance Management ソフトウェアの動的なレポートセット一覧に置き換えられます。

%SYSLIST%

使用可能な Oracle の Enterprise Performance Management ソフトウェアの一覧を挿入する場合は、%SYSLIST%変数を使用します。

例

HTML の次の行は、製品一覧ページの外観を定義する SYSLIST.HTX テンプレートに含まれています。製品一覧には、Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションとともに使用するよう設定されたすべてのオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアが一覧表示されます。

```
<BODY BACKGROUND="/images/backgrnd.gif">
<H2><IMG SRC="/images/spd_icon.gif"> Hyperion Systems</H2><P>
%SYSLIST%
</BODY>
```

Web ページが生成されると、%SYSLIST%変数はオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアの動的な一覧に置き換えられます。

%SYSTEM%

アクセスしている Oracle の Enterprise Performance Management ソフトウェアの名前を挿入する場合は、%SYSTEM%変数を使用します。

例

HTML の次の行は、HTML フォームを使用して POV セレクタをカスタマイズする CUST_POV.HTX テンプレートに含まれています。

```

<form action="/hspider/spider.dll?report" method=post> <!-- formアクション
はspider.dllのREPORT関数を呼び出します -->
<input type="hidden" name="sys" value="%SYSTEM%">
<input type="hidden" name="app" value="%APPLICATION%">
<input type="hidden" name="rpt" value="%REPORTNAME%">
<input type="hidden" name="tview" value="cust_pov.htx">

.

.

.

</form>

```

%SYSTEM%は、実行時に現在の Oracle の Enterprise Performance Management ソフトウェアに置き換えられます。

%TIME%

現在の時刻を静的レポートまたはパッケージに挿入する場合は、%TIME%変数を使用します。Web ページが表示されると、%TIME%変数は現在の時刻に置き換えられます。

カスタム変数

標準の変数に加え、標準テンプレートには、テンプレートをカスタマイズできるカスタム変数が含まれています。これらの変数は、パーセント記号 (%) で囲みます。カスタム変数を使用して、印刷リンク、個々のデータの視点の要素、キーなどを、データの視点の値、ボタン、HTML リンクなどとして Web ページに挿入することができます。

次の表に、カスタムテンプレート変数を示します。

表 21 テンプレートのカスタム変数

変数	説明
%@BUTTON()%	指定のディメンションをボタンとして挿入します。ボタンの名前はディメンションの値に設定されます。ユーザがそのボタンを選択すると、そのディメンションの「データの視点の編集」画面が表示されます。
%@EVALUATE()%	この変数の使用方法については、 115 ページの「@EVALUATE」 を参照してください。
%@LAB()%	指定のディメンションの値を挿入します。
%LAUNCH_PRINT% %LAUNCH_PRINT2%	ユーザが動的レポートを PDF ファイルに出力できるようにします。
%@LINK()%	指定のディメンションの「データの視点の編集」画面に移動する HTML リンクを挿入します。
%@QUERY()%	この変数の使用方法については、 118 ページの「@QUERY」 を参照してください。

変数	説明
%STATIC_PRINT%	ユーザが静的レポートを PDF ファイルに出力できるようにします。この変数は、静的レポートで使用する標準テンプレートに含まれています。
%STATIC_BOOK%	ユーザが静的レポートを PDF ファイルに出力できるようにします。この変数は、静的パッケージで使用する標準テンプレートに含まれています。

注： カスタム変数の関数名と変数はすべて大文字と小文字が区別されます。関数名はすべて大文字でなければなりません。@BUTTON、@LAB、@LINK 変数のキー名は、[データの視点の編集] 画面に表示されるディメンションの大文字と小文字の表記に一致する必要があります。

%@BUTTON()%

指定のディメンションをボタンとして挿入します。ここで、Keyname は挿入するディメンションの名前になり、大文字と小文字が区別されます。ボタンの名前はディメンションの値に設定されます。ユーザがそのボタンを選択すると、そのディメンションの [データの視点の編集] 画面が表示されます。次の構文を使用します。

%@BUTTON(Keyname)%

ここで、Keyname は、挿入するディメンションの ID になり、大文字と小文字が区別されます。

例えば、%BUTTON(ENTITY)%をカスタムテンプレートに追加すると、この変数は実行時に現在のエンティティをラベルに持つボタンに置き換えられます。ユーザがそのボタンを押すと、そのエンティティディメンションの [データの視点の編集] 画面が表示されます。

%@EVALUATE()%

この変数の使用方法については、[107 ページの「データの視点」](#)を参照してください。

%@LAB()%

指定のディメンションの ID を挿入します。ここで、Keyname は挿入するディメンションの名前になり、大文字と小文字が区別されます。この変数は、動的なレポートやチャートで使います。

次の構文を使用します。

%@LAB(Keyname)%

または

%@LAB([Product.][Application.]Keyname)%

ここで、Keyname は、挿入するディメンションの名前になり、大文字と小文字が区別されます。Product は現在のオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアの名前、Application は現在のアプリケーションの名前です。Essbase を使用している場合は、Product を Essbase-servername/Application に、Application を現在のデータベースに設定します。

例

ディメンションごとにドロップダウンリストがあるカスタムのデータの視点バーを表示する HTML フォームで%@LAB()%変数を使用するとします。HTML の次の行は、CUST_POV.HTX Gallery テンプレートに含まれています。

```
<select name=entity>
<option value=usa>USA          - United States
<option value=europe>EUROPE    - Europe
<option value=canada>CANADA    - Canadian Operations
<option value=asia>ASIA        - Europe
<option value=soamer>SOAMER    - South America
<option value=%@LAB(Entity)% selected>%@LAB(Entity)%
</select>
```

テンプレートのこのセクションでは、エンティティディメンションのドロップダウンリストの外観を定義します。実行時に、現在のエンティティの ID が選択したエンティティとしてドロップダウンリストに表示されます。

%@LAUNCH_PRINT()%と%@LAUNCH_PRINT2()%

Adobe Acrobat Reader がインストールされている場合に、ユーザが動的レポートを PDF ファイルに出力できるようにします。%LAUNCH_PRINT%変数は PDF アイコンを組み込みます。変数は動的レポートに使用する標準テンプレートに含まれています。%LAUNCH_PRINT2%変数は PDF アイコンを組み込みません。

例

次の例は、%LAUNCH_PRINT%変数を使用して、adobe.gif というグラフィックファイルとして PDF リンクを挿入します。

```
%IF (PDF) %
<A HREF="%LAUNCH_PRINT%"><IMG SRC="/images/adobe.gif" BORDER=0 WIDTH=17
HEIGHT=22></A><BR>
%ENDIF (PDF) %
```

%@LINK()%

指定のディメンションの [データの視点の編集] 画面の HTML リンクを挿入します。

次の構文を使用します。

```
%@LINK(Keyname)%
```

ここで、**Keyname** は、挿入するディメンションの名前になり、大文字と小文字が区別されます。

例

ユーザが期間ディメンションの現在のメンバを変更できるように、Web ページに HTML リンクを挿入するとします。この場合は、次の行を HTML ファイルに追加します。

```
<A HREF="%LINK(Period)%">Change Period</A>
```

%@QUERY()%

この変数の使用方法については、[118 ページの「@QUERY」](#)を参照してください。

%STATIC_PRINT%

Adobe Acrobat Reader がインストールされている場合に、ユーザが静的レポートを PDF ファイルに出力できるようにします。実行時に%STATIC_PRINT%変数は、静的レポートと PDF アイコン用に生成された PDF ファイルのリンクに置き換えられます。

次の構文を使用します。

%STATIC_PRINT%

例

HTML の次の行は、静的レポートの外観を定義する STATREP.HTX テンプレートに含まれています。

```
<P>%PAGEDEF%%DATE% %TIME% - %FILENAME%  
<BR>%STATIC_PRINT%
```

HTML ファイルの静的レポートである RPPROD.HTM を実行すると、日時の下に PDF アイコンが表示されます。実行時にこの Web ページと置き換えられる HTML は次のようになります。

```
<P>March 30, 1999 11:38 AM - rpprod2.htm  
<BR><A HREF="rpprod2.PDF"></A><BR>
```

%STATIC_BOOK%

Adobe Acrobat Reader がインストールされている場合に、ユーザが静的パッケージを PDF ファイルに出力できるようにします。実行時に、%STATIC_BOOK%変数は静的パッケージと PDF アイコン用に生成された PDF ファイルのリンクに置き換えられます。

次の構文を使用します。

%STATIC_BOOK%

例

HTML の次の行は、静的パッケージの目次の外観を定義する STATBOOK.HTX テンプレートに含まれています。

```
<P>%PAGEDEF%%DATE% %TIME% - %FILENAME%  
<BR>%STATIC_BOOK%
```

静的パッケージの BOOK0001.HTM を実行すると、目次ページの日時の下に PDF アイコンが表示されます。実行時にこの Web ページと置き換えられる HTML は次のようになります。

```
<p>June 19, 1998 11:18 AM - book0001.htm  
<br><a HREF="book0001.PDF"></a><br>
```

標準テンプレートの変更

標準テンプレートは、テキストエディタまたは HTML エディタを使用して変更することができます。例えば、他の Web サイトへのリンクの追加、会社のロゴの追加、背景色の変更、レポートデータへのグリッド線の追加などを行うことができます。カスタム変数を追加して、個々のデータの視点ディメンションを値、リンク、ボタンなどとして Web ページに挿入することもできます。

標準テンプレートに加える変更は、そのテンプレートを使用するすべてのレポート、チャート、またはパッケージに反映されます。動的レポートやチャート、静的レポートやチャート、静的パッケージ用の標準テンプレートがあります。使用可能なテンプレートについては、[161 ページの「標準テンプレートの変更」](#)を参照してください。

► 標準テンプレートを変更するには、次の手順に従います。

1 HTML エディタまたはテキストエディタで変更するテンプレートを開きます。

ヒント： 標準テンプレートは SPIDER.DLL と同じディレクトリにあり、ファイル名に HTX 拡張子が付いています。使用可能なテンプレートについては、[137 ページの「標準テンプレート」](#)を参照してください。

注： テンプレートを変更する前に、テンプレートファイルをバックアップしてください。

2 テンプレートの HTML タグと変数を変更します。

注： <FORM>と</FORM>変数の間にある変数は、削除または移動しないでください。システムはこれらの変数を使用して、システム情報を追跡します。これらの変数を移動または削除すると、システムの動作に異常が生じることがあります。

3 別の名前でファイルを保存します。

カスタムテンプレート

標準テンプレートの代わりに、独自のテンプレートを作成することができます。動的レポートやチャートへのリンクを作成するときに、標準テンプレートの代わりに独自のテンプレートを指定できます。また、静的レポートやパッケージを作成したときにカスタムテンプレートを指定することもできます。

標準テンプレートには、ユーザのログオン ID や現在のデータの視点などのシステム情報の追跡に使用される変数があります。カスタムテンプレートに正しいシステム変数を含めるために、必ず標準テンプレートに基づいてテンプレートを作成してください。それには、テキストエディタや HTML エディタで標準テンプレートを開き、変更を加えた後で、別の名前でドキュメントを保存します。

フレームを使用する動的レポートとチャートのカスタムテンプレートの作成

レポートの既存のテンプレートをコピーして変更し、別の名前で保存することで、フレームを使用する動的レポートとチャートのカスタムテンプレートを作成できます。フレームを使用する動的レポートとチャートの上部のフレームに、データの視点を変更するためのボタンが表示されます。下部のフレームには、1つのレポートまたはチャートが表示されるか、左右にフレームが分割されて、各フレームにレポートまたはチャートが表示されます。

フレームを使用した動的レポートとチャート用のカスタムテンプレートを作成すると、次の操作を行うことができます。

- サイズや位置などのフレームのプロパティの変更
- フレームの追加と除去
- 各フレームに表示されるレポートまたはチャートの Web ページの外観の変更

フレームプロパティの変更

カスタムフレームテンプレートを作成して、フレームプロパティを変更することができます。フレームテンプレートは、複数のフレームを表示する Web ページのレイアウトを定義する HTML ファイルです。例えば、フレームのサイズを変更したり、フレームを追加することが可能です。使用可能なフレームテンプレートの一覧について、[137 ページの「フレームを使用する動的レポートとチャートのテンプレート」](#)を参照してください。

▶ フレームプロパティを変更するには、次の手順に従います。

- 1 カスタマイズするテンプレートの基になる標準フレームテンプレートを、テキストエディタまたは HTML エディタで開きます。

注： 標準テンプレートファイルは spider.dll と同じディレクトリにあります。テンプレートは、テキストエディタやフレーム対応の HTML エディタで開くことができます。テンプレートを変更する前に、テンプレートファイルをバックアップしてください。

- 2 フレームプロパティを変更します。

3 別の名前でファイルを保存します。

レポート、チャート、データの視点ボタンのテンプレートの変更

レポート、チャート、データの視点ボタンの標準テンプレートを変更して、レポート、チャート、データの視点ボタンのカスタムテンプレートを独自に作成することができます。Hyperion Enterprise Reporting Web では、freport.htx テンプレートを使用して、下部のフレームに表示するレポートまたはチャートの外観を定義します。上部のフレームに表示するデータの視点ボタンの外観を定義する場合は、fpov.htx が使用されます。freport.htx または fpov.htx の代わりに使用するテンプレートを作成できます。

注： 行および列見出しが固定された複合レポートの処理には、別のテンプレートが使用されます。複合レポートのテンプレートの一覧については、[142 ページの「フレームを使用しない動的複合レポートとチャートのテンプレート」](#)、[143 ページの「フレームを使用する動的複合レポートとチャートのテンプレート」](#)、[144 ページの「静的複合レポートとチャートのテンプレート」](#)を参照してください。固定された行および列見出しに使用するテンプレートの一覧については、[140 ページの「行および列見出しが固定された動的レポートのテンプレート」](#) および [141 ページの「行および列見出しが固定された静的レポートのテンプレート」](#) を参照してください。

► レポート、チャート、データの視点ボタンのテンプレートを変更するには、次の手順に従います。

1 テキストエディタまたは HTML エディタでテンプレートを開きます。

- レポートやチャートの Web ページの外観を変更する場合は、FREPORT.HTX を開きます。
- データの視点ボタンの Web ページの外観を変更する場合は、FPOV.HTX を開きます。

注： テンプレートファイルは spider.dll と同じディレクトリにあります。テンプレートを変更する前に、テンプレートファイルをバックアップしてください。

2 テンプレートを変更します。

3 別の名前でファイルを保存します。

フレームを使用しない動的レポートとチャートのカスタムテンプレートの作成

フレームを使用しない動的レポートとチャートのテンプレートを変更して、フレームを使用しない動的レポートとチャートのカスタムテンプレートを作成できます。Hyperion Enterprise Reporting Web では、REPORT.HTX テンプレートを使用して、フレームを使用しない Web ページのレポートとチャートの外観を定義します。REPORT.HTX の代わりに使用する独自のテンプレートを作成することができます。

注： 行および列見出しが固定された複合レポートの処理には、別のテンプレートが使用されます。複合レポートのテンプレートの一覧については、[142 ページの「フレームを使用しない動的複合レポートとチャートのテンプレート」](#)、[143 ページの「フレームを使用する動的複合レポートとチャートのテンプレート」](#)、[144 ページの「静的複合レポートとチャートのテンプレート」](#)を参照してください。固定された行および列見出しに使用するテンプレートの一覧については、[140 ページの「行および列見出しが固定された動的レポートのテンプレート」](#) および [141 ページの「行および列見出しが固定された静的レポートのテンプレート」](#) を参照してください。

- ▶ フレームを使用しない動的レポートとチャートのカスタムテンプレートを作成するには、次の手順に従います。

- 1 テキストエディタまたは HTML エディタで `REPORT.HTX` を開きます。

注： `REPORT.HTX` ファイルは、`SPIDER.DLL` と同じディレクトリにあります。このファイルは変更する前にバックアップしてください。

- 2 テンプレートを変更します。
- 3 別の名前でファイルを保存します。

静的レポート、チャート、パッケージのカスタムテンプレートの作成

静的レポート、チャート、パッケージのテンプレートを変更して、静的レポート、チャート、パッケージのカスタムテンプレートを作成できます。静的レポート、チャート、パッケージのカスタムテンプレートを作成する場合、テンプレートファイルの名前は変更せず、カスタマイズしたテンプレートを標準テンプレートと異なるディレクトリに保存します。静的レポート、チャート、パッケージのカスタムテンプレートには、標準テンプレートと同じファイル名を使用する必要があります。すべてのテンプレートファイルを新しいディレクトリにコピーする必要があります。テンプレートファイルについては、[137 ページの「標準テンプレート」](#)を参照してください。

- ▶ 静的レポート、チャート、パッケージのカスタムテンプレートを作成するには、次の手順に従います。
- 1 カスタムテンプレートファイルのディレクトリを作成します。
 - 2 作成したディレクトリに、静的レポート、チャート、パッケージのすべての標準テンプレートファイルをコピーします。
 - 3 カスタムテンプレートファイルのディレクトリから、編集するテンプレートファイルをテキストエディタまたは HTML エディタで開きます。
 - 4 テンプレートを変更し、元の名前で新しい場所に保存します。

カスタムテンプレートの使用

Hyperion Enterprise Reporting Web は、カスタムテンプレートを指定した場合を除き、標準テンプレートを使用してレポート、チャート、パッケージの Web ページを作成します。この項では、次のタイプのカスタムテンプレートの使用方法について説明します。

- フレームを使用する動的レポートとチャートのカスタムテンプレート
- フレームを使用しない動的レポートとチャートのカスタムテンプレート
- 静的レポート、チャート、パッケージのカスタムテンプレート

フレームを使用する動的レポートとチャートのカスタムテンプレート

フレームを使用する動的レポートやチャートのカスタムフレームテンプレートを指定することができます。フレームテンプレートは、サイズや位置などの Web ページのフレームプロパティを決定しますが、フレーム内のレポートやチャートの外観は制御しません。また、個別のフレームにカスタムテンプレートを指定して、各フレームに表示されるレポートやチャートの Web ページの外観を変更することもできます。

動的レポートやチャートへのリンクを作成するときに、カスタムフレームテンプレートを指定します。詳しくは、[73 ページの「動的レポートとチャートへのリンクの作成」](#)を参照してください。

注： カスタムテンプレートを有効にするには、ブラウザの URL 行で TVIEW パラメータと TPOV パラメータを REPORT、CHART、または REPCHART 関数とともに使用します。

フレームを使用しない動的レポートとチャートのカスタムテンプレート

レポートを実行するために設定するハイパーリンクで動的レポートのカスタムテンプレートを指定します。管理プログラムの **Link Builder** を使用して動的レポートやチャートへのリンクを作成するときに、レポートやチャートの表示に使用するカスタムテンプレートを指定します。詳しくは、[72 ページの「リンクページの定義」](#)を参照してください。

テキストエディタや HTML エディタでリンクを作成する場合は、TVIEW パラメータを REPORTS や CHARTS 関数と組み合わせて、使用するテンプレートを指定します。

この例では、REPORT2.HTX をテンプレートに指定します。

```
<A HREF="http://HSPIDER/spider.dll?report&Enterprise&Demo&RPPL1&frame=NO&tview=report2.htx">
```

静的レポート、チャート、パッケージのカスタムテンプレート

静的レポート、チャート、パッケージのカスタムテンプレートファイルを、標準テンプレートファイルとは別のディレクトリに保存します。Hyperion Enterprise Reporting レポートやパッケージを管理プログラムを使用して静的 HTML ファイルに変換する場合、プログラムがテンプレートファイルを検索するディレクトリを指定します。静的パッケージの作成とテンプレートファイルのディレクトリの設定方法については、[65 ページの「静的パッケージの作成」](#)を参照してください。

Gallery テンプレート

Hyperion Enterprise Reporting Web には、追加のテンプレートが DEMO Web サイトの Gallery に用意されており、これを使用して独自のテンプレートを作成することができます。

Gallery の各テンプレートには、テンプレートのカスタマイズ方法について説明したコメントが含まれています。次の表に、Gallery テンプレートを示します。

表 22 フレームを使用する動的レポートとチャートのテンプレート

テンプレート名	説明
dimen.htx	@BUTTON テンプレート変数を使用して、必要なデータの視点ボタンだけを表示します。
excel.htx	現在のレポートを Microsoft Excel に読み込みます。
drill_chart.htx	ユーザがチャートをクリックすると、基準となるレポートが表示されます。
cellbg.htx	JavaScript を使用してレポートの追加の書式設定を行う方法を表示します。このテンプレートの場合、各セルの背景色が異なります。
chart_link.htx	ユーザが現在のレポートのチャートを作成し、チャート作成前にチャートオプションを設定できるようにします。
cust_pov.htx	HTML フォームを使用して、カスタマイズされたデータの視点セクタを表示します。
dynchart.htx	ユーザがチャートとチャートオプションの表示を切り替えて、現在のチャートのチャートオプションを設定できるようにします。
frbottm.htx	データの視点ボタンを上部のフレームではなく下部のフレームに表示します。
nopov.htx	フレームとデータの視点バーなしで動的レポートまたはチャートを表示します。
colors.htx	背景とテキストの色をカスタマイズします。
libwin.htx および frlibwin.htx	レポートライブラリを別のウィンドウに表示します。
動的注釈	動的 HTML 注釈ファイルにレポートをリンクします。

テンプレート名	説明
vrml.htm	ユーザが米国と欧州の財務マップを使用して 3 次元のシーンを移動できるようにします。
stars.htx	条件スクリプトの stars.cbp を使用します。
summary.htx	条件スクリプトの summary.cbp を使用します。
gauge.htx	条件スクリプトの gauge.cbp を使用します。
valid.htx	JavaScript を使用してデータ入力モードでレポートのサンプル検証を行う方法を表示します。

Dimen.htx : ディメンションボタン

DIMEN.HTX テンプレートファイルは、@BUTTON テンプレート変数を使用して、必要なディメンションボタンだけをデータの視点バーに表示する方法を示します。

このテンプレートは@BUTTON 変数を使用して、エンティティと勘定科目のディメンションのディメンションボタンのみを組み込みます。各@BUTTON 変数は、指定のディメンションを変更するボタンを持つ HTML フォームに置き換えられます。@BUTTON のディメンションパラメータを指定する場合、ディメンションラベルの初めの文字を大文字にする必要があります。例えば、period ではなく Period と指定します。このテンプレートでは、[ディメンションの選択] フォームが表示される前に、現在のフレームセットをクリアするために target=_parent パラメータと BASE タグを使用します。使用されない場合、上部のフレームにフォームが表示されます。

このテンプレートを使用する場合は、動的レポート、チャート、条件ページへのリンクを作成するときに、tpov=dimen.htx を指定します。

Excel.htx : Microsoft Excel の起動

excel.htx テンプレートには、現在のレポートデータを Microsoft Excel スプレッドシートに読み込むためのリンクがあります。ページが生成されると、LAUNCH_EXCEL 変数はリンクの作成に必要な構文に置き換えられます。

このテンプレートを使用するには、動的レポートやチャートに次のリンクを指定します。

tvview=excel.htx

Drill_chart.htx : ドリルスルーを使用するチャート

drill_chart.htx テンプレートファイルでは、ユーザがチャートをクリックすると、チャートの基盤となるレポートが表示されます。

テンプレートでは、レポートにリンクするための<A> タグで REPORT 変数が囲まれています。チャートが生成されると、REPORT 変数はチャートの.GIF ファイルに置き換えられます。<A>タグの HREF 部分の SYSTEM、APPLICATION、お

よび REPORTNAME 変数は、現在のチャートを生成した URL から、システム、アプリケーション、およびレポート情報を取得します。これらの変数は、spider.dll を呼び出し、チャートに基づいてレポートを生成する REPORT 関数のパラメータです。

生成したチャートで以前のフレームセットを置き換えるには、target=_parent パラメータが必要です。このパラメータがない場合は、2 つのデータの視点フレームが表示されます。フレームを使用しない場合は、このパラメータを削除してください。

このテンプレートを使用するには、動的チャートに次のリンクを指定します。

```
tvview=drill_chart.htx
```

Chart_link.htx : 現在のレポートのチャートの作成

chart_link.htx テンプレートファイルには、ユーザがチャートオプションを選択してから、現在のレポートのチャートを作成できる HTML フォームが含まれています。また、このテンプレートを動的チャートとともに使用して、ユーザがチャートオプションを変更できるようにすることもできます。

チャートのグラフィック (sp_chrt.gif) のリンクは、チャートオプションフォームを開始する内部ジャンプで、テンプレートのレポートの下にあります。フォームの非表示の入力フィールドには、ページを生成する URL 要求からのシステム、アプリケーション、レポートへの参照が保持されています。tvview フィールドは、チャートのテンプレートを chart_link.htx に設定する非表示の入力フィールドです。フォームの残りのフィールドはチャートオプションを設定します。ユーザが [Create Chart (チャートの作成)] ボタンを選択すると、フォームフィールドがすべて <FORM> タグの form アクションに追加されます。form アクションは、spider.dll の CHART 関数を呼び出して、チャートを生成します。

生成したチャートで以前のフレームセットを置き換えるには、<FORM> タグの target=_parent パラメータが必要です。このパラメータがない場合は、2 つのデータの視点フレームが表示されます。フレームを使用しない場合は、このパラメータを削除してください。

このテンプレートを使用するには、動的レポートやチャートに次のリンクを指定します。

```
tvview=chart_link.htx
```

Cust_pov.htx : カスタマイズされたデータの視点セレクトの表示

cust_pov.htx テンプレートファイルは、HTML フォームを使用して POV セレクタをカスタマイズします。HTML <SELECT> タグは、フォーム内でディメンション一覧を表示する場合に使用します。一覧から選択したディメンションは、ユーザが [Update Report (レポートの更新)] 送信ボタンを選択すると、form アクションに追加されます。form アクションは、レポートを生成する spider.dll の REPORT 関数を呼び出します。SYSTEM、APPLICATION、REPORTNAME 変数に

は、現在の Oracle の Enterprise Performance Management ソフトウェア、アプリケーション、レポートが保存されます。これらは form アクションにも付加されます。このテンプレートを使用する場合は、動的レポートやチャートへのリンクを作成するときに、`tvview=cust_pov.htx` を指定します。

Dynchart.htx : チャートオプションの設定

`dynchart.htx` テンプレートファイルは、スタイルシートと JavaScript を使用して、現在のチャートのチャートオプションを設定できるようにします。ユーザは、ボタンを選択して、チャートとチャートオプションの表示を切り替えることができます。このテンプレートを使用するには、Mozilla Firefox 2.0.x 以降または Microsoft Internet Explorer 6.0 以降のブラウザが必要です。

このテンプレートは、カスケードスタイルシートと JavaScript を使用して、ユーザの選択に応じてチャートまたはチャートオプションの表示と非表示を切り替えます。チャートとチャートオプションのフォームは、DIV 要素内でそれぞれ定義されます。DIV 要素を配置して、表示設定の属性を表示または非表示に設定する場合、スタイルシートを使用します。ボタンのさまざまな状態を示す GIF ファイルも、別の DIV 要素で定義されます。ユーザがボタンの.GIF にカーソルを移動すると、`on-mouse-over` イベントがトリガされます。この結果、各 DIV の表示属性を設定する JavaScript 関数が呼び出されます。

<STYLE>タグで囲まれたスタイルシートセクションは、各 DIV のスタイルクラスを定義します。これらのクラスは、各 DIV の'id='ステートメントによって DIV に割り当てられます。

JavaScript の ShowChart 関数と ShowOptions 関数は、ユーザがボタンの.GIF にマウスを置くと、チャートおよびチャートオプションの DIV を表示または非表示に設定します。また、選択された状態と選択されていない状態の間でボタンの.GIF も切り替わります。IF...ELSE 節は、Mozilla Firefox と Microsoft Internet Explorer のどちらのブラウザを使用しているかを検出し、各ブラウザに適した構文を使用します。

<FORM>タグで定義される非表示の入力フィールドには、現在の Oracle の Enterprise Performance Management ソフトウェア、アプリケーション、レポートへの参照が保持されます。残りのフォームフィールドはチャートオプションを設定します。ユーザが [Apply Settings (設定の適用)] ボタンを選択すると、フォームフィールドがすべて form アクションステートメントに追加されます。

このテンプレートを使用するには、動的チャートに次のリンクを指定します。

`tvview=dynchart.htx`

Frbottm.htx : 下部のフレームのデータの視点ボタン

`frbottm.htx` フレームセットテンプレートファイルでは、上部のフレームではなく下部のフレームにデータの視点ボタンが表示されます。

このテンプレートを使用するには、動的レポートやチャートに次のリンクを指定します。

tfile=frbottm.htm

Nopov.htm : データの視点ボタンの削除

nopov.htm テンプレートファイルは、データの視点ボタンを削除します。フレームを使用していない場合や、動的レポートまたはチャートでデータの視点バーを表示しない場合にこのテンプレートを使用できます。

このテンプレートは、report.htm を変更したバージョンです。POVBAR 変数が削除されたため、このテンプレートを使用して、データの視点ボタンのない動的レポートやチャートを表示することもできます。このテンプレートは、frame=no パラメータとともに使用します。

このテンプレートを使用する場合は、frame=no パラメータとともに動的レポートまたはチャートへの次のリンクを指定します。

tview=no.htm

COLORS : 色のカスタマイズ

colors.htm テンプレートには、カスタマイズされた背景色とテキストの色があります。このテンプレートファイルの<BODY>タグを編集して、色を変更することができます。

このテンプレートを使用するには、動的レポートやチャートに次のリンクを指定します。

tview=colors.htm

動的注釈

このサンプルレポートには、HTML 注釈ファイルへのリンクがあります。リンクは、データの視点の変更に伴って変更します。リンクは、Hyperion Enterprise DEMO アプリケーションの TEXTLINK レポートの総経費の行の行ヘッダーにあります。リンクの HREF 部分で@LAB 関数と@DAT 関数が使用され、データ種別と期間が変更されるたびにリンクが更新されます。サンプル注釈ファイルでは、Actual と Budget データ種別に January、February、March の注釈があります。

Stars.htm : Performance Ratings 条件ベースのページ

Stars.htm は、条件スクリプトの stars.cbP を使用する条件ベースの Web ページです。各国の変数は、星の GIF に置き換えられます。期間と勘定科目のセレクトを表示する場合は、BUTTON 変数が使用されます。この変数は、ページが生成されると、指定のディメンションの HTML フォームに置き換えられます。条件ベースの Web ページについて詳しくは、第 15 章「財務インジケータの作成」を参照してください。

Summary.htx : Financial Highlights 条件ベースのページ

Summary.htx は、条件スクリプトの summary.cbp を使用する条件ベースの Web ページです。条件ベースの Web ページについて詳しくは、[第 15 章「財務インジケータの作成」](#)を参照してください。

Gauge.htx : Gauge 条件ベースのページ

Gauge.htx は、条件スクリプトの gauge.cbp を使用する条件ベースの Web ページです。条件ベースの Web ページについて詳しくは、[第 15 章「財務インジケータの作成」](#)を参照してください。

この章の内容

| | |
|---|-----|
| 財務インジケータについて..... | 173 |
| 条件ベースのページの仕組み | 174 |
| Microsoft VBScript と Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーション | 177 |
| 条件スクリプトについて..... | 178 |
| 条件スクリプトの定義..... | 183 |
| 条件スクリプトの編集..... | 189 |
| CBP ファイルでの高度な操作 | 192 |
| 条件スクリプトのテスト..... | 193 |
| 条件スクリプトのサンプルファイル..... | 193 |

財務インジケータについて

財務インジケータを使用すると、Hyperion Enterprise Reporting Web レポートのデータに基づいて Web ページの外観を変えることができます。最初に、ページが取得するデータの条件を定義します。次に、条件が満たされたときにページの外観がどのように変わるかを指定します。条件スクリプトに基づいて Web ページを作成できます。

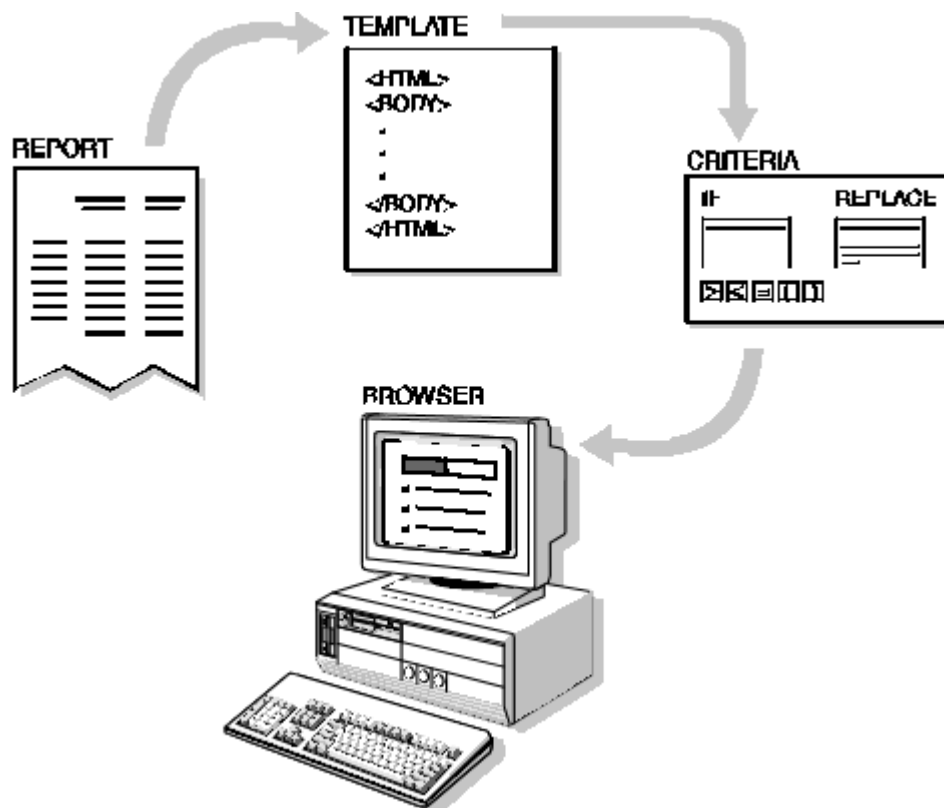
Web ページの財務インジケータの作成に条件スクリプトを使用する場合は、いくつかの方法で条件を定義できます。詳しくは、[183 ページの「条件スクリプトの定義」](#)を参照してください。

条件ベースのページを作成すると、ユーザは財務インジケータが表示されるレポートにアクセスできるようになります。ユーザがそのページを表示すると、システムが条件を評価し、それに従って表示の書式が設定されます。例えば、米国の地図を示すページを作成し、条件ステートメントを使用して州ごとの売上高を取得したり、売上が低下した州を表示したりできます。

ページのグラフィック、テキスト、色、サウンド、その他の特性をレポートの値に基づいて変更したり、レポートの値をページの任意の場所に挿入することもできます。また、条件スクリプトを使用して複数のレポートやオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアのアプリケーションから値を取得し、それらをまとめてカスタマイズされたレポートのように表示できます。例えば、販売予測レポートと予算レポートの値を比較するページをデザインできます。

次の図に、Web ページの財務インジケータを作成するプロセスを示します。

図 18 条件スクリプトのワークフロー



前の図で示したように、条件スクリプトを使用して Web ページを作成する場合は、以下の操作を行います。

- Hyperion Enterprise Reporting を使用して、条件の基準となる値を含むレポートを作成します。
- 条件で置き換える変数を含む条件スクリプト Web ページのテンプレートを作成します。テンプレートの作成には、標準的な HTML エディタまたはテキストエディタを使用します。また、VRML (Virtual Reality Modeling Language) エディタを使用して、3 次元の条件スクリプト Web ページを作成することもできます。
- Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーション管理プログラムを使用して、レポートやテンプレートの条件スクリプトを定義します。また、Hyperion Enterprise Reporting アプリケーションの Web サイトウィザードを使用して、条件ベースのページとして順位付けやスコアカードのページを作成することもできます。
- そのページにアクセスし、Web ブラウザを使用してテストします。システムは条件を評価し、適切な表示条件とともに Web ページを返します。

条件ベースのページの仕組み

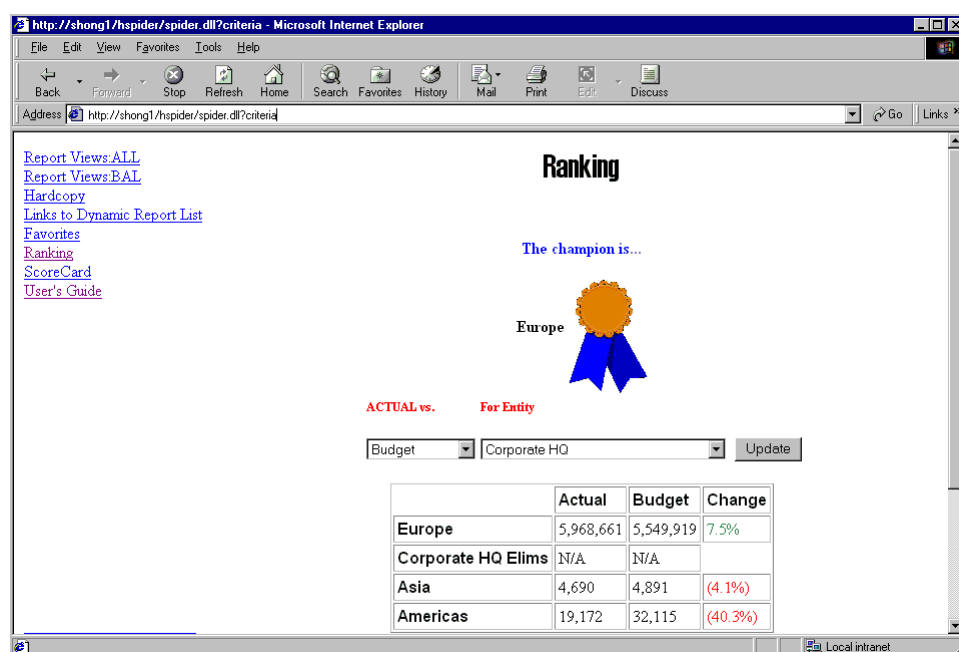
条件ベースのページは HTML テンプレート内で変数の置き換えを使用して、条件付きテキスト、グラフィック、色、その他の要素を Web ページに表示します。

スコアカードや順位付けの条件ベースのページの作成

Web サイトウィザードを使用すると、条件スクリプトを使用しないで順位付けやスコアカードの条件ページを作成できます。Web サイトウィザードが完了すると、条件スクリプトファイル、HTML ページのテンプレート、およびレポート定義ファイルが作成されます。その後、Web ブラウザでページを表示できます。Hyperion Enterprise Reporting Web 管理プログラムで Criteria（条件）モジュールを使用して、順位付けやスコアカードのページを変更できます。

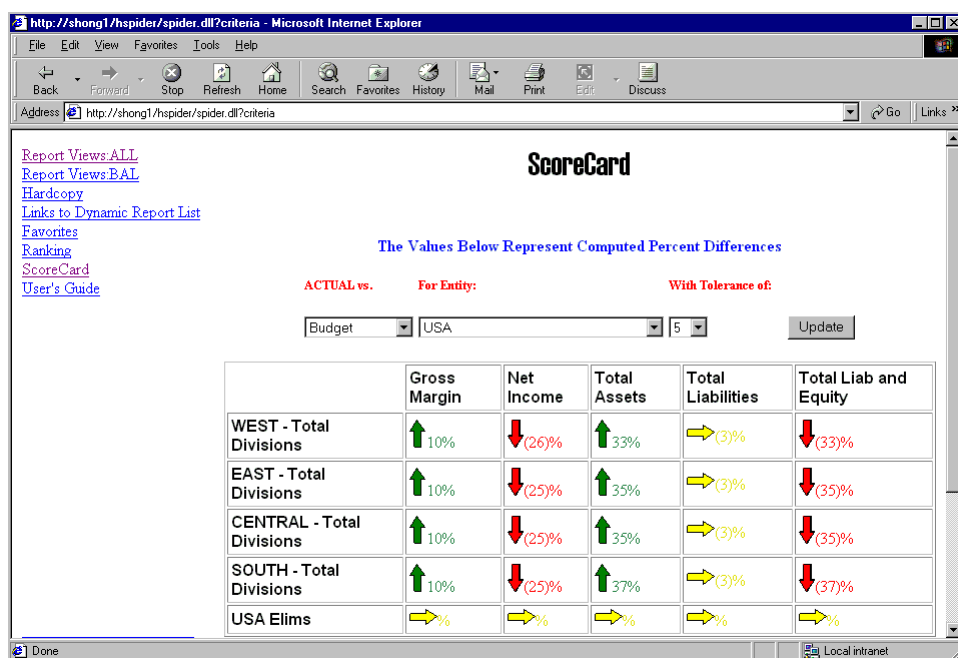
順位付けのページでは、指定した行ディメンションの 2 つのディメンションメンバの値が比較され、算出された差異（%）が、Web サイトウィザードで生成されたレポートに降順に表示されます。比較ディメンション、比較に使用する基本メンバ、生成されたレポートの行にメンバを表示するディメンションの順に選択します。次に順位付けページを示します。このページでは、予算を超えている Sales 勘定科目がページの最初に表示されるのですぐにわかります。予算に満たない Sales 勘定科目は負の値で、かっこで囲まれて表示されます。

図 19 順位付けの条件ベースのページ



スコアカードのページでは、指定した行および列ディメンションの 2 つのディメンションメンバの値が比較され、算出された差異（%）とグラフィックインジケータが、Web サイトウィザードで生成されたレポートに表示されます。比較ディメンション、比較に使用する基本メンバ、生成されたレポートの行にメンバを表示するディメンション、およびレポートの列に表示するディメンションとそのメンバを選択します。次にスコアページを示します。このレポートでは、予算を超えている勘定科目はすべて緑色のテキストで示され、上矢印が表示されるので、すぐにわかります。予算に満たない勘定科目は赤色で示され、下矢印が表示されます。予算内の勘定科目は黄色で示され、水平矢印が表示されます。負の値はすべてかっこで囲まれて表示されます。

図 20 スコアカードの条件ベースのページ



条件ベースのページの作成

条件ベースのページを作成する場合は、次の手順に従います。

レポートの作成

Hyperion Enterprise Reporting を使用して、条件の基準となる値を含むレポートを作成します。レポートに、条件スクリプトで使用する特別なパラメータはありません。ただし、独自の条件スクリプトを作成する場合は、条件の基準となる計算がレポートに含まれている必要があります。例えば、予算に対する実績を条件とする場合は、ACTUAL と BUDGET の列と、それらと比較する計算後の列が必要です。計算後の列の値は、後に条件スクリプトで参照されます。

HTML テンプレートファイルの作成

条件スクリプトを使用してページを作成するには、HTML テンプレートファイル (.HTX)を作成し、条件に基づいてページの外観を変える各場所に変数を置き換えます。変数はドキュメントの任意の位置に配置でき、有効な HTML タグとテキストに置き換えることができます。変数を使用すると、画像やテキストを挿入したり、フォントのサイズ、スタイル、色などの書式プロパティの設定を変更したり、ActiveX コントロールやビデオクリックなどのオブジェクトを挿入したりできます。

次に、変数の使用例を示します。

```
<TD BGCOLOR=%VAR1%>USA</TD>
```

表のセルの背景色を VARI の条件に基づいて設定します。

```
<IMG SRC=%VAR2% ALIGN=LEFT>
```

画像の表示を VAR2 の条件に基づいて変更します。

Sales for Canada were %CAN%

%CAN%を条件に基づいて条件付きテキストに置き換えます。

また、どのデータの視点要素の変数でも挿入できます。これらは、ページが生成されるときに要素の現在のデータの視点の値に置き換えられます。

条件スクリプトの作成

VBScript または OLE オートメーションを使用して独自の条件スクリプトを作成すると、条件ベースのページを作成できます。このスクリプトは、HTML テンプレートで変数を置き換えるための命令を定義します。管理者は、式が「true」と評価される場合に使用する条件レポートと条件付きの置換テキストを参照する式を変数ごとに定義します。例えば、条件レポートで Sales 勘定科目の差異列の値が正の場合は HTML テンプレートファイルの変数%SALES%をグラフィック UP.GIF に、負の場合は DOWN.GIF に置き換えると指定できます。

条件ベースのページへのアクセス

ユーザは Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションの Web ページに加えられたリンクを選択して Web ブラウザから条件ベースのページにアクセスします。ユーザがページにアクセスすると、サーバで次の処理が行われます。

- ページの条件スクリプトを開く。
- レポートを開く。
- ページの HTML テンプレートを開く。
- 条件スクリプトの各変数の条件式が評価され、置換テキストが特定されて各変数が置き換えられる。
- 完了ページがクライアントのブラウザに送信される。

Microsoft VBScript と Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーション

Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションでは Microsoft の VBScript を使用して、Hyperion Enterprise Reporting ユーザにマクロ言語を提供します。ここでは、マクロ言語とは、製品を駆動するスクリプトをユーザが記述してコマンドを作成できる製品機能として大まかに定義します。

Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションのスクリプト

Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションでは、VBScript を介して Visual Basic に類似した構造を使用して、スクリプトがアプリケーションの財務報を定義済みのオブジェクトメソッドに連結します。データをアクションに連結するこの

機能は、大量の財務データから、特定のユーザをターゲットとした有用な情報を適宜取得する強力なツールとなります。正確には、これらのスクリプトを使用すると、条件ベースの表示と財務エージェントを作成できます。

条件ベースの表示では、VBScript を使用して、チェックするデータを決定する条件付きステートメントと、検出されたデータに使用する表示要素を定義できます。

VBScript

VBScript は Visual Basic 言語 (VB) のサブセットです。Hyperion Enterprise Reporting Web では、VBScript を使用すると VB に備わる基本的なフロー制御メカニズム (例えば IF, THEN ステートメントや FOR ループ) を使用できるようになります。これにより、スクリプトの作成時に最大限の柔軟性が発揮されます。さらに VBScript は、VB の普及により多数のユーザが使い慣れているという利点もあります。

VBScript の入手

VBScript の機能は、Microsoft が所有および管理している VBSCRIPT.DLL から派生しています。そのライセンスを所有すると、自由に配布できるようになります。また、VBScript の最新の拡張やアップグレードをインターネットから直接ダウンロードできます。

VBScript について詳しくは、次の Web サイトを参照してください。

<http://msdn2.microsoft.com/en-us/library/ms950396.aspx>

条件スクリプトについて

財務インジケータではなく条件スクリプトに固有の機能は何でしょう。条件スクリプトを使用すると、Hyperion Enterprise Reporting Web レポートのデータに基づいて Web ページの外観を変えることができます。条件スクリプトに基づく Web ページの場合は、ページが取得するデータの条件を最初に定義します。次に、条件が満たされたときにページの外観がどのように変わるかを指定します。ユーザがそのページを表示すると、システムが条件を評価し、それに従って表示の書式が設定されます。例えば、米国の地図を示すページを作成し、条件ステートメントを使用して州ごとの売上高を取得したり、売上が低下した州を表示したりできます。

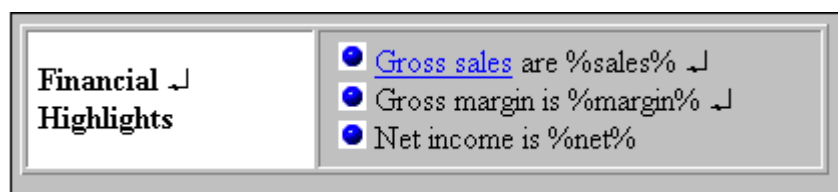
ページのグラフィック、テキスト、色、サウンド、その他の特性をレポートの値に基づいて変更したり、レポートの値をページの任意の場所に挿入することもできます。また、条件スクリプトを使用して複数のレポートやオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアのアプリケーションから値を取得し、それらをまとめてカスタマイズされたレポートのように表示できます。例えば、販売予測レポートと予算レポートの値を比較するページをデザインできます。

ケーススタディ - 条件付き条件を使用して表示要素を変更する

Thompson Sporting Goods の経営者は、総売上高、売上総利益率、および純利益が当期の予算を超えているか下回っているかなどの財務重要項目を要約したフレームを会社の Web ページに作成しようとしています。まずシステム管理者は、総売上高、売上総利益率、および純利益の実際と予算のデータが含まれているレポートを作成します。レポートに CDP1.RPT という名前を付けます。

次に、これら各データ項目の変数が含まれているテンプレートを作成します。次の図に、管理者が作成するテンプレートの一部を示します。

図 21 条件スクリプトのテンプレート



上の図では、管理者は表を使用して財務重要項目を箇条書きのリストで表しています。定義する変数は%SALES%、%MARGIN%、および%NET%です。管理者は、ユーザが詳細を知りたい場合に概要ページから売上総利益率レポートを開くことのできるジャンプを定義します。管理者はテンプレートを SUMMARY.HTX として保存します。

次に、管理者は Hyperion Enterprise Reporting Web 管理プログラムを使用して、変数を評価する方法を指示する条件スクリプトをテンプレートで定義します。管理者は、テンプレートとして SUMMARY.HTX を選択し、VBScript を使用する方法を選択して、新しい条件スクリプトを開始します。予算についてテキストをデフォルトで表示するページを設定してから、%NET%変数に次の条件ステートメントを定義します。

%NET%変数

条件ステートメント

```
CDP1.GetCellDouble(1,5)> "ahead of budget"
```

```
CDP1.GetCellDouble(1,6)
```

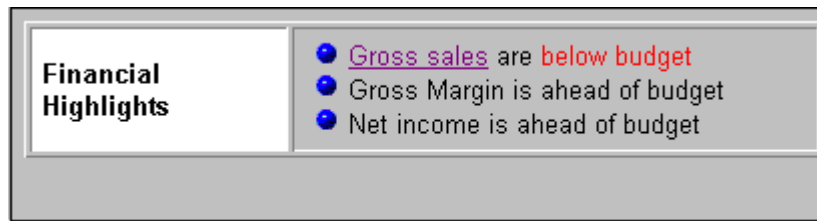
```
CDP1.GetCellDouble(1,5)< "<font color=#C50B21>belowbudget</font>"
```

```
CDP1.GetCellDouble(1,6)
```

最初のステートメントは、行 1、列 5（現在の純利益）の値が行 1、列 6（予算の純利益）より大きい場合に、変数をテキスト「ahead of budget」に置き換えるように指定します。2 番目のステートメントは、値が予算より小さい場合に変数をテキスト「below budget」に置き換えるように指定します。font タグは、テキストを赤で表示するように指定します。

管理者はテンプレートで各変数に同様の条件を定義します。次の図に Web ページを示します。

図 22 条件スクリプト Web ページ



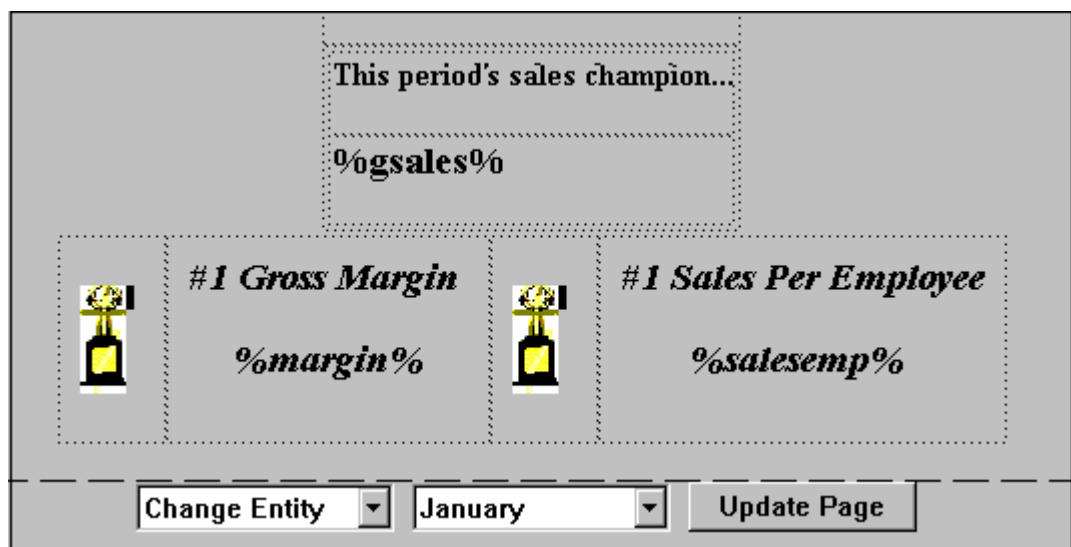
ケーススタディ - デフォルト値を使用して表示要素を変更する

Thompson Sporting Goods の経営者は、売上全般、売上総利益率、従業員別売上で業績優秀者をグラフで表示する条件スクリプト Web ページを作成しようとしています。このページでは、業績優秀者をエンティティ別に表示することもできます。

管理者は、必要なレポートの作成から開始し、優秀者の売上全般、売上総利益率、および従業員別売上の変数が含まれたテンプレートを作成します。また、ユーザーがシステムでエンティティを変更してエンティティごとに業績優秀者を表示できる HTML フォーム要素を追加します。

次の図に、管理者が作成するテンプレートの一部を示します。

図 23 業績優秀者 Web ページ用テンプレート



上の図では、変数%GSALES%、%MARGIN%、および%SALESEMP%が評価され、条件スクリプトで定義されている条件に従って置き換えられます。管理者はテンプレートを WINNERS.HTX として保存します。

次に管理者はテンプレートとして WINNERS.HTX を使用し、VBScript を使用して、Hyperion Enterprise Reporting Web 管理プログラムで新しい条件スクリプトを定義します。その後、総売上高、売上総利益率、および従業員ごとの売上の業績優秀者を見つけるためにシステムがアクセスする必要のある各レポートを追加します。次の 3 つのレポートからデータが取り出されます。

- CDEMP.RPT - 従業員別売上データ
- CDMARG.RPT - 売上総利益率データ
- CDSALES.RPT - エンティティ別売上データ

これらのレポートは、データを大きい値から小さい値に並べ替える機能を備えています。各レポートの売上と利益率のトップは最初の行に表示されます。このように並ぶため、必要なデータを取り出すために複雑な条件ステートメントを定義する必要はありません。該当するレポートから最初の値を取り出すデフォルト値のステートメントを各変数に設定するだけです。

最初の変数%GSALES%には次のデフォルト値を定義します。

```
CDSALES.GetCellString(1,0)
```

この値は、CDSALES.RPT というレポートの最初の行から書式設定された値を取得し、テンプレートが示す場所に表示するように指示します。

2 番目の変数%SALESEMP%には次のデフォルト値を定義します。

```
CDEMP.GetCellString(1,0)
```

この値は、CDEMP.RPT というレポートの最初の行から書式設定された値を取得し、テンプレートが示す場所に表示するように指示します。

3 番目の変数%MARGIN%には次の値を定義します。

```
CDMARG.GetCellString(1,0)
```

この値は、CDMARG.RPT というレポートの最初の行から書式設定された値を取得し、テンプレートが示す場所に表示するように指示します。

次の図に結果の Web ページを示します。

図 24 業績優秀者 Web ページ



条件ベースのページのレポート

Hyperion Enterprise Reporting で条件ベース Web ページのレポートを設定します。レポートに、条件スクリプトで使用する特別なパラメータはありません。条件スクリプトを使用する場合は、条件の基準となる計算がレポートに含まれている必要があります。例えば、予算に対する実績を条件とする場合は、ACTUAL と BUDGET の列と、それらを比較する計算後の列が必要です。計算後の列の値を条件スクリプトで参照します。Hyperion Enterprise Reporting を使用したレポートの作成またはカスタマイズ方法については、『Hyperion Enterprise Reporting ユーザガイド』を参照してください。

注： 条件ベースの Web ページに関連付けられているレポートは、レポートでデータの視点ディメンションを指定した場合を除き、ユーザの現在のデータの視点を使用して実行します。Hyperion Enterprise Reporting を使用して、正しい情報を取得するのに重要なディメンションを指定します。条件ベースの Web ページで複合レポートは使用できません。

条件ベースのページのテンプレート

条件スクリプトを使用して Web ページを作成する場合は、条件ベースの Web ページのテンプレートを作成して、ページのレイアウトで変数が含まれる場所を示すことができます。定義済みの条件に基づいてページの外観を変更する各場所に変数を配置します。例えば、一番売れている製品ラインの地域別リストを表示するテンプレートを作成するとします。地域ごとに変数を定義してから、各変数の条件を定義します。この条件は、その地域で一番売れている製品ラインを示すテキスト文字列で各変数を置き換えるように指定します。

条件ベースのページのテンプレートに配置する変数に、>、<、または@の記号を含めることはできません。@記号は、関数名を含んでいるカスタムテンプレートの変数にのみ使用されます。これらの記号が含まれている変数は、条件を定義するときに変数リストに表示されません。

テンプレートの作成には、標準的な HTML エディタかテキストエディタを使用します。テンプレートの任意の場所に変数を配置して、グラフィックやテキストを挿入したり、書式のプロパティを変更したり、ActiveX コントロールなどのオブジェクトを挿入することができます。詳しくは、[133 ページの「テンプレート」](#)を参照してください。

また、条件ベースの Web ページのテンプレートとして VRML スクリプトを使用することもできます。詳しくは、[183 ページの「VRML 条件スクリプト」](#)を参照してください。

テンプレートで変数を定義したら、拡張子.HTX を付けて HSPIDER ディレクトリにテンプレートを保存します。次に、管理者は Hyperion Enterprise Reporting Web 管理プログラムを使用して、変数を評価して置き換える方法を指示する条件を定義します。

VRML 条件スクリプト

条件ベースの Web ページのテンプレートとして VRML (Virtual Reality Modeling Language) スクリプトを使用できます。VRML は、Web ページに 3 次元のシーンを表示して移動できるシーン記述言語です。

VRML スクリプトは、テキストエディタか標準的な VRML エディタで作成するテキストファイルです。VRML シーンの外観を変更するスクリプトの場所に変数を配置します。以下に、VRML スクリプトで変数を使用できる場所をいくつか示します。

- Text ノードの文字列パラメータ内
- Appearance ノードの Image Texture パラメータ内
- Geometry ノードのサイズパラメータ内
- Material ノードの拡散色パラメータと併用

VRML スクリプトを完了したら、拡張子.WRL を付けて HSPIDER ディレクトリに保存します。

注： テンプレートは HSPIDER に保存する必要はありませんが、別のディレクトリに保存する場合は、テンプレートへの参照にフルパス、ファイル名拡張子を含める必要があります。テンプレートが HSPIDER ディレクトリにある場合は、ファイル名だけで参照でき、パスやファイル名拡張子は不要です。

条件スクリプトの定義

条件スクリプトを定義して、条件ベース Web ページのテンプレートに配置した変数の評価方法を指示します。条件スクリプトを定義する場合は、まずページに使用するテンプレートと、1 つまたは複数のレポートを選択します。次に、テンプレートの各変数を評価する条件と、条件が満たされている場合に変数を置き換える値を指定します。

条件ステートメント内の条件が満たされていると、そのステートメントに関連付けられている値で変数が置き換えられます。変数に複数のステートメントを定義した場合は、最初のステートメントが評価されて true かどうかが判別されます。true でない場合は、2 番目のステートメントが評価されます。1 つが true と評価されるまで、すべてのステートメントが評価されます。条件が満たされなかった場合は、変数に設定したデフォルト値が表示されます。

条件を定義するには、いくつかの方法があります。

- Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションに付属の Visual Basic (VB) Assistant を使用して条件を入力できます。
- Visual Basic (VB) スクリプトとして条件を入力できます。
- OLE オートメーションオブジェクトを参照できます。

注： VBScript の構文について詳しくは、Microsoft の VBScript Web サイト <http://msdn2.microsoft.com/en-us/library/ms950396.aspx> を参照してください。

条件の入力形式は、選択した方法によって異なります。

スクリプトを保存する前に、その構文をチェックできます。開くかつこと閉じるかつこの数の不一致や演算子の欠如など、スクリプト内の構文エラーがシステムでチェックされます。ステートメントに構文エラーがある場合は、エラーを訂正するようにメッセージが表示されます。

注： Hyperion Enterprise Reporting Web 管理プログラムでスクリプトを定義すると、システムでファイルが作成されます。これはメモ帳やその他のテキストエディタを使用して直接編集できます。

【Criteria Scripts（条件スクリプト）】ウィンドウへのアクセス

アプリケーションの条件スクリプトを定義するには、【Criteria Scripts（条件スクリプト）】ウィンドウにアクセスします。条件スクリプトを作成するか、既存のページの条件スクリプトを編集できます。【Criteria Scripts（条件スクリプト）】ウィンドウには Hyperion Enterprise Reporting Web 管理プログラムからアクセスします。

- 【Criteria Scripts（条件スクリプト）】ウィンドウにアクセスするには、次の手順に従います。
- 1 【スタート】ボタンをクリックし、【プログラム】、【Hyperion Solutions】、【Hyperion Enterprise Reporting】、【Web サーバー管理プログラム】の順に選択します。
- 2 【Criteria Scripts（条件スクリプト）】を選択します。

Visual Basic Assistant を使用した条件の定義

Visual Basic（VB）Assistant を使用して条件を定義する場合、適切なレポート参照と必要な演算子を選択して、IF ステートメントと REPLACE ステートメントを定義するためのインターフェイスが提供されます。IF ステートメントは、システムが変数を評価するときに満たされるべき条件を示し、REPLACE ステートメントは、条件が満たされている場合にシステムが変数を置き換える属性を示します。

IF ステートメントを作成するには、次の書式を使用します。

Report.GetCellDouble(Row, Column) Operator Variable

変数 説明

Report データを評価するレポートのファイル名

Row レポートで評価する行の番号

Column レポートで評価する列の番号

Operator 小なり記号 (<) は「より小さい」、大なり記号 (>) は「より大きい」、等号付きの小なり記号 (<=) は「以下」、等号付きの大なり記号 (>=) は「以上」、等号 (=) は「等しい」、山型かつこ (<>) は「等しくない」を示します。

Variable 指定した行と列を評価するときに比べる値。指定したセルが指定の値と一致した場合に、ステートメントは true と評価されます。一致しない場合は、false と評価されます。

ヒント： また、ステートメントの後で接続詞の AND または OR を使用して、別のレポート、行、列などを指定して評価することもできます。

次に条件ステートメントの例を示します。

```
Sales1.GetCellDouble(1,5)>10
```

このステートメントでは、システムはレポート SALES1 を評価して、最初の行の 5 列目の値が 10 より大きいかどうかを判別します。GetCellDouble メソッドについて詳しくは、324 ページの「GetCellDouble メソッド」を参照してください。

REPLACE ステートメントには有効なテキスト文字列か HTML 形式の文字列を使用できます。次は REPLACE ステートメントの例です。

```
  
<font color=#C50B21>below projected</font>
```

最初のステートメントは変数を up.gif という画像で置き換えます。2 番目のステートメントは「below projected」というテキストの変数を赤色のテキストに置き換えます。ステートメントの書式設定について詳しくは、266 ページの「VB Assistant を使用した条件定義 - 構文の補足情報」を参照してください。

注： VB Assistant を使用した条件定義と、Visual Basic スクリプトとしての条件入力とを切り替えることができます。スクリプト方式に切り替えた場合は、既存の条件が適切な形式のスクリプトに変換され、テキスト領域に表示されます。

► VB Assistant を使用して条件を定義するには、次の手順に従います。

- 1 [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択し、[Criteria Scripts (条件スクリプト)] を選択します。
- 2 [新規ページの作成] を選択して [OK] を選択し、次の操作を行います。
 - HTML テンプレートファイルの編集ボックスで、使用するテンプレートを指定するか、[参照] を選択し、テンプレートを選択して [OK] を選択します。
 - [VBScript] を選択します。
 - [OK] をクリックします。
- 3 [レポート] で [追加] を選択し、適切なアプリケーションにログオンして、条件で参照するレポートを選択します。

注： 現在のセッションに必要なアプリケーションに既にログオンしている場合は、再ログオンの指示は表示されません。

- 4 変数リストから、条件を定義する変数を選択します。

- 5 [デフォルト値] 編集ボックスで、テキストまたは有効な HTML 形式のステートメントを使用して変数のデフォルト値を指定します。

ヒント： デフォルトの条件を指定する領域が足りない場合は、[...] ボタンを選択します。

- 6 [条件] で、[編集] を選択して [スクリプトアシスタント] ダイアログボックスにアクセスします。

ヒント： [編集] ボタンは、[スクリプトを表示] チェックボックスがオフの場合にのみ表示されます。[編集] ボタンが表示されていない場合は、[スクリプトを表示] をオフにしてください。

- 7 次の手順に従って条件を定義し、[OK] を選択します。

- [IF] テキスト領域で、レポート、行番号と列番号、演算子、および評価する値を指定します。

ヒント： [レポート] からセルを選択してセルをダブルクリックするか、[追加] を選択して、現在選択しているセルをカーソルの位置に挿入できます。また、別のレポートを選択して [レポート] ドロップダウンリストから表示することもできます。

- [置換後の文字列] テキスト領域で、テキストまたは有効な HTML ステートメントを使用して REPLACE ステートメントを指定します。

- 8 次のいずれかの操作を行います。

- 選択した変数に別の条件ステートメントを定義するには、定義する各ステートメントにステップ 6 と 7 を繰り返します。
- 選択した変数に条件ステートメントをコピーするには、コピーする行にカーソルを置き、[編集] メニューの [コピー] を選択し、ステートメントを貼り付ける行にカーソルを置き、[編集] メニューの [貼り付け] を選択します。
- 別の変数に条件を定義するには、条件を定義する各変数にステップ 3 ～ 7 を繰り返します。

ヒント： [スクリプトをチェック] を選択して構文をチェックし、エラーを訂正します。

- 9 [ファイル] メニューの [保存] を選択して作業内容を保存し、ファイル名と場所を指定してから [OK] を選択します。

VB Assistant を使用した条件定義 - 構文の補足情報

VBScript を使用して条件を入力した場合は、パラメータの入力に制約があります。デフォルト値と REPLACE ステートメントを入力するときに、これらの制約に従う必要があります。

- REPLACE ステートメント内に引用符を含めることができますが、引用符の前後にプラス記号 (+) を入力することはできません。次に、引用符を埋め込んだ REPLACE ステートメントの例を示します。

```
<font color="#C50B21">below budget</font>
```

- GetCellString 以外の VBScript の関数を使用する場合は、その関数を引用符で囲む必要があります。開く引用符と閉じる引用符の後にプラス記号 (+) を入力する必要があります。次の例に、絶対値の関数を入力する方法を示します。

```
"+CStr(abs(RPPL1.GetCellDouble(1,2)))+"
```

注： VBScript の構文について詳しくは、Microsoft の VBScript Web サイト <http://www.microsoft.com/vbscript> を参照してください。

VBScript を使用した条件定義

選択した変数の条件を VBScript を使用して定義する場合は、標準的な Visual Basic の IF、THEN、および ELSE ステートメントを使用して条件を入力します。条件ステートメントごとに、満たす条件を IF および ELSEIF 節で定義し、条件が満たされているときに実行する処理を THEN 節で定義します。さらに、条件が満たされていないときのデフォルト値を ELSE 節で定義します。ステートメントは VBScript の標準的な構文に従う必要があります。詳しくは、Visual Basic のマニュアルを参照するか、VBScript の Web サイト <http://www.microsoft.com/vbscript> を参照してください。

注： 条件をスクリプトとして定義する方法と、VB Assistant を使用して定義する方法を切り替えることができます。VB Assistant を使用する方法に切り替えると、既存のスクリプトが変換され、[Criteria Assistant (条件アシスタント)] ダイアログボックスに表示されます。

次の例に、条件を VBScript として入力する方法を示します。

図 25 VBScript を使用して作成された条件の例

```
if CDP1.GetCellDouble( 1, 5) > CDP1.GetCellDouble( 1,6) then
    Summary.Sub "%sales%", "ahead of budget"
elseif CDP1.GetCellDouble( 1, 5) < CDP1.GetCellDouble( 1, 6) then
    Summary.Sub "%sales%", "<font color=#C50B21>below budget</font>"
else if DEFAULT
    Summary.Sub "%sales%", "on budget"
end if
```

この例では、IF ステートメントで GetCellDouble を使用して、CDP1 レポートの指定の行と列から値を取得し、同じレポートの別の列の値と比較します。最初のセル参照の値が 2 番目のセル参照の値より大きい場合は、変数%SALES%がテキスト「ahead of budget」に置き換えられます。

IF ステートメントが false と評価された場合は、最初の ELSEIF 節が評価されます。最初の ELSE IF 節で、最初に取得した値が 2 番目に取得した値よりも小さいかどうか評価されます。小さい場合は、変数%SALES%がテキスト「below budget」に置き換えられ、赤色に書式設定されます。

ELSE IF ステートメントが false と評価された場合は、最後の ELSE ステートメントに移動します。最後の ELSE ステートメントは、前のステートメントのどちらも true と評価されなかった場合に変数をテキスト「on budget」に置き換えるようシステムに指示します。

注： また、条件ステートメントで GetCellString 関数を使用して、値の代わりに書式設定された文字列を取得することもできます。

➤ VBScript を使用して条件を定義するには、次の手順に従います。

- 1 [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択し、[Criteria Scripts (条件スクリプト)] を選択します。
- 2 [新規ページの作成] を選択して [OK] を選択し、次の操作を行います。
 - HTML テンプレートファイルの編集ボックスで、使用するテンプレートを指定するか、[参照] を選択し、テンプレートを選擇して [OK] を選択します。
 - [VBScript] を選択します。
 - [OK] をクリックします。
- 3 [レポート] で [追加] を選択し、適切なアプリケーションにログオンして、条件で参照するレポートを選択します。
- 4 変数リストから、条件を定義する変数を選択します。
- 5 [View Script (スクリプトの表示)] を選択します。

注： 現在のセッションで必要なアプリケーションに既にログオンしている場合は、再ログオンの指示は表示されません。

- 6 [条件] テキスト領域にカーソルを置き、標準的な Visual Basic のスクリプト構文を使用して条件を指定します。

ヒント： 条件ステートメントの切り取り、コピー、貼り付けには [編集] メニューを使用します。

- 7 次のいずれかの操作を行います。
 - 選択した変数に別の条件ステートメントを定義するには、定義する各ステートメントにステップ 6 を繰り返します。
 - 別の変数に条件を定義するには、条件を定義する各変数にステップ 3～6 を繰り返します。

ヒント： [Check Syntax (構文のチェック)] を選択すると、いつでも構文をチェックできます。

- 8 [ファイル] メニューの [保存] を選択して作業内容を保存し、ファイル名と場所を指定してから [OK] を選択します。

OLE オートメーションオブジェクトを使用した条件の定義

OLE オートメーションを使用して条件を定義する場合は、外部で定義された OLE オートメーションオブジェクトの呼び出しと、オブジェクトが定義する関数の 1 つを作成します。条件を [Criteria Scripts (条件スクリプト)] ウィンドウ内で定義する変数は指定しません。変数と条件ステートメントはオートメーションオブジェクトで定義されます。

詳しくは、[189 ページの「OLE オートメーションオブジェクトを使用した条件の定義」](#)を参照してください。

- ▶ OLE オートメーションオブジェクトを使用して条件を定義するには、次の手順に従います。
 - 1 [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択し、[Criteria Scripts (条件スクリプト)] を選択します。
 - 2 [新規ページの作成] を選択して [OK] を選択し、次の操作を行います。
 - HTML テンプレートファイルの編集ボックスで、使用するテンプレートを指定するか、[参照] を選択し、テンプレートを選択して [OK] を選択します。
 - [OLE オートメーションオブジェクト] を選択します。
 - [OK] をクリックします。
 - 3 [ProgID] 編集ボックスに、呼び出す OLE オートメーションオブジェクトのプログラム ID を入力します。
 - 4 [関数] 編集ボックスに、OLE オートメーションオブジェクト内から呼び出す関数の名前を入力します。
 - 5 [レポート] で [追加] を選択し、適切なアプリケーションにログオンして、条件で参照するレポートを選択します。

注： 現在のセッションに必要なアプリケーションに既にログオンしている場合は、再ログオンの指示は表示されません。

- 6 [ファイル] メニューの [保存] を選択して作業内容を保存し、ファイル名と場所を指定してから [OK] を選択します。

条件スクリプトの編集

既存の条件スクリプトを編集して、条件の 1 つを変更したり、定義した要素を表示したりできます。編集できる項目は、条件スクリプトの定義に使用した方法によって異なります。次のような違いがあります。

- OLE オートメーションを使用した場合は、オートメーション ProgID と呼び出す関数を編集するか、ページのレポート参照を編集できます。
- Visual Basic のどちらかの方法を使用した場合は、ページの参照先レポートまたは変数のデフォルト値を編集するか、選択した変数の条件を追加、編集、または削除できます。

VB Assistant を使用した条件スクリプトの編集

▶ VB Assistant を使用して条件スクリプトを編集するには、次の手順に従います。

- 1 [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択し、[Criteria Scripts (条件スクリプト)] を選択します。
- 2 [既存ページを開く] を選択し、[OK] を選択してから、編集する条件を選択し、[開く] を選択します。

ヒント： [Criteria Scripts (条件スクリプト)] ウィンドウが既にある場合は、[ファイル] メニューの [開く] を選択して、編集するページを選択します。編集にいつでも [スクリプトをチェック] を選択して、構文をチェックできます。

- 3 [変数] 編集ボックスで、条件を編集する変数を選択します。
- 4 変数のデフォルト値を変更するには、[デフォルト値] 編集ボックスのデータを編集します。

ヒント： ダイアログボックスの長さを超えるデフォルト値のステートメントを編集する必要がある場合は、[...] ボタンを選択できます。

- 5 変数の条件ステートメントを編集するには、必要に応じて次の操作を行います。
 - 選択した変数の条件ステートメントを追加するには、[条件] で [追加] を選択してから、条件と置き換える値を指定し、[OK] を選択します。
 - 選択した変数の既存のステートメントを編集するには、編集する行にカーソルを置き、[編集] を選択してから、変更を加えて [OK] を選択します。
 - 選択した変数のステートメントを削除するには、削除する行にカーソルを置き、[除去] を選択します。
- 6 ページのレポートを変更するには、次のいずれかの操作を行います。
 - レポートをリストに追加するには、[レポート] で [Add Reports (レポートの追加)] を選択し、適切なアプリケーションにログオンし、レポートを選択して [OK] を選択します。

注： 現在のセッションに必要なアプリケーションに既にログオンしている場合は、再ログオンの指示は表示されません。

- リストからレポートを削除するには、レポートを選択して [除去] を選択します。

注： 条件ステートメントで参照されているレポートを削除した場合は、ブラウザで条件を実行しようとしたときにエラーが表示されます。レポートを削除するときは、条件内のその参照をすべて削除してください。

- 7 [ファイル] メニューから [保存] を選択して変更内容を保存します。

VBScript を使用した条件の編集

▶ VBScript を使用して条件スクリプトを編集するには、次の手順に従います。

- 1 [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択し、[Criteria Scripts (条件スクリプト)] を選択します。
- 2 [既存ページを開く] を選択し、[OK] を選択してから、編集する条件を選択し、[開く] を選択します。

ヒント： [Criteria Scripts (条件スクリプト)] ウィンドウが既に開いている場合は、[ファイル] メニューの [開く] を選択して、編集するページを選択します。編集にいつでも [スクリプトをチェック] を選択して、構文をチェックできます。

- 3 [変数] 編集ボックスで、条件を編集する変数を選択します。
- 4 [View Script (スクリプトの表示)] を選択します。
- 5 変数の条件ステートメントを編集するには、必要に応じて次の操作を行います。
 - 選択した変数の条件ステートメントを追加するには、[条件] テキスト領域にカーソルを置き、新しいステートメントを入力します。
 - 選択した変数の既存のステートメントを編集するには、[条件] テキスト領域にカーソルを置き、適切なステートメントを編集します。
 - 選択した変数のステートメントを削除するには、削除するステートメントをハイライトし、[削除] を押します。
- 6 ページのレポートを変更するには、次のいずれかの操作を行います。
 - レポートをリストに追加するには、[Add Reports (レポートの追加)] を選択し、適切なアプリケーションにログオンし、レポートを選択して [OK] を選択します。

注： 現在のセッションで必要なアプリケーションに既にログオンしている場合は、再ログオンの指示は表示されません。

- リストからレポートを削除するには、レポートを選択して [除去] を選択します。
- 7 [ファイル] メニューから [保存] を選択して変更を保存します。

OLE オートメーションを使用した条件スクリプトの編集

▶ OLE オートメーションを使用して条件スクリプトを編集するには、次の手順に従います。

- 1 [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択し、[Criteria Scripts (条件スクリプト)] を選択します。

- 2 [既存ページを開く] を選択し、[OK] を選択してから、編集する条件を選択し、[開く] を選択します。

ヒント： [Criteria Scripts (条件スクリプト)] ウィンドウが既にある場合は、[ファイル] メニューの [開く] を選択して、編集するページを選択します。

- 3 呼び出すオブジェクトを変更するには、[ProglD] 編集ボックスで値を編集します。
- 4 選択したオブジェクトの別の関数を呼び出すには、[関数] 編集ボックスの値を編集します。
- 5 ページのレポートを変更するには、次のいずれかの操作を行います。
 - レポートをリストに追加するには、[Add Reports (レポートの追加)] を選択し、適切なアプリケーションにログオンし、レポートを選択して [OK] を選択します。

注： 現在のセッションで必要なアプリケーションに既にログオンしている場合は、再ログオンの指示は表示されません。

- リストからレポートを削除するには、レポートを選択して [除去] を選択します。
- 6 [ファイル] メニューから [保存] を選択して変更内容を保存します。

CBP ファイルでの高度な操作

条件ベースのページ (GBP) ファイルで次のような高度な操作を行うことができます。

- CBP ファイルで Hyperion Enterprise Reporting の .REP ファイルにアクセスする。
- CBP ファイルで \$(CBPDIR) 変数を使用して、CBP ファイルと同じディレクトリパスにある .HTX ファイルまたは .REP ファイルを参照する。

.Rep ファイルへのアクセス

Hyperion Enterprise Reporting では、レポート定義は各レポートの .REP ファイルに記述されています。Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションで条件ベースのページ (.CBP ファイル) のレポートにアクセスするが、そのレポートを Web アプリケーションで使用可能にしない場合は、レポートの .REP ファイルにアクセスできます。

例えば、Hyperion Enterprise DEMO アプリケーションには、CBPMAIN レポートを使用する条件ベースのページが含まれています。このレポートを DEMO アプリケーションから除去して、ユーザが Hyperion Enterprise Reporting でアクセスできないようにし、Web アプリケーションで条件ベースのページを保持することをお勧めします。これを実行するには、まず CBPMAIN.REP ファイルを \HSPIDER ディレクトリに移動し、DEMO アプリケーションにログオンして Hyperion Enterprise Reporting を起動します。左側のナビゲーションウィンドウで、CRITERIA レポー

トセットに移動し、CBPMAIN レポートを削除します。最後に、メモ帳で CPANEL.CBP ファイルを開き、\$REPORT 行を次のように変更します。

```
'$REPORT Enterprise,DEMO,CBPMAIN.REP,CBP1
```

CBPMAIN レポートは条件ベースの CPANEL ページでまだ使用できますが、Hyperion Enterprise Reporting では使用できません。

\$(CBPDIR)変数の使用

CBP ファイルで\$(CBPDIR)変数を使用して、CBP ファイルと同じディレクトリパスにあるテンプレート (.HTX ファイル) または.REP ファイルを指定できます。この条件ベースの Web ページを Web ブラウザで表示すると、\$(CBPDIR)変数が CBP ファイルのディレクトリパスに置き換えられます。

例えば、CBP ファイルで MYFILE.HTX と名付けたカスタムテンプレートを使用するとします。CBP ファイルの\$HTXTEMP 行を次のように変更します。

```
'$HTXTEMP $(CBPDIR)myfile.htx
```

CBP ファイルと同じディレクトリにある myfile.htx ファイルがシステムで使用されます。

また、CBP ファイルの\$REPORT 行に\$(CBPDIR)変数を含めることもできます。次にその例を示します。

```
'$REPORT Enterprise,DEMO,$(CBPDIR)CBPMAIN.REP,CBP1
```

条件スクリプトのテスト

ブラウザで条件スクリプト Web ページをテストするには、事前に確立されている条件ページへのリンクを選択するか、Web ページの URL で CRITERIA 関数を使用します。

条件スクリプトのサンプルファイル

Hyperion Enterprise Reporting Web をインストールすると、サンプルの条件テンプレート、スクリプト、関連する一連のグラフィックなどが含まれています。これらのファイルで DEMO システムの条件スクリプトの機能を確認したり、グラフィックを独自の条件スクリプトで使用したりできます。次の表に、インストール時に提供されるサンプルファイルを示します。これらのファイルは INETPUB\SCRIPTS ディレクトリにインストールされます。








表 23 サンプルテンプレートと条件スクリプトファイル

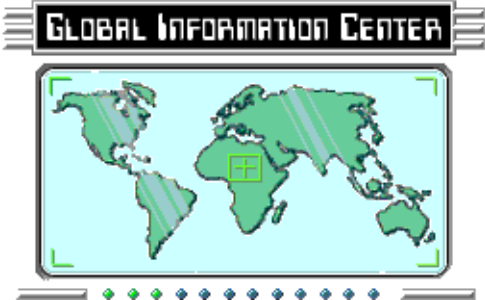








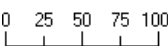
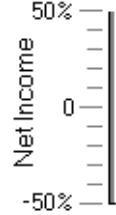



| ファイル | 内容 |
|------------|---|
| BWATCH.CBP | Budget Watch Web ページを作成するために BWATCH.HTX ファイルで使用される条件スクリプト。選択したエンティティと期間の総売上高、売上原価、および売上総利益率が予測をどれほど上回るか、または下回るかを示します。 |

| ファイル | 内容 |
|-------------|---|
| BWATCH.HTX | Budget Watch サンプル Web ページで使用されるテンプレートファイル。総売上高、売上原価、および売上総利益率の変数が含まれています。 |
| SUMMARY.CBP | Financial Highlights Web ページを作成するために SUMMARY.HTX ファイルで使用される条件スクリプト。売上総利益率、売上、および純売上高が予算を超えているか下回っているかを示します。 |
| SUMMARY.HTX | Financial Highlights サンプル Web ページで使用されるテンプレートファイル。売上総利益率、売上、および純売上高の変数が含まれています。 |
| WINNERS.CBP | Best Performance Web ページを作成するために WINNERS.HTX ファイルで使用される条件スクリプト。総売上高、売上総利益率、および従業員別売上の業績が第 1 位のエンティティを示します。 |
| WINNERS.HTX | Best Performance サンプル Web ページに使用されるテンプレートファイル。総売上高、売上総利益率、および従業員別売上の変数が含まれています。 |

次の表に、INETPUB\WWWROOT ディレクトリ内の IMAGES サブディレクトリにインストールされるサンプルグラフィックをいくつか示します。

表 24 サンプル条件ビットマップ

| ビットマップ | ファイル名 |
|---|--------------|
|  | blueball.gif |
|  | bwmap.gif |
|  | down.gif |
|  | gauge.gif |
|  | green.gif |
|  | green2.gif |
|  | half.bmp |

| ビットマップ | ファイル名 |
|---|--------------|
|  | map.gif |
|  | meter_1.gif |
|  | meter_2.gif |
|  | meter_3.gif |
|  | minus.gif |
|  | plus.gif |
|  | pointer2.gif |
|  | red.gif |
|  | red2.gif |
|  | scale.gif |
|  | scale2.gif |
|  | trophy2.gif |
|  | trophyt.gif |
|  | up.gif |

この章の内容

| | |
|-----------------------------------|-----|
| 財務エージェント | 197 |
| ケーススタディ | 198 |
| [財務エージェント管理] ダイアログボックスへのアクセス..... | 202 |
| エージェントシステムのオプションの定義 | 202 |
| エージェントの定義 | 203 |
| エージェントのカスタマイズ | 217 |
| エージェントの編集 | 224 |
| エージェントのコピー | 226 |
| エージェントの削除 | 227 |
| エージェントモニタサービス | 227 |
| エージェントモニタサービスの設定 | 228 |

財務エージェント

財務エージェントを使用すると、オラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアのデータ変更を自動的に監視できます。アプリケーションのデータを定期的にチェックして、特定の条件が存在するかどうかを確認するには、財務エージェントを作成して、スケジュールを決めます。例えば、今期の経費を監視するエージェントを作成して、前年度の同一期間の経費と比較することもできます。ユーザは Web ブラウザから使用できるエージェントの一覧にアクセスします。ユーザは、目的のエージェントを登録できます。

エージェントを作成すると、指示したタイミングでアプリケーションのデータが自動的にチェックされます。エージェントで監視対象の条件が検出されると、エージェントに登録されているすべてのユーザに通知が送信されます。通知を送信するためにエージェントが満たす必要のある条件については、[217 ページの「電子メール通知」](#)を参照してください。

エージェントを使用する場合は、次の操作を行うことができます。

- 新しいエージェントを作成するか、エージェントをコピーして変更を加えることによって、エージェントを定義できます。
- エージェントに変更を加える必要がある場合は、エージェントを編集できます。
- 不要になったエージェントは削除できます。
- システムレベルのオプションを設定して、エージェントの機能を制御できます。

- エージェントのアクティビティを監視して、データのチェック時やユーザへの通知の送信時にエラーが検出されたかどうかを確認できます。

Hyperion Enterprise Reporting でエージェントのレポートを設定します。エージェントとともに使用するためにレポートに特別に必要なパラメータはありませんが、エージェントがチェックするデータとエージェントに必要な計算がレポートに含まれている必要があります。例えば、エージェントが予算に対して売上総利益率をチェックする場合は、レポートには Actual と Budget の列、およびそれらを比較する列が必要です。エージェントに条件が定義されている場合は、比較列の値を参照します。Hyperion Enterprise Reporting を使用したレポートの作成またはカスタマイズ方法については、『Hyperion Enterprise Reporting ユーザガイド』を参照してください。

ケーススタディ

手順 1：レポートの定義

Thompson Sporting Goods の経営者は今年度の今期と前年度の同一期間を比較してそれらの経費状況を追跡するために、エージェントを作成しようとしています。経費が前年度の同一期間の経費より 5 パーセント以上多い場合に、エージェントから購読ユーザに通知するつもりです。

エージェントを作成したシステム管理者は、既存のレポートの調査を開始します。マーケティング、研究開発、一般管理費、および運営費の現在の経費と前年度の同じ値を比較したレポートが既に存在します。次の図に、初期状態のレポートを示します。

図 26 エージェントのレポート

Friday, January 11, 2002

| | USA
January 2002 | |
|---------------------|---------------------|-----------|
| | Actual | Last Year |
| Marketing Expense | 529 | 550 |
| R & D Expense | 0 | 100 |
| General & Admin Exp | 531 | 480 |
| Operating Expenses | 1,348 | 1,389 |

管理者は、レポートを編集して、Actual と Last Year を比較する Variance 列を追加しました。最後に、レポートを AGRANGE.RPT という名前で保存しました。次の図に、編集されたレポートを示します。

図 27 編集されたエージェントのレポート

Friday, January 11, 2002

| USA | | | |
|---------------------|--------|-----------|----------|
| January 2002 | | | |
| | Actual | Last Year | Variance |
| Marketing Expense | 529 | 550 | 4.0% |
| R & D Expense | 0 | 100 | 100% |
| General & Admin Exp | 531 | 480 | (4.6%) |
| Operating Expenses | 1,348 | 1,389 | 3.0% |

手順 2 : 条件の定義

レポートをカスタマイズした後に、管理者は Expense Analysis というエージェントを作成しました。VBScript を使用して、エージェントの条件を定義します。

条件を定義するには、最初に AGRANGE.RPT レポートをエージェントに関連付け、デフォルトのデータの視点を設定します。レポートを追加して、次にエージェントが実行される最初の期間にデフォルトのデータの視点を設定します。

管理者は、各行の Variance 列にある数値をチェックするため、次のスクリプトを入力しました。

```
NotifyFlag=0
'行が条件を満たすかどうかを示すフラグ。
'GetNumRowsを使用してレポートの行数を指定し、すべての行をループします。
For i = 1 to AGRANGE.GetNumRows
IF AGRANGE.GetCellDouble( i, 3) > 7 Then
'現在の行の列3をチェックします。
NotifyFlag=1
'条件を満たす行にFLAGの1を設定します。
End If
Next
If NotifyFlag=1 Then AgentEval.Notify()
'行が条件を満たす場合に通知を送信します。
```

注： データ条件を定義する方法については、[203 ページの「エージェントの定義」](#)を参照してください。

手順 3 : メッセージの定義

条件を定義したら、管理者はシステムから各通知とともに配布されるデフォルトのメッセージを作成します。メッセージを定義するには、スクリプトに Agent.DefMsg プロパティを設定します。メッセージには 2 つの部分があり、最初の部分では、エージェントが通知を送信するために発生する必要がある条件を指定します。メッセージのこのセクションは、エージェントを何度実行しても変わりません。メッセージの最初の部分には次に示すスクリプトを入力します。

```
Agent.DefMsg="These accounts exceed prior year by more than 5%:" Chr(13)
Chr(10)
```

このステートメントでは、CHR(13)および CHR(10)は、作成される Web ページを書式設定するときに、復帰改行および改行を挿入するようにシステムに指示します。このステートメントはループの結果に応じて変更される必要がないため、メッセージステートメントのこの部分は手順 2 で定義された FOR, NEXT ループの外に挿入されます。

メッセージの 2 番目の部分は、条件が発生したレポートと、データが検出された特定のエンティティおよび勘定科目を指定します。メッセージのこのセクションはエージェントが実行されるごとに、データベースのデータに基づいて変更されます。管理者は、メッセージを定義して、勘定科目とエンティティの詳細レポートへのリンクを含めました。メッセージを作成するには、次の関数を使用します。

- AGRANGE.GetCellString(i,0)。レポート AGRANGE.RPT から現在の行見出しを取得し、通知がトリガされたエンティティおよび勘定科目を識別します。
- AddLink()。データ条件が発生した行ごとの詳細レポートへのリンクを作成します。行見出しはリンクテキストとして使用されます。
- GetCellPOVString(i,2)。現在の行のデータの視点を取得し、詳細レポートのデータの視点を設定します。

管理者は次の VBScript を使用して、メッセージの 2 番目のセクションをメッセージの最初のセクションに追加します。

```
Call AgentEval.AddLink("/hspider/spider.dll?
report&demo&enterprise&AGDETAIL&frame=no"+AGRANGE.GetCellPovString,AGRAN
GE.GetCellString(i,0))
```

管理者は、メッセージステートメントの 2 番目のセクションを、定義した VBScript 条件の FOR, NEXT ループ内に挿入します。行が条件を満たすたびに、その行の適切なエンティティおよび勘定科目を示すようにメッセージが変更されます。最終的なスクリプトを次に示します。

```
NotifyFlag=0
Agent.DefMsg="These accounts exceed prior year by more than 5%" Chr(13)
Chr(10)
For i = 1 to AGRANGE.GetNumRows
IF AGRANGE.GetCellDouble( i, 3) > 7 Then
Agent.DefMsg=Agent.DefMsg AgentEval.AddLink("/hspider/spider.dll?
report&demo&enterprise&AGDETAIL&frame=no"+
agrange.GetCellPovString, AGRANGE.GetCellString(i,0))
NotifyFlag=1
End If
Next
If NotifyFlag=1 Then AgentEval.Notify()
```

手順 4 : アクションの選択

条件を定義した後に、管理者はユーザが選択できるオプションとして [アクション] の電子メールおよび Web 通知を選択します。カスタムメッセージが既に定義されているため、このタブの [メッセージ] 編集ボックスを空白のままにします。

手順 5 : エージェントのスケジュール設定

管理者は、次の 6 か月間に毎週 1 回エージェントを実行することにしました。毎週月曜日にエージェントを実行するには、各月曜日の日付を手動で入力するかわりに [値の挿入] オプションを使用します。[値の挿入] ダイアログボックスで、WEEKLY の期間単位を選択し、日として MONDAY を選択します。管理者は、エージェントを実行する時刻として「9:00 AM」と入力しました。

エージェントが今期を常にチェックするように、スケジュールされた時刻ごとのデフォルトのデータの視点を上書きする必要があります。これによって期間は常に今期に設定されます。デフォルトのデータの視点を上書きするには、それぞれのスケジュールされた日付と時刻を選択し、データの視点バーで期間を適切な期間に変更します。

手順 6 : セキュリティの定義

管理者はエージェントのセキュリティを設定することにしました。エージェントを要求した経営者から管理者に、経費が 5 パーセントを上回った場合に通知する必要があるユーザの一覧が提供されました。管理者は、指定された各ユーザの Windows ユーザ名を選択します。

手順 7 : エージェントの Spider.ini 設定の定義

エージェントを作成するプロセスの最終段階として、管理者は次に示す spider.ini ファイルの設定を行います。

- エージェントが送信しようとする電子メールが配信不能な場合に、システムが使用できる返信先アドレス
- 電子メールを送信する前に通知の受信者の存在を確認するようにシステムに指示する確認設定。受信者が存在しない場合は、エラーログがエージェントモニタプログラムに記録され、そのアドレスに電子メールは送信されません。
- SMTP またはネットワーク接続が遅延している場合にシステムの待機時間を指定する 2 種類のタイムアウト設定。単位はミリ秒です。
- システムが電子メール通知に関する一連の詳細メッセージを記録できるファイルへのパスを指定するログファイル設定

管理者は次の設定を入力しました。

```
[Agent-Email]
ReturnAddress=jsignet@corp.com
Verify=1
SendTimeout=5000
ReceiveTimeout=5000
LogFile=c:\inetsrv\spider\Email.log
```

[財務エージェント管理] ダイアログボックスへのアクセス

アプリケーションのエージェントを操作するときは、[財務エージェント管理] ダイアログボックスにアクセスします。[財務エージェント管理] ダイアログボックスで、エージェントを作成、編集、コピーまたは削除できます。または、エージェントのシステムレベルのオプションを定義できます。Hyperion Enterprise Reporting Web 管理プログラムから [財務エージェント管理] ダイアログボックスにアクセスします。

- ▶ [財務エージェント管理] ダイアログボックスにアクセスするには、次の手順に従います。
- 1 [スタート] ボタンをクリックし、[プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択して管理プログラムにアクセスします。
- 2 [エージェント] を選択します。

エージェントシステムのオプションの定義

エージェントオプションを定義して、エージェントのシステムレベルのパラメータを設定します。設定できる 2 つのオプションを次に示します。

- エージェントを定義するときに使用するカスタム VBScript 関数が含まれているファイルのファイル名を指定します。
- エージェントで有効なアクションを設定するか、新しいアクションを設定します。

アクションは、監視対象のデータ条件が発生したときにエージェントが行う手順です。システムには、電子メールおよび Web 通知の 2 つのアクションがデフォルトで用意されています。エージェントで使用する新しいアクションを作成することもできます。アクションを使用するには、次の 2 つの操作を行う必要があります。

- アクションに必要な設定を行います。例えば、エージェントで電子メールのアクションを使用するには、ホスト名とポート名を設定し、失敗した配信の返信先アドレスを指定する必要があります。
- エージェントを定義するときに、1 つ以上のアクションを有効にします。

アクションを定義するときに、アクションを処理するために必要な関数、ロジック、およびパラメータを含んでいる OLE オートメーションオブジェクトを作成する必要があります。アクションを定義し、呼び出す必要がある OLE オートメーションオブジェクトおよび関数にアクションをリンクして、必要なその他の設定を行います。OLE オートメーションオブジェクトの定義については、OLE 製品のマニュアルを参照してください。

▶ エージェントシステムのオプションを定義するには、次の手順に従います。

- 1 [スタート] メニューから [プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択して管理プログラムにアクセスし、[エージェント] を選択します。
- 2 [オプション] を選択します。
- 3 既存のアクションを設定するには、次の操作を行います。
 - [動作] タブを選択します。
 - 設定するアクションを選択します。
 - [編集] を選択して、必要に応じてオプションを変更します。
 - [設定] を選択し、アクションのオプションを設定し、[OK] を選択します。

ヒント： 電子メールアクションオブジェクトを設定する場合は、ホスト、ポート、および返信先アドレスを設定する必要があります。

- 4 アクションを追加するには、次の操作を行います。
 - [動作] タブを選択します。
 - [追加] を選択して、アクション名および説明を指定します。
 - 新しいアクションのために作成された OLE オートメーションオブジェクトで使用される ProgID と関数を指定します。
 - ユーザが登録するときにアクションがユーザ入力が必要とする場合は、ブラウザに含めるユーザインターフェイスの種類を選択して、編集ボックスのラベルを指定します。ユーザ入力が必要としない場合は、[なし] を選択します。
- 5 アクションを削除するには、次の操作を行います。
 - [動作] タブを選択します。
 - 削除するアクションを選んで、[削除] を選択します。

注： 電子メールアクションおよび Web 通知アクションは削除しないでください。

- 6 エージェントの条件の定義時に、カスタム VBScript 関数を有効にするには、[スクリプト関数] タブを選択して、使用する関数が含まれているファイルのパスおよびファイル名を指定します。
- 7 [閉じる] を選択します。

エージェントの定義

エージェントを定義して、新しいエージェントを Hyperion Enterprise Reporting Web のユーザが使用できるようにします。エージェントは Hyperion Enterprise アプリケーションのデータの変更を追跡し、監視対象の変更が発生するとユーザに通知します。

エージェントを定義する場合は、VBScript または OLE オートメーションのどちらのオプションを使用するかを選択できます。使用するオプションによって、VBScript

を使用するエージェントの条件を入力するか、または OLE オートメーションオブジェクトの関数を参照するかが決まります。OLE オートメーションオブジェクトの関数には、システムで評価されるアプリケーションデータの条件が含まれます。

エージェントの定義時に行う必要がある手順を次に示します。

- エージェントを作成し、名前と説明を割り当て、エージェントの条件を定義するのに使用するロジックを選択します。
- エージェントからユーザへの通知を引き起こすデータ条件を定義します。
- データ条件が発生したときにエージェントが実行するアクションを指定します。例えば、エージェントがユーザに電子メールによって通知するか、または Web ページから通知するかを指定します。
- エージェントが関連データをチェックし、条件が満たされたかどうかを調べる頻度を指定します。
- エージェントのセキュリティを定義します。この定義には、購読できるユーザの指定、およびエージェントのデータへのアクセス方法が含まれます。
- 返信先アドレスの指定、電子メールアドレスの検証の設定、タイムアウトオプションの設定、および電子メール通知ログファイルの作成を行うには、オプションの SPIDER.INI ファイルを設定します。

エージェントを定義したら、Web サーバに保存します。エージェントにアクセスするセキュリティ権限を持つすべてのユーザが、エージェントに登録し、登録オプションを指定できます。

注： Hyperion Enterprise Reporting Web とともにインストールされるエージェントモニタサービスは、エージェントがデータベースをチェックする Web サーバ上で実行する必要があります。また、電子メール通知を使用する場合は、電子メールを設定する必要があります。

VBScript を使用してエージェントの条件を定義するときは、標準の Visual Basic の IF, THEN ステートメントとして条件に入力します。次のガイドラインに従ってください。

- 標準の Visual Basic 構文を使用します。構文について詳しくは、Visual Basic のマニュアル、または次の Microsoft の Web サイトを参照してください。

<http://www.microsoft.com/scripting/default.htm?scripting/vbscript/default.htm>

- 複数の ELSE 節を含む 1 つの IF, THEN ステートメントを使用して、複数の条件のデータを評価することも、複数の IF, THEN ステートメントを使用することもできます。
- エージェントの購読ユーザに通知を送信するには、THEN 節で Agent.Notify メソッドを使用する必要があります。
- 指定された行をループする FOR, NEXT ループを条件で定義すると、一連の行または列を評価できます。

注意 条件は、SUB ステートメントで始まり、END SUB で終わる必要があります。保存するときに、システムでこれらの値が挿入されます。これ

らの値を直接入力しないでください。入力すると、エラーメッセージが表示されます。

さらに、条件で定義済みのスクリプト、ロジック、およびプロパティを使用して、特殊な関数を実行できます。次の表に、一般的に使用されるロジックとプロパティ、およびそれぞれの説明を示します。ロジックおよびプロパティと、その全一覧については、「データベース表のリファレンス」の章を参照してください。サンプルスクリプトについては、[206 ページの「カスタマイズ可能な条件スクリプト」](#)を参照してください。

表 25 ロジックおよびプロパティの条件

| ロジックまたはプロパティ | 説明 | 使用例 |
|------------------|-------------------------------|---|
| Agent.DefMsg | ユーザ通知に含めるデフォルトのメッセージを作成します。 | Agent.DefMsg を使用して、評価される行に基づいてデフォルトのメッセージをカスタマイズできます。 |
| GetCellDouble | セルの書式設定されていない数値を返します。 | GetCellDouble を使用して、セルの値が予算を超えるかどうかを判断します。 |
| GetCellString | セルの書式設定した文字列値を返します。 | GetCellString を使用して、行または列見出しを返すことができます。また、カスタマイズしたメッセージで使用して、問題が発生した場所を示すことができます。 |
| GetNumRows | レポートの中の行数を返します。 | GetNumRows を使用して、レポートの各行を個別に評価する FOR, NEXT ループを作成できます。 |
| GetNumCols | レポートの中の列数を返します。 | GetNumCols を使用して、レポートの各列を個別に評価する FOR, NEXT ループを作成できます。 |
| GetCellPOVString | レポート内の特定のセルにおけるデータの視点の値を返します。 | GetCellPOVString を使用して、条件が適切なデータの視点で発生したレポートをユーザに表示するリンクを作成できます。 |
| Agent.Notify | エージェントに関連付けられているアクションを実行します。 | 条件の定義の最後で Agent.Notify を使用して、ユーザ通知を実行できます。 |

VBScript 条件の例

例 1：基本的な条件

次の条件はレポートの 1 つのセルを評価します。

```
If AGSALES.GetCellDouble(1,9) < 0 Then
```

```
AgentEval.Notify()  
End If
```

この例では、AGSALES.RPT レポートの行 1、列 9 を評価し、値がゼロより小さいかどうかを判断します。値がゼロより小さい場合は、エージェントは、ユーザが選択した通知オプションに従って、すべての購読ユーザに通知します。

例 2：2 つのレポートの値の比較

次の条件は 2 つのレポートの値を比較します。

```
If AGSALES.GetCellDouble(1,3) < AGSALES.GetCellDouble(1,4) Then  
AgentEval.Notify()  
End If
```

この例では、同じレポートの 2 つの列の値を比較し、行 1、列 3 の値が行 1、列 4 の値より小さいかどうかを判断します。

例 3：複雑な条件のステートメント

次の条件では FOR…NEX ループを使用して複数の行を評価します。

```
For i = 1 to AGRANGE.GetNumRows  
If AGRANGE.GetCellDouble(i,3) > 5 Then  
Agent.DefMsg=agrange.GetCellString(i,0)  
"is more than 5% over prior year.For  
detail, view <a href=" chr(34)  
"\HSPIDER\spider.dll?report&enterprise  
&demo&agrange2&frame=no"  
agrange2.GetCellPOVString(i,1) Chr(34)  
>Detail Report</a>"AgentEval.Notify()  
End If  
Next
```

この例では、ループを行 1 で開始し、レポートの最後の行で終了します。各行の列 3 の値が 5 より大きいかどうかを評価し、大きい場合は、現在の行のデータの視点に関連するレポートへのリンクを含むカスタマイズメッセージを送信します。

カスタマイズ可能な条件スクリプト

Hyperion Enterprise Reporting Web には、エージェント条件の定義で利用できる複数のカスタマイズ可能な条件スクリプトがあります。サンプルスクリプトを条件に貼り付けたり、エージェントの変数を適切な情報に置き換えたり、エージェントを保存したりできます。これによって、複雑な条件をすばやく簡単に作成できます。

サンプルスクリプトは、AGSCRIPT.TXT テキストファイルに格納されます。このファイルは製品のインストール時に HSPIDER ルートディレクトリに保存されます。このファイル内のサンプルスクリプトを使用するか、独自のカスタマイズ可能なスクリプトファイルを作成し、AGSCRIPT ファイルのわりにそのファイルを使用するように設定できます。独自のカスタマイズ可能なスクリプトを定義する方法については、[210 ページの「カスタマイズ可能なスクリプトの定義」](#)を参照

してください。異なるサンプルスクリプトファイルへの変更については、[202 ページの「エージェントシステムのオプションの定義」](#)を参照してください。

AGSCRIPT.TXT ファイルには、次のサンプルスクリプトが含まれます。

- If, Then 条件
- 詳細レポートへのリンクを含むレポートの行範囲
- 詳細レポートへのリンクを含むレポートの列範囲
- 行見出しのテキストを含むレポートの行範囲
- 列見出しのテキストを含むレポートの列範囲

IF, THEN サンプルスクリプト

IF, THEN サンプルスクリプトは、条件に指定されたレポートをチェックします。条件が発生すると、スクリプトによって通知が送信されます。評価する条件式を CONDITION 変数に置き換えます。条件式は、true または false と評価される必要があります。

次に示すスクリプトは、IF, THEN サンプルスクリプトのデフォルトデータです。

```
IF CONDITION Then
'テストする条件を指定します。
AgentEval.Notify
'通知を送信します。
End If
```

詳細レポートへのリンクを含む行範囲のサンプルスクリプト

詳細レポートへのリンクを含む行範囲のサンプルスクリプトはレポートのすべての行をループし、指定された条件に従わない特定の列のデータを評価します。条件の発生時、スクリプトはエージェントのデフォルトメッセージに指定されたレポートへのリンクを追加します。リンクには、条件が発生した行のデータの視点の設定が含まれます。その後、条件を満たすすべての行へのリンクを含む通知が送信されます。

詳細レポートへのリンクを含む行範囲のサンプルスクリプトの例を次に示します。

```
'行が条件を満たすかどうかを監視するフラグ
NotifyFlag=0
'レポートの数値または行を検出し、すべての行をループします。
For i = 1 to REPORT.GetNumRows
'現在の行のCOLUMNをテストします。
IF REPORT.GetCellDouble( i, COLUMN) CONDITION Then
Call AgentEval.AddLink("URL"+REPORT.GetCellPovString
(i,COLUMN2), REPORT.GetCellString(i,0))
Add a link to detail report for current row/col. Uses the current row
heading as link text.
Sets flag when a row meets the condition
(NotifyFlag=1)
End If
Next
'行が条件を満たす場合に通知を送信します。
If NotifyFlag=1 Then AgentEval.Notify
```

スクリプトを挿入してからカスタマイズし、目的のレポートおよび列を評価できます。次の表に、置き換え可能な項目を示します。

表 26 「詳細レポートへのリンクを含む行範囲」 サンプルスクリプトの変数

| 置き換え可能な変数 | 置換オプション |
|-----------|---|
| REPORT | チェックするレポートの名前。ファイル名の拡張子.RPT は必要ありません。 |
| COLUMN | チェックするレポートの各行に対する列数 |
| COLUMN2 | エージェントの通知内のレポートリンクに使用されるデータの視点を含んでいるレポートの列数 |
| CONDITION | システムがチェックする条件 |
| URL | エージェントの通知に含まれるレポートへの HREF リンク。次にその例を示します。

 |

詳細レポートへのリンクを含む列範囲

詳細レポートへのリンクを含む列範囲のサンプルスクリプトはレポートのすべての列をループし、特定の行のデータを評価して、指定された条件を満たすかどうかを調べます。条件の発生時、スクリプトは指定されたデータの視点の設定を含むソースレポートへのリンクを含んでいる通知を送信します。

詳細レポートへのリンクを含む列範囲のサンプルスクリプトの例を次に示します。

```
NotifyFlag=0
'列が条件を満たすかどうかを追跡するフラグ
For i = 1 to REPORT.GetNumColumns
'レポートの数値または列を検出し、すべての列をループします。
IF REPORT.GetCellDouble( Row, i) CONDITION Then
'現在の列のROWをテストします。
Call AgentEval.AddLink("URL"+REPORT.GetCellPovString
(ROW2,i),REPORT.GetCellString(0,i))
'現在の行／列の詳細レポートへのリンクを追加します。リンクテキストに現在の列見出しを使用します。
NotifyFlag=1
'列が条件を満たすときにフラグを設定します。
End If
Next
If NotifyFlag=1 Then AgentEval.Notify
'列が条件を満たす場合に通知を送信します。
```

スクリプトを挿入してからカスタマイズし、目的のレポートおよび行を評価できます。次の表に、置き換え可能な項目を示します。

表 27 「詳細レポートへのリンクを含む列範囲」 サンプルスクリプトの変数

| 置き換え可能な変数 | 置換オプション |
|-----------|---|
| REPORT | チェックするレポートの名前。ファイル名の拡張子.RPT は必要ありません。 |
| ROW | チェックするレポートの各列に対する行数 |
| ROW2 | エージェントの通知内のレポートリンクで使用するデータの視点を含
むレポートの行数 |
| CONDITION | システムがチェックする条件 |
| URL | エージェントの通知に含まれるレポートへの HREF リンク |

行見出しのテキストを含む行範囲

行見出しテキストを含む行範囲のサンプルスクリプトはレポートのすべての行をループし、特定の列のデータを評価して、指定された条件を満たすかどうかを調べます。条件の発生時、システムは行見出しをユーザに送信されるデフォルトのメッセージに追加します。作成される通知には、条件を満たすすべての行の行見出しが一覧表示されます。

行見出しテキストを含む行範囲サンプルスクリプトの例を次に示します。

```
NotifyFlag=0
'列が条件を満たすかどうかを追跡するフラグ
For i = 1 to REPORT.GetNumColumns
'列数を検出し、すべてのcolumnsIF REPORT.GetCellDouble( ROW, i) CONDITION
Thenをループします。
'現在の列のROWをテストします。
Agent.DefMsg=Agent.DefMsg Chr(13) Chr(10)
+REPORT.GetCellString(0,i)
'改行を含む現在の列見出しをデフォルトのメッセージに追加します。
NotifyFlag=1
'列が条件を満たすときにフラグを設定します。
End If
Next
If NotifyFlag=1 Then AgentEval.Notify
'列が条件を満たす場合に通知を送信します。
```

スクリプトを挿入してからカスタマイズし、目的のレポートおよび行を評価できます。次の表に、置き換え可能な項目を示します。

表 28 「列見出しテキストを含む行範囲」 サンプルスクリプトの変数

| 置き換え可能な変数 | 置換オプション |
|-----------|---------------------------------|
| REPORT | チェックするレポートの名前。拡張子.RPT は必要ありません。 |
| ROW | チェックするレポートの各列に対する行数 |
| CONDITION | システムがチェックする条件 |

列見出しテキストを含む列範囲

列見出しテキストを含む列範囲のサンプルスクリプトはレポートのすべての列をループし、特定の行のデータを評価して、指定された条件を満たすかどうかを調べます。条件の発生時、システムは列見出しをユーザに送信されるデフォルトのメッセージに追加します。作成される通知には、条件を満たすすべての列の列見出しが一覧表示されます。

列見出しテキストを含む列範囲のサンプルスクリプトの例を次に示します。

```
NotifyFlag=0
'行が条件を満たすかどうかを追跡するフラグ
For i = 1 to REPORT.GetNumRows
'行数を検出し、すべての行をループします。
IF REPORT.GetCellDouble( i, COLUMN) CONDITION Then
    '現在の行のCOLUMNをテストします。
Agent.DefMsg=Agent.DefMsgChr(13) Chr(10)
+REPORT.GetCellString(i,0)
'改行を含む現在の行見出しをデフォルトのメッセージに追加します。
NotifyFlag=1
    '行が条件を満たすときにフラグを設定します。
End If
Next
If NotifyFlag=1 Then AgentEval.Notify
'行が条件を満たす場合に通知を送信します。
```

スクリプトを挿入してカスタマイズし、目的のレポートおよび列を評価できます。次の表に、置き換え可能な項目を示します。

表 29 「行見出しテキストを含む列範囲」 サンプルスクリプトの変数

| 置き換え可能な変数 | 置換オプション |
|-----------|---------------------------------------|
| REPORT | チェックするレポートの名前。ファイル拡張子名の.RPT は必要ありません。 |
| COLUMN | チェックするレポートの各行に対する列数 |
| CONDITION | システムがチェックする条件 |

カスタマイズ可能なスクリプトの定義

カスタマイズ可能なスクリプトを定義して、カスタム条件をエージェントの条件に貼り付けることができます。デフォルトでは、システムとともにインストールされた AGSCRIPT.TXT ファイルのコンテンツが読み取られて、どのカスタムスクリプトを使用できるかが決まります。次の 2 種類の方法でカスタマイズ可能なスクリプトを定義します。

- AGSCRIPT.TXT ファイルを変更します。
- 独自のファイルを作成し、AGSCRIPT.TXT の代わりに使用する管理プログラムを設定します。

新しいスクリプトを定義するときは、次の書式に従う必要があります。

'\$BEGINTEMPLATE

```
['$TEMPLATE_NAME Name]
```

Script

```
'$ENDTEMPLATE
```

変数 説明

Name [関数の貼り付け] ダイアログボックスに表示されるサンプルスクリプトのオプションの名前。TEMPLATE_NAME 行に入力しない場合は、[関数の貼り付け] ダイアログボックスの「Template Name Unknown (不明なテンプレート名)」という名前がスクリプトに使用されます。

Script エージェント条件に貼り付けるサンプル VBScript

例えば、次のように入力すると、「Notification Always Called」というカスタムスクリプトが作成されます。

```
'$BEGINTEMPLATE
'$TEMPLATE_NAME Notification Always Called
'この関数は、このスクリプトを使用するエージェントが実行されるたびに、
  すべてのアクションを使用して
  'すべての購読ユーザーに通知します。
  '電子メールおよびWeb通知を
  テストする場合に便利です。
AgentEval.Notify
'$ENDTEMPLATE
```

- ▶ カスタマイズ可能なスクリプトを定義するには、次の手順に従います。
- 1 AGSCRIPT.TXT ファイルを編集するには、メモ帳やその他のテキストエディタでファイルを開くか、新しいファイルを作成します。
- 2 標準の Visual Basic 構文を使用するカスタムスクリプトを指定します。
- 3 ファイルを保存します。

VBScript を使用したエージェントの定義

- ▶ VBScript を使用してエージェントを定義するには、次の手順に従います。
- 1 [スタート] メニューから [プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択して管理プログラムにアクセスし、[エージェント] を選択します。
- 2 [新規作成] を選択します。
- 3 次の操作を行って、[OK] をクリックします。
 - エージェント名と説明を入力します。
 - [VBScript] を選択します。
 - エージェントに関連付けるレポートを選択するには、次の操作を行います。
 - [追加] をクリックします。
 - 適切なアプリケーションにログオンします。

- 目的のレポートを選択して、[OK] をクリックします。

ヒント： エージェントからレポートを削除するには、そのレポートを選択して [削除] を選択します。

4 レポートごとに、レポートを選択し、データの視点バーで各ディメンションの値を選択してデフォルトのデータの視点を設定します。

5 エージェントの条件を定義するには、次の操作を行います。

- 標準 VBScript 構文を使用して [条件] ボックスに条件を入力します。構文について詳しくは、Visual Basic のマニュアル、または Microsoft の Web サイト (<http://www.microsoft.com/vbscript>) を参照してください。
- 定義済みのスクリプト、ロジック、またはプロパティを挿入するには、[F(x)] を選択します。ドロップダウンリストから項目を選択して、[スクリプトに追加] を選択します。[閉じる] をクリックすると、[条件] パネルに戻ります。

注： 定義済みのスクリプトの VBScript 関数を使用するには、[Agent Options (エージェントオプション)] ダイアログボックスで適切なスクリプトのテンプレートファイルのパスとファイル名を指定する必要があります。詳しくは、[202 ページの「エージェントシステムのオプションの定義」](#)を参照してください。

- レポートにセルへの参照を挿入するには、そのレポートを選択し、[レポートを表示] を選択します。セルをダブルクリックするか、セルを選択して [参照を追加] を選択すると、セルの参照が [条件] テキスト領域のカーソル位置に挿入されます。[OK] をクリックして、[レポートを表示] ダイアログボックスを閉じます。
- スクリプトを入力した後に、構文をチェックするには、[スクリプトをチェック] をクリックします。

注： 構文チェックでは、スクリプトで参照するオブジェクト名はチェックされません。

6 [動作] タブを選択し、購読ユーザが通知オプションを選択できるアクションを定義します。

7 [スケジュール] タブを選択し、エージェントがデータベースをチェックする日付と時刻を定義します。

8 [セキュリティ] タブを選択し、エージェントのセキュリティを定義します。

9 [OK] をクリックします。

注： Web 通知または電子メール通知の外観を変更することによって、エージェントをさらにカスタマイズできます。手順については、[315 ページの「エージェントのカスタマイズ」](#)を参照してください。

OLE オートメーションを使用したエージェントの定義

▶ OLE オートメーションを使用してエージェントを定義するには、次の手順に従います。

- 1 [スタート] メニューから [プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択して管理プログラムにアクセスし、[エージェント] を選択します。
- 2 [新規作成] を選択します。
- 3 次の操作を行って、[OK] をクリックします。
 - エージェント名と説明を入力します。
 - [OLE オートメーションオブジェクト] を選択します。
- 4 [財務エージェント] ウィンドウの [条件] パネルで、呼び出す OLE オブジェクトと関数の ProglD および関数を指定します。
- 5 エージェントに関連付けるレポートを選択するには、次の操作を行います。
 - [追加] をクリックします。
 - 適切なアプリケーションにログオンします。
 - 目的のレポートを選択して、[OK] をクリックします。

ヒント： エージェントからレポートを削除するには、そのレポートを選択して [削除] を選択します。

- 6 レポートごとに、レポートを選択し、データの視点バーで各ディメンションの値を選択してデフォルトのデータの視点を設定します。
- 7 [動作] タブを選択し、購読ユーザが通知オプションを選択できるアクションを定義します。
- 8 [スケジュール] タブを選択し、エージェントがデータベースをチェックする日付と時刻を定義します。
- 9 [セキュリティ] タブを選択し、エージェントのセキュリティを定義します。
- 10 [OK] をクリックします。

アクションの選択

アクションを選択して、購読ユーザが使用できる通知オプションを指定します。アクションによって、エージェントの監視対象のデータ条件が発生したときにユーザに通知する方法が決定されます。エージェントに選択したアクションは、ユーザの [Subscriptions (登録)] ページに表示されます。ユーザは、管理者がエージェントに選択したアクションのいずれかを選択できます。

管理者は Hyperion Enterprise Reporting Web で用意されているアクションから選択できます。電子メール通知を選択した場合は、エージェントの電子メールが設定済みであることを確認する必要があります。

アクションの選択に加えて、デフォルトのメッセージを入力して、選択したアクションに関連付けます。ユーザへ送信される各電子メール通知または各 Web 通知で、デフォルトのメッセージが送信されます。ユーザに表示されるメッセージに改行を含める場合は、メッセージの定義で、CHR(13) CHR(10)ステートメントを使用します。これらの文字は、Web ページに表示されるときに、HTML タグ (
) に変換されます。

▶ アクションを選択するには、次の手順に従います。

- 1 [スタート] メニューから [プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択して管理プログラムにアクセスし、[エージェント] を選択します。
- 2 新しいエージェントを定義するには、[新規作成] を選択します。エージェントを開くには、一覧から使用可能なエージェントを選択して、[開く] を選択します。
- 3 [動作] タブを選択します。
- 4 [許可された動作] の各オプションの横のチェックボックスをオンにして、エージェントの通知オプションを選択します。

注： オプションをオフにすると、新しい購読ユーザはそのアクションを要求できません。

- 5 エージェント通知のデフォルトのメッセージを入力します。メッセージボックスに改行を挿入するには、[Ctrl] キーを押しながら [Enter] キーを押します。ユーザには、この改行は表示されません。

ヒント： ユーザに表示されるメッセージに改行を挿入するには、デフォルトのメッセージに「Chr(13) Chr(10)」と入力します。例として、285 ページの「ケーススタディ」を参照してください。

- 6 条件が発生したレポートへのリンクをエージェントの通知に含めるには、[ソースレポートへの URL リンクを含む] を選択します。
- 7 次のいずれかのオプションを使用してエージェントの定義を続けます。
 - VBScript によるエージェントの定義
 - OLE オートメーションによるエージェントの定義

エージェントのスケジュール

エージェントのスケジュールを設定し、エージェントがデータベースをチェックする日付と時刻を指定します。それぞれの日付と時刻を直接入力するか、[値の挿入] ダイアログボックスから期間単位、曜日、および時刻を選択できます。[値の挿入] ダイアログボックスに入力したデータに基づいてエージェントのスケジュールが適切な日付と時刻に自動的に指定されます。

また、特定のチェック時にシステムが使用するように、カスタマイズしたデータの視点を設定できます。例えば、1997 年 1 月に設定されたレポートをチェックする月次エージェントを設定するとします。エージェントが今期をチェックするには、レポートのデフォルト期間のデータの視点を使用するのではなく、エージェントにスケジュールされた日付と時刻を選択して、データの視点をカスタマイズ

します。これによって、期間は常に今期に設定されます。例えば、1997 年 2 月に実行するチェックを選択すると、期間が 1997 年 2 月に変更されます。

▶ エージェントのスケジュールを設定するには、次の手順に従います。

- 1 [スタート] メニューから [プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択して管理プログラムにアクセスし、[エージェント] を選択します。
- 2 新しいエージェントを定義するには、[新規作成] を選択します。エージェントを開くには、一覧から使用可能なエージェントを選択して、[開く] を選択します。
- 3 [スケジュール] タブを選択します。
- 4 エージェントがデータをチェックする日付と時刻を指定するには、次の操作を行います。
 - エージェントがデータベースをチェックする特定の日付を手動で入力するには、[追加] を選択し、日付と時刻を指定して、[OK] を選択します。

ヒント： リストから日付と時刻を削除するには、日付と時刻を選択して [削除] を選択します。

- 期間単位に基づいて一連の日付を指定するには、次の操作を行い、[OK] を選択します。
 1. [値の挿入] を選択します。
 2. 値を挿入する日付に開始日と終了日を入力します。
 3. エージェントがチェックする期間単位と曜日を選択します。
 4. エージェントがチェックする時刻を入力します。
- 5 エージェントがスケジュールされた時刻にレポートを参照するときに、システムが使用するデータの視点を指定するには、次の操作を行います。
 1. カスタムのデータの視点を設定する日付と時刻を選択します。
 2. カスタムのデータの視点を設定するレポートを選択します。
 3. データの視点バーからカスタマイズするデータの視点的要素を選択します。
- 6 既存の日付と時刻に変更を加えるには、変更する行を選択し、[編集] を選択して、変更を加え、[OK] を選択します。
- 7 エージェントのチェックをすべて一時停止にするには、[延期] を選択します。

ヒント： チェックを再開するには、[延期] を再び選択します。

- 8 次のいずれかのオプションを使用してエージェントの定義を続けます。
 - VBScript によるエージェントの定義
 - OLE オートメーションによるエージェントの定義

エージェントセキュリティの設定

エージェントの作成時には、どのユーザまたはグループ（ドメイングループを含む）がエージェントに登録できるかと、エージェントがどのように Oracle の

Enterprise Performance Management ソフトウェアにアクセスするかという 2 種類のセキュリティを定義する必要があります。

エージェントに登録できるユーザを定義するには、エージェントへのアクセスを許可するユーザの Windows ユーザ ID またはユーザグループ ID を入力します。指定されたユーザのみが、Web ブラウザで [Subscriptions (登録)] ページにアクセスしたときにエージェントを表示することができます。

また、エージェントがアクセスするレポートごとに ID およびパスワードを割り当てることによって、エージェントからデータへのアクセスを保護できます。ユーザまたはグループおよびパスワードは、レポートが関連付けられるアプリケーション内に存在する必要があります。例えば、システムが Hyperion Enterprise レポートにアクセスする場合は、そのレポートの有効な Hyperion Enterprise ID とパスワードをシステムに割り当てる必要があります。アプリケーションで ID およびパスワードを定義されたすべてのセキュリティ権限は、デフォルトでエージェントに適用されます。

➤ エージェントのセキュリティを設定するには、次の手順に従います。

- 1 [スタート] メニューから [プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択して管理プログラムにアクセスし、[エージェント] を選択します。
- 2 新しいエージェントを定義するには、[新規作成] を選択します。エージェントを開くには、一覧から使用可能なエージェントを選択して、[開く] を選択します。
- 3 [セキュリティ] タブを選択します。
- 4 [ユーザーを追加] か [グループを追加] を選択し、ドメインを選択し、エージェントへのアクセスを認める Windows ユーザ、ユーザグループ、またはドメイングループを選択して [OK] をクリックします。

ヒント： 一覧からユーザまたはユーザグループを削除するには、ユーザまたはユーザグループを選択して [除去] を選択します。

- 5 セキュリティを設定するレポートを選択して、そのレポートのアプリケーションログオン ID とパスワードを指定します。
- 6 エージェントがアクセスする必要のある各レポートに対して、ステップ 5 を繰り返します。
- 7 次のいずれかのオプションを使用してエージェントの定義を続けます。
 - VBScript によるエージェントの定義
 - OLE オートメーションによるエージェントの定義

注意 ユーザがブラウザからアクセスする Hyperion Enterprise Reporting Web サーバのエージェントに対して、ユーザとグループのセキュリティを定義する必要があります。サーバのエージェントモニタをリモートで実行している場合は、正しいユーザー一覧が表示されません。

エージェントのカスタマイズ

エージェント機能を次のような方法でカスタマイズできます。

- Hyperion Enterprise Reporting Web のエージェントから送信される電子メールメッセージの外観をカスタマイズできます。
- Hyperion Enterprise Reporting Web のエージェントから送信される Web 通知の外観をカスタマイズできます。
- spider.ini 設定を行って、電子メール通知の処理方法をカスタマイズできます。

電子メール通知

Hyperion Enterprise Reporting Web では、監視対象に変更が発生したときにユーザーに通知する財務エージェントを定義できます。エージェントが送信できる通知の 1 つに電子メール通知があります。システムは、電子メールアクションオブジェクトを使用して、エージェントの登録オプションで電子メールによる通知を選択したユーザーに電子メールを送信します。

通知が送信されるときに、電子メールオブジェクトは、Simple Mail Transfer Protocol (SMTP) サーバに接続し、エージェントの定義で指定された情報に基づいてメッセージを送信します。システム管理者がメッセージの書式を変更するには、エージェント定義を変更するか、システムが電子メールの書式設定で使用する emailtmp.txt テンプレートファイルを変更します。

各メッセージにはエージェント管理者の返信先アドレスが含まれているので、配信障害のメッセージはシステム管理者に返送されます。エージェントがトリガされたときに、SMTP ネットワークサーバに接続できない場合は、失敗した通知のすべてがシステムのデータベース表に保存され、後で送信されます。エラーメッセージは、Windows イベントビューアのアプリケーションログにメッセージとして管理者に配信され、オプションのログファイルにも配信されます。

Hyperion Enterprise Reporting Web 電子メールオブジェクトには、次の機能はありません。

- 一般的な電子メールサービスを提供する機能

SMTP プロトコル

Simple Mail Transfer Protocol (SMTP) は、コンピュータ（通常、サーバ）間で電子メールを送受信できるようにする TCP/IP ベースプロトコルです。クライアントコンピュータは通常、SMTP によって電子メールをサーバに送信します。公式プロトコル定義の場所については、[220 ページの「SMTP ソフトウェアおよびリソース」](#)を参照してください。

ユーザーがインターネットメールを受信できるシステムには、何らかの SMTP ゲートウェイがあります。Hyperion Enterprise Reporting Web 電子メールアクションオブジェクトは、イントラネット TCP/IP ネットワーク上でこのゲートウェイに直接接続する必要があります。この SMTP サーバは通常、ファイアウォールの外部のインターネット TCP/IP ネットワークに接続されるファイアウォール上にあります。

また、次に示すサービスは、インターネットでサードパーティベンダが提供する SMTP 電子メールによって利用できます。

- 英数字を使用するポケットベルのアクセス
- 受信した SMTP 電子メールのメッセージをファックス送信する FAX ゲートウェイ
- SMTP 電子メールを受信できる電子メールアクセス機能がある Personal Internet Service Provider (ISP) アカウント

SMTP サーバ

SMTP サーバは、電子メールメッセージを送信、受信、および転送するための SMTP Socket ポート（通常ポート 25）があるコンピュータです。Windows マシンでは、SMTP は通常、実行可能なファイルとしてではなく、Windows コントロールパネルのサービスとして実行されます。

SMTP サービスでは、次のタスクが実行されます。

- パケットをテキストメッセージにコンパイルします。
- 受信者のドメイン名を解決します。
- メッセージのコピーを受信者に転送します。
- サービスがメッセージを受信して処理しようとしていることをクライアントに報告します。
- 受信者のドメイン名が解決されない場合に送信者のアドレスにメッセージを返します。
- 受信者のドメインの SMTP サーバに接続できない場合に送信者のアドレスにメッセージを返します。

注： SMTP がサーバ上で実行されるときに、SMTP ポートリスナサービスではそのアドレスに届く TCP/IP パケットのすべてを評価し、ポート 25 に指定されているかどうかを確認します。ポート 25 に指定されている場合は、SMTP サービスによりパケットがテキストメッセージにコンパイルされます。

SMTP クライアント

SMTP クライアントは、TCP/IP SMTP プロトコルを使用して SMTP サーバにエンコードされた電子メールメッセージを送信できるソフトウェアコンポーネントです。例えば、Hyperion Enterprise Reporting Web 電子メールアクションオブジェクトと電子メールプログラム Eudora Pro は、いずれも SMTP クライアントです。

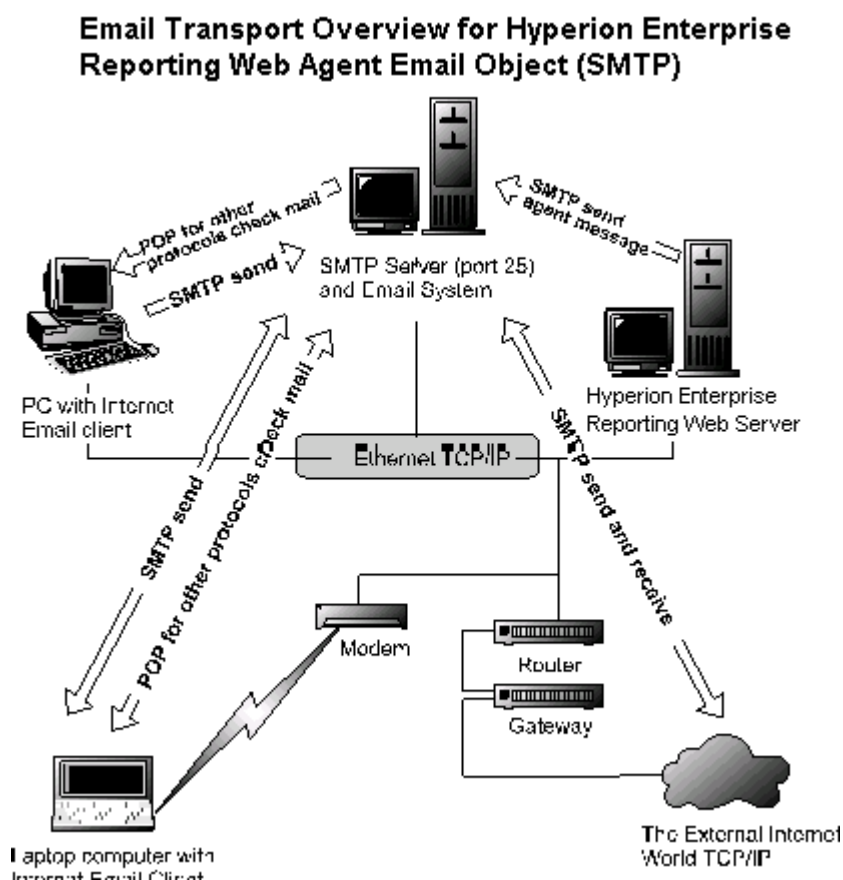
SMTP クライアントおよびサーバの必要条件

SMTP クライアントとサーバが通信するには、次の条件が満たされる必要があります。

- SMTP サーバがインストールされ、SMTP リモートクライアントの視点からアクセス可能な TCP/IP アドレスで実行されている必要があります。Hyperion Enterprise Reporting Web の場合は、クライアントは電子メールアクションオブジェクトです。
- クライアントには IP アドレスまたは SMTP サーバのドメイン名およびポート番号（通常 25）が含まれる必要があります。
- 電子メール受信者の電子メールメッセージアドレスを解決するには、SMTP サーバに DNS へのアクセス権がある必要があります。

次の図に、SMTP クライアントとサーバ間の通信プロセスを示します。

図 28 SMTP クライアントとサーバ間の通信プロセス



サポートされているその他の電子メール送信プロトコル

標準の SMTP 設定の使用に加えて、Hyperion Enterprise Reporting Web では、次に示す電子メール送信プロトコルをサポートします。

- SMTP サーバゲートウェイを既存の電子メールシステムに接続する。
- 外部 SMTP サーバを使用する。
- 新しいエージェントアクションオブジェクトを書き込む。

多くの SMTP 以外の内部電子メールには、従来の電子メールシステムに接続するオプションの SMTP ゲートウェイがあります。

プライマリ電子メールシステムが SMTP ではないが、SMTP サーバが Hyperion Enterprise Reporting Web 電子メールアクションオブジェクトに表示されている場合は、プライマリ電子メールシステムは、そのメールクライアントの代わりに外部の SMTP/POP3 システムの電子メールを受信できます。

また、プロトコルまたは電子メールシステムをサポートする新しいエージェントのカスタム OLE アクションオブジェクトを書き込むことによって、新しい電子メールプロトコルをサポートできます。

SMTP ソフトウェアおよびリソース

Mail Server バージョン 1.1 を含む Microsoft NT Server 4.0 リソースキット

Mail Server (Mailsrv) は、Windows NT Workstation および Windows NT Server の基本的な SMTP および POP3 サービスです。Mail Server では、インターネットベースの電子メールクライアントがサポートされ、Microsoft Mail プログラムとはまったく別個のものです。

Microsoft Exchange Server 5.0 の Microsoft Exchange Internet Mail Connector

このソフトウェアについて詳しくは、<http://www.microsoft.com/exchange> を参照してください。

SMTP ソフトウェア : Microsoft 以外

サードパーティ SMTP NT Server 対応ソフトウェアの一覧については、次の Web サイトを参照してください。

<http://www.microsoft.com/ntserver/tools/mail.htm>

EMWAC Internet Mail Service はこの一覧に含まれています。

EMWAC Internet Mail Service : SMTP、POP3、およびメーリングリスト機能

EMWAC Internet Mail Service は、Intel、Alpha、MIPS、および PowerPC NT プラットフォームで実行される European Microsoft Windows NT Academic Center (EMWAC) のフリーウェアプログラムです。1996 年 7 月、現在のバージョンは 0.86 で、ファイルサイズは 376K です。

EMWAC Internet Mail Service は、電子メール関連機能を実装する Windows NT 用サービスの集まりです。EMWAC IMS では、インターネット標準 SMTP および POP3、およびメーリングリスト機能がサポートされます。

詳しくは、http://www.emwac.ed.ac.uk/html/internet_toolchest/ims/ims.htm を参照してください。

Microsoft Mail Server : Microsoft Mail to SMTP ゲートウェイ

詳しくは、<http://www.gruntsoftware.com/intergate/> を参照してください。

SMTP リファレンス

RFC 821 Simple Mail Transfer Protocol : 詳しくは、<http://ds1.internic.net/std/std10.txt> または <http://ds1.internic.net/rfc/rfc821.txt> を参照してください。

インターネットテキストメッセージの書式のための RFC 822 標準 : 詳しくは、<http://ds1.internic.net/rfc/rfc822.txt> を参照してください。

エージェント電子メールのカスタマイズ

Hyperion Enterprise Reporting Web のエージェントから送信される電子メールメッセージの外観をカスタマイズできます。これを行うには、Hyperion Enterprise Reporting Web に付属のテキストテンプレートファイルを変更します。このファイルの名前は EMAILTMP.TXT で、HSPIDER ディレクトリにインストールされています。このテンプレートをカスタマイズするか、別のテンプレートを指定できます。標準の EMAILTMP.TXT ファイルを次に示します。

```
;;HERエージェントの電子メールテンプレート
;;2つのセミコロンに続くテキスト（行の最後までを含む）は、
;;メッセージに表示されないコメントです。2つのシャープに続くテキストは見出しで、
;;名前、コロン、および値を含める必要があります。その他のすべては
;;メッセージテキストです。パーセント記号で区切られるキーワードは、適切な情報に
;;置き換えられます。
##From:%RETURNADDR%
##To:%RECIPIENTS%
##Subject:%AGENTNAME% - %AGENTDESC%
This message is from an automated agent on behalf of %USERNAME%.
%DEFMSG%
%USERMSG%
Use the following links in your browser to see more information:
;;BEGINLINKとENDLINKの間のテキスト（改行を含む）は、
;;各リンクで繰り返されます。
%BEGINLINK%      %LINKTEXT% - http://www.yourserver.com%LINKURL%
%ENDLINK%
```

emailtmp.txt ファイルで示すように、テンプレートファイルは標準インターネットメールヘッダーに対応する一連のヘッダーで始まり、From、To、Subject、cc、Return-Path、ReplyTo、Sender、References、Keywords、および Comments が含まれます。2つのシャープで始まるヘッダーの行の後には、ヘッダー名、コロン、およびヘッダー値が続きます。

To ヘッダーは必須ですが、他のすべてのヘッダーはオプションです。From ヘッダーの使用をお勧めします。これによってシステムは配信できない電子メールを戻すことができます。通常、From ヘッダーを編集して、独自の電子メールアドレスを含めます。

ヘッダーまたはコメントではない行のすべては、メールメッセージの本文として扱われます。メッセージの本文には、メールの内容をカスタマイズできるようにするテキストおよび変数を含めることができます。次の表に、本文テキストに使用可能な変数を示します。

表 30 Emailtmp.txt ファイルの変数

| 変数 | 説明 |
|--------------|--|
| %AGENTDESC% | メッセージを送信するエージェントの説明 |
| %AGENTNAME% | メッセージを送信するエージェント名 |
| %DEFMSG% | このエージェントの標準メッセージ |
| %LINKTEXT% | このリンクの説明 |
| %LINKURL% | このリンクの URL |
| %RECIPIENTS% | 購読フォームに指定されたアドレスの一覧 |
| %RETURNADDR% | エージェントに指定された返信先アドレス。電子メールによる通知を配信できないときに使用されます。 |
| %USERMSG% | [Subscriptions (登録)] ページで指定されたこのエージェントの個人的なメッセージ |
| %USERNAME% | メッセージを送信したエージェントに登録しているユーザの ID |

注： 定義済みのリンクには、関連するパスが使用されますが、サーバ名は含まれず、"/HSPIDER/spider.dll?"で始まります。このため、接頭辞として%LINKURL%をサーバ名に含める必要があります。

%LINKURL%の後にレポートオプション（&view=mytemplate.htx.など）を追加することもできます。レポートオプションの一覧については、295 ページの「REPORT 関数 - 動的レポート」を参照してください。

エージェント Web 通知のカスタマイズ

エージェント Web 通知をカスタマイズして、通知 Web ページでユーザが受け取る通知の外観を変更できます。各エージェントに表示される行の外観をカスタマイズできます。これを行うには、AGTRIG.HTX テンプレートファイルの一部を変更します。

次の図に、変更可能な AGTRIG.HTX ファイルのセクションを示します。変更できる項目を黒で示し、変更できない項目を青で示します。

図 29 AGTRIG.HTX ファイルのセクション

```
%BEGINRT%
<tr><td valign=top><input type=checkbox name=CB%CBID%
value=%CBVAL%
<td colspan=4>%DEFMSG%<BR>
%LINKTEXT%<BR>
%USERMSG%
<tr><td><td>Triggered by:<BR>%AGENTNAME% <td>Date:<BR>%DATE%
<td>Time:<BR>%TIME24% <td>Priority:<BR>%PRIORITY% </tr>
%ENDRT%
</table>
```

AGTRIG.HTX テンプレートをカスタマイズするときに、次の制限が適用されます。

- 書式の変更は、%BEGINRT%および%ENDRT%変数の間で行う必要があります。このテンプレートのその他の情報は変更しないでください。
- システムで有効と見なされるには、前の図で示したように行を INPUT TYPE=CHECK BOX パラメータで定義する必要があります。
- システムで有効と見なされるには、図のとおり to 正確な CB%CBID%および%CBVAL%変数が含まれている必要があります。これらの変数を含んでいる行を変更しないでください。

次の表に、%BEGINRT%と%ENDRT%変数の間に使用できる変数を示します。

表 31 %BEGINRT%と%ENDRT%の間で使用できる変数

| 変数 | 操作 |
|-------------|--------------------------------------|
| %AGENTDESC% | メッセージを送信するエージェントの説明 |
| %AGENTNAME% | メッセージを送信するエージェント名 |
| %DATE% | 通知が送信された日付。書式：June 4, 1998. |
| %DATENUM% | 通知が送信された日付。書式：6/4/98. |
| %DATEWK% | 通知が送信された日付。書式：Tuesday, June 4, 1998. |
| %DEFMSG% | エージェントの定義で指定されたこのエージェントの標準メッセージ |
| %LINKTEXT% | このリンクの説明と、システムが実行する URL |
| %PRIORITY% | 登録時にユーザが定義した通知の優先順位 |
| %TIME% | 通知が送信された時刻。書式：3:07 P.M. |
| %TIMESEC% | 通知が送信された時刻。書式：3:07:02 P.M. |
| %TIME24% | 通知が送信された時刻。書式：15:07 P.M. |

| 変数 | 操作 |
|-------------|--------------------------------|
| %TIMESEC24% | 通知が送信された時刻。書式：15:07:02 P.M. |
| %USERMSG% | 登録時にユーザが指定したこのエージェントの個人的なメッセージ |

エージェントの Spider.ini オプションの設定

spider.ini ファイルの[Agent-Email]セクションのオプションを設定して、エージェントが購読ユーザに電子メール通知を送信する方法をカスタマイズできます。設定できるパラメータは次のとおりです。

- ReturnAddress。電子メールを配信できない場合に、システムが使用します。システムは、配信できない電子メールを指定されたアドレスに戻します。
- Verify。電子メールを送信する前に受信者の存在を確認するようにシステムに指示します。受信者が存在しない場合は、エラーログがエージェントモニタプログラムまたは NT Event Viewer に記録され、そのアドレスに電子メールは送信されません。
- SendTimeout および ReceiveTimeout。SMTP またはネットワーク接続が遅延している場合にシステムが待機する時間を指定します。単位はミリ秒です。
- Logfile。電子メール通知に関する一連の詳細メッセージをシステムが記録できるファイルへのパスを指定します。このファイルを使用して、電子メールが正しく動作しない場合に問題を診断できます。または、送信済み電子メールの追跡記録を調べることができます。
- DomainName。SMTP サーバの必要に応じて、ドメイン名を指定します。

SPIDER.INI ファイルの[Agent-Email]セクションのサンプルを次に示します。

```
[Agent-Email]
ReturnAddress=klinton@corp.com
Verify=1
SendTimeout=8000
ReceiveTimeout=8000
LogFile=c:\inetsrv\spider\email.log
DomainName=hyperion.com
```

各パラメータには、次の書式を使用します。

Parameter=Value

変数 説明

Parameter ReturnAddress、Verify、SendTimeout、ReceiveTimeout、Logfile など、設定するパラメータの名前

Value 各パラメータの値。タイムアウトパラメータの単位はミリ秒です。

エージェントの編集

エージェントに定義された項目に変更が必要な場合にエージェントを編集します。例えば、詳しい情報を含めるために、エージェントに定義されたデフォルトのメッ

ページを変更できます。また、データをより頻繁にチェックするために、一般的なエージェントを変更できます。[財務エージェント管理] ダイアログボックスの[スケジュール] パネルで定義した、エージェントがデータベースをチェックする開始日と終了日を除く、エージェントのすべての情報を編集できます。

▶ エージェントを編集するには、次の手順に従います。

- 1 [スタート] メニューから [プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択して管理プログラムにアクセスし、[エージェント] を選択します。
 - 2 編集するエージェントを選択してから [開く] を選択します。
 - 3 エージェントの条件を変更するには、[条件] パネルで利用可能な情報を編集します。
 - 4 エージェントのレポートを変更するには、必要に応じて次の操作を行います。
 - 新しいレポートを追加するには、[追加] を選択し、アプリケーションにログインして、1 つまたは複数のレポートを選択し、[OK] をクリックします。
 - レポートを削除するには、1 つまたは複数のレポートを選択して [削除] を選択します。
 - レポートのデータの視点を変更するには、レポートを選択してデータの視点バーのディメンションの値を変更します。
 - 5 購読ユーザが使用できるエージェントのアクションを変更するには、[動作] タブを選択して、必要に応じて次の操作を行います。
 - 新しいアクションを登録できるようにするには、アクションの左側のチェックボックスをオンにします。
 - ユーザが受け取る購読オプションからアクションを削除するには、アクションの左側のチェックボックスをオフにします。
- 注：** オプションをオフにすると、新しい購読ユーザはそのアクションを要求できません。以前にそのアクションを選択していた既存の購読ユーザは、通知を継続して受け取ります。
- 6 エージェントがデータをチェックする日付を変更するには、[スケジュール] タブを選択して、次のいずれかの操作を行います。
 - 既存のスケジュールに新しい時刻を追加するには、[追加] を選択して、日付と時刻を指定し、[OK] をクリックします。

ヒント： [値の挿入] オプションを使用すると、多数の日付と時刻をすばやく挿入できます。[値の挿入] を選択して、開始日と終了日、期間単位、曜日、および時刻を指定し、[OK] をクリックします。

- 既存のスケジュールの時刻を編集するには、その時刻を選択し、[編集] を選択して、変更を加え、[OK] をクリックします。
- 既存のスケジュールからスケジュールされた時刻を削除するには、1 つまたは複数の時刻を選択し、[削除] を選択します。
- エージェントのチェックをすべて一時停止するには、[延期] を選択します。
- 特定の時刻のデータの視点を変更するには、その時刻を選択して、データの視点のディメンションの値を変更します。

- 7 エージェントのセキュリティ設定を変更するには、[セキュリティ] タブを選択して、必要に応じて次の操作を行います。
 - アクセスリストにユーザまたはグループを追加するには、[ユーザーを追加] または [グループを追加] を選択し、追加するユーザまたはグループを選択して [OK] をクリックします。
 - アクセスリストからユーザまたはグループを削除するには、ユーザまたはグループを選択して [削除] を選択します。
 - レポートのログオン ID およびパスワードを変更するには、レポートを選択して、ログオン情報を変更します。
- 8 [OK] をクリックします。

エージェントのコピー

既存のエージェントに類似する新しいエージェントを作成するには、エージェントをコピーします。エージェントをコピーするときは、コピーするエージェントを選択して、新しい名前と説明を指定します。システムは、既存のエージェントのデータをコピーします。新しいエージェントを編集して、コピーされたデータに変更を加えることができます。

注： エージェントをコピーするときは、新しいエージェントの条件を VBScript と OLE オートメーションのどちらを使用して定義するかを選択します。一般的には、コピー元のエージェントを作成したときに使用した方法を選択します。元のエージェントで使用した方法とは異なる方法を選択する場合は、新しいエージェントを編集して、作成される条件が正しいかどうかを確認する必要があります。

- エージェントをコピーするには、次の手順に従います。
- 1 [スタート] メニューから [プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択して管理プログラムにアクセスし、[エージェント] を選択します。
 - 2 コピーするエージェントを選択して、[コピー] を選択します。
 - 3 エージェント名と説明を入力します。
 - 4 エージェントの条件を定義する方法を選択するには、次の操作を行います。
 - VBScript を使用してエージェントの条件を定義するには、[VBScript] を選択します。
 - OLE オートメーションオブジェクトを使用してエージェントの条件を定義するには、[OLE Automation Object (OLE オートメーションオブジェクト)] を選択します。
 - 5 [OK] をクリックします。

ヒント： 新しいエージェントのコピーされた情報を変更するには、[財務エージェント管理] ダイアログボックスでエージェント名を選択して、[開く] をクリックします。変更を加えて、[OK] をクリックします。

エージェントの削除

ユーザのデータ条件を監視するエージェントが不要になった場合は、そのエージェントを削除します。エージェントを削除すると、使用可能なエージェントの一覧からそのエージェントが削除され、そのエージェントに現在登録しているユーザには、Web 通知または電子メール通知は送信されません。Web ページ上の既存の通知のすべてが削除されます。

エージェントを定義するときに、システムは複数のデータベース表にレコードを保存します。エージェントが削除されるときは、そのエージェントに関連付けられたデータベース表のレコードのすべてが削除されます。

- ▶ エージェントを削除するには、次の手順に従います。
- 1 [スタート] メニューから [プログラム]、[Hyperion Solutions]、[Hyperion Enterprise Reporting]、[Web サーバー管理プログラム] の順に選択して管理プログラムにアクセスし、[エージェント] を選択します。
- 2 削除するエージェントを選択して、[削除] を選択します。

エージェントモニタサービス

決まった時刻にエージェントが実行されるようにするには、エージェントモニタを実行します。エージェントモニタにより、各時点でエージェントの実行が必要であるかどうかが判定され、必要なエージェントが実行されます。Windows NT Event Viewer 用のアプリケーションログには、各エージェントのステータス情報が記録されます。

エージェントモニタは、Windows サービスとして実行されます。このプログラムを実行するには、エージェントモニタサービスを設定する必要があります。サービスの実行中、Windows ユーザアカウントがアクティブである必要がないため、1 つのサービスとしてエージェントモニタを実行することによりセキュリティが向上します。

オプションとしては、エージェントモニタで受信するすべてのメッセージをログファイルに記録するかどうかと、データベースの再チェックを行うまでに待つ秒数を設定します。

さらに、通知が届かない場合に再送するまで待つ秒数も設定できます。エージェント通知が届かないと、Retry_Actions 表と Retry_Links 表にその情報が書き込まれます。エージェントモニタプログラムにより、定期的にこれらの表がチェックされ、中に含まれるすべての通知の再送信が行われます。通知の再送信が正常に完了すると、そのレコードが表から削除されます。

注： データをチェックするすべてのエージェントに対して、Hyperion Enterprise Reporting Web サーバ上でエージェントモニタサービスを実行する必要があります。

エージェントモニタサービスの設定

Windows サービスとしてエージェントモニタを実行する場合は、Hyperion Enterprise Reporting ネットワークアクセスに使用されるものと同じアカウントを使用して実行するようにサービスを設定する必要があります。この場合、アクティブにする必要があるアカウントがないため、セキュリティの管理をより強化できます。モニタが追跡するすべてのメッセージは、Windows イベントビューアに送信されます。

Windows サービスとしてエージェントモニタを実行するには、以下の操作を行います。

- [コントロールパネル] の [サービス] アプレットでサービスの設定と起動を行います。
- エージェントモニタのオプションを設定します。

Hyperion Enterprise Reporting Web をインストールすると、[コントロールパネル] にエージェントモニタのアイコンが追加されます。

エージェントモニタサービスの設定

➤ エージェントモニタサービスを設定するには、次の操作を行います。

- 1 [スタート] ボタンから、[設定]、[コントロールパネル]、[サービス] の順に選択します。
- 2 エージェントモニタを手動で起動するには、[サービス] リストから [エージェントモニタ] を選択し、[開始] を選択します。
- 3 エージェントモニタサービスを自動的に起動するように設定するには、次の操作を行います。
 - [サービス] リストから [エージェントモニタ] を選択し、[スタートアップ] を選択します。
 - スタートアップの種類フレームで、[自動] を選択します。
 - [ログオン] フレームで、[システムアカウント] を選択します。
 - 残りのオプションはデフォルト値のままにして、[OK] をクリックします。

注： 次回システムを起動すると、このサービスが自動的に開始されます。それ以前にサービスを開始するには、[開始] を選択します。

- 4 エージェントモニタサービスを停止するには、[コントロールパネル] から [サービス] を選択し、サービスのリストから [エージェントモニタ] を選択して [停止] を選択します。

エージェントモニタのオプション設定

➤ エージェントモニタのオプションを設定するには、次の操作を行います。

- 1 [スタート] ボタンから、[設定]、[コントロールパネル]、[エージェントモニタ] の順に選択します。

2 次のいずれかを実行します。

- メッセージをファイルに保存するには、[メッセージをファイルに保存] を選択して編集ボックスにパスとファイル名を指定します。
- チェックの間の待機時間を秒数で指定するには、[イベント確認後の停止間隔] 編集ボックスに値を入力します。
- 失敗した通知を再送するまでの待機時間を秒数で指定するには、[失敗した動作を再試行する間隔] 編集ボックスに値を入力します。

3 [OK] をクリックします。

4 サービスが既に起動している状態でエージェントモニタの設定の変更を保存する場合は、次のいずれかの操作を行います。

- エージェントモニタサービスが停止し、再開したときに変更を適用するには、[OK] をクリックします。
- 変更を直ちに適用するには、[適用] ボタンをクリックします。

この章の内容

| | |
|---|-----|
| カスタム OLE オートメーション | 231 |
| OLE オートメーションを使用した条件スクリプトのカスタマイズ | 231 |
| OLE オートメーションを使用したエージェントのカスタマイズ | 236 |
| OLE オートメーションを使用したエージェントアクションのカスタマイズ | 242 |

カスタム OLE オートメーション

Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションを使用すると、アプリケーション開発者は、Hyperion Enterprise Reporting 管理プログラムの条件およびエージェント機能で使用可能なカスタム OLE オートメーションオブジェクトを作成できます。カスタム OLE オートメーションオブジェクトを使用すると、Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションから通常はアクセスできないデータにアクセスできるようになります。例えば、サードパーティの製品やデータベース、テキストファイルやスプレッドシート、ODBC データソースに保存されているデータにアクセスできます。

この章では、Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションと連動するカスタム OLE オブジェクトの作成手順について説明し、サンプルオブジェクトを作成してカスタマイズされた条件表示、財務エージェント、および財務エージェントで使用するアクションを作成する方法を示します。

OLE オートメーションを使用した条件スクリプトのカスタマイズ

レポートのデータに基づいて HTML 画面を動的に変更する条件スクリプトを作成できます。条件スクリプトに基づく Web ページの場合は、ページが取得するデータの条件を最初に定義します。次に、条件が満たされたときにページの外観がどのように変わるかを指定します。ユーザがそのページを表示すると、システムが条件を評価し、それに従って表示の書式が設定されます。

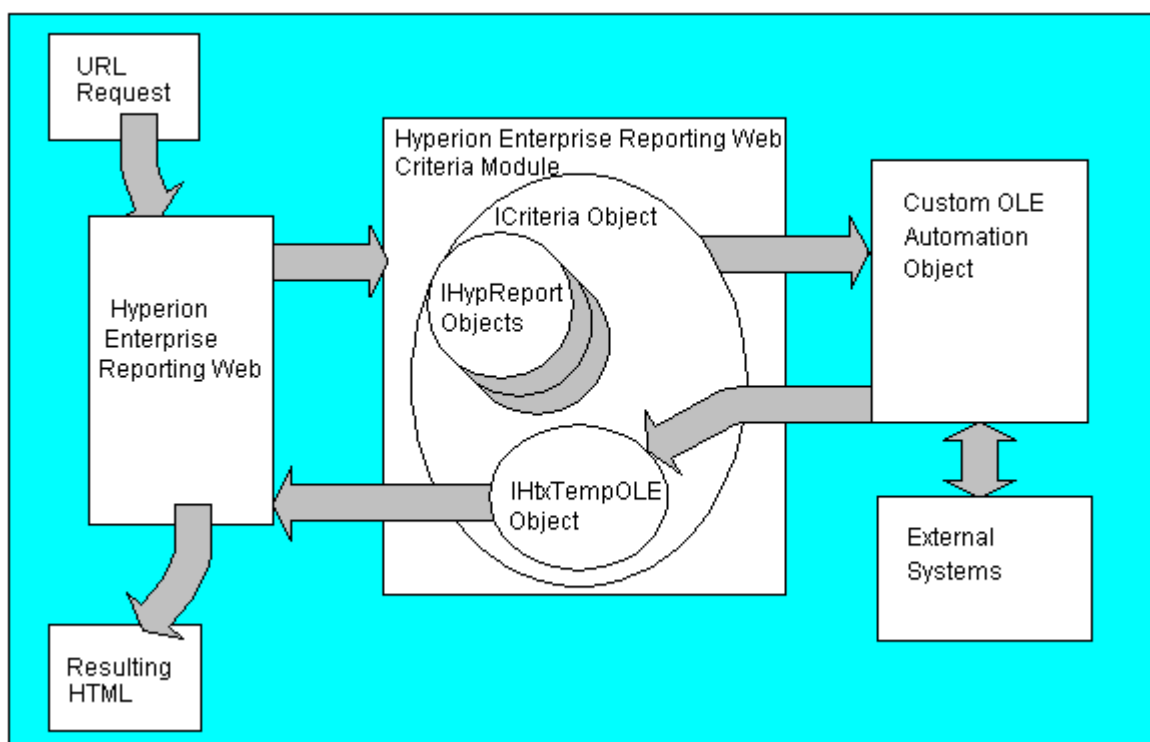
条件スクリプトの定義を開始するときに、VBScript と OLE オートメーションのどちらを使用するかを指定します。VBScript を使用して定義した条件スクリプトでは、Oracle の Enterprise Performance Management ソフトウェアに保存されているデータだけにアクセスできます。OLE オートメーションを使用する場合は、条件定義でカスタム OLE オブジェクトを参照します。このため条件スクリプトでは、テキストファイル、スプレッドシートファイル、ODBC データソースなどの外部

ソースのデータにアクセスできるようになります。OLE の開発については、OLE 開発に関する次の Web ページを参照してください。 <http://www.microsoft.com/oledev/>.

OLE ベースの条件スクリプトの評価プロセス

次の図に、OLE 情報オブジェクトと条件スクリプトがどのように関係するかを示します。

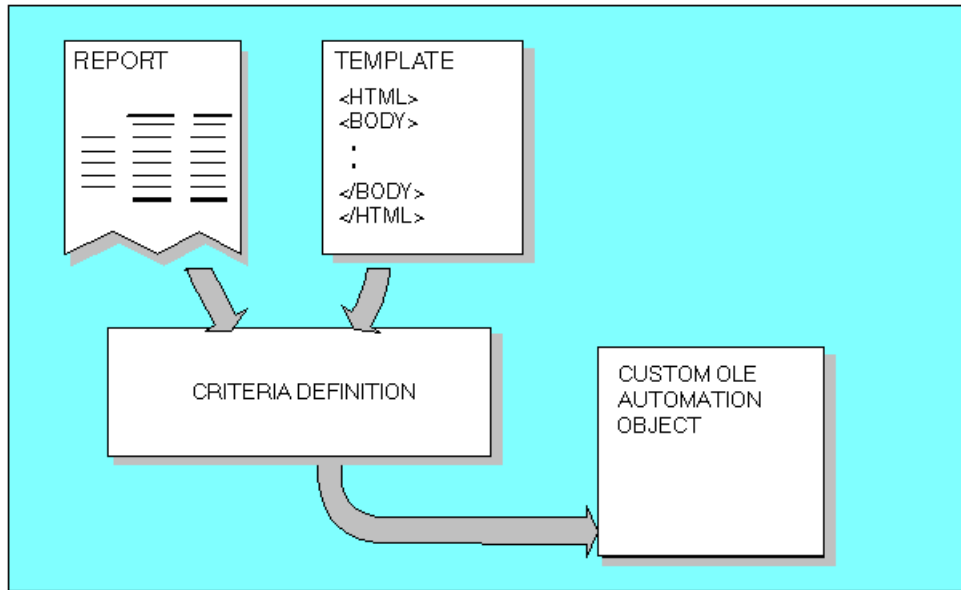
図 30 Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションの Criteria（条件）モジュールへの OLE インターフェイス



この図では、ユーザが Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションに条件ページの URL 要求を渡します。システムは条件定義にアクセスし、その定義でカスタム OLE オートメーションオブジェクトが参照されていることを認識します。システムはそのカスタムオブジェクトのインスタンスを作成し、オブジェクトは必要なレポートおよびテンプレートの変数にアクセスします。次に、オブジェクトは条件スクリプトを評価します。テンプレート内の変数が評価の結果に置き換えられます。OLE オブジェクトの実行が終了すると、Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションは結果の HTML ファイルをクライアントに返します。

次の図に、条件定義の情報の流れを示します。

図 31 OLE ベースの条件ページの情報の流れ



この図では、管理プログラムの Criteria（条件）モジュールが、レポートおよびテンプレート定義から情報を受け取ります。管理プログラムは、カスタム OLE オートメーションオブジェクトにこの情報を渡します。OLE オートメーションオブジェクトは、レポートからの情報を使用してテンプレートの置換値を決定します。次に、オブジェクトはテンプレート内の変数を置き換えます。

OLE ベースの条件スクリプトの作成

OLE ベースの条件スクリプトを作成するには、次の手順に従います。

- Visual Basic、Microsoft C++、または他の OLE 準拠の作成ツールを使用してオートメーションオブジェクトを作成します。Criteria（条件）モジュールがオブジェクトのインスタンスを作成できるように、TypeID に Creatable を指定してオブジェクトを設定する必要があります。
- 条件オブジェクトのディスパッチポインタを受け取って void を返す関数を OLE オブジェクトに追加します。
- GetTemplate メソッドを使用して条件オブジェクトからテンプレートオブジェクトを取得します。テンプレートには、システムが条件の評価結果の書式を設定して表示するために必要な情報が含まれています。また、置き換える必要がある変数も含まれています。テンプレートオブジェクトで Sub メソッドを使用して、テンプレートの変数を置き換えます。
- GetReportDisp メソッドを使用して、条件定義に関連付けられているレポートオブジェクトを取得します。これらのレポートオブジェクトは、カスタム OLE 関数を呼び出す前に生成されて挿入されるため、レポートオブジェクトによってオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアから抽出されたデータを取得するために使用できます。
- 条件スクリプトをテストして返される情報を確認します。システムがカスタム OLE 関数を終了するときに、要求を送信したユーザに返す応答は 2 つあります。エラーが発生し、SetErrorNum メソッドが正しく呼び出された場合は、エラー番号と、SetErrorMsg メソッドで設定されたメッセージが返されます。

エラーが発生しなかった場合は、Web ページに結果が返されます。テンプレートのすべての置換値が、テンプレートオブジェクトの Sub 呼び出しで指定した値に置き換えられます。

Microsoft Visual Basic を使用した OLE オブジェクトとしての Winners 表示の作成

Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションをインストールすると、いくつかのサンプル条件スクリプトが HSPIDER ディレクトリにインストールされます。これらのサンプル条件スクリプトの 1 つが Winners 条件表示です。Winners 表示では Hyperion Enterprise DEMO アプリケーションのデータにアクセスし、従業員別、売上総利益別、および総売上高別に売上高が最も高い地域を表示します。以下の手順では、Microsoft Visual Basic を使用して、Winners 表示を生成するカスタム OLE オブジェクトを作成する方法を示します。

注： この例のサンプルスクリプトは、Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションインストール CD の /DISK/Samples/VB サブディレクトリの VBOLE.CLS ファイルに含まれています。オブジェクトの ProgID は VBExmp.VBOLE です。

- ▶ Microsoft Visual Basic を使用して OLE オブジェクトとして Winners 表示を作成するには、次の手順に従います。
- 1 Microsoft Visual Basic 4.0 の指示に従って OLE オートメーションオブジェクトを作成し、REGSVR32.EXE を使用してそのオブジェクトをシステムに登録します。例えば、オブジェクトを VBExmp.VBOLE として登録します。
- 2 次の EvalWinners 関数を OLE オブジェクトクラスに追加します。

```
Public Sub EvalWinners(Crit As Object)
    '条件の作成に必要なすべてのオブジェクトを定義します。
    Dim Winners As Object Dim CDPSALES As Object Dim CDPEMP As Object Dim
    CDPMARG As Object
    '条件定義で指定されている 'テンプレートオブジェクトを取得します。
    Set Winners = Crit.GetTemplate
    '条件定義で指定された順序で 'レポートを取得します。
    Set CDPEMP = Crit.GetReportDisp(1) Set CDPMARG = Crit.GetReportDisp(2)
    Set CDPSALES = Crit.GetReportDisp(3)
    'レポートの見出しの値を取得し、'適切な項目に置き換えます。
    Winners.Sub "%gsales%", CDPSALES.GetCellString(1, 0) Winners.Sub
    "%salesemp%", CDPEMP.GetCellString(1, 0) Winners.Sub "%margin%",
    CDPMARG.GetCellString(1, 0)
End Sub
```

- 3 管理プログラムで新しい条件スクリプトを作成します。
 - 1. Criteria (条件) モジュールで、[ファイル] メニューから [新規作成] を選択します。
 - 2. テンプレートとして [WINNERS.HTX]、使用する方法として [OLE Automation (OLE オートメーション)] を選択し、[OK] をクリックします。

3. ステップ 1 で作成したオブジェクトの ProgID を指定します。
 4. ステップ 2 で作成した関数を指定します。
 5. ステップ 2 で関数に入力した順序でレポートを入力して、レポートを条件スクリプトに関連付けます。
 6. [ファイル] メニューの [保存] を選択し、HSPIDER ディレクトリに WINOLE.CBP というファイル名で定義を保存します。
- 4 条件ページを実行して OLE オブジェクトをテストするために、ブラウザの URL 行に次のように入力します。

`http://path/spider.dll?criteria&winole`

ここで、path は SPIDER.DLL ファイルへのパスです。

Microsoft Visual C++を使用した OLE オブジェクトとしての Winners 表示の作成

Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションをインストールすると、いくつかのサンプル条件スクリプトが HSPIDER ディレクトリにインストールされます。これらのサンプル条件スクリプトの 1 つが Winners 条件表示です。Winners 表示では Hyperion Enterprise DEMO アプリケーションのデータにアクセスし、従業員別、売上総利益別、および総売上高別に売上高が最も高い地域を表示します。以下の手順では、Microsoft Visual C++を使用して、Winners 表示を生成するカスタム OLE オブジェクトを作成する方法を示します。

注： この例のサンプルスクリプトは、Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションインストール CD の/DISK/Samples/VB サブディレクトリの VCOLE.CPP ファイルに含まれています。オブジェクトの ProgID は VCExmp.VCOLE です。

- ▶ Microsoft Visual C++を使用して OLE オブジェクトとして Winners 表示を作成するには、次の手順に従います。
- 1 Microsoft Visual C++の指示に従って OLE オートメーションオブジェクトを作成し、REGSVR32.EXE を使用してそのオブジェクトをシステムに登録します。例えば、オブジェクトを VCExmp.VCOLE として登録します。
 - 2 HSPIDER ディレクトリの CRITERIA.TLB ファイルから、ICriteria と IHtxTempOLE のクラス定義をソースファイルにインポートします。
 - 3 HSPIDER ディレクトリの RHYPEDA.TLB ファイルから、IHypReport をソースファイルにインポートします。
 - 4 .TLB ファイルをソースファイルにインポートして生成される CRITERIA.H ファイルと RHYPEDA.H ファイルをインクルードします。
 - 5 次の EvalWinners メソッドを OLE クラスに追加します。

```
void VCOLE::EvalWinners(LPDISPATCH lpCrit)
{ //条件のMFCクラスを設定します。ICriteria      icrit(lpCrit);
  //テンプレートオブジェクトを取得します。
```

```

IHTxTempOLE winners(icrit.GetTemplate());
//条件定義に入力する順序で //レポートオブジェクトを取得します。
IHypReport cdpEmp(icrit.GetReportDisp(1)); IHypReport
cdpMarg(icrit.GetReportDisp(2)); IHypReport
cdpSales(icrit.GetReportDisp(3));
//レポートの見出しの値を取得し、//適切な項目に置き換えます。
winners.Sub("%gsales%", cdpSales.GetCellString(1, 0));
winners.Sub( "%salesemp%", cdpEmp.GetCellString(1, 0));
winners.Sub( "%margin%", cdpMarg.GetCellString(1, 0)); }

```

6 管理プログラムで新しい条件スクリプトを作成します。

1. Criteria (条件) モジュールで、[ファイル] メニューから [新規作成] を選択します。
2. テンプレートとして [WINNERS.HTX]、使用する方法として [OLE Automation (OLE オートメーション)] を選択し、[OK] をクリックします。
3. ステップ 1 で作成したオブジェクトの ProgID を指定します。
4. ステップ 2 で作成した関数を指定します。
5. ステップ 2 で関数に入力した順序でレポートを入力して、レポートを条件スクリプトに関連付けます。
6. [ファイル] メニューの [保存] を選択し、HSPIDER ディレクトリに WINOLE.CBP というファイル名で定義を保存します。

7 条件ページを実行して OLE オブジェクトをテストするために、ブラウザの URL 行に次のように入力します。

<http://path/spider.dll?criteria&winole>

ここで、path は SPIDER.DLL ファイルへのパスです。

OLE オートメーションを使用したエージェントのカスタマイズ

財務エージェントを使用して Hyperion データを自動的に評価し、関心のある変化が発生した場合に通知を受け取ることができます。エージェントでは、監視するデータ条件、データベースをチェックする間隔、およびデータ条件が発生したときのアクションを定義します。通常、エージェントのアクションには電子メール通知と Web ページ通知があります。

管理プログラムでエージェントを定義するときに、VBScript と OLE オートメーションのどちらを使用するかを指定します。VBScript を使用して定義したエージェントでは、Oracle の Enterprise Performance Management ソフトウェアに保存されているデータだけをチェックできます。エージェントにカスタム OLE オブジェクトを使用する場合は、テキストファイル、スプレッドシート、ODBC データソースなどの外部データソースにある情報を評価できます。

OLE で定義されたエージェントがデータベースを定期的にチェックするたびに、カスタム OLE オブジェクトのインスタンスが作成されます。いくつかの Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションオブジェクトが、エージェント定義およびエージェントの指定レポートを参照できる OLE オブジェクトに渡されます。

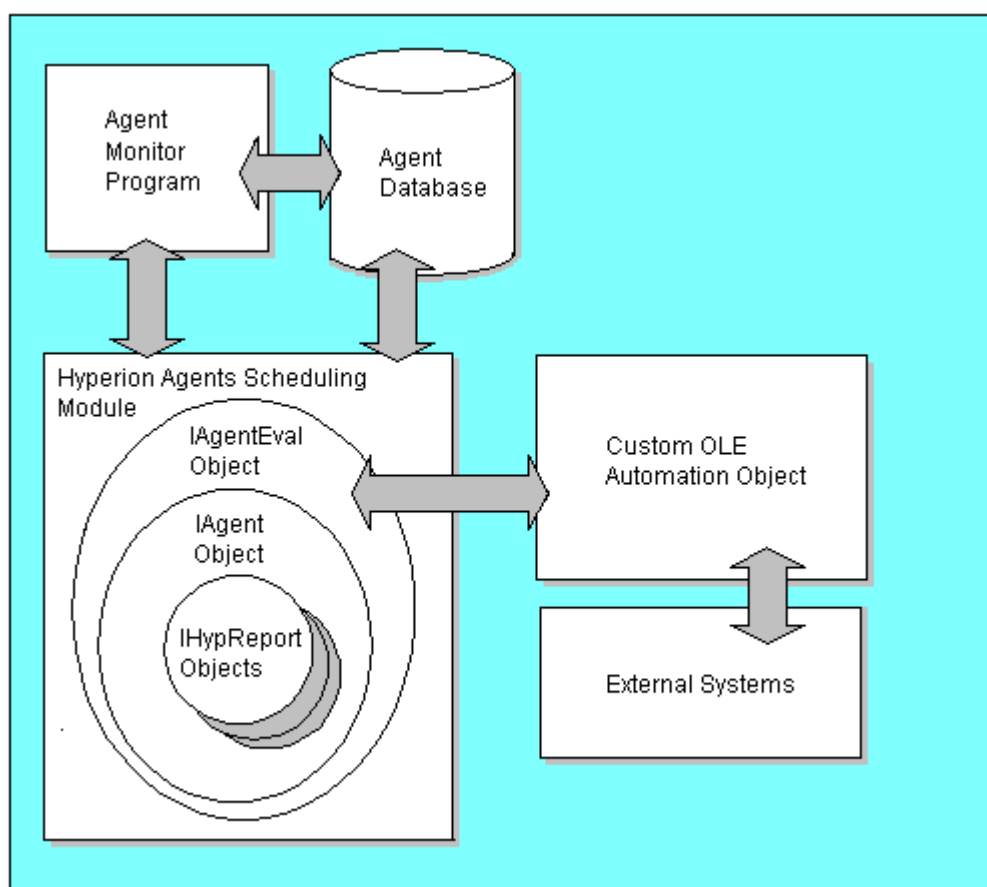
オブジェクトはデータ条件を評価し、エージェントの通知を起動するメソッドにアクセスします。

注： OLE 開発については、<http://www.microsoft.com/oledev/>の OLE 開発サイトを参照してください。

OLE で定義されたエージェントの評価プロセス

次の図に、OLE オブジェクトとエージェントがどのように関係するかを示します。

図 32 財務エージェントの OLE インターフェイス



この図では、エージェントを評価する必要があるかどうかを判断するために、エージェントモニタプログラムがデータベースをチェックするときに評価プロセスが始まります。OLE オートメーションで定義されたエージェントをチェックする必要があるとエージェントモニタが判断した場合は、次の処理が行われます。

- スケジュールモジュールは、エージェント評価オブジェクト、エージェントオブジェクト、およびエージェント定義で指定されたレポートオブジェクトのインスタンスを作成します。
- スケジュールモジュールはカスタム OLE オブジェクトのインスタンスを作成し、そのインスタンスをエージェント評価オブジェクトに渡します。エージェント評価オブジェクトが、エージェントオブジェクトとそのレポートにアクセスできるようになります。また、エージェント評価オブジェクトには、エー

ジェント定義に関連付けられたアクションをトリガするために使用される AgentEval.Notify メソッドもあります。

- OLE オブジェクトはレポートオブジェクトと外部データソース（定義されている場合）を使用して、エージェントの監視対象のデータ条件が発生したかどうかを判断します。
- データ条件が存在しない場合は、関数を終了します。条件が存在する場合は、エージェント評価オブジェクトとエージェントオブジェクトに関連付けられた結果値が設定されます。結果値には、デフォルトメッセージや、関連付けられたレポートをユーザが実行するため必要な URL リンクなど、エージェントが購読ユーザに通知を送信するときに必要なものが含まれます。
- 結果値が設定されると、AgentEval.Notify メソッドが起動します。このメソッドでは、エージェント評価オブジェクトとエージェントオブジェクトで指定された情報を使用してすべての購読アクションを実行するように、スケジューラモジュールに指示します。

エージェントのカスタム OLE オブジェクトの作成

▶ OLE ベースのエージェントを作成するには、次の手順に従います。

- 1 Microsoft Visual Basic、Microsoft Visual C++、または他の OLE 準拠の作成ツールを使用してオートメーションオブジェクトを作成します。Agents（エージェント）モジュールがオブジェクトのインスタンスを作成できるように、TypeID に Creatable と指定したオブジェクトを設定する必要があります。
- 2 エージェント評価オブジェクトへのディスパッチポインタを受け取って void を返す関数を OLE オブジェクトに追加します。例えば、次の関数を追加します。

```
Public Sub CheckNumbers (AgentEval As Object)
```

- 3 エージェント評価オブジェクトで GetAgent メソッドを使用して、エージェントオブジェクトを取得して使用します。エージェントオブジェクトにはエージェント定義に関する情報があり、エージェントの評価に必要なレポートにアクセスするために使用できます。また、エージェントオブジェクトには、エージェントの結果値の設定に使用できるプロパティもあります。例えば、オブジェクトに次のように追加します。

```
Dim AgentObj As Object  
Set AgentObj = AgentEval.GetAgent
```

- 4 GetReportDisp メソッドを使用して、条件定義に関連付けられているレポートオブジェクトを取得します。これらのレポートオブジェクトは、カスタム OLE 関数を呼び出す前に生成されて挿入されるため、レポートオブジェクトによってオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアから抽出されたデータを取得するために使用できます。例えば、オブジェクトに次のように追加します。

```
Dim SalesRep As Object  
Set SalesRep = AgentObj.GetReportDisp(1)
```

注： レポートのインデックスは、エージェント定義に入力された順序で決まります。

- 5 監視しているデータ条件が発生すると必ず、カスタム OLE オブジェクトがエージェントに関連付けられたすべてのアクションを実行できるように、AgentEval.Notify メソッドを呼び出します。例えば、オブジェクトに次のように追加します。

AgentEval.Notify

Microsoft Visual Basic を使用した OLE オブジェクトとしての Expenses_Prior エージェントの作成

Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションをインストールすると、いくつかのサンプルエージェントがインストールされます。これらサンプルエージェントの 1 つが Expenses_Prior エージェントです。Expenses_Prior エージェントでは、Hyperion Enterprise DEMO アプリケーションの AGRANGE.RPT レポートのデータにアクセスし、今期の経費と前期の経費を比較します。今期の経費が前期の経費より 7%以上多いときに、エージェントから購読ユーザに通知が送信されます。

以下の手順では、Microsoft Visual Basic を使用して、Expenses_Prior エージェントを生成するカスタム OLE オブジェクトを作成する方法を示します。

注： この例のサンプルスクリプトは、Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションインストール CD の/DISK/Samples/VB サブディレクトリの VBOLE.CLS ファイルに含まれています。オブジェクトの ProgID は VBExmp.VBOLE です。

- Microsoft Visual Basic を使用して OLE オブジェクトとして Expenses_Prior エージェントを作成するには、次の手順に従います。
- 1 Microsoft Visual Basic 4.0 の指示に従って OLE オートメーションオブジェクトを作成し、REGSVR32.EXE を使用してそのオブジェクトをシステムに登録します。
 - 2 次の AG_ExpPrior 関数を OLE オブジェクトクラスに追加します。

```
Public Sub AG_ExpPrior(AgentEval As Object)
    'エージェントオブジェクトを取得します。
    Dim Agent As Object
    Set Agent = AgentEval.GetAgent
    'レポートを取得します。
    Dim AGRANGE As Object
    Set AGRANGE = Agent.GetReportDisp(1)
    '通知する必要があるかどうかを示すフラグを設定します。
    NotifyFlag = 0
    'デフォルトメッセージを初期化します。
    Agent.DefMsg = "These accounts exceed prior year by more than 7%:" +
    Chr(13) + Chr(10)
    'すべてのセルをループして、7%を超えている値を探します。
    For i = 1 To AGRANGE.GetNumRows
        If AGRANGE.GetCellDouble(i, 3) > 7 Then
            '7%を超えている場合は、デフォルトメッセージに情報を追加します。
            Agent.DefMsg = Agent.DefMsg + AGRANGE.GetCellString(i, 0) +
            Chr(13) + Chr(10)
        End If
    Next i
    NotifyFlag = 1
End Sub
```

Next

・7%を超える値があった場合は、すべての購読ユーザに通知します。

If NotifyFlag = 1 Then AgentEval.Notify

End Sub

- 3 管理プログラムで新しいエージェントを作成します。
 1. 名前と説明を指定し、使用方法として [OLE Automation Object (OLE オートメーションオブジェクト)] を選択し、[OK] をクリックします。
 2. ステップ 1 で作成したオブジェクトの ProgID を入力します。
 3. ステップ 2 で作成した関数の名前を入力します。
 4. AGRANGE というレポートを追加します。
 5. テストするために、エージェントがすぐに実行されるようにスケジュールを設定します。
 6. エージェントのセキュリティ情報を指定します。
 7. エージェントに使用可能なアクションを追加します。
- 4 [閉じる] を選択してエージェント定義を保存します。
- 5 テスト実行者がエージェントに登録していることを確認し、エージェントモニタサービスを実行します。
- 6 エージェントモニタによってエージェントが起動したら、購読ユーザに通知をチェックしてもらいます。

Microsoft Visual C++を使用した OLE オブジェクトとしての Expenses_Prior エージェントの作成

Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションをインストールすると、いくつかのサンプルエージェントがインストールされます。これらサンプルエージェントの 1 つが Expenses_Prior エージェントです。Expenses_Prior エージェントでは、Hyperion Enterprise DEMO アプリケーションの AGRANGE.RPT レポートのデータにアクセスし、今期の経費と前期の経費を比較します。今期の経費が前期の経費より 7%以上多いときに、エージェントから購読ユーザに通知が送信されます。

以下の手順では、Microsoft Visual C++を使用して、Expenses_Prior エージェントを生成するカスタム OLE オブジェクトを作成する方法を示します。

注： この例のサンプルスクリプトは、Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションインストール CD の/DISK/Samples/VB サブディレクトリの VCOLE.CPP ファイルに含まれています。オブジェクトの ProgID は VCExmp.VCOLE です。

- Microsoft Visual C++を使用して OLE オブジェクトとして Expenses_Prior エージェントを作成するには、次の手順に従います。
 - 1 Microsoft Visual C++の指示に従って OLE オートメーションオブジェクトを作成し、REGSVR32.EXE を使用してそのオブジェクトをシステムに登録します。

- 2 HSPIDER ディレクトリの SCHD.TLB ファイルから、IAgentEval と IAgentObj のクラス定義をソースファイルにインポートします。
- 3 HSPIDER ディレクトリの RHYPEDA.TLB ファイルから、IHypReport をソースファイルにインポートします。
- 4 .TLB ファイルをソースファイルにインポートして生成される SCHD.H ファイルと RHYPEDA.H ファイルをインクルードします。
- 5 次の AGExpPrior メソッドを OLE クラスに追加します。

```
void VCOLE::AGExpPrior(LPDISPATCH lpAgentEval)
{ IAgentEval AgentEval(lpAgentEval);
  //エージェントオブジェクトを取得します。
  IAgentObj Agent(AgentEval.GetAgent());
  //レポートを取得します。
  IHypReport AGRANGE(Agent.GetReportDisp(1));
  //通知する必要があるかどうかを示すフラグを設定します。
  BOOL NotifyFlag = FALSE;
  //デフォルトメッセージを初期化します。
  CString DefMsg = "These accounts exceed prior year by more than 7%:\n\r";
  //すべてのセルをループして、7%を超えている値を探します。
  for (short i = 1; i <= AGRANGE.GetNumRows(); i++)
  { if (AGRANGE.GetCellDouble(i, 3) > 7)
    {
      //7%を超えている場合は、デフォルトメッセージに情報を追加します。
      DefMsg += AGRANGE.GetCellString(i, 0) + "\n\r";
      NotifyFlag = TRUE;
    }
  }
  Agent.SetDefMsg(DefMsg); //7%を超える値があった場合は、すべての購読ユーザに通知
  //します。 if (NotifyFlag)
  { //通知にVariantを渡す必要があります。
    //標準アクションの場合は、Variantが無視され、
    //タイプVT_EMPTYになります。
    VARIANT vaParam;
    AfxVariantInit(&vaParam);
    //通知コマンドを呼び出して購読アクションを実行します。
    AgentEval.Notify(vaParam); }}
```

- 6 管理プログラムで新しいエージェントを作成します。
 1. 名前と説明を指定し、使用方法として [OLE Automation Object (OLE オートメーションオブジェクト)] を選択し、[OK] をクリックします。
 2. ステップ 1 で作成したオブジェクトの ProgID を入力します。
 3. ステップ 2 で作成した関数の名前を入力します。
 4. AGRANGE というレポートを追加します。
 5. テストするために、エージェントがすぐに実行されるようにスケジュールを設定します。
 6. エージェントのセキュリティ情報を指定します。
 7. エージェントに使用可能なアクションを追加します。
- 7 [閉じる] を選択してエージェント定義を保存します。

- 8 テスト実行者がエージェントに登録していることを確認し、エージェントモニタサービスを実行します。
- 9 エージェントモニタによってエージェントが起動したら、購読ユーザに通知をチェックしてもらいます。

OLE オートメーションを使用したエージェントアクションのカスタマイズ

財務エージェントを使用して Hyperion データを自動的に評価し、関心のある変化が発生した場合に通知を受け取ることができます。エージェントでは、監視するデータ条件、データベースをチェックする間隔、およびデータ条件が発生したときのアクションを定義します。

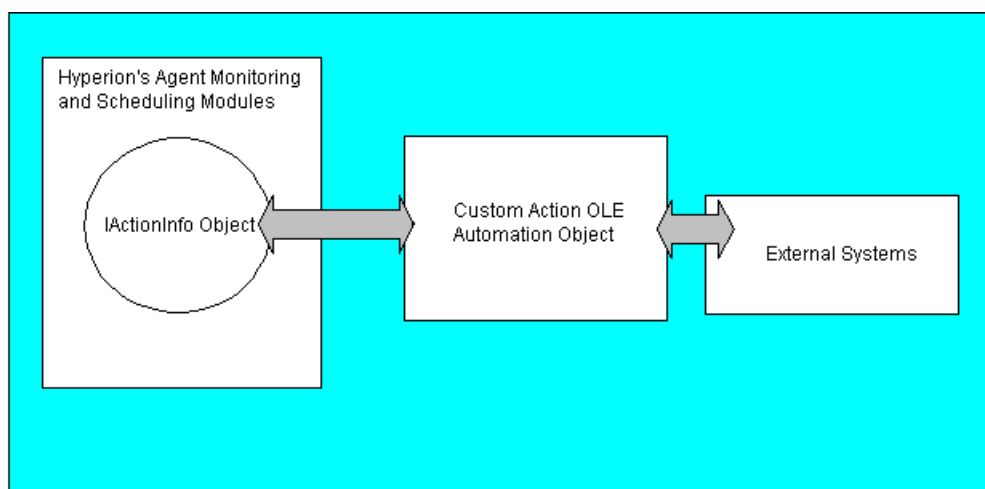
Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションには、電子メール通知と Web ページ通知というあらかじめ定義された 2 つのアクションがあります。他のアクションを使用する場合は、OLE オートメーションオブジェクトを作成し、管理プログラムでそのオブジェクトを使用するように設定することにより、カスタムアクションを定義できます。Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションシステムでは、カスタムアクションオブジェクトを使用するエージェントが通知を送信するときは必ず、そのオブジェクトを呼び出します。システムは、実行する必要があるアクションごとにアクションオブジェクトのインスタンスを作成します。例えば、3 人のユーザがエージェントを購読し、各ユーザに電子メールを送信する必要がある場合は、電子メールアクションオブジェクトのインスタンスが 3 つ作成されます。各カスタムアクションオブジェクトでは、オブジェクトに定義したアクティビティを実行できます。

注： OLE 開発については、<http://www.microsoft.com/oledev/> の OLE 開発サイトを参照してください。

OLE で定義されたエージェントアクションの評価プロセス

次の図に、OLE 情報オブジェクトとエージェントアクションがどのように連携するかを示します。

図 33 アクションオブジェクトの OLE インターフェイス



この図では、エージェントモニタとエージェントスケジュールモジュールが予定時刻にエージェントを評価します。カスタムアクションオブジェクトが定義されていて、ユーザによって購読されているエージェントを実行するときは、次の処理が行われます。

- システムは、エージェントの監視対象の条件が発生したかどうかを調べます。条件が発生した場合は、AgentEval.Notify 関数を呼び出します。
- システムは、どのユーザがそのエージェントを購読し、登録時にどのアクションを選択したかを調べるために、エージェントデータベースにクエリを実行します。
- アクションごとおよびユーザごとに、適切なカスタムアクション OLE オートメーションオブジェクトのインスタンスを作成し、購読ユーザ、購読ユーザが選択した購読オプション、およびトリガされたエージェントに関する情報をオブジェクトに渡します。
- アクションオブジェクトではその情報と外部システムからのデータ（定義されている場合）を使用してそのアクションを実装します。

エージェントアクションのカスタム OLE オブジェクトの作成

- ▶ OLE ベースのエージェントオブジェクトを作成するには、次の手順に従います。
- 1 Microsoft Visual Basic、Microsoft Visual C++、または他の OLE 準拠の作成ツールを使用してオートメーションオブジェクトを作成します。Agents（エージェント）モジュールがオブジェクトのインスタンスを作成できるように、TypeID に Creatable と指定してオブジェクトを設定する必要があります。
 - 2 必要なアクションを実行する関数を OLE オブジェクトに追加します。関数は、トリガされるエージェントに関する情報が含まれているアクション情報オブジェクトへのディスパッチポイントを受け取り、成功か失敗かを示すブール値（成功の場合は TRUE、失敗の場合は FALSE）を返す必要があります。FALSE を返すアクションは後で再試行されます。例えば、次の関数を入力します。
 - 3 Public Function SendNet(ActionInfo As Object) Boolean

- 4 設定が必要な場合は、オブジェクトに **Configure** 関数を追加します。Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションでは、アクションオブジェクトがシステムに追加されると、そのオブジェクトに関する情報を収集します。収集された情報には、ProgID、アクション関数、購読のユーザインターフェイス、およびオブジェクトのラベルが含まれています。オブジェクトに関する他の設定情報が必要な場合は、**Configure** 関数を追加する必要があります。**Configure** 関数は、パラメータとしてエージェントアクション関数の名前と、呼び出し元関数への OLE ウィンドウハンドルをとります。例えば、次の関数を入力します。
- 5 **Public Sub Configure (strAction as String, OLEWND as Long)**
- 6 **Configure** 関数を追加した場合は、アクションオブジェクトが管理プログラムに他の設定が必要であることを通知できるように、オブジェクトに **CanConfigure** 関数を追加します。この関数はパラメータとしてアクション関数名をとり、そのアクション関数が設定可能であるかどうかを示すブールを返します。例えば、次の関数を入力します。
- 7 **Public Function CanConfigure(strAction As String) As Boolean**
- 8 管理プログラムで、システムに定義されたアクションの一覧に新しいアクションを追加します。
- 9 管理プログラムで、新しいアクションを購読オプションとして使用できるように、既存のエージェントを編集します。これで、既存の購読ユーザは購読を変更して新しいアクションを含めることができるようになります。

Microsoft Visual Basic を使用したネットワークメッセージアクションの作成

以下の手順では、Microsoft Visual Basic を使用して、ネットワークメッセージで通知を送信するカスタム OLE オブジェクトを作成する方法を示します。この例のサンプルスクリプトは、Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションインストール CD の/DISK/Samples/VB サブディレクトリの VBOLE.CLS ファイルに含まれています。オブジェクトの ProgID は VBExmp.VBOLE です。

- Microsoft Visual Basic を使用してネットワークメッセージアクションを作成するには、次の手順に従います。
- 1 Microsoft Visual Basic の指示に従って OLE オートメーションオブジェクトを作成し、REGSVR32.EXE を使用してそのオブジェクトをシステムに登録します。例えば、オブジェクトを VBExmp.VBOLE として登録します。
- 2 次の AGAction 関数を OLE オブジェクトクラスに追加します。

```
Public Function AGAction(ActionInfo As Object) As Boolean
    strData = ActionInfo.DataText
    strMsg = ActionInfo.MessageText
    strPMsg = ActionInfo.UserMessageText
    strUser = ActionInfo.UserName
    strName = ActionInfo.AgentName
    strDesc = ActionInfo.AgentDescription
    strCRLF = Chr(13) + Chr(10)
    strExec = "net send" + strData + "HYPERION AGENT TRIGGERED" + strCRLF
    strExec = strExec + "AGENT: " + strName + "- " + strDesc + strCRLF
    strExec = strExec + "SUBSCRIBER : " + strUser + strCRLF + strCRLF
```

```

        strExec = strExec + "MSG : " + strMsg + strCRLF
        strExec = strExec + strPMsg + strCRLF
    Shell (strExec)
    AGAction = True
End Function

```

- 3 次の Configure 関数をカスタム OLE オブジェクトに追加します。

```

Public Sub Configure(strAction As String, hWnd As Long) Form1.Show 1
'設定情報を収集して保存します。 End Sub

```

- 4 次の CanConfigure 関数をカスタム OLE オブジェクトに追加します。

```

Public Function CanConfigure(strAction As String) As Boolean
CanConfigure = False If (strAction = "AGAction") Then CanConfigure =
True End If End Function

```

- 5 管理プログラムで、エージェントに定義されたアクションの一覧に新しいアクションを追加します。
- 6 Agent Definition（エージェント定義）モジュールで、新しく定義されたアクションを購読オプションとして使用できるように、既存のエージェントを変更します。
- 7 テスト実行者がエージェントに登録していることを確認し、エージェントモニタサービスを実行します。
- 8 エージェントモニタによってエージェントが起動したら、購読ユーザに通知をチェックしてもらいます。

Microsoft Visual C++を使用したネットワークメッセージアクションの作成

以下の手順では、Microsoft Visual C++を使用して、ネットワークメッセージで通知を送信するカスタム OLE オブジェクトを作成する方法を示します。この例のサンプルスクリプトは、Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションインストール CD の/DISK/Samples/VB サブディレクトリの VCOLE.CPP ファイルに含まれています。オブジェクトの ProgID は VCEmp.VCOLE です。

- Microsoft Visual C++を使用してネットワークメッセージアクションを作成するには、次の手順に従います。

- 1 Microsoft Visual Basic の指示に従って OLE オートメーションオブジェクトを作成し、REGSVR32.EXE を使用してそのオブジェクトをシステムに登録します。例えば、オブジェクトを VBExp.VBOLE として登録します。
- 2 HSPIDER ディレクトリの SCHD.TLB ファイルから、IActionObject のクラス定義をソースファイルにインポートします。
- 3 .TLB ファイルをソースファイルにインポートして生成される SCHD.H ファイルをインクルードします。
- 4 次のアクション関数をカスタム OLE オブジェクトに追加します。

```

BOOL VCOLE::NetSend(LPDISPATCH lpActionInfo)
{
    //オブジェクトを取得します。
    IActionInfo ActionInfo(lpActionInfo);
    //オブジェクトの情報を取得します。

```

```

        CString strData = ActionInfo.GetDataText();
        CString strMsg = ActionInfo.GetMessageText();
        CString strPMsg = ActionInfo.GetUserMessageText();
        CString strUser = ActionInfo.GetUserName();
        CString strName = ActionInfo.GetAgentName();
        CString strDesc = ActionInfo.GetAgentDescription();
        CString strCRLF = "\n\r";
//表示文字列を作成します。
        CString strExec = "net send " + strData + "HYPERION AGENT TRIGGERED" +
        strCRLF;
        strExec = strExec + "AGENT: " + strName + "- " + strDesc + strCRLF;
        strExec = strExec + "SUBSCRIBER : " + strUser + strCRLF + strCRLF;
        strExec = strExec + "MSG : " + strMsg + strCRLF;
        strExec = strExec + strPMsg + strCRLF;
        //メッセージを実行します。
        WinExec (strExec, SW_HIDE);
        //再試行しないようにTRUEを返します。
        return TRUE;
    }

```

- 5 次の Configure 関数をカスタム OLE オブジェクトに追加します。

```

void VCOLE::Configure(LPCTSTR szAction, OLE_HANDLE hWnd)
{
    CString csAction(szAction);
    if (csAction.CompareNoCase(_T("NetSend")) == 0)
    {
        CConfigDlg cfgDlg;
        cfgDlg.DoModal();
    }
}

```

- 6 次の CanConfigure 関数をカスタム OLE オブジェクトに追加します。

```

BOOL VCOLE::CanConfigure(LPCTSTR szAction)
{
    CString csAction(szAction);
    if (csAction.CompareNoCase(_T("NetSend")) == 0)
        return TRUE;
    return FALSE;
}

```

- 7 管理プログラムで、エージェントに定義されたアクションの一覧に新しいアクションを追加します。
- 8 Agent Definition（エージェント定義）モジュールで、新しく定義されたアクションを購読オプションとして使用できるように、既存のエージェントを変更します。
- 9 テスト実行者がエージェントに登録していることを確認し、エージェントモニタサービスを実行します。
- 10 エージェントモニタによってエージェントが起動したら、購読ユーザに通知をチェックしてもらいます。

この章の内容

| | |
|--|-----|
| Batch Administration Program | 247 |
| Batch Administration Program の使用 | 247 |
| 例 | 255 |

Batch Administration Program

Batch Administration Program は、複数の HTML ファイル（Web ページ）の生成を単一のコマンド行から実行するための独立したユーティリティです。これは Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーション用の静的レポート、チャート、およびパッケージの作成に使用できます。セットアッププログラムはデフォルトで Batch Administration Program をインストールします。

Batch Administration Program の実行では、Web ページとして生成する静的レポート、チャート、パッケージのプロパティをコマンド行パラメータを使用して指定します。Batch Administration Program の実行には、Hyperion Enterprise アプリケーションのユーザ名とパスワードをコマンド行パラメータとして指定する必要があります。

注： バッチのコマンド行パラメータでは大文字と小文字が区別されません。

Batch Administration Program を実行すると、コマンド行パラメータとして指定したプロパティが BATADMIN.CFG という名前のテキストファイルに保存され、次回に Batch Administration Program を実行するときにデフォルトとして使用されます。コマンド行パラメータを変更しない場合は、次回に Batch Administration Program を実行するときに、これらのデフォルトが使用されます。ユーザ名、パスワード、およびデータの視点は BATADMIN.CFG に保存されません。

Batch Administration Program の使用

Batch Administration Program は次のいずれかの方法で使用できます。

- Batch Administration Program の複数のコマンドを含んでいるバッチファイルを作成することができます。バッチファイルを実行すると、各コマンドで指定された静的レポート、チャート、またはパッケージが Web ページとして生成されます。

- コマンド行から Batch Administration Program を実行して、単一の静的レポート、チャート、またはパッケージを生成できます。
- Batch Administration Program を後で実行するようにスケジュールすることができます。

BatAdmin コマンド行の構文

Batch Administration Program を静的レポート、チャートまたはパッケージの生成に使用するには、コマンドプロンプトまたはバッチファイル内で次の BatAdmin コマンド構文を使用します。

```
BatAdmin /user=UserID /password=Password [/sys=System] [/app=Application] [/doc=TypeName] [/rpt=Report] [/file=FileName] [/longfile=UseLongFilename] [/pov="POV"] [/chrteng=ChartEngine] [/ct=ChartType] [/ctitle=ChartTitle] [/piv=ChartPivot] [/leg=ChartLegend] [/fon=ChartFont] [/fos=ChartFontSize] [/wid=ChartWidth] [/ht=ChartHeight] [/drill=DrillOn] [/maxdrill=MaxDrillLevels] [/expand=ExpandOn] [/maxexpand=MaxExpandLevels] [/exceltmpl=ExcelTemplate] [/pdf=GenPDF] [/tpath=TemplatePath] [/lockhdrs=LockHeaders] [/browser=BrowserType] [/grid=UseBorders] [/style=BookStyle]
```

| 変数 | 説明 |
|-------------|--|
| UserID | Hyperion Enterprise アプリケーションで使用するユーザ名。 これは必須のパラメータです。 コマンド行でユーザ名を指定しないと、コマンドを実行したときに入力するように指示されます。 |
| Password | Hyperion Enterprise アプリケーションで使用するパスワード。 これは必須のパラメータです。 コマンド行でユーザ名を指定しないと、コマンドを実行したときに入力するように指示されます。 |
| System | <p>アクセスする Hyperion 製品のラベル。</p> <p>製品のラベルは REPENG.INI ファイルの[DRIVERS32]セクションで定義します。</p> <p>Essbase を使用している場合は、System パラメータを次の構文に置き換えます。
Essbase-servername\Essbase application name</p> <p>ここで、Essbase-servername は、REPENG.INI ファイルの Essbase ドライバ名と Essbase サーバ名をハイフンでつないだものです。Essbase application name は、Essbase アプリケーションの名前です。</p> |
| Application | <p>アクセスする Hyperion Enterprise アプリケーションのラベル。System パラメータで指定されているオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアの任意のアプリケーションを選択できます。</p> <p>Essbase を使用している場合、このパラメータは Essbase データベースの名前です。</p> |
| TypeName | <p>Web ページに表示する文書の種類。次のいずれかの値を指定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Report : 静的レポートを生成します。 ● Chart : 静的チャートを生成します。 ● Repchart : 並列表示の静的レポートとチャートを生成します。 ● Book : 静的パッケージを生成します。 |

| 変数 | 説明 |
|-----------------|--|
| | <ul style="list-style-type: none"> ● Bookchart : HTML ベースの表の代わりにチャートを含む静的パッケージを生成します。 |
| Report | Web ページとして生成する静的レポートやパッケージの名前 |
| FileName | Batch Administration Program が生成する Web ページの出力ファイル名。HTML ファイル名を指定しない、レポート名に拡張子 .HTM を付けたものがファイル名になります。 |
| UseLongFilename | <p>次のいずれかの設定を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Yes : 生成された HTML ファイルに長いファイル名を使用します。 ● No : ファイル名の長さを 8 文字に制限します。 |
| "POV" | <p>静的レポート、チャート、またはパッケージを生成するときに適用するデータの視点。データの視点ディメンションとそのデフォルト値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● エンティティ - CORP ● データ種別 - ACTUAL ● 期間 - JAN.97 <p>注： 現在の月を指定するには、期間を@curmonth に設定します。
 spider.ini ファイルの[Default]セクションで@curmonth パラメータを設定した場合は、BatAdmin コマンドの期間がその月に設定されます。例えば、SPIDER.INI ファイルで@curmonth=january を設定し、BatAdmin コマンドで period=@curmonth を指定した場合は、BatAdmin コマンドによって生成されるデータの視点レポートの期間は 1 月に設定されます。SPIDER.INI ファイルで@curmonth が設定されていない場合は、生成されるレポートのデータの視点は、Windows の現在の月に設定されます。SPIDER.INI ファイルで@curmonth が設定されていない場合は、アプリケーションで使用する月の長い形式の名前は、コンピュータで指定されている月の表記に正確に一致している必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 期間単位 - M.CTD ● 勘定科目 - AVGRATE ● サブエンティティ - NONE ● サブ勘定科目 1 - NONE\ ● サブ勘定科目 2 - NONE ● フィールド - VAL <p>データの視点全体を二重引用符 (") で囲み、データの視点内の個々のディメンションをアンパサンド (&) で区切ります。</p> |
| ChartEngine | 静的チャートの生成に使用するチャートエンジンの種類。Visual Components First Impressions チャートエンジンを使用するには 1 を、Microsoft Excel チャートエンジンを使用するには 2 を指定します。 |
| ChartType | 生成するチャートの種類。デフォルトは 0 (3 次元縦棒グラフ) です。このパラメータについては、 251 ページの「ChartType パラメータの値」 を参照してください。 |
| ChartTitle | 静的チャートのタイトル。このパラメータにはデフォルト値はありません。 |
| ChartPivot | <p>次のいずれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Yes : データの行および列がスワップまたはピボット (再配置) されます。これがデフォルト値です。 |

| 変数 | 説明 |
|-----------------|---|
| | <ul style="list-style-type: none"> ● No : 水平軸に沿って行が、垂直軸に沿って列が表示されます。 |
| ChartLegend | <p>次のいずれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Yes : 色分けの凡例がチャートに表示されます。 ● No : 凡例は表示されません。この設定がデフォルトです。 |
| ChartFont | チャートの軸のラベルに使用するフォントの名前。デフォルト値は Arial です。 |
| ChartFontSize | チャート軸のラベルに使用するポイント単位でのフォントサイズ。デフォルトは 8 です。 |
| ChartWidth | ピクセル単位でのチャートの幅。高さは最適の表示に自動的に調整されます。デフォルト値は 500 です。 |
| ChartHeight | チャートの高さ (ピクセル単位) |
| DrillOn | <p>次のいずれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Yes : レポートの調査を有効にします。この設定がデフォルトです。 ● No : レポートの調査を無効にします。No を指定すると、レポート定義で調査が有効になっていても無効になります。 |
| MaxDrillLevels | レポートの調査レベルの最大数。デフォルトは 4 です。このパラメータを設定した場合は、DrillOn パラメータが自動的に Yes に設定されます。 |
| ExpandOn | <p>次のいずれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Yes : レポートの展開を有効にします。この設定がデフォルトです。 ● No : レポートの展開を無効にします。No を指定すると、レポート定義で展開が有効になっていても無効になります。 <p>ヒント : No を指定すると、プラス記号 (+) やマイナス記号 (-) が表示されないのでブラウザで使用する領域が小さくなります。</p> |
| MaxExpandLevels | レポートの展開レベルの最大数。デフォルトは 4 です。このパラメータを設定した場合は、ExpandOn パラメータが自動的に Yes に設定されます。 |
| UseFrames | <p>次のいずれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Yes : 個別のフレームにデータの視点ボタンが表示されます。この設定がデフォルトです。 ● No : レポートの本体にデータの視点ボタンが表示されます。フレームをサポートしていないブラウザを使用する場合は、No を指定します。 |
| GenPDF | <p>次のいずれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Yes : 静的レポート、チャート、またはパッケージの PDF ファイルを生成します。 ● No : PDF ファイルは生成されません。 |
| TemplatePath | Web ページの生成に使用するすべてのテンプレート (.htx ファイル) が保存されているディレクトリのパス |
| LockHeaders | <p>次のいずれかを指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Yes : ユーザがレポートをスクロールする際に行および列見出しが固定されます。 ● No : 行および列見出しは固定されません。 |

| 変数 | 説明 |
|-------------|--|
| | LockHeaders パラメータは、管理プログラムで設定されている行および列見出しのデフォルト動作に優先します。このオプションの設定方法について詳しくは、管理プログラムのオンラインヘルプを参照してください。 |
| BrowserType | 次のいずれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> ● 1 : Microsoft Internet Explorer 6.0x 以降を Web ブラウザに指定します。 ● 2 : Mozilla Firefox 2.0.x 以降を Web ブラウザに指定します。 ● 0 : その他のブラウザを指定します。この設定がデフォルトです。 |
| UseBorders | 次のいずれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> ● Yes : レポートに枠線を表示します。 ● No : 枠線を表示しません。 |
| BookStyle | 静的パッケージを生成する場合に指定する Web ページのスタイル。次のいずれかの値を指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> ● 0 : すべてのレポートやチャートを 1 つの HTML ファイルに含めます。 ● 1 : レポートやチャートを複数の HTML ファイルに含めます。 ● 2 : レポートやチャートごとに別々の HTML ファイルを生成します。 |

ChartType パラメータの値

ChartType パラメータは、生成するチャートの種類を指定するために使用します。選択できるチャートの種類は Visual Components First Impression チャート作成ツールを使うか、Microsoft Excel を使うかで異なります。

次の場合に Visual Components First Impression チャート作成ツールを使用します。

- Microsoft Excel が Hyperion Enterprise Reporting サーバにインストールされていない場合
- 組み合わせチャート、バブルチャート、ガントチャートなど Excel がサポートしないチャートを作成する場合。
- First Impression のチャートの外観が望ましい場合

次の場合は Microsoft Excel のチャート作成ツールを使用します。

- Microsoft Excel が Hyperion Enterprise Reporting サーバにインストールされている場合
- 等高線グラフ、二次元ドーナツグラフ、ユーザ定義のグラフなど First Impression がサポートしないチャートを作成する場合。
- Excel のチャートの外観が望ましい場合

Visual Components First Impression のチャート作成ツールを使用する場合は、次の表にあるチャートの種類を選択できます。

表 32 First Impression のチャートの種類

| チャートの種類 | 値 |
|---------|---|
| 3 次元縦棒 | 0 |

| チャートの種類 | 値 |
|---------|----|
| 2次元縦棒 | 1 |
| 3次元折れ線 | 2 |
| 2次元折れ線 | 3 |
| 3次元面 | 4 |
| 2次元面 | 5 |
| 3次元階段状 | 6 |
| 2次元階段状 | 7 |
| 3次元複合 | 8 |
| 2次元複合 | 9 |
| 3次元横棒 | 10 |
| 2次元横棒 | 11 |
| 3次元集合棒 | 12 |
| 3次元円 | 13 |
| 2次元円 | 14 |
| 3次元ドーナツ | 15 |
| 2次元XY線 | 16 |
| 2次元ポーラー | 17 |
| 2次元レーダー | 18 |
| 2次元バブル | 19 |
| 2次元等高線 | 20 |
| 2次元ガント | 21 |
| 3次元ガント | 22 |

Microsoft Excel のチャート作成ツールを使用する場合は、次の表にあるチャートの種類を選択できます。

表 33 Microsoft Excel のチャートの種類

| チャートの種類 | 値 |
|---------|---|
| 3次元縦棒 | 0 |
| 2次元縦棒 | 1 |
| 3次元折れ線 | 2 |

| チャートの種類 | 値 |
|-------------|----|
| 2 次元折れ線 | 3 |
| 3 次元面 | 4 |
| 2 次元面 | 5 |
| 3 次元横棒 | 10 |
| 2 次元横棒 | 11 |
| 3 次元円 | 13 |
| 2 次元円 | 14 |
| 2 次元 XY 散布図 | 16 |
| 2 次元レーダー | 18 |
| 3 次元等高線 | 23 |
| 2 次元ドーナツ | 24 |
| カスタム | 25 |

単一の BatAdmin コマンドの実行

- ▶ コマンド行から Batch Administration Program を実行して、単一の静的レポート、チャート、またはパッケージを生成するには、次の手順に従います。
- 1 コマンドプロンプトウィンドウを開きます。
- 2 C:\プロンプトで「BatAdmin」に続けて Hyperion Enterprise アプリケーションのユーザ名、パスワードを順に入力し、レポート、チャート、またはパッケージの名前を入力し、その他の必須パラメータを入力します。

例えば、次の BatAdmin コマンドは、Hyperion Enterprise DEMO アプリケーションの AGRANGE レポートの Web ページを生成し、レポートを FILE1.HTM として保存します。

```
BatAdmin.exe /user=admin /password=
/sys=ENTERPRISE /app=DEMO /rpt=AGRANGE
/file=File1 /pov="%Entity=
Global&Period=MAR.97" /doc=report
```

- 3 静的レポート、チャート、またはパッケージの Web ページが生成されたら、Web ブラウザを開いてファイルを表示します。

複数の BatAdmin コマンドを実行するバッチファイルの作成と実行

- ▶ 複数の BatAdmin コマンドを実行するバッチファイルを作成して実行するには、次の手順に従います。

- 1 Windows のメモ帳などのテキストエディタを開きます。
- 2 BatAdmin コマンド行を含むバッチファイルを作成します。

例えば、次のような TEST.BAT というバッチファイルを作成します。

```
@echo off
rem レポートを作成するためのバッチファイル
@echo on
batadmin /user=%1 /sys=ENTERPRISE /app=DEMO /doc=report /rpt=rpprod3
/file=D:\dumpdir\RPPROD3
/pov="&Entity=CORP&Period=%2" /longfile=yes
/chrteng=1 /ct=0 /ctitle=MyChart /leg=yes
/fon=Arial /fos=8 /wid=500 /piv=yes /drill=yes /expand=yes /frame=no
/tpath=d:\spider3x\ntintel\debug\bin\
/pdf=yes /lockhdrs=yes /browser=0 /grid=no
/style=0
batadmin /user=%1 /rpt=sumbal /pdf=no /grid=no /file=d:\dumpdir\sumbal
batadmin /user=%1 /doc=chart /rpt=sup4f
/file=d:\dumpdir\SUP4F /pdf=yes /piv=no
/leg=no
batadmin /user=%1 /doc=book /longfile=yes
/rpt=otprod /file=d:\dumpdir\bk /grid=no
/style=2
```

- 3 バッチファイルを拡張子*.BAT で保存します。
- 4 コマンドプロンプトで、実行するバッチファイルの名前に続けて Hyperion Enterprise アプリケーションのユーザ名、パスワード、適用する環境変数を順に入力します。バッチファイルでの環境変数の使用方法について詳しくは、次の項を参照してください。

BatAdmin コマンドでの代替変数の使用

コマンドインタプリタプログラムはユーザ定義変数もアプリケーション定義変数もサポートします。バッチファイル内の BatAdmin コマンドで使用するパラメータの値を変数で表現できます。

- ▶ BatAdmin コマンドで環境変数を使用するには、次の手順に従います。

- 1 BatAdmin コマンド行構文に従ってバッチファイルで変数を設定します。

例えば、ユーザ名、パスワード、およびデータの視点の期間ディメンションの値を表す変数として%1、%2、および%3 をバッチファイルで使用できます。その場合のバッチファイルは次のようになります。

```
@echo off
rem レポートを作成するためのバッチファイル
@echo on
```

```

BatAdmin /user=%1 /password=%2
/sys=ENTERPRISE /app=DEMO /doc=report
/rpt=AGRANGE
/pov="&Entity=CORP&Category=ACTUAL&Period=%3
&Frequency=M.CTD"
BatAdmin /user=%1 /password=%2 /rpt=AGSALES /
pov="&Entity=CORP&Category=ACTUAL&Period=%3&Frequency=M.CTD"
BatAdmin /user=%1 /password=%2 /rpt=RESULTS /
pov="&Entity=CORP&Category=ACTUAL&Period=%3&Frequency=M.CTD"
BatAdmin /user=%1 /password=%2 /rpt=RPPL1 /
pov="&Entity=CORP&Category=ACTUAL&Period=%3&Frequency=M.CTD"
BatAdmin /user=%1 /password=%2 /rpt=RPPL2 /
pov="&Entity=CORP&Category=ACTUAL&Period=%3&Frequency=M.CTD"
BatAdmin /user=%1 /password=%2 /rpt=RPPL3 /
pov="&Entity=CORP&Category=ACTUAL&Period=%3&Frequency=M.CTD"

```

- 2 バッチファイルを拡張子*.BAT で保存します。
- 3 コマンドプロンプトで、実行するバッチファイルの名前を入力し、次に変数に値が設定されているパラメータの名前を変数で設定されている順番に入力します。

例えば、ステップ 1 のバッチファイルの例を実行するには、次のようにコマンドを入力します。

```
C:\>test.bat YourUserID YourPassword JAN.98
```

例

この項の例は、すべて次のバッチファイル BATADMINDEMO.BAT に含まれています。このファイルは Hyperion Enterprise Reporting Web アプリケーションのインストール時に、Microsoft IIS を実行するコンピュータの HSPIDER ディレクトリにインストールされます。

```

@echo off
set destpath=c:\inetpub\wwwroot\
set file=/file=%destpath%
set userpass=/user=admin /password=
set sysapp=/sys=Enterprise /app=demo
set spiderdir=/tpath=c:\inetpub\scripts
set doctype=/doc=report
rem *** ここでレポート、チャートなどのデフォルトオプションを設定します。
set other_options=/drill=no /expand=no /pdf=yes /lockhdrs=no /grid=no /
style=2 %spiderdir% %doctype% %userpass% %sysapp% /longfile=yes /
browser=ie40
rem *****Essbaseレポート*****
set sysapp=/sys=Essbase-yourserver\yourapp /app=demo
set userpass=/user=userid /password=user000
set doctype=/doc=report
set other_options=/drill=no /expand=no /pdf=yes /lockhdrs=no /grid=no /
style=2 %spiderdir% %doctype% %userpass% %sysapp% /longfile=yes /
browser=ie40
rem *** 展開と調査。これらのテストでは、明示的に指定しない場合でもBatAdminによりいくつ
    かの機能が有効になります。例えば、出力ファイル名に長いファイル名を指定すると長い
    ファイル名が有効になります。
batadmin /rpt=expand1 %file%table.htm %other_options%
batadmin /rpt=expand1 %file%table_with_1_expansion /maxexpand=1 /
drill=no %userpass%

```

```

batadmin /rpt=expand1 %file%table_with_1_invest /expand=no /maxdrill=1
%userpass%
rem *** 次のコマンド行では調査を使用するため、長いファイル名を有効にする必要があります。
batadmin /rpt=expand1 %file%5char.htm /maxexpand=1 /maxdrill=1 %userpass
%
rem *** このレポートは8.3形式のファイル名で生成する必要があります *****
batadmin /rpt=expand1 %file%8dt3.htm /maxexpand=1 /maxdrill=1 /
longfile=no %userpass%
batadmin /rpt=expand1 %file%table_with_lh.htm /lockhdrs=yes /
browser=ie40 /expand=no /drill=no /longfile=yes /pdf=no %userpass%
batadmin /rpt=expand1 %file%table_with_lh_exp_and_invest /lockhdrs=yes /
browser=ie40 /maxexpand=1 /maxdrill=1 %userpass%
rem *** POVオプションの変更
batadmin /rpt=rppl1 %file%pov.htm /lockhdrs=no /drill=no /expand=no /
pov="&entity=corp&category=actual" %userpass%
batadmin /rpt=rppl1 %file%pov2.htm /
pov="&entity=europe&Category=Actual" %userpass%
rem *** テンプレートのパスを変更し、後で元に戻します。
batadmin /rpt=expand1 /tpath=c:\inetpub\scripts2 %file
%new_template_path %userpass%
batadmin /rpt=expand1 %spiderdir% %file%old_template %userpass%
rem *** グリッド線を使用したレポートを生成した後、グリッド線を無効にします。
batadmin /rpt=expand1 /grid=yes %file%table_with_grid %userpass%
batadmin /rpt=expand1 /grid=no %file%table_with_no_grid %userpass%
rem *** スペースを含む長いファイル名を試します。
batadmin /rpt=expand1 %file%table with spaces in name.htm %userpass%
:チャート
rem ***** チャートの生成
@ set doctype=/doc=chart
@ set other_options=/drill=no /expand=no /pdf=yes /lockhdrs=no /grid=no /
style=2 %spiderdir% %doctype% %userpass% %sysapp% /longfile=yes
batadmin /rpt=rppl1 %file%chart_simple.htm %other_options%
@ rem オプションを指定してチャートを生成します。
batadmin /rpt=rppl1 %file%chart_with_1_expansion /maxexpand=1 %userpass
%
batadmin /rpt=rppl1 %file%chart_with_1_invest /maxdrill=1 %userpass%
batadmin /rpt=rppl1 %file%chart_excel_custom_template /maxdrill=0
%userpass% /chrteng=2 /exceltmpl=your_custom_template_name_here
rem ***** repchartを生成します。
@ set doctype=/doc=repchart
@ set other_options=/drill=no /expand=no /pdf=yes /lockhdrs=no /grid=no /
style=2 %spiderdir% %doctype% %userpass% %sysapp% /longfile=yes
batadmin /rpt=expand1 %file%repchart_default.htm %other_options%
rem ***** パッケージを生成します。
@ set doctype=/doc=book
@ set other_options=/drill=no /expand=no /pdf=yes /lockhdrs=no /grid=no /
style=2 %spiderdir% %doctype% %userpass% %sysapp% /longfile=yes
batadmin /rpt=pl %file%book_default.htm %other_options%
batadmin /rpt=pl %file%book_with_1_expansion.htm /maxexpand=1
%other_options%
batadmin /rpt=pl %file%book_with_1_invest.htm /maxdrill=1 %other_options
%
batadmin /rpt=pl %file%book_with_lh_ie.htm /lockhdrs=yes /browser=ie40 /
drill=no %other_options%
batadmin /rpt=pl %file%book_with_lh_ns.htm /lockhdrs=yes /
browser=netscape40 %other_options%

```

```

rem *** 別のスタイルを試してみます。
batadmin /rpt=pl %file%book_html_single.htm /style=0 %other_options%
rem グループ単位のPDFはサポートされていません。
batadmin /rpt=pl %file%book_html_group.htm /style=1 /pdf=no
%other_options%
rem グリッド線を使用したパッケージを生成します。
batadmin /rpt=pl %file%book_with_grid_single /grid=yes /style=0
%other_options%
rem ***** bookchartを生成します。
@ set doctype=/doc=bookchart
@ set other_options=/drill=no /expand=no /pdf=yes /lockhdrs=no /grid=no /
style=2 %spiderdir% %doctype% %userpass% %sysapp% /longfile=yes
batadmin /rpt=pl %file%book_chart_default.htm %other_options%
batadmin /rpt=pl %file%book_chart_with_1_expansion.htm /maxexpand=1
%other_options%
batadmin /rpt=pl %file%book_chart_with_1_invest.htm /maxdrill=1
%other_options%
batadmin /rpt=pl %file%book_chart_with_lh.htm /lockhdrs=yes /
browser=ie40 %other_options%

```

例 1：環境変数

このサンプルバッチファイルの最初のセクションでは、ファイル全体で使用する環境変数を初期化します。

```

@echo off
set destpath=c:\inetpub\wwwroot\
set file=/file=%destpath%
set userpass=/user=admin /password=
set sysapp=/sys=Enterprise /app=demo
set spiderdir=/tpath=c:\inetpub\scripts
set doctype=/doc=report
rem *** ここでレポート、チャートなどのデフォルトオプションを設定します。
set other_options=/drill=no /expand=no /pdf=yes /lockhdrs=no /grid=no /
style=2 %spiderdir% %doctype% %userpass% %sysapp% /longfile=yes /
browser=ie40

```

%destpath%と%file%

次の行では、バッチ管理の出力ファイル（HTML 形式の静的レポート、チャート、パッケージ）の Hyperion Enterprise Reporting サーバ上での場所を指定する環境変数を初期化します。これによって各 BatAdmin コマンド行でディレクトリパスを繰り返さずに済みます。

```

set destpath=d:\inetpub\wwwroot\batadmin\
set file=/file=%destpath%

```

最初の行では%destpath%変数を、Hyperion Enterprise Reporting サーバ上で出力ファイルを保存する場所のディレクトリパスに設定して初期化します。2 行目は、%file%変数を、/file という BatAdmin パラメータに設定して初期化します。そのパラメータの値には%destpath%変数を設定します。

バッチファイルの後半で、%file%変数を使って出力ファイルのパスを指定します。ファイル名は次の例のように、この変数の後にスペースなしで続けます。

```
batadmin /rpt=NAMES %file%Essbase_book %userpass% /doctype=book
```

%userpass%

次の行はユーザ名とパスワードの設定に使用する%userpass%環境変数を初期化します。

```
set userpass=/user=admin /password=
```

%userpass%変数は BatAdmin パラメータの/user と/password に設定されます。これらのパラメータは適切なユーザ名とパスワード設定されます。同じバッチファイルでユーザ名として「admin」が設定されていますが、パスワードはありません。

レポート、チャート、およびパッケージの生成に使用するすべての製品とアプリケーションで、ユーザ名とパスワードがすべて同じ場合は、この変数によって、BatAdmin コマンド行ごとにユーザ名とパスワードを入力する手間を省くことができます。

%sysapp%

次の行は%sysapp%変数を初期化します。これは Hyperion 製品とアプリケーションの設定に使用されます。

```
set sysapp=/sys=Enterprise /app=demo
```

%sysapp%変数は BatAdmin パラメータの/sys と/app に設定されています。/sys パラメータは Enterprise に、/app パラメータは Demo に設定されています。この変数によって、同じ製品とアプリケーションを使用する BatAdmin コマンド行ごとに/sys と/app パラメータを繰り返し入力する手間を省くことができます。

サンプルファイルでは、%sysapp%を使って%other_options%変数に設定されているオラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアとアプリケーションを指定しています。%other_options%変数は、レポート、チャート、およびパッケージ用のデフォルトオプションを設定します。

%spiderdir%

次の行は%spiderdir%変数を初期化します。これは、Web ページ作成に使うテンプレート（HTX ファイル）のディレクトリパスの指定に使用されます。

```
set spiderdir=/tpath=c:\inetpub\spider
```

%spider%変数は、テンプレートのディレクトリを指定する/tpath という BatAdmin パラメータに設定されています。この変数によって、BatAdmin コマンド行ごとに/tpath パラメータを繰り返し入力する手間を省くことができます。

サンプルファイルでは、%spiderdir%が%other_options%変数の/tpath パラメータを指定するために使用されています。

%doctype%

次の行は%doctype%変数を初期化します。これは生成する HTML ドキュメントの種類（レポート、チャート、またはパッケージ）の設定に使用されます。

```
set doctype=/doc=report
```

%doctype%変数は/doc という BatAdmin パラメータに、/doc は report に設定されています。この変数によって、レポートを生成する BatAdmin コマンド行ごとに/doc パラメータを繰り返し入力する手間を省くことができます。

サンプルファイルでは、%other_options%変数でドキュメントの種類を指定するために%doctype%が使用されています。

%other_options%

次の行は%other_options%変数を初期化します。これはレポートオプションの設定に使用されます。

```
set other_options=/drill=no /expand=no /pdf=yes /lockhdrs=no /grid=no /  
style=2 %spiderdir% %doctype% %userpass% %sysapp% /longfile=yes /  
browser=ie40
```

%other_options%変数には次の BatAdmin パラメータと環境変数が設定されています。

- /drill=no - 調査を無効にします。
- /expand=no - 展開を無効にします。
- /pdf=yes - 選択したレポートの PDF ファイルを作成します。
- /lockhdrs=no - 行および列見出しは固定されません。
- /grid=no - 選択したレポートにグリッド線を表示しません。
- /style=2 - 選択した静的パッケージで個々のレポートやチャートを別々の HTML ファイルとして作成します。
- %spiderdir% - テンプレートのディレクトリを設定します。
- %doctype% - 作成する HTML ファイルを設定します（あらかじめ report に設定されています）。
- %userpass% - ユーザ名とパスワードを設定します（あらかじめ「admin」とパスワードなしに設定されています）。
- %sysapp% - オラクル社の Enterprise Performance Management ソフトウェアおよびアプリケーションを設定します。（あらかじめ Hyperion Enterprise と Demo アプリケーションに設定されています）。
- /longfile=yes - 出力ファイルに長いファイル名を使用できるようにします。
- /browser=ie40 - 出力される HTML ファイルのブラウザの種類を Microsoft Internet Explorer に設定します。

%other_options%変数によって、これらのパラメータを使用する BatAdmin コマンド行ごとに同じパラメータを繰り返し入力する手間を省くことができます。サンプルファイルでは、%other_options%変数が次のような複数の BatAdmin コマンド行に同じレポートオプションを設定するために使用されています。

```
batadmin /rpt=expand1 %file%table.htm %other_options%
```

Essbase の環境変数

次の行は Essbase に環境変数を初期化します。

```
set sysapp=/sys=Essbase-yourserver\yourapp /app=demo
set userpass=/user=userid /password=user000
set doctype=/doc=report
set other_options=/drill=no /expand=no /pdf=yes /lockhdrs=no /grid=no /
style=2 %spiderdir% %doctype% %userpass% %sysapp% /longfile=yes /
browser=ie40
```

例 2：展開と調査

BATADMINDEMO.BAT ファイルの次のセクションには、展開と調査を含むレポートを生成する BatAdmin コマンド行が含まれています。

```
batadmin /rpt=expand1 %file%table.htm %other_options%
batadmin /rpt=expand1 %file%table_with_1_expansion /maxexpand=1 /
drill=no %userpass%
batadmin /rpt=expand1 %file%table_with_1_invest /expand=no /maxdrill=1
%userpass%
rem *** 次のコマンド行では調査を使用するため、長いファイル名を有効にする必要がありま
す。
batadmin /rpt=expand1 %file%5char.htm /maxexpand=1 /maxdrill=1 %userpass
%
rem *** このレポートは8.3形式のファイル名で生成する必要があります *****
batadmin /rpt=expand1 %file%8dt3.htm /maxexpand=1 /maxdrill=1 /
longfile=no %userpass%
batadmin /rpt=expand1 %file%table_with_lh.htm /lockhdrs=yes /
browser=ie40 /expand=no /drill=no /longfile=yes /pdf=no %userpass%
batadmin /rpt=expand1 %file%table_with_lh_exp_and_invest /lockhdrs=yes /
browser=ie40 /maxexpand=1 /maxdrill=1 %userpass%
```

これらのコマンド行では同じユーザ名とパスワードを使用するので、すべて %userpass% 変数が使用されています。

展開を有効にして調査を無効にする

次のコマンド行では展開を使用し展開のレベル数を 1 に設定します。

```
batadmin /rpt=expand1 %file%table_with_1_expansion /maxexpand=1 /
drill=no %userpass%
```

/maxexpand パラメータを 1 に設定すると、そのレポートの展開が自動的に有効になります。/drill パラメータは no に設定されているので調査は無効になります。/rpt パラメータには使用するレポートの名前として expand1 が指定されています。%file% 変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成される HTML ファイルの名前がその後に続いています。

調査を有効にして展開を無効にする

次のコマンド行では、レポートで調査を使用し、調査のレベル数を 1 に設定し、展開を無効に設定しています。

```
batadmin /rpt=expand1 %file%table_with_1_invest /expand=no /maxdrill=1 %userpass%
```

/maxdrill パラメータを 1 に設定するとそのレポートで調査が自動的に有効になります。/expand パラメータは no に設定されているので展開は無効になります。/rpt パラメータには使用するレポートの名前として expand1 が指定されています。%file%変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成される HTML ファイルの名前がその後に続いています。

調査と展開の両方を有効にする

次のコマンド行では、レポートで展開と調査の両方を使用します。

```
batadmin /rpt=expand1 %file%5char.htm /maxexpand=1 /maxdrill=1 %userpass%
```

/maxexpand と/maxdrill パラメータを設定すると、そのレポートの展開と調査が自動的に有効になります。/rpt パラメータには使用するレポートの名前として expand1 が指定されています。%file%変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成される HTML ファイルの名前がその後に続いています。

長いファイル名の有効化と無効化

次のコマンド行では、出力ファイルで調査と展開の両方を使用し、長いファイル名が無効になっています。

```
batadmin /rpt=expand1 %file%8dt3.htm /maxexpand=1 /maxdrill=1 /longfile=no %userpass%
```

/maxexpand と/maxdrill パラメータを設定すると、そのレポートの展開と調査が自動的に有効になります。/rpt パラメータには使用するレポートの名前として expand1 が指定されています。%file%変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成される HTML ファイルの名前がその後に続いています。/longfile パラメータは no に設定されているので、出力ファイルの名前は 8.3 形式のファイル名に制限されます。

次のコマンド行では、出力ファイルで調査と展開の両方が無効になっていて、長いファイル名が有効になっています。

```
batadmin /rpt=expand1 %file%table_with_1h.htm /lockhdrs=yes /browser=ie40 /expand=no /drill=no /longfile=yes /pdf=no %userpass%
```

/expand と/drill パラメータを no に設定すると、そのレポートの展開と調査が無効になります。/rpt パラメータには使用するレポートの名前として expand1 が指定されています。%file%変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成される HTML ファイルの名前がその後に続いています。/longfile パラメータは yes に設定されています。これによって出力ファイルに長いファイル名を使用できます。

/lockhdrs パラメータが no に設定されているので、そのレポートの行および列見出しは固定されません。/browser パラメータが ie40 に設定されているので、生成される HTML ファイルには Microsoft Internet Explorer 6.0 以降用の書式が適用されません。

例 3：データの視点の変更

BATADMINDEMO.BAT ファイルの次のセクションには、レポートのデータの視点を変更する BatAdmin コマンド行が含まれています。

```
batadmin /rpt=rppl1 %file%pov.htm /lockhdrs=no /drill=no /expand=no /
pov="&entity=corp&category=actual" %userpass%
batadmin /rpt=rppl1 %file%pov2.htm /
pov="&entity=europe&Category=Actual" %userpass%
```

/pov パラメータで設定するデータの視点は、元のレポートに設定されているデータの視点に優先します。上の 2 つのコマンド行ではどちらも、/pov パラメータでエンティティとデータ種別のデータの視点ディメンションを設定しています。最初の行ではエンティティが CORP に、データ種別が ACTUAL に設定されています。2 行目では、エンティティが EUROPE に、データ種別が ACTUAL に設定されています。各コマンド行でデータの視点全体が二重引用符で囲まれ、各ディメンションはアンパサンド (&) で区切られています。

/rpt パラメータには使用するレポートの名前として rppl1 が指定されています。%file%変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成される HTML ファイルの名前がその後に続いています。%userpass%変数にはユーザ名とパスワードがあらかじめ設定されています。

例 4：テンプレートパスの変更

BATADMINDEMO.BAT ファイルの次のセクションには、Web ページの生成に使用するすべてのテンプレート (HTX ファイル) が保存されているディレクトリへのパスを変更する BatAdmin コマンド行が含まれています。

```
batadmin /rpt=expand1 /tpath=c:\inetpub\scripts2 %file
%new_template_path %userpass%
batadmin /rpt=expand1 %spiderdir% %file%old_template %userpass%
```

最初のコマンド行では、/tpath パラメータを使って、テンプレートパスをバッチファイルの冒頭にある %spiderdir%環境変数で設定した c:\inetpub\scripts から、カスタムテンプレートを保存している独自に作成できるディレクトリを表す c:\inetpub\scripts2 に変更しています。BatAdmin コマンドでテンプレートパスを変更する場合は、既に作成されているディレクトリパスを指定していることを確認してください。

2 行目では、%spiderdir%環境変数を使って/tpath パラメータの値を元のテンプレートパスに戻します。

/rpt パラメータには使用するレポートを指定します。上の例ではどちらも expand1 が指定されています。%file%変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定

されていて、生成される HTML ファイルの名前がその後に続いています。%userpass %変数にはユーザ名とパスワードがあらかじめ設定されています。

例 5：レポートのグリッド線の有効化と無効化

BATADMINDEMO.BAT ファイルの次のセクションには、レポートのグリッド線を有効化または無効化する BatAdmin コマンド行が含まれています。

```
batadmin /rpt=expand1 /grid=yes %file%table_with_grid %userpass%
```

```
batadmin /rpt=expand1 /grid=no %file%table_with_no_grid %userpass%
```

最初のコマンド行は、/grid パラメータを yes に設定して、そのレポートのグリッド線を有効にしています。2 行目では、/grid を no に設定して、グリッド線を無効にしています。

/rpt パラメータには使用するレポートを指定します。上の例ではどちらも expand1 が指定されています。%file%変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成される HTML ファイルの名前がその後に続いています。%userpass %変数にはユーザ名とパスワードがあらかじめ設定されています。

例 6：チャートの生成

BATADMINDEMO.BAT ファイルの次のセクションには、静的チャートを生成する BatAdmin コマンド行が含まれています。

```
@ set doctype=/doc=chart
@ set other_options=/drill=no /expand=no /pdf=yes /lockhdrs=no /grid=no /
style=2 %spiderdir% %doctype% %userpass% %sysapp% /longfile=yes
batadmin /rpt=rppl1 %file%chart_simple.htm %other_options%
@ rem オプションを指定してチャートを生成します。
batadmin /rpt=rppl1 %file%chart_with_1_expansion /maxexpand=1
%other_options%
batadmin /rpt=rppl1 %file%chart_with_1_invest /maxdrill=1 %other_options
%
batadmin /rpt=rppl1 %file%chart_excel_custom_template %other_options% /
chrteng=2 /exceltmpl=your_custom_template_name_here
```

環境変数

このセクションの最初の 2 行は、BatAdmin コマンド行で使用する環境変数を初期化します。

```
@ set doctype=/doc=chart
@ set other_options=/drill=no /expand=no /pdf=yes /lockhdrs=no /grid=no /
style=2 %spiderdir% %doctype% %userpass% %sysapp% /longfile=yes
```

これらの環境変数はバッチファイルの冒頭で設定した同じ名前の変数の設定に優先します。%doctype%変数は生成される出力の種類 (/doc パラメータ) を chart に設定します。%other_options%変数は複数のパラメータと変数を設定します。環境変数については、[257 ページの「例 1：環境変数」](#)を参照してください。

展開を使用するチャートの生成

次のコマンド行は展開が有効になっている静的チャートを生成します。

```
batadmin /rpt=rppl1 %file%chart_with_1_expansion /maxexpand=1  
%other_options%
```

%doctype%変数は%other_options%変数の中で出力の種類を chart に設定します。/maxexpand を 1 に設定するとチャートで展開が有効になります。これは%other_options%変数の/expand=no 設定に優先します。%other_options%変数の他の設定は指定されているチャートに適用されます。

/rpt パラメータには使用するレポートの名前として rppl1 が指定されています。
%file%変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成される HTML ファイルの名前がその後に続いています。

調査を使用するチャートの生成

次のコマンド行は調査が有効になっている静的チャートを生成します。

```
batadmin /rpt=rppl1 %file%chart_with_1_invest /maxdrill=1 %other_options  
%
```

%doctype%変数は%other_options%変数の中で出力の種類を chart に設定します。/maxdrill を 1 に設定するとチャートで調査が有効になります。これは%other_options%変数の/drill=no 設定に優先します。%other_options%変数の他の設定は指定されているチャートに適用されます。

/rpt パラメータには使用するレポートの名前として rppl1 が指定されています。
%file%変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成される HTML ファイルの名前がその後に続いています。

Microsoft Excel のオートフォーマットを使用したチャートの生成

次のコマンド行は、静的チャートの生成に Microsoft Excel をチャートエンジンとして使用し、Microsoft Excel のオートフォーマットを適用します。

```
batadmin /rpt=rppl1 %file%chart_excel_custom_template %other_options% /  
chrteng=2 /exceltmpl=your_custom_template_name_here
```

%doctype%変数は%other_options%変数の中で出力の種類を chart に設定します。/charteng パラメータを 2 に設定すると、選択したチャートのチャートエンジンとして Microsoft Excel が使用されます。/exceltmpl パラメータには、チャートに使用する Microsoft Excel オートフォーマットが指定されています。チャートの書式設定オプションを指定するオートフォーマットは Microsoft Excel で作成します。
%other_options%変数の他の設定は指定されているチャートに適用されます。

/rpt パラメータには使用するレポートの名前として rppl1 が指定されています。
%file%変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成される HTML ファイルの名前がその後に続いています。

例 7：並列表示のレポートとチャートの生成

BATADMINDEMO.BAT ファイルの次のセクションには、新しい環境変数を設定して並列表示の静的レポートとチャートを生成する BatAdmin コマンド行が含まれています。

```
@ set doctype=/doc=repchart
@ set other_options=/drill=no /expand=no /pdf=yes /lockhdrs=no /grid=no /
style=2 %spiderdir% %doctype% %userpass% %sysapp% /longfile=yes
batadmin /rpt=expand1 %file%repchart_default.htm %other_options%
```

環境変数

このセクションの最初の 2 行は、BatAdmin コマンド行で使用する環境変数を初期化します。

```
@ set doctype=/doc=repchart
@ set other_options=/drill=no /expand=no /pdf=yes /lockhdrs=no /grid=no /
style=2 %spiderdir% %doctype% %userpass% %sysapp% /longfile=yes
```

これらの環境変数はバッチファイルの冒頭で設定した同じ名前の変数の設定に優先します。%doctype%変数は出力の種類 (/doc パラメータ) を repchart (並列表示のレポートとチャート) に設定します。%other_options%変数は複数のパラメータと変数を設定します。環境変数については、[257 ページの「例 1：環境変数」](#)を参照してください。

並列表示のレポートとチャートの生成

次のコマンド行は、静的レポートを左側のフレームに静的チャートを右側のフレームに表示する Web ページを生成します。

```
batadmin /rpt=expand1 %file%repchart_default.htm %other_options%
```

%doctype%変数は%other_options%変数の中で出力の種類を repchart に設定します。%other_options%変数の他の設定は指定されているチャートに適用されます。

/rpt パラメータには、レポートとチャートの両方に使用するレポートの名前として expand1 が指定されています。%file%変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成される HTML ファイルの名前がその後に続いています。

例 8：静的パッケージの生成

BATADMINDEMO.BAT ファイルの次のセクションには、新しい環境変数を設定して静的パッケージを生成する BatAdmin コマンド行が含まれています。

```
@ set doctype=/doc=book
@ set other_options=/drill=no /expand=no /pdf=yes /lockhdrs=no /grid=no /
style=2 %spiderdir% %doctype% %userpass% %sysapp% /longfile=yes
batadmin /rpt=pl %file%book_default.htm %other_options%
batadmin /rpt=pl %file%book_with_1_expansion.htm /maxexpand=1
%other_options%
```

```
batadmin /rpt=pl %file%book_with_1_invest.htm /maxdrill=1 %other_options%
%
batadmin /rpt=pl %file%book_with_lh_ie.htm /lockhdrs=yes /browser=ie40 /
drill=no %other_options%
batadmin /rpt=pl %file%book_with_lh_ns.htm /lockhdrs=yes /
browser=netscape40 %other_options%
rem *** 別のスタイルを試してみます。
batadmin /rpt=pl %file%book_html_single.htm /style=0 %other_options%
rem グループ単位のPDFはサポートされていません。
batadmin /rpt=pl %file%book_html_group.htm /style=1 /pdf=no
%other_options%
rem グリッド線を使用したパッケージを生成します。
batadmin /rpt=pl %file%book_with_grid_single /grid=yes /style=0
%other_options%
```

環境変数

このセクションの最初の 2 行は、BatAdmin コマンド行で使用する環境変数を初期化します。

```
@ set doctype=/doc=book
@ set other_options=/drill=no /expand=no /pdf=yes /lockhdrs=no /grid=no /
style=2 %spiderdir% %doctype% %userpass% %sysapp% /longfile=yes
```

これらの環境変数はバッチファイルの冒頭で設定した同じ名前の変数の設定に優先します。%doctype%変数は生成される出力の種類 (/doc パラメータ) を静的パッケージに設定します。%other_options%変数は複数のパラメータと変数を設定します。例えば、/style パラメータを 2 に設定して、静的パッケージの各レポートを個別の HTML ファイルとして生成します。環境変数については、[257 ページの「例 1：環境変数」](#)を参照してください。

静的パッケージの生成

次の BatAdmin コマンド行は、%other_options%環境変数で設定されているレポートオプションを使用して、静的パッケージを生成します。

```
batadmin /rpt=pl %file%book_default.htm %other_options%
/rptパラメータには使用する静的パッケージとしてplが指定されています。%file%変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成されるHTMLファイルの名前がその後が続いています。
```

次のコマンド行は、%other_options%環境変数で設定されているレポートオプションを使用して、静的パッケージを生成します。但し、展開を有効にする設定が追加されています。

```
batadmin /rpt=pl %file%book_with_1_expansion.htm /maxexpand=1
%other_options%
```

/maxexpand パラメータが 1 に設定されているので、そのパッケージに含まれるすべてのレポートの展開が自動的に有効になります。これは%other_options%変数の設定に優先します。

/rptパラメータには使用する静的パッケージとしてplが指定されています。%file%変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成されるHTMLファイルの名前がその後が続いています。

次のコマンド行は、%other_options%環境変数で設定されているレポートオプションを使用して、静的パッケージを生成します。但し、調査を有効にする設定が追加されています。

```
batadmin /rpt=pl %file%book_with_1_invest.htm /maxdrill=1 %other_options%
```

/maxdrill パラメータが 1 に設定されているので、その静的パッケージに含まれるすべてのレポートの調査が自動的に有効になります。これは%other_options%変数の設定に優先します。

/rptパラメータには使用する静的パッケージとしてplが指定されています。%file%変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成されるHTMLファイルの名前がその後に続いています。

次のコマンド行は、%other_options%環境変数で設定されているレポートオプションを使用して静的パッケージを生成します。但し、行および列見出しを固定する設定とブラウザ形式を Microsoft Internet Explorer 6.0 にする設定が追加されています。

```
batadmin /rpt=pl %file%book_with_lh_ie.htm /lockhdrs=yes /browser=ie40 /drill=no %other_options%
```

/lockhdrs パラメータが yes に設定されているので、そのパッケージのすべてのレポートの行および列見出しが固定されます。/browser パラメータは ie40 に設定されているので、そのパッケージのすべてのレポートが Microsoft Internet Explorer 6.0 用の書式で生成されます。

/rptパラメータには使用する静的パッケージとしてplが指定されています。%file%変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成されるHTMLファイルの名前がその後に続いています。

次のコマンド行は、%other_options%環境変数で設定されているレポートオプションを使用して、静的パッケージを生成します。但し、ブラウザ形式を Mozilla Firefox 2.0.x 以降にする設定が追加されています。

```
batadmin /rpt=pl %file%book_with_lh_ns.htm /lockhdrs=yes /browser=netscape40 %other_options%
```

/browser パラメータが netscape40 に設定されているので、そのパッケージのすべてのレポートが Mozilla Firefox 2.0.x 以降用の書式で生成されます。

/rpt パラメータには使用する静的パッケージとして pl が指定されています。%file%変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成される HTML ファイルの名前がその後に続いています。

異なったスタイルの静的パッケージの生成

次のコマンド行は、%other_options%環境変数で設定されているレポートオプションを使用して、すべてのレポートを単一の HTML ファイルに含める静的パッケージを生成します。

```
batadmin /rpt=pl %file%book_html_single.htm /style=0 %other_options%
```

/style パラメータが 0 に設定されているので、パッケージのすべてのレポートが単一の HTML ファイルに出力されます。

/rpt パラメータには使用する静的パッケージとして pl が指定されています。%file %変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成される HTML ファイルの名前がその後に続いています。

次のコマンド行は、すべてのレポートを一連の HTML ファイルに出力する静的パッケージを生成します。レポートオプションは%other_options%環境変数に指定されているものを使用します。但し、PDF ファイルの生成を無効にする設定が追加されています。

```
batadmin /rpt=pl %file%book_html_group.htm /style=1 /pdf=no
%other_options%
```

/style パラメータが 1 に設定されているので、パッケージのすべてのレポートは一連の HTML ファイルに出力されます。/pdf パラメータが no に設定されているので、PDF ファイルの生成は無効になります。一連の HTML ファイルを含む静的パッケージでは PDF ファイルの生成がサポートされていません。この設定は、%other_options%変数の/pdf パラメータの設定に優先します。

/rpt パラメータには使用する静的パッケージとして pl が指定されています。%file %変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成される HTML ファイルの名前がその後に続いています。

次のコマンド行は、すべてのレポートを単一の HTML ファイルに出力する静的パッケージを生成します。レポートオプションは%other_options%環境変数に指定されているものを使用します。但し、グリッド線を有効にする設定が追加されています。

```
batadmin /rpt=pl %file%book_with_grid_single /grid=yes /style=0
%other_options%
```

/style パラメータが 0 に設定されているので、パッケージのすべてのレポートが単一の HTML ファイルに出力されます。/grid パラメータが yes に設定されているので、パッケージのすべてのレポートでグリッド線が有効になります。この設定は、%other_options%変数の/grid パラメータの設定に優先します。

/rpt パラメータには使用する静的パッケージとして pl が指定されています。%file %変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成される HTML ファイルの名前がその後に続いています。

例 9：チャートのみを含む静的パッケージの生成

BATADMINDEMO.BAT ファイルの次のセクションには、新しい環境変数を設定して、チャートのみを含む静的パッケージを生成する BatAdmin コマンド行が含まれています。

```
@ set doctype=/doc=bookchart
@ set other_options=/drill=no /expand=no /pdf=yes /lockhdrs=no /grid=no /
style=2 %spiderdir% %doctype% %userpass% %sysapp% /longfile=yes
batadmin /rpt=pl %file%book_chart_default.htm %other_options%
batadmin /rpt=pl %file%book_chart_with_1_expansion.htm /maxexpand=1
%other_options%
batadmin /rpt=pl %file%book_chart_with_1_invest.htm /maxdrill=1
%other_options%
```

```
batadmin /rpt=pl %file%book_chart_with_lh.htm /lockhdrs=yes /  
browser=ie40 %other_options%
```

環境変数

このセクションの最初の 2 行は、BatAdmin コマンド行で使用する環境変数を初期化します。

```
@ set doctype=/doc=repchart  
@ set other_options=/drill=no /expand=no /pdf=yes /lockhdrs=no /grid=no /  
style=2 %spiderdir% %doctype% %userpass% %sysapp% /longfile=yes
```

これらの環境変数はバッチファイルの冒頭で設定した同じ名前の変数の設定に優先します。%doctype%変数は、生成される出力の種類 (/doc パラメータ) を bookchart に設定します。これにより、チャートのみを含む静的パッケージが生成されます。%other_options%変数は複数のパラメータと変数を設定します。例えば、/style パラメータを 2 に設定して、静的パッケージの各チャートを個別の HTML ファイルとして生成します。環境変数については、[257 ページの「例 1：環境変数」](#)を参照してください。

チャートのみを含む静的パッケージの生成

次の BatAdmin コマンド行は、%other_options%環境変数で設定されているレポートオプションを使用して、静的パッケージを生成します。

```
batadmin /rpt=pl %file%book_chart_default.htm %other_options%
```

/rpt パラメータには使用する静的パッケージとして pl が指定されています。%file %変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成される HTML ファイルの名前がその後に続いています。

次のコマンド行は、%other_options%環境変数に指定されているレポートオプションを使用して静的パッケージを生成します。但し、パッケージのすべてのチャートで展開を有効にする設定が追加されています。

```
batadmin /rpt=pl %file%book_chart_with_1_expansion.htm /maxexpand=1  
%other_options%
```

/maxexpand パラメータが 1 に設定されているので、そのパッケージに含まれるすべてのチャートの展開が自動的に有効になります。これは%other_options%変数の設定に優先します。

/rpt パラメータには使用する静的パッケージとして pl が指定されています。%file %変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成される HTML ファイルの名前がその後に続いています。

次のコマンド行は、%other_options%環境変数で設定されているレポートオプションを使用して、静的パッケージを生成します。但し、調査を有効にする設定が追加されています。

```
batadmin /rpt=pl %file%book_chart_with_1_invest.htm /maxdrill=1  
%other_options%
```

/maxdrill パラメータが 1 に設定されているので、その静的パッケージに含まれるすべてのレポートの調査が自動的に有効になります。これは%other_options%変数の設定に優先します。

/rpt パラメータには使用する静的パッケージとして pl が指定されています。%file%変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成される HTML ファイルの名前がその後に続いています。

次のコマンド行は、%other_options%環境変数で設定されているレポートオプションを使用して静的パッケージを生成します。但し、行および列見出しを固定する設定とブラウザ形式を Microsoft Internet Explorer 6.0 にする設定が追加されています。

```
batadmin /rpt=pl %file%book_chart_with_lh.htm /lockhdrs=yes /  
browser=ie40 %other_options%
```

/lockhdrs パラメータが yes に設定されているので、そのパッケージのすべてのレポートの行および列見出しが固定されます。/browser パラメータは ie40 に設定されているので、そのパッケージのすべてのレポートが Microsoft Internet Explorer 6.0 用の書式で生成されます。

/rpt パラメータには使用する静的パッケージとして pl が指定されています。%file%変数にはサーバ上の保存先ディレクトリパスが指定されていて、生成される HTML ファイルの名前がその後に続いています。

用語集

API 「アプリケーションプログラムインターフェイス (Application program interface : API)」を参照。

CBP 「条件ベースページ (Criteria-based page)」を参照。

FTP 「ファイル転送プロトコル (FTP : File Transfer Protocol)」を参照。

HTX Hyperion Enterprise Reporting Web Application のファイル拡張子で、ハイパーテキストマークアップ言語 (HTML : Hyper Markup Language) テンプレートファイルを識別するために使用される。

IP 「インターネットプロトコル (IP : Internet protocol)」を参照。

JavaScript インタープリタ型のプログラミングまたはスクリプト言語。現在はサーバサイドのスクリプト言語、サーバの HTML パーサの埋め込み言語、およびブラウザで実行される埋め込み言語として、これら 3 つの環境下でのみ実行される。本質的には WWW と連結し、拡張されたフォーム、Web データベースのフロントエンドクエリ、およびナビゲーション性能の向上のために主に使用される。

LAN 「ローカルエリアネットワーク (Local area network : LAN)」を参照。

ODBC ODBC

OLE 「オブジェクトのリンクと埋め込み (Object linking and embedding : OLE)」を参照。

OLE オートメーションオブジェクト (OLE automation object) あるアプリケーションを別のアプリケーション内で自動的に実行する機能。

PDF 「Portable document format」を参照。

Portable document format (PDF) 印刷された文書のすべての要素を表示、移動、および印刷が可能な電子イメージとして取り込んだファイル形式。

POV 「データの視点 (Point of view : POV)」を参照。

Simple mail transfer protocol (SMTP) 電子メール通信および受信を管理する TCP/IP プロトコル。

SSL 「セキュアソケットレイヤ (Secure socket layer)」を参照。

Uniform resource locator (URL) インターネットまたはイントラネット上のコンピュータ、ファイル、またはディレクトリの場所やアドレスを一意に指定する命名規則。適切なインターネットプロトコルも指定する。

VBScript Microsoft のインタープリタ型スクリプト言語。VBScript の命令は、論理的に連番が付けられた一連のオペレーティングシステムのコマンドで、コマンドインタープリタによって一度に 1 つの命令が処理される。

Virtual reality modeling language (VRML) 3 次元 (3-D) 画像シーケンスの作成に使用され、ワールドワイドウェブ上でのユーザとのインタラクションを可能にする言語。VRML ファイルを表示するには、VRML ビューアまたは VRML ブラウザが必要。

Web ブラウザ (Web browser) インターネットサーバからドキュメントを取得し、HTML コードを解釈して、グラフィック形式でドキュメントを表示するソフトウェアプログラム。

アクセス権限 (Access rights) ユーザがタスクを実行したり、Oracle Hyperion® Enterprise® の特定のアプリケーション要素にアクセスしたりできるかどうかを決定する Oracle Hyperion® Enterprise® Reporting のオプション。

アプリケーションプログラムインターフェイス (API)
(Application program interface (API)) オペレーティングシステムとアプリケーションの間のインターフェイス。これによって、プログラマはそのオペレーティングシステムまたは別のアプリケーションのリクエストを出すことができる。

暗号化 (Encryption) 権限のないユーザが簡単に傍受できないフォームまたはコード (暗号と呼ばれる) にデータを変換すること。

インターネット (Internet) TCP/IP ネットワークプロトコルを使用して、データの転送および交換を容易にする世界的コンピュータネットワーク。

インターネットサービスプロバイダ (ISP) (Internet service providers (ISP)) 個人および各企業に、インターネットへのリモート接続やアクセス、Web サイト作成およびホストなどの関連サービスを提供する会社。

インターネットプロトコル (IP) (Internet protocol (IP)) イーサネットネットワークで広く使用される TCP/IP プロトコル群のネットワーク層。IP はプロトコルを切り替えるパケットで、データリンク層を介したパケットルーティング、フラグメンテーション、および再構成を提供する。

イントラネット (Intranet) 企業内に構築されたネットワーク。複数の相互連結ローカルエリアネットワークから構成され、広域エリアネットワークの専用回線を使用することもできる。1 つまたは複数のゲートウェイを介して外部のインターネットに接続されている場合と接続されていない場合がある。通常、イントラネットの主な目的は、会社情報およびコンピューティングリソースを従業員間で共有することである。

エクストラネット (Extranet) インターネットプロトコルおよび公開通信システムを使用するプライベートネットワーク。サプライヤ、ベンダ、パートナー、顧客、またはその他の企業とともにビジネス情報の一部を安全に共有する。エクストラネットは、社外のユーザに拡張された、会社のイントラネットの一部としてとらえることができる。

エージェント (Agent) アプリケーションやデータベースの開始と終了、ユーザの接続管理、ユーザアクセスのセキュリティ処理などを行うサーバのプロセス。

オブジェクトのリンクと埋め込み (OLE) (Object linking and embedding (OLE)) あるアプリケーションのオブジェクトおよびアプリケーション機能を別のアプリケーションに含める機能。リンクまたは埋め込みされたアプリケーションの機能は、指定されたアプリケーション内でアクセス可能である必要がある。

オープンデータベース接続 (ODBC) (Open database connectivity (ODBC)) データベースにアクセスするための標準またはオープンなアプリケーションプログラミングインターフェイス (API)。

関数 (Function) 算術コードのあらかじめ定義されたルーチン。計算式内で使用され、データを取得して計算する。

キャッシュ (Cache) 情報またはデータが一時的に保存される場所。要求された Web ページは、ハードディスクのブラウザのキャッシュディレクトリに保存される。キャッシュは、引き続いて要求されたアドレスを監視し、要求されたデータが既にキャッシュディレクトリに存在するかどうかを確認する。ディレクトリに存在する場合はデータが直ちに返され、存在しない場合はブラウザがその情報を取得する。キャッシュ機能を使用すると、時間を節約し、ネットワークトラフィックを抑制できる。

組み込みオブジェクト (Embedded object) 同じアプリケーションおよびファイルに含まれているオブジェクト。OLE 機能の使用時、データはソースファイルからコピーされる。ソースファイルからのデータが変更された場合、変更は反映されない。「リンクされたオブジェクト (Linked object)」と比較。

権限 (Permissions) 「アクセス権限 (Access right)」を参照。

サーバ (Server) コンピュータネットワークにとっての共有リソースであるファイルやプリンタにクライアントステーションがアクセスできるようにするコンピュータ。

財務エージェント (Financial agent) Hyperion 製品のデータ変更および特定の条件をチェックするための自動的な方法。

条件スクリプト (Criteria script) 条件ベースのページ (CBP) の作成に使用される変数および条件の方法を割り当てるスクリプト。実行される条件ベースページ (CBP) に割り当てられる変数は、VBScript または OLE オートメーションオブジェクトを使用して定義する。

条件ベースページ (CBP) (Criteria-based page (CBP)) HTML テンプレート内で変数の置き換えを使用して、条件付きテキスト、グラフィック、色、その他の要素を Web ページに表示するページ。

情報交換標準コード (ASCII : American Standard Code for Information Interchange) コンピュータやインターネットでのテキストファイル用の最も一般的な形式。ASCII ファイルでは、各アルファベット、数値、または特殊文字は、7 ビットの 2 進法 (7 桁の 0 または 1 から成る文字列) で表示され、この方法で 128 文字まで定義できる。

静的チャート (Static chart) 特定時点でのデータを取得したチャート。データはレポート形式ではなくチャート形式で表示できる。データを変更または更新することはできない。

静的パッケージ (Static book) 同じ POV の複数のレポートを含んでいるパッケージ。パッケージの要素の値を指定して、それに含まれるレポートを制限する。POV またはデータを変更または更新することはできない。

静的レポート (Static report) 特定時点でのデータを取得したレポート。これらのレポートは、ユーザ要求の前に作成され、Web サーバに HTML ファイルとして保存されている。POV またはデータを変更または更新することはできない。

セキュアソケットレイヤ (SSL) (Secure sockets layer (SSL)) Netscape によって作成された、ネットワークのメッセージ送信のセキュリティを管理するためのプログラムレイヤ。インターネット上で暗号化された通信を可能にする。

タグ (Tag) 言語要素の記述子の総称。通常、ドキュメントなどの情報の単位に使用するタグのセットは、マークアップと呼ばれる。

調査 (Investigations) セルのサポート用補足データを表示する Hyperion Solution 製品のドリルダウンの手順。レポート内の項目を選択し、新しいレポートを生成して、選択した値に関する詳細情報を表示できる。

展開 (Expansions) レポート内の項目の詳細を表示することができるドリルダウンの手順。展開は 1 つのサマリ行または列と、複数の詳細行または列から構成される。

転送制御プロトコル/インターネットプロトコル (TCP/IP) (Transmission control protocol/internet protocol (TCP/IP))
インターネットの 2 層の基本的な通信言語またはプロトコル。転送制御プロトコル (TCP) は、メッセージまたはファイルをグループやパケットに分割する処理を管理する。これらのグループやパケットがインターネットに転送され、TCP レイヤによって受信されると、元のメッセージが再生成される。下位層インターネットプロトコル (IP) は、送信者および受信者のアドレスがパケットの一部として送信されたかどうかを確認する。これにより、メッセージが正しい送信先に届くようにする。

テンプレートファイル (Template File) レポートのテンプレートが保存されているファイル。

データの視点 (Point of view : POV) (Point of view (POV))
特定のディメンションを選択して、Hyperion Solution 製品のデータを表示する。これらのディメンションは、データの視点を構成し、レポートおよびチャートに関する特定のデータを提供する。

動的チャート (Dynamic chart) ユーザの要求に応答してチャートを作成するインタラクティブな処理から生成されるチャート。リンクからチャートにアクセスした時点で、レポートが開き、関連アプリケーションからの現在のデータが取得され、チャートとして表示される。データは表示されるたびに更新され、ユーザはデータの視点 (POV) を変更できる。

動的レポート (Dynamic report) ユーザの要求に応答してレポートを作成するインタラクティブな処理から生成されるレポート。リンクからレポートにアクセスした時点で、レポートが開かれ、関連アプリケーションからの現在のデータが取得される。データは表示されるたびに更新され、ユーザはデータの視点 (POV) を変更できる。

ドリルダウン (Drill down) 詳細なデータに段階的に移動するプロセス。

ハイパーテキスト転送プロトコル (HTTP) (Hypertext transfer protocol (HTTP)) クライアントとサーバコンピュータ間の通信の基本となるアプリケーションプロトコル。ワールドワイドウェブ上でのファイル (テキスト、グラフィックイメージ、サウンド、ビデオなどのマルチメディアファイル) の交換におけるルールセット。

ハイパーテキストマークアップ言語 (HTML) (Hypertext markup language (HTML)) ワールドワイドウェブのドキュメントを作成および書式設定するために使用されるオーサリング言語。

ファイル転送プロトコル (FTP : File Transfer Protocol)
サーバへのネットワーク間でファイルを交換する手段。サーバ上のファイルの更新 (削除、名前の変更、移動、およびコピー) が可能になる。

復号化 (Decryption) 暗号化されたデータを元の理解可能な形式に変換する処理。

複合レポート (Compound report) 画面に同時に表示される 2 つ以上の動的または静的レポートあるいはチャートを含むレポート。

フレーム (Frames) Web ページを別個のウィンドウ表示に分割する HTML 要素。各フレームは異なる HTML ファイルを表示できる。フレームを含む Web ページは 2 つ以上の HTML ファイルから構成され、1 つの HTML ファイルにはフレームセット定義が含まれている。これによって、フレームを作成するソースファイルおよび各フレームが使用するページサイズが定義される。

ブラウザ (Browser) ハイパーテキスト転送プロトコル (HTTP) を使用して、ブラウザユーザの代わりにインターネット全体の Web サーバにリクエストを出すプログラム。ワールドワイドウェブ上のすべての情報を表示、読み取り、および聞くために使用できる。

プロトコル (Protocol) 特にネットワーク間におけるデータの転送方法を記述した計算式ルールセット。下位レベルのプロトコルは、従うべき電気規格および技術的標準、ビットとバイト順序およびその送信、エラー検出、およびビットストリームの修正などを定義する。上位レベルプロトコルは、メッセージの構文、コンピュータダイアログへの端末、文字セット、メッセージのシーケンスなどを含むデータ書式設定を行う。

並列表示のレポート (Side-by-side report) 動的または静的な 2 つ以上の非組み込み式レポート／チャートが含まれているレポート。レポートまたはチャートあるいはその両方は、データの視点バーとともに HTML フレームで並列に表示される。複合レポートは、1 つまたはすべてのフレームで表示できる。

変数 (Variable) Web ページの出力を変更するための HTML コードの入力に使用される。

マルチスレッド (Multithreading) 複数のユーザが互いに干渉せずに同じアプリケーションで作業できるクライアント／サーバプロセス。指定のシステムで同時に複数の要求を処理できる。

マルチディメンション (Multidimensional) 3 つ以上のディメンションからデータを参照する方法。個々のレコードはディメンションのセットの交点を表す。Oracle Essbase は、マルチディメンションデータをサポートしている。

リンク (Link) ある文字、画像、または情報オブジェクトから別の場所への、選択可能な接続。最も一般的な形式のリンクは、ハイライトされた選択可能な文字または画像で、これらが選択されると、直ちに別のファイルが配信および表示される。

リンクされたオブジェクト (Linked object) 別のファイルに含まれるオブジェクトへの参照。OLE 機能の使用時、ソースファイルのデータへのポインタが作成される。ソースファイルからのデータが変更された場合、変更は反映される。「埋め込みオブジェクト (Embedded object)」と比較。

ログファイル (Log file) システム内で発生した問題を追跡できるようにする情報を格納するファイル。

ロジック (Methods) 勘定科目値の計算方法をシステムに指示する一連のルール。ロジックはアプリケーションのセットアップ時に定義する。アプリケーションの変更時に、変更内容を反映するようにロジックを編集できる。

ローカルエリアネットワーク (LAN) (Local area network (LAN)) 相互接続されたワークステーションおよび関連付けられたデバイスの小規模なネットワーク。同一地域内の単一のプロセッサまたはサーバのリソースを共有する。

ワールドワイドウェブ (World Wide Web) ハイパーテキスト転送プロトコルからのテキスト、グラフィック、サウンド、およびアニメーションリソースを提供するインターネット上のすべてのリソースおよびユーザ。

索引

A - Z

Adobe Acrobat, ファイルに印刷するための変数, [157](#)

AGTRIG.HTX ファイル, [222](#)

APPLIST

関数, [123](#)

例, [124](#)

batadmin コマンド, [254](#)

@curmonth 構文, [249](#)

代替変数, [254](#)

Batch Administration Program

Hyperion Essbase 用の環境変数, [260](#)

環境変数, [257](#)

構文, [248](#)

コマンド行から実行, [253](#)

使用, [247](#)

静的パッケージの生成, [265](#)

説明, [247](#)

チャートの生成, [263](#)

チャートのみを含む静的パッケージの生成, [268](#)

テンプレートパスの変更, [262](#)

データの視点の変更, [262](#)

並列表示のレポートとチャートの生成, [265](#)

例, [255](#)

レポートのグリッド線, [263](#)

Batch Administration Program の環境変数, [257](#)

CHART 関数

チャートの種類を指定するパラメータ, [251](#)

DATAENTRY 関数

説明, [89](#)

パラメータのルール, [90](#)

DATAENTRY の template2.htx パラメータ, [90](#)

EMAILTMP.TXT ファイル, [221](#)

EVALUATE

構文, [115](#)

例, [116](#)

Excel

チャートのオートフォーマット, [62](#)

テンプレート, [167](#)

EXCELREP 関数

スプレッドシートの書式, [83](#)

説明, [81](#)

Gallery テンプレート, [168](#)

HTML ファイル

Hyperion Distributed Schedules の起動, [84](#)

PDF リンクの追加, [94](#)

お気に入りの設定, [130](#)

お気に入りの説明, [129](#)

スプレッドシートリンクの追加, [81](#)

すべてのレポートのデータ入力の有効化, [88](#)

データ入力モードでレポートを表示, [88](#)

データ入力モードのテンプレート, [142](#)

動的一覧の追加, [121](#)

リンクの作成, [76](#)

リンクページ作成に使用, [72](#)

Hyperion Distributed Schedules

HTML ファイルからの起動, [84](#)

ブラウザからの起動, [88](#)

レポートの起動, [83](#)

Hyperion Enterprise Reporting

条件表示用レポート, [182](#)

調査レポート, [97](#)

展開レポート, [101](#)

IF THEN エージェント条件, [207](#)

LAUNCH_PRINT テンプレート変数, [157](#)

LDAP 認証

設定, [23](#)

Link Builder

並列表示のレポートとチャートへのリンクの作成, [74](#)

リンクの作成, [76](#)

リンクの編集, [76](#)

MSAD 認証

設定, [23](#)

NTLM 認証

- 設定, 30
- OLE オートメーション
 - エージェント, 239
 - エージェント条件の定義, 213
 - エージェント通知のアクション, 242
 - 条件スクリプトの定義に使用, 189
 - 条件スクリプトの編集, 191
 - 条件ページの変更に使用, 231
 - 表示基準, 232
- OLE オートメーションを使用したエージェントのカスタマイズ, 236
- PDF ファイル
 - 印刷の変数, 157
 - 生成, 94
 - パッケージでの, 67
 - ブラウザでの表示, 95
 - リンクの追加, 94
 - レポートの保存形式, 93
- POVDROPBAR
 - 構文, 111
 - 例, 112
- POVDROPDOWN
 - 構文, 113
 - 例, 114
- PRINTREP 関数
 - 構文, 96
- QUERY
 - 構文, 118
 - 例, 118
- REPSETLIST
 - 関数の説明, 127
- SCHEDREP 関数
 - 説明, 85
- SETLIST
 - 関数の説明, 125
 - 例, 126
- SMARTPOV
 - 構文, 108
 - 戻り値, 109
 - 例, 110
- SMTP
 - クライアント, 218
 - サーバ, 218
 - ソフトウェア, 220
 - 必要条件, 218
 - プロトコル, 217
 - リソース, 220
- STATIC_BOOK 変数, 157
- STATIC_PRINT 変数, 157
- SYSLIST
 - 関数の説明, 122
 - 例, 123
- URL
 - お気に入りへのアクセス, 131
- VBScript
 - エージェント, 211
 - 構文, 186
 - サンプルエージェント条件, 205
 - 条件, 187
- virtual reality modeling language, 183
- Visual Basic
 - OLE オートメーション, 244
 - アシスタントを使用した条件スクリプトの編集, 191
 - エージェント条件を定義するために使用, 205
 - 条件スクリプトの定義, 188
- Visual C++
 - OLE オートメーション, 245
- VRML, テンプレート, 182
- Web サイト
 - ウィザード, 17
 - 作成, 17
 - 準備, 13
 - 静的および動的ページ, 16
 - データの種類, 16
 - ネットワークの利用, 15
 - パフォーマンスに関する考慮事項, 13
 - ファイルの整理, 18
 - レポートの追加, 47
 - レポートファイル, 50
- Web 通知
 - エージェントの有効化, 213
- Web ページ
 - Link Builder による作成, 72
 - アプリケーションの表示, 123
 - お気に入りの設定, 130
 - お気に入りの説明, 129
 - 編集, 72
 - リンクの追加, 76
 - リンクの編集, 76
 - レポートセット一覧の表示, 125
- Windows
 - エージェントモニタサービス, 228

あ行

アクション

OLE のカスタマイズ, 243

エージェントからの削除, 202

エージェントへの追加, 202

削除, 213

設定, 202

選択, 213

追加, 199

アプリケーション一覧, 生成, 123

印刷

.PDF の変数, 157

静的レポート, 54

パッケージ, 69

ウィンドウ, 条件スクリプト, 184

エラー

エージェント, 224

エージェント通知, 228

エージェント

OLE オートメーション, 237

OLE オートメーションを使用したカスタマイズ, 236

OLE オートメーションを使用した定義, 213

SPIDER.INI の設定, 224

VBScript を使用した定義, 211

アクションの OLE オートメーション, 245

カスタマイズ, 222

カスタマイズ可能な条件スクリプト, 206

概要, 197

ケーススタディ, 198

コピー, 226

削除, 227

サンプル条件スクリプト, 210

[財務エージェント管理] ダイアログへのアクセス, 202

システムオプションの設定, 202

条件, 203

条件での VBScript, 205

条件の定義, 204

スケジュール, 214

セキュリティ, 215

テンプレート, 139

編集, 224

モニタ, 227

エージェントアクションオブジェクト, 242

エージェントのスケジュール, 214

エージェントモニタ, 227

お気に入り

アクセス, 131

設定, 130

説明, 129

か行

カスタマイズ可能なエージェント条件, 定義, 210

カスタムテンプレート

作成, 162

静的パッケージ, 166

静的レポート, 166

説明, 165

フレームを使用しない動的チャート, 165

フレームを使用しない動的レポート, 165

フレームを使用する動的チャート, 165

フレームを使用する動的レポート, 165

変数, 157

カスタムファイルのパス, 18

管理オプション

調査の無効化, 99

調査レベルの設定, 99

展開の無効化, 104

展開レベルの設定, 103

データ入力モードを有効にする, 88

行および列見出し

固定, 140

行および列見出しの固定

静的レポートのテンプレート, 141

動的レポートのテンプレート, 140

パッケージでの, 67

行および列見出しの保持, 140

行範囲

行見出しのエージェント条件, 209

詳細レポートのエージェント条件へのリンクを含む, 207

ケーススタディ

財務エージェント, 201

条件スクリプト, 179

展開の使用, 102

テンプレートのカスタマイズ, 135

構文

エージェント条件, 205

条件スクリプト, 186

条件のチェック, 183

さ行

財務エージェント

OLE オートメーションを使用した定義, 213

SPIDER.INI の設定, 224

VBScript を使用した定義, 211

アクションに OLE オートメーションを使用,
242

アクションの OLE オートメーション, 244

カスタマイズ, 224

カスタマイズ可能な条件スクリプト, 206

概要, 197

ケーススタディ, 201

コピー, 226

削除, 227

サンプル条件スクリプト, 208

[財務エージェント管理] ダイアログボック
スへのアクセス, 202

システムオプションの設定, 202

条件, 203

条件での VBScript, 205

条件の定義, 203

スケジュール, 214

セキュリティ, 215

定義, 203

テンプレート, 139

編集, 224

モニタ, 227

[財務エージェント管理] ダイアログボックス,
202

書式

エージェント Web 通知, 222

エージェント電子メール, 221

シングルサインオン設定ユーティリティ
使用, 22

条件

IF THEN サンプル, 207

VBScript の例, 205

エージェント用に定義, 203

カスタムスクリプトの定義, 210

詳細サンプル条件へのリンクを含む行範囲,
207

詳細サンプル条件へのリンクを含む列範囲,
208

見出しのサンプル条件を含む行範囲, 209

見出しのサンプル条件を含む列範囲, 210

条件スクリプト

OLE オートメーションを使用したカスタマ
イズ, 231

OLE オートメーションを使用した編集, 191

VB Assistant を使用した編集, 191

VBScript, 183

VRML, 183

ウィンドウ, 184

ケーススタディ, 179

構文, 184

サンプルファイル, 193

処理, 174

説明, 178

定義, 187

テスト, 193

テンプレート, 182

条件の変数, 174

スプレッドシート

EXCELREP の書式, 83

HTML ファイルへのリンクの追加, 81

ブラウザからのレポート表示, 81

レポートデータの表示, 79

レポートの表示, 80

静的チャート

カスタムテンプレートの作成, 164

作成, 59

説明, 55

展開レベルの設定, 103

テンプレート, 138

ファイル, 56

並列表示のレポートファイル, 57

用途, 56

静的パッケージ

カスタムテンプレートの作成, 164

調査レベルの設定, 99

展開レベルの設定, 103

テンプレート, 138

静的ページ

静的レポート

印刷, 54

カスタムテンプレートの作成, 164

作成, 52

展開レベルの設定, 103

テンプレート, 166

標準テンプレート, 138

ファイル, 57

用途, 48

製品一覧, 122

セキュリティ,財務エージェント, 215
セルの色, 87

た行

チャート

Microsoft Excel のオートフォーマットの使
用, 62
作成, 60
種類, 57, 251
静的および動的, 55
静的チャートの用途, 56
説明, 48
プロパティ, 59
リンクの作成, 74

調査

説明, 97
無効化, 99
レベルの設定, 99
レポートの作成, 97

調査レベル, 99

展開

ケーススタディ, 102
設定, 103
説明, 101
無効化, 104
レベルの設定, 103
レポートの作成, 101

テンプレート

Financial Highlights 条件ベースのページ, 171
Gallery での事前定義, 166
Gauge 条件ベースのページ, 171
Microsoft Excel の起動, 167
Performance Ratings 条件ベースのページ,
170
VRML サポート, 182
一覧, 140
色のカスタマイズ, 170
カスタマイズされたデータの視点セレクタの
表示, 168
下部のフレームの外観の変更, 163
下部のフレームのデータの視点ボタン, 169
ケーススタディ, 135
現在のレポートのチャートの作成, 168
作成, 162
財務エージェント, 139
条件スクリプト, 182
静的チャート, 164

静的パッケージ, 164

静的レポート, 138

静的レポートの行および列見出しの固定,
141

チャートオプションの設定, 169

ディメンションボタン, 167

データ入力, 142

データの視点フォーム, 140

データの視点ボタンの削除, 170

動的注釈, 170

動的レポート, テンプレート, 165

動的レポートの行および列見出しの固定,
140

ドリルスルーを使用するチャート, 167

標準, 137

フレームプロパティ, 162

フレームプロパティの変更, 162

フレームを使用しないチャート, 138

フレームを使用しない動的なレポートや
チャートの作成, 163

フレームを使用しない動的レポート, 138

フレームを使用するチャート, 137

フレームを使用する動的レポート, 137

並列表示のチャート, 137

並列表示のレポート, 137

変更, 161

変数, 157

レポートライブラリ, 139

テンプレートの変数, 146

ディメンション, データの視点バー, 107

電子メール

エージェント通知の有効化, 213

カスタマイズ, 221

サポートされているプロトコル, 219

通知用のオプションの設定, 224

ログファイル, 224

電子メール通知

SMTP クライアント, 218

SMTP サーバ, 218

SMTP プロトコル, 217

サポートされている電子メール送信プロトコ
ル, 219

ソフトウェア, 220

必要条件, 218

リソース, 220

データ

折りたたみ, 101

詳細の表示, [97](#), [101](#)
 調査, [97](#)
 展開, [101](#)
 データ入力モード
 HTML ファイルからレポートを表示, [88](#)
 管理プログラムで有効にする, [88](#)
 セルの色, [87](#)
 テンプレート, [142](#)
 レポートの表示, [86](#)
 データの視点
 EVALUATE, [115](#)
 POVDROPBAR, [111](#)
 POVDROPDOWN, [113](#)
 QUERY, [118](#)
 SMARTPOV, [108](#)
 カスタマイズ, [108](#)
 説明, [107](#)
 フォームのテンプレート, [140](#)
 動的一覧
 生成, [121](#)
 説明, [121](#)
 ライブラリ関数, [121](#)
 動的チャート
 説明, [55](#)
 テンプレート, [165](#)
 テンプレートの作成, [162](#)
 動的ページ, [16](#)
 動的レポート
 テンプレートの作成, [162](#)
 標準テンプレート, [137](#)
 複合レポートのテンプレート, [142](#)
 リンクの作成, [53](#), [73](#)

は行

バッチファイル, [254](#)
 パッケージ
 PDF ファイル, [67](#)
 印刷, [69](#)
 行および列見出しの固定, [67](#)
 作成, [68](#)
 説明, [65](#)
 調査と展開, [66](#)
 ファイル, [68](#)
 ブラウザ形式, [67](#)
 必要条件, SMTP, [218](#)
 表示基準
 OLE オートメーション, [231](#)

OLE を使用した定義, [189](#)
 VBScript を使用した定義, [188](#)
 レポート, [182](#)
 標準テンプレート, [137](#)
 ファイル, パッケージ, [68](#)
 複合レポート
 説明, [48](#)
 動的レポートとチャートのテンプレート, [142](#)
 フレーム, [162](#)
 ブラウザ
 Hyperion Distributed Schedules の起動, [84](#)
 PDF ファイルの表示, [95](#)
 スプレッドシートとしてのレポート表示, [81](#)
 プロパティ
 LDAP, [38](#)
 NTLM, [43](#)
 並列表示のレポート
 説明, [48](#)
 ファイル, [57](#)
 リンクの作成, [74](#)
 変数, [157](#)

や行

ユーザ, お気に入りへのアクセス, [131](#)

ら行

リンク
 お気に入りへのアクセス, [131](#)
 動的チャート, [73](#)
 動的レポート, [73](#)
 並列表示のレポート, [74](#)
 編集, [76](#)
 リンクページ, [72](#)
 レポート
 HTML からデータ入力モードで表示, [88](#)
 Hyperion Distributed Schedules での起動, [83](#)
 PDF ファイルとして保存, [93](#)
 PDF ファイルの生成, [94](#)
 アドホック, [97](#)
 作成, [52](#)
 条件スクリプト, [182](#)
 スプレッドシートに表示, [79](#), [80](#)
 スプレッドシートへのリンク, [79](#)
 調査, [97](#)
 展開, [101](#)

データ入力モードでの表示, [86](#)
データ入力モードの許可, [88](#)
データ入力モードの説明, [49](#)
データ入力モードのセルの色, [87](#)
データ入力モードのテンプレート, [142](#)
ファイル, [50](#)
ブラウザから Hyperion Distributed Schedules
で起動, [88](#)
ブラウザでの PDF ファイルの表示, [95](#)
リンク, [73](#)
リンクの作成, [74](#)
レポート一覧, [127](#)
レポートセット一覧, [125](#)
レポートライブラリ, テンプレート, [139](#)

わ行

ワークフロー, 条件スクリプト, [173](#)

